最終考察　うみねこのなく頃に　考察

目次‥‥001

考察資料‥‥002～009
■ノックスの十戒‥‥003
■ヴァン・ダインの二十則‥‥003
■ウィルの推理‥‥003
■偽書作家テスト‥‥004～
■略称‥‥005
■赤字(適宜ふれるEPごとにまとめています)‥‥005～

各EP考察(小ネタ)‥‥010～042
■うみねこのなく頃に　Episode1　「Legend of the golden witch」‥‥011～
■うみねこのなく頃に　Episode2　「Turn of the golden witch」‥‥013～
■うみねこのなく頃に　Episode3　「Banquet of the golden witch」‥‥016～
■うみねこのなく頃に　Episode4　「Alliance of the golden witch」‥025～
■うみねこのなく頃に散　Episode5　「End of the golden witch‥‥028～
■うみねこのなく頃に散　Episode6　「Dawn of the golden witch」‥‥033～
■うみねこのなく頃に散　Episode7　「Requiem of the golden witch」‥035～
■うみねこのなく頃に散　Episode8　「Twilight of the golden witch」040～

■コラムコーナー1‥‥043

トピック考察(五十音順)‥‥044～095
■赤字とはどのようなもの?‥‥045～
■明日夢はどんな人?‥‥046
■“一なる真実”とはどのようなもの?‥‥046～
■ウィルの推理の解答は?‥‥047～
■ウィンチェスターM１８９４の威力は?‥‥048
■絵羽の日記とはどのようなもの?‥‥048～
■絵羽は縁寿を憎んでいた?‥‥050
■絵羽は本当に強いの?‥‥050
■EP1～4で本当に謎は解ける?‥‥051～
■EP2で真里亞のジャックオーランタンのマシュマロ菓子をどうやってベアトは元に戻したの?‥‥052
■EP2で楼座は何故助からなかったの?‥‥053
■EP2の終盤で戦人は何故、金蔵を目撃したの?‥‥053～
■EP3の譲治と南條は誰が殺したの?‥‥054～
■EP4で戦人の母親が霧江だと確定できる?‥‥055～
■EP4の園芸倉庫での殺人はどのようにして行われたの?‥‥056
■EP4のもう一人のベアトリーチェは何者?‥‥056
■EP5でエリカは金蔵が死んでいることを知っていたの?‥‥056
■EP5で金蔵の死体は何故見つからなかったの?‥‥056～
■EP5で碑文の謎が解かれても殺人が続くのは何故?‥‥057
■EP5に入っているという『Land of the golden witch』の一番肝心なる部分とは?‥‥057～
■EP5の蔵王殺しはどのようにして行われたの?‥‥058
■EP5の第一の魂の死体を煉獄の七姉妹やガァプが目撃し、さらにガァプは死体を消しているけど、どういうこと?‥‥058
■EP5の第一の魂はどのようにして行われたの?‥‥058
■EP5のベアトはどういう存在なの?‥‥058～
■EP7のお茶会が一なる真実なの?‥‥059
■EP8で縁寿は何故、入館証を２個持っていたの?‥‥059～
■縁寿は戦人の出生の秘密を知っていたの?‥‥060
■黄金の真実とはどのようなもの?‥‥060～
■家具とはどのようなもの?‥‥061
■片翼の鷲の使用人とはどのようなもの?‥‥061
■嘉音の“汚らわしい仕事”とはどんな仕事?‥‥061
■嘉音は現実の六軒島にもいたの?‥‥061～
■偽書作家テストの解答は?‥‥062～
■偽書とはどのようなもの?‥‥064
■偽書は何のために書かれたの?‥‥064～
■霧江は残酷な殺人鬼なの?‥‥066
■霧江は本当に酷い母親だったの?‥‥066～
■霧江は留弗夫の離状を知っていたの?‥‥067
■曲名の秘密‥‥067
■“金蔵の気まぐれ”とはどのようなことなの?‥‥067
■金蔵の書斎‥‥067～
■金蔵は紗音が１９年前の赤ん坊であることに気がついていたの?‥‥068
■金蔵は夏妃を嫌っていたの?‥‥068～
■金蔵は暴力当主だったの?‥‥069
■金蔵は本当は優しい人だったのでは?‥‥069～
■金蔵不在の伏線‥‥070
■蔵臼と夏妃の関係は冷めていた?‥‥070～
■蔵臼はムスカ大佐?‥‥071
■ゲーム盤とはどのようなもの?‥‥071
■ゲームマスターとはどのようなもの?‥‥071～
■駒とはどのようなもの?‥‥072～
■駒の認識力‥‥075
■『最終考察　うみねこのなく頃に散』にツッコミ！　ツッコミ！‥‥075
■さくたろうの伏線‥‥075
■朱志香には何故、彼氏が出来ないの?‥‥075～
■朱志香の喘息は演技?‥‥076
■紗音が実際の六軒島でしようとしたことは?‥‥076
■紗音の胸は偽物?‥‥076
■紗音の容姿‥‥077
■紗音は優秀?‥‥077
■譲治と朱志香の対比‥‥077
■譲治と紗音はいつから付き合いだしたの?‥‥077
■使用人の勤続年数は?‥‥077
■真実の魔女の限界‥‥077～
■親族会議‥‥078
■身長はいくら?‥‥078
■世界観‥‥078
■ゼパルとフルフル、どっちが男でどっちが女?‥‥078～
■１９９８年‥‥079
■１９８６年?‥‥080
■１９８６年１０月４日‥‥080
■台湾への伏線‥‥080
■ＴＩＰＳ‥‥080～
■テーブルトークＲＰＧ?‥‥081
■夏妃の頭痛‥‥081
■夏妃は１９年前に赤ん坊を殺そうとしたの?‥‥081～
■南條はいつから金蔵と知り合いなの?‥‥082
■年齢はいくつ?‥‥082～
■ノックスの十戒とヴァン・ダインの二十則から見る『うみねこのなく頃に』083
■戦人が１９８６年に帰ってこなかったら事件は起こらなかったの?‥‥083
■戦人の乗り物嫌い‥‥083
■戦人は本当に約束を忘れたの?‥‥083～
■一人二役?‥‥085～
■フェザリーヌ・アウグストゥス・アウローラ‥‥087
■プレイヤーの戦人とは一体何者なの?‥‥087～
■ベアトリーチェの容姿は?‥‥088
■ベアトリーチェは駒のベアトとゲームマスターのベアト、二人いる?‥‥088～
■ベアトリーチェは何故、蜘蛛の巣が苦手なの?‥‥089～
■ベルンカステル‥‥090
■魔女の碑文‥‥090
■魔法とはどのようなもの?‥‥090
■真里亞の読解力は高いの?‥‥090
■真里亞の薔薇は結局どうなったの?‥‥090～
■真里亞は自閉症?‥‥091
■メッセージボトルとはどのようなもの?‥‥091～
■メッセージボトルの不思議‥‥092
■メッセージボトルは誰が持っているの?‥‥092～
■メッセージボトルは何のために書かれたの?‥‥093
■モーターボート‥‥093
■ヤス=幾子説‥‥093～
■ヤスは男?‥‥094
■ラムダデルタ‥‥094
■楼座に愛が視えない?‥‥094～
■ロジックエラーとはどんなもの?‥‥095
■六軒島の電話事情‥‥095
■六軒島の料理事情‥‥095

■コラムコーナー2‥‥096

■あとがき‥‥098

考察資料

■ノックスの十戒
・第1条。犯人は物語当初の登場人物以外を禁ず
・第2条。探偵方法に超自然能力の使用を禁ず
・第3条。秘密の通路の存在を禁ず
・第4条。未知の薬物、及び、難解な科学装置の使用を禁ず
・第5条。欠番
・第6条。探偵方法に偶然と第六感の使用を禁ず
・第7条。探偵が犯人であることを禁ず
・第8条。提示されない手掛かりでの解決を禁ず
・第9条。観測者は自分の判断・解釈を主張することが許される
・第１０条。手掛かりなき他の登場人物への変装を禁ず

■ヴァン・ダインの二十則
・第1則。手掛り全ての説明なき事件を禁ず
・第7則。死体なき事件であることを禁ず
・第9則。探偵が犯罪であることを禁ず
・第１１則。使用人が犯人であることを禁ず
・第１２則。真犯人が犯罪であることを禁ず

■ウィルの推理
第1のゲーム
「第1のゲーム、第一の晩。圓芸倉庫に、６人の死体」
「幻は幻に。……土には帰れぬ骸が、幻に帰る」
「第1のゲーム、第二の晩。寄り添いし二人の骸は鎖で守られし密室に」
「幻は幻に。……幻の鎖は、幻しか閉じ込めない」
「第1のゲーム、第四の晩。密室書斎の老当主は炎熱の霧の中に」
「幻は幻に。……幻の男は、あるべきところへ」
「第1のゲーム、第五の晩。杭に胸を刺されし少年の最後」
「幻は幻に。……幻想の魔女と杭は、幻想しか貫けない」
「第1のゲーム、第六、第七、第八の晩。歌う少女の密室に横たわる３人の骸」
「幻は幻に。……盲目なる少女が歌うは幻、密室幻想」

第2のゲーム
「第2のゲーム、第一の晩。腹を割かれし６人は密室礼拝堂に」
「幻は幻に。……黄金の真実が、幻の錠を閉ざす」
「第2のゲーム、第二の晩。寄り添いし二人は、死体さえも寄り添えない」
「幻は幻に。……役目を終えたる幻は、骸さえも残せない」
「第2のゲーム、第四、第五、第六の晩。夏妃の密室にて生き残りし者はなし」
「土は土に。……棺桶が密室であることに、疑問を挟む者はいない」
「第2のゲーム、第七、第八の晩。赤き目の幻想に斬り殺されし二人」
「土は土に。幻は幻に。……幻に生み出せる骸はなし」

第3のゲーム
「第3のゲーム、第一の晩。凍結密室が繋ぎし、６人の骸」
「幻は幻に。……輪ごなる密室、終わりと始まりが、重なる」
「第3のゲーム、第二の晩。薔薇庭園にて親子は骸を重ねる」
「土は土に。……語られし悪魔に、何の偽りもなし」
「第3のゲーム、第四、第五、第六の晩。屋敷にて倒れし３人の骸」
「土は土に。……語られし悪魔に、何の偽りもなし」
「第3のゲーム、第七、第八の晩。夫婦二人は東屋にて骸を晒す」
「土は土に。……明白なる犯人は、無常の刃を振るいたり」

第4のゲーム
「第4のゲーム、第一の晩。食堂にて吹き荒れる虐殺の嵐」
「幻は幻に。……黄金の真実が紡ぎ出す物語は、幻に帰る」
「第4のゲーム、第二の晩。二人の若者は試練に挑み、共に果てる」
「幻は幻に。……黄金の真実が紡ぎ出す物語は、幻に帰る」
「第4のゲーム、第四、第五、第六、第七、第八の晩。逃亡者は誰も生き残れはしない」
「土は土に。幻は幻に。……虚構に彩られし、物言わぬ骸」
「第4のゲーム、第九の晩。そして、誰も生き残れはしない」
「土は土に。幻は幻に。……虚構は捕縛に閉ざされることで、真実となる」

ベアトの心臓
「私は、だぁれ……？」
「幻は、幻に。……約束された死神は、魔女の意思を問わずに、物語に幕を下ろす」

■偽書作家テスト

Episode1 Legend of the golden witch

問01 真里亞の薔薇に込められた意味と、消失の理由は?
問02 真里亞が持っていた傘と手紙を渡したのは誰?
問03 夏妃の部屋の扉に不気味な汚れを残した人物と、その理由は?
問04 【園芸殺し・6人殺し】の犯人と方法は?
問05 【チェーン夜室・絵羽&秀吉殺し】の犯人と方法は?
問06 【ボイラー室・嘉音殺し】の犯人と方法は?
問07 金蔵の倉庫内に手紙を置いた人物と方法は?
問08 【客間・源次&南條&熊沢殺し】の犯人と方法は?
問09 【玄関ホール・夏妃殺し】の犯人と方法は?
問10 EP1のゲーム盤の真相は?

Episode2 Turn of the golden witch

問01 ゲーム盤上に登場したベアトリーチェの正体は?
問02 楼座が受け取ったベアトリーチェの封筒の中身は?
問03 親たち7人は深夜の礼拝堂で何を見た?
問04 【礼拝堂・ハロウィンパーティーの6人殺し】の犯人と方法は?
問05 【朱志香の私室・朱志香&嘉音殺し】の犯人と方法は?
問06 【使用人控え室・南條&熊沢殺し】の犯人と方法は?
問07 【夏妃の私室・紗音&譲治&郷田殺し】の犯人と方法は?
問08 生き残った人々は最終的にどうなった?
問09 EP2のゲーム盤の真相は?
問10 ベルンカステルが騙ったベアトリーチェの隙とは?

Episode3 Banquet of the golden witch

問01 碑文の謎の答えは?
問02 【連続密室・6人殺し】の犯人と方法は?
問03 【薔薇庭園・楼座&真里亞殺し】の犯人と方法は?
問04 【玄関ホール・留弗夫&霧江&秀吉殺し】の犯人と方法は?
問05 譲治がゲストハウスから屋敷へ行った方法は?
問06 【ゲストハウス・蔵臼&夏妃殺し】の犯人と方法は?
問07 客間の扉に「07151129」を置いた人物と数字の意味は?
問08 【客間・譲治殺し】の犯人と方法は
問09 【使用人室・南條殺し】の犯人と方法は?
問10 EP3のゲーム盤の真相は?

Episode4 Alliance of the golden witch

問01 【食堂・6人殺し&5人幽霊】の犯人と方法は?
問02 【朱志香の私室・朱志香殺し、薔薇庭園・譲治殺し】の犯人と方法は?
問03 【屋敷の裏手と客室・嘉音&紗音&南條&蔵臼&霧江殺し】の犯人と方法は?
問04 【園芸倉庫・郷田&熊沢殺し】の犯人と方法は?
問05 【客間・真里亞殺し】の犯人と方法は?
問06 戦人の罪とは?
問07 ベアトリーチェの問い「私は、だぁれ?」の答えは?
問08 EP4のゲーム盤の真相は?
問09 縁寿がマルフク復興店で発見したものは?
問10 12年後の六軒島で行われた、縁寿と須磨寺霧一派の戦いの真相は?

Episode5 End of the golden witch

問01 親族会議休憩中、食堂の扉をノックして手紙を置いた人物とその方法は?
問02 【いとこ部屋・4人殺し】の犯人と方法は?
問03 【使用人室・源次殺し】の犯人と方法は?
問04 【謎の場所からの脅迫電話・蔵臼殺し】の犯人と方法は?
問05 【客室・秀吉殺し】の犯人と方法は?
問06 突如現れた古戸エリカはどのような存在か?
問07 19年前の男の正体は?
問08 作中で示されたノックス十戒の意味は?
問09 ベアトリーチェに対する戦人の心証が大きく変わった理由は?
問10 EP5のゲーム盤の真相は?

Episode6 Dawn of the golden witch

問01 【各所で発見される死体・恋の試練の6人殺し】の犯人と方法は?
問02 ゼパルとフルフルによる恋の試練と決闘が描かれた意味は?
問03 回想シーンで戦人が女性の好みを語った相手は誰?
問04 「お母様」の正体と、彼女がベアトリーチェに恋心を託した理由は?
問05 紗音と嘉音はどのような関係?
問06 いとこ部屋こいたはずの嘉音が脱出した方法は?

問07 嘉音がチェーンで閉ざされた客室から戦人を助け出し、消失する方法は？
問08 「18人目の人間」「17人だ」。エリカ退場後、2つの赤字が並び立った理由は？
問09 EP6のゲーム盤の真相は？
問10 冒頭で部屋に監禁されていた人物が、女性めいた言葉を発した理由は？

Episode7 Requiem of the golden witch
問01 ベアトリーチェ殺人事件の犯人（＝彼女を生み出した人間）は？
問02 「戦人が1986年の六軒島に来なければ事件は起こらなかった」のはなぜ？
問03 戦人から紗音への手紙は本当になかった？（誤治が隠蔽したという説はあり得る？）
問04 ヤスが1986年の六軒島で行おうとした計画は？
問05 ヤス、紗音、嘉音、理御、ベアトリーチェ、クレル、それぞれの関係は？
問06 ヤスが寶女になってからの2年間に何があったのか？
問07 「幻は幻に。‥‥黄金の真実が、幻の錠を閉ざす」の黄金の真実とは？
問08 お茶会で描かれた次男夫婦による殺人の真相は？
問09 クレルのはらわたで描写されたシーンの真相は？
問10 ウィルの二十の棺がベルンカステルに適用しなかった理由は？

Episode8 Twilight of the golden witch
問01 「ゲームマスター」と「作家（物語の筆者）」の違いは？
問02 各EP（1～8）の作者は誰？
問03 ベアトリーチェの心臓とは何か？
問04 ヤスの血縁関係を分かる範囲で説明せよ
問05 真里亞は事件にどのような影響を与えた？
問06 赤字と金字（黄金の真実）について説明せよ
問07 八城綾子＆フェザリーヌの正体と登場理由は？
問08 ベルンカステル＆ラムダデルタの正体は？
問09 「一なる真実の書」の内容は？
問10 八城綾子が真実の書と鍵を持つ理由は？
問11 ボトルメールを流した人物とその理由は？
問12 12年後の世界やメタ世界は偽書に書かれたこと？
問13 八城十八が偽書を発表した理由は？
問14 3日目の描写の前には何が起こった？
問15 戦人とベアトリーチェが入水した意味は？
問16 八城十八が郵ゆかりに行った告白の真偽は？
問17 福音の家の黄金郷が意味するものは？
問18 魔法と手品、縁寿にとってより良い選択は？
問19 山羊が世界を食い尽くす描写の意味は？
問20 『うみねこのなく頃に』全体の真相は？

■略称
ベアト＝ベアトリーチェ　ベルン＝ベルンカステル　ラムダ＝ラムダデルタ　ワルギ＝ワルギリア　１９男＝１９年前の男　ドラ＝ドラノール　フェザ＝フェザリーヌ　すべて＝『うみねこのなく頃に』のすべて　竜騎士０７インタビュー『ファウスト　2011　SUMMER　Vol.8』　最考散＝『最終考察 うみねこのなく頃に散』　真相＝『真相解明読本』　我告＝『我らの告白』

■赤字(適応されるEPごとにまとめています)
全ＥＰ共通の赤字
・真実を語る時、赤を使うことにする。(EP2より)
・礼拝堂の鍵は一本しか存在しない。礼拝堂の施錠は礼拝堂の鍵以外では開錠不可能。礼拝堂の扉は、施錠時には如何なる方法での出入りも拒む。(EP2より)
・(EP2以降)マスターキーは使用人たちがそれぞれ持つ一本のみ。マスターキーは5本しかない。(EP2より)
・妾(ベアト)は約束は守る。(EP2より)
・六軒島の中には、九羽鳥庵という隠し屋敷が実在します。 かつて実際にこの場所で、お二人(金蔵とベアト)はこのような会話をなされました。1967年の六軒島の隠し屋敷に、人間としてのベアトリーチェさまが存在した。(EP3より)
・(崖から落ちた九羽鳥庵のベアトリーチェは)間違いなく死んでいる！(EP3より)
・六軒島に存在する全ての扉は鍵が通り抜けられる隙間などない。(EP3より)
・人間以外の一切の要素は、このゲーム盤に関与しない！(EP3より)
・金蔵の書斎以外にオートロックの扉は存在しない！(EP4より)
・全ゲームの開始時に金蔵はすでに死んでいる！(EP4より)
・全ての人物は右代宮金蔵を見間違わない。いかなる変装であったとしても、右代宮金蔵を見間違わない！ (EP4より)
・妾(ベアト)はこれまで、この島には19人以上の人間は存在しないと宣言してきた。それを、金蔵の分、1人減らす！！この島には18人以上の人間は存在しない！！以上とはつまり18人目を含めるぞ。つまり、18人目のXは存在しないッ！！　これは全ゲームに共通することである！！！ (EP4より)
・身元不明死体について、その身元を全て保証する。即ち、替え玉トリックは存在しない！(EP4より)
・俺(戦人)の6年前に、ベアトリーチェなどという人物は存在しないのだ。(EP4より)
・妾(ベアト)が今、そなた(戦人)に思い出すことを要求している罪は、右代宮戦人とベアトリーチェの間のものではない。右代宮戦人には罪がある。そなたの罪で、人が死ぬ。そなたの罪により、この島の人間が、大勢死ぬ。誰も逃さぬ、全て死ぬ。(EP4より)
・妾(ベアト)は黄金の魔女、ベアトリーチェ。そして右代宮金蔵の孫、右代宮戦人と戦うためにこのゲームを開催した。(EP4より)
・右代宮戦人の母は、右代宮明日夢である。(EP4より)
・俺の名は右代宮戦人(だ)。(EP4より)
・右代宮戦人は、右代宮明日夢から生まれた。(EP4より)

・俺(殺人)は、右代宮、(「明日夢から生まれた」が妹で言えない)。(EP4より)
・そなた(殺人)は、右代宮明日夢の息子ではない。(EP4より)
・右代宮殺人は右代宮明日夢の息子ではないね。(EP4より)
・"殺人は明日夢の息子ではない"(そして)"金蔵の孫である殺人にしか(ベアトの)決闘相手の資格がない"。(EP4より)
・……縁寿は、……俺(殺人)の妹だ。(EP4より)
・このゲームに決着をつけない限り、あなた(殺人)が解放されることは決してない。(EP5より)
・碑文を誰かが解くことで、この子(ベアト)が何かを得ることはありません。もともと黄金郷の黄金はこの子のもの。見つけさせる必要も、横取りする必要も、何もありません。碑文の謎が解けても解けなくても、この子にとって得るものは何もありません。碑文が解かれようと解かれなかろうと、ベアトが何かを得ることはない。恐怖を味わわせるのが目的ではありません。誰かに復讐するためのものでもありません。ベアトは、快楽目的で殺人を行なっていることはありません。(EP5より)
・ベアトは、あなた(殺人)に解いて欲しいと願って、解けるようにこのゲームを、……この物語の謎を生み出しました。(EP5より)
・探偵権限。……探偵は全ての現場を検証する権利を持つ。(EP5より)
・これまで(EP1~4)のあなた(殺人)は探偵デシタ！　(探偵である)あなたには主観を偽る権利はありマセンッ！！(EP5より)
・全ての死体は、決して検死を誤らぬ。登場人物以外の死体は登場しない。(EP5より)
・殺人くんは(全てのゲームにおいて)誰も殺してはいません。(EP5より)
・全ての名は、本人以外には名乗れない！！(EP7より)
・このゲームに、ハッピーエンドは与えない。(EP8より)

EP1 赤字(EP4より)
・(第二の晩において)二人(絵羽と秀吉)は地殺である！　密室構築剣に片方を殺害の後に自殺したのではない！　また、殺人は執行者、犠牲者が共に同室して行われた！　執行者が室外から殺害する手段は存在しない！
・(第五の晩において)全ての生存者にアリバイがある！　さらに死者も含めようぞ！！　つまり、島の如何なる人間にも死者にも、嘉音は殺せなかった！
・嘉音は自殺ではない。嘉音は凍故死ではない！
・同室していた真里亞は(三人を)殺していないぞ！　そしてもちろん三人(源次、熊沢、南條)は地殺だ！　源次、熊沢、南條は殺人者ではない！
・夏妃は地殺である！　身元不明死体は一切なく、生存者も全員がアリバイがある！　夏妃の額に埋まりし銃弾は、夏妃の銃から放たれたものではない！　夏妃を射殺したのはトラップじゃなく、ちゃんと銃を構えて引き金を引いてしっかり射殺したのよ！

EP2 赤字
・生死は捨て置く。6人(蔵臼、夏妃、絵羽、秀吉、留弗夫、霧江)は確かに(礼拝堂の)扉から入った。6人は確かに"この正面扉"から入った。礼拝堂での6人の殺害時、犯人は礼拝堂内にいたわ！　6人は発見時にすでに全員死亡していた！　全員が他殺だ！　6人は全員が制御不能な犠牲者であり、相互の殺人には関与しない！　相打ち殺人は存在しない！！　あの礼拝堂には誰も隠れていなかった。よって、引き篭もり密室は通用しない！(EP4より)
・楼座は今朝、確かに真里亞の手摺りの中から封筒を取り出し、そこから正真正銘の礼拝堂の鍵を手に入れたぞ。妾(ベアト)が真里亞に預けた封筒の中身は、確かに礼拝堂の鍵だった。妾が真里亞に渡した封筒と、楼座が開封した封筒は同一のものであるぞ。真里亞の鍵は、真里亞受領後から翌日の楼座開封の瞬間まで、誰の手にも渡っていない！！(EP4より)
・(朱志香の部屋は)隠し扉の類は一切ない。出入りはこの扉からだけだ。扉の施錠は、朱志香の鍵が一本と使用人たちが一本ずつ持つマスターキーのみ。窓は内側から施錠されている。嘉音はこの部屋で殺された。施錠時には如何なる方法をもってしても出入りは出来ぬ。部屋の外から鍵を使わずに施錠するようなカラクリも通用せぬぞ。この部屋に隠し扉はない。扉と窓以外に出入りする方法はない。
・朱志香の死体発見時、朱志香の部屋にいたのは、殺人、譲治、真里亞、楼座、源次、郷田、紗音、熊沢、南條のみだった。朱志香ももちろん含む。よって、朱志香の部屋の件、そしてこの使用人室の件の両方について、そなた(殺人)が怪訝していた以外の人間は存在しない。
・(使用人室には)誰も隠れていない。扉は鍵を使用せずに外から施錠する方法は存在しない。窓については外からは如何なる方法でも施錠する方法は存在しない。(使用人室の鍵は)使用人室の奥のキーボックスに収められているぞ。出入りは唯一の扉と唯一の窓からと以外は不可能。そしてそれらはいずれも施錠されていた。扉も窓も、施錠時には如何なる出入りも許さない。扉の開錠は使用人室の鍵とマスターキー以外は不可能。この部屋には、お前たち以外は存在しない。お前達の定義とは、殺人、譲治、真里亞、楼座、源次、郷田、紗音のことを指す。
・夏妃の部屋もまったく同じだぞ、いつもの通り。扉も窓も内側から施錠されていた。如何なるイカサマも細工もなく、そして隠された通行手段もなければ隠れる場所もないッ。夏妃自身の鍵は譲治のポケットに入って、室内に閉じ込められていた。あとは5本のマスターキーしかないが、それは全て"楼座"が持っているッ。楼座がマスターキーを管理しと降、それら全ては一度たりとも彼女の手を離れていない！　夏妃の部屋を開錠した時に殺人に貸し出した際を除いてね。(EP4より)
・本来の客間の鍵は使用人室に封印されている。だからマスターキー以外では開錠不能！　部屋の密室定義もいつもに同じよ！
・(第七~八の晩において)彼ら(源次、南條、熊沢、紗音、郷田)は異なる人物を嘉音と誤認することは絶対ごない！(EP4より)

EP3 赤字
・ちなみに、6つの部屋の扉や窓はいずれも普通。オートロックのような鍵を使用せず施錠できるような仕掛けは存在しない。金蔵、源次、紗音、嘉音、郷田、熊沢の6人は死亡している！　6つの部屋には誰も隠れていない！　6人は即死であった！　室内には犯人しかおらず、それ以外の人物は室内には存在しておりません。6人はトラップで殺されてはいない。6人は誰も自殺していない！！
・マスターキー5本は全て、5人の使用人の様よりそれぞれ発見された！　個別の鍵は死体の傍らの封筒の中に！　つまり、連続密室にかかわる全ての鍵が、連続密室内に閉じ込められていわけだ！！　ドアの隙間だの窓の隙間だの通気口だのッ、そんなところを使って密室外から鍵を戻すことなど出来ぬぞ！！　彼ら全員には致命傷となった銃創と思わしき傷痕があったぞ！　室外からの殺害は不可能だぞ！！　さらに赤を重ねようぞ！　金蔵を除く5人の殺人の際、殺人者は必ず同室していた！　自殺者がいないことは当時に赤で宣言済みだ！！(EP4より)
・楼座と真里亞は死亡した。死因は南條の見立て通りだ。楼座と真里亞の二人は地殺です。わし(秀吉)はずっと部屋におったで。事件の前後の時間帯は全てや。
・霧江は食料はいらないと考えていた。ゲストハウスを出ないべきだと主張していた。食料を取りにゲストハウスを出ようと提案する。その心変わりの理由は、誰にも語られておらず、また記されてもいない！　霧江はね、死ぬ最後の瞬間まで"食料を取りに行かない＝屋敷に行かない"という行動式を維持していたわ！
・譲治はゲストハウスの階段を降りてはおらぬ。外部へ通ずる窓も扉も全て内側より施錠されていたぞ。しかもそれらの施錠は全て、外側からは不可能！(EP4より)
・朱志香負傷後、絵羽は常に殺人の監視下にあった。殺人は犯人でもなく共犯者でもない。よって絵羽の完全なアリバイを証明できる。
・(南條殺害後)金蔵は死亡している。蔵臼は死亡している。夏妃は死亡している。秀吉は死亡している。譲治は死亡している。留弗夫は死亡している。霧江は死亡している。楼座は死亡している。真里亞は死亡している。源次は死亡している。紗音は死亡している。嘉音は死亡している。郷田は死亡している。熊沢は死亡している。南條は死亡している。以上、15人は死亡。殺人は生存している。絵羽は生存している。朱志香は生存している。
・(南條殺害時)絵羽はあなた(殺人)とずっと一緒に居たわ。だから犯行は不可能。もちろん殺人くんは犯人じゃないわ。アリバイ偽装なんてしてないし、彼女が犯人の可能性も考慮していたから、その行動は用心深く見張ってた。彼女には、不審なことをできるあらゆる可能性が存在しなかった！つまり、犯行時の使用人室には、南條と朱志香しかいなかったのよ。右代宮朱志香は殺人を犯していない！　南條殺しにかかわっていない！！　彼女の目は完全に塞がれている。その彼女に殺人を行なうことは不可能よ！　朱志香の体が起こした如何なる動作も、南條の殺人には関係・影響しない！　この適用を殺人と絵羽にも広げるわ。南條は地殺よ。もちろん、トラップではなく、直

接的な殺害方法よ。凶器を構え、それにて真正面の至近距離から殺した！　犯人は、南條の目の前に堂々と現れ、そして互いに顔を見合わせながら、殺害したのだ…！！　南條を殺したのは、確かに人間である！！

EP4 赤字

・ここは妄(ベアト)の黄金郷！！　妄以外の魔法は絶対に存在できない世界！！　(妄の)魔法でさくたろうを蘇らせることは出来なかった…！！
・その(さくたろうの)ぬいぐるみは特別なぬいぐるみ！　楼座が娘の誕生日のために作った、世界でたった一つの、(「ぬいぐるみ」が赤で言えない)
・嘉音は死亡している。霧江たち5人の中で、一番最初に死亡した。つまりは、9人目の犠牲者というわけだ。
・親族会議に居合わせた全員が、金蔵の存在を認めた！
・(EP4最後の謎において)右代宮戦人、今から私(ベアト2)が、あなたを殺します。そしてたった今、この島にはあなた以外誰もいません。この島で生きているのは、あなただけです。島の外の存在は一切干渉できません。この島にあなたはたった一人。そしてもちろん、私はあなたではない。なのに私は今、ここにいて、これからあなたを殺します。

EP5 赤字

・古戸エリカは探偵であることを宣言するわ。探偵は、犯人ではなく、その証明には如何なる証拠も必要としない。古戸エリカは犯人ではない。古戸エリカは、これまでのベアトのゲームに影響を与えない。これまでの世界には存在しないし、影響も与えないわ。古戸エリカが1人増えただけ。それ以外の在島者の人数は、これまでのゲームとまったく同じ。つまり、今、この塔間にいる人数が、在島者全ての人数、ってことになるわね。
・この(地下貴賓室の)黄金の山は本物よ。ここに積まれたインゴットは全て本物の純金！　レプリカとかニセモノとか、そんな類しは一切無し！！
・書斎扉は昨晩、23時から現在まで、一度たりとも開かれなかった。窓は全て施錠されていた。夏妃の指す“金蔵”とは右代宮金蔵以外の如何なるものも意味しない。夏妃は書斎にて23時に金蔵と対面したこと主張。(ベッドの下かもしれぬぞ?!)探索済みデス。(バスタブの中かもしれぬ！！)探索済みデス。(クローゼットの中！　机の下！　カーテンの束の中！！)探索済みデス。(本棚の裏、戸棚の裏、絨毯の裏ッ、床裏、天井裏、壁紙の裏、ソファーの中に椅子の中、ベッドの中に布団の中に壁の中ッ、石の中、岩の中、部屋の中ッ！！)済みデス。
・夏妃に不審に思われずして、扉より出ることが叶わぬ。夏妃は扉の開く音、在室中に聞くことはなかりけり。扉より金蔵が出入ること、叶わぬものなり。窓は内より閉ざされ、また、夏妃が金蔵を逃したることもなし…！！　窓は内側より施錠されていた！！　ノックス第8条。提示されない手掛かりでの解決を禁ず…！！
・書斎に入った時、その構造について、はっきりと言及してるぜ。“金蔵の書斎は、屋敷の内側に作られた小さな別荘とさえ呼んでもいい”“書斎。書庫。事務所。そして風呂場に水場。複数の部屋で構成されている”
・“窓が昨晩以来開かれたことはない”
・親族会議以前に、エリカ、譲治、朱志香、真里亞、南條、郷田、熊沢は、屋敷より退出し、ゲストハウスへ移動したものなり。残りは、蔵臼、夏妃、源次の3人のみが2階廊下におり、それ以外の全員は食堂におりしこと、申し上げ奉る。蔵臼、夏妃、源次の3人は、その手紙に触れてさえいない！　食堂の全員の誰も、いいえ、もっとシンプルな言い方をするわ。24時の時点で屋敷内にいた誰一人！　あの手紙を廊下に置いた者はいないわ。
・蔵臼、夏妃、源次の3人は、ノックをしていない！　これは、扉だけはノックしていないという、限定的な意味じゃないわよ？　音が伝わる柱だろうと録音したカセットテープの再生ボタンだろうと、そのノック音を生み出したことは断じてないという意味！　無論、直接的にも間接的にも、意図的にも偶発的にも、無意識的にもね！　24時の時点で、2階廊下にいた、蔵臼、夏妃、源次の3人と、食堂にいた全員以外の、一切のニンゲンは屋敷内に存在しなかった。蔵臼、夏妃、源次の3人に加え、食堂の全員もまた、ノックしていないこと、申し上げる。このノックとは、ノック音を生み出す、直接的、間接的、意図的、無意識的、偶発的な全てを含めるものなり。つまり、屋敷にいた人物全員が、ノック音の発生源とは成り得ない、という意味デス。……そしてこの“全員”とは、誰も把握していない、観測されていない人物であったとしても含みマス。
・屋敷内の誰一人、手紙を廊下に置いた者はいない。それは直接的、間接的、意図的、偶発的、無意識的、全ての概念でよ。24時の時点で、屋敷以外に存在するのは、エリカ、譲治、朱志香、真里亞、南條、郷田、熊沢のみである。廊下天井に手紙が存在したことはなきなりや。配膳車に手紙が触れたことはなきと知り給え。屋敷以外の全員は、親族会議終後、屋敷内にて何を行なうことも不可能なり。
・全ての人物は、ノック音を誤認することはない。ノック音を誤認しない、ということはつまり。ノック音によく似た他の音を、ノック音と勘違いしたりはしない、ということよ。柱を叩くとノックに似た音がする、なんてのもアウト。ノック音をカセットテープに録音したとしても、それはもはや“ノック音を録音したテープの音”であって、ノック音ではない。だからこれもアウト！　つまり、実際にあの扉を叩いたノック音を、全員は正確に識別し、絶対に聞き間違えないということよ。あの扉を直接叩く以外のあらゆる音を、ノックと誤解することは絶対にありないということ！！　ノックは、人が手で扉を叩くもの(よ？　仕掛けで叩いたなんて認めないわ、)　そして、彼らは誰もノック音を誤認しない。蔵臼、夏妃、源次の3人はノックにかかわっていない。それ以外の人物は誰も屋敷内に存在もしない。そしてノックは、直接扉の前に立ち、手で扉を叩く行為を指す。
・譲治、朱志香、真里亞、楼座、源次の死体は、誰が見ても、一目で死亡が確認できる。死んだフリなど絶対にありえぬ、誰もが一目で死亡を確認できる死体であるわ。
・(夏妃は)紗音にしか、秘が好きだと語ったことはない。
・つまり熊沢は、ゲストハウスへ戻って以降、朝まで2階に上がっていない。郷田はゲストハウスへ戻って以降、朝まで2階に上がっていない。ゲストハウスには、24時の時点で、譲治、朱志香、真里亞は生存していて、2階のいとこ部屋にいた。南條、郷田、熊沢は1階にいた。譲治、朱志香、真里亞、楼座、源次の5人はちゃんと死んでるわよ。24時の時点で、屋敷の2階廊下には、夏妃と蔵臼、源次がいたわ。残りは全員、親族会議の食堂よ。もちろん、この時点ではまだ殺人は起こってない。源次も健在よ。午前1時から午前3時まで、エリカ、南條、郷田の3人は、ゲストハウス1階のラウンジで過ごした。24時以降、エリカは午前3時までずっと、南條と一緒にいたわ。あなたの封印も赤き真実も完璧よ。南條は、午前3時までエリカと一緒にいたというアリバイがある。そして午前3時から朝まで自室を出ていない。右代宮戦人は、午前3時にいとこ部屋に戻りそのまま就寝した。そして事件発覚まで部屋では一切、不審なことはなかった！　つまり、戦人には殺人も死体を傷つけることも不可能だったということ。ゲストハウス2階へは、ラウンジにいた人物に知られずに至ることは不可能。……もちろんこれは、内部から2階へ至る話だけれど。ゲストハウス2階へは、ラウンジを通過しない限り至ることは出来ず、ラウンジにいたエリカに知られずに至ることは不可能！　24時の時点で、屋敷の2階廊下には、夏妃と蔵臼、源次がいた。残りは全員、1階の食堂。食堂の全員は、午前1時まで、誰一人食堂を退出していない…！　源次は電話の取次ぎを終えた後、そのまま、まっすぐ控え室に戻っている。絵羽は午前1時に源次の控え室に封印をし、それは、朝の事件発覚時に、嘉音と熊沢に破られた。面倒だから、さらに付け加えるわ。午前1時の小休止で最初に食堂を出たのは、楼座と絵羽よ。絵羽が戻るまで、食堂の人間は全員その場に留まっていた。絵羽は、楼座を見送った後、控え室へ行き、封印を行なった。無論、その際に室内には一切立ち入っていないわ。源次が24時以降、屋敷を出たことはない。
・右代宮夏妃は犯人ではない！
・右代宮蔵臼は犯人ではない。そしてとっくに殺されてるわ。あんた(夏妃)に電話で声を聞かせた直後にね?
・以上により、封印の完全性は保証されマシタ。ミス・エリカの封印は、何者にも破れず、誤魔化すことは出来ないのデス！！　絵羽の封印も、ミス・エリカの封印と同一のものデス。この封印方法は、ミス・エリカと絵羽が晩餐後に共同で考案したものだからデス。全ての封印は如何なる方法でも、痕跡を残さずに剥がすことは不可能なり。全ての封印には不審な一切の痕跡は、無きにけり…！　エリカと絵羽の全ての封印には、剥がすなどの、封印の機能を損なわせる一切のエ作はなかった。
・ノックス第3条。秘密の通路の存在を禁ず！　ミス・エリカは探偵として全ての侵入口を封印していマス。探偵に発見できない通路は、秘密の通路デス。よって、ミス・エリカに発見できない侵入口は存在しないのデス！！
・ラウンジでのエリカ側の見張りは完璧なりや。わずかの隙も油断も、1秒の見落としも無きにけり。よって、ラウンジでの会合中、2階へ上がりしは、楼座のみなり！　何者かが楼座に変装することを示唆する伏線は存在しマセン！　また、彼女が人間を隠蔽できる荷物を所持していなかったことを、エリカは確認していマス！
・犠牲者は全員、他殺なりや。

・夏妃。金蔵があんたの心に、片翼の鷲を刻むことを、いつ許したっての？　あんたの妄想の中の金蔵の言葉でしょうが、それは。‥‥本当の金蔵はね。生涯、ただの一度も！　あんたを心の底から信頼したこともないし、あんたに敵意を許そうと思ったことも、ただの一度もないわ！　本当の金蔵はそんなことを言わないわ。消えなさい。夏妃によって美化された、夏妃にとって都合のいい、夏妃の中の妄想の金蔵。

・金蔵は24時から朝まで、ずっと同じ部屋に滞在したわ。金蔵は、屋敷以外の場所には存在しない。3階に金蔵はいない。地下に金蔵はいない。1階に金蔵はいない。以上から、金蔵が存在し得る余地の検討は、2階だけとなるわ。夏妃の部屋を除く全ての場所に、金蔵は存在しない！　24時から朝までの一晩、生きた金蔵は、夏妃の部屋を除く全ての場所に存在しない！！　24時から朝までの一晩。生きた金蔵の存在する余地は、あなたのベッドの中以外に、存在しない。　24時から朝までの一晩。生きた金蔵の存在する余地は、夏妃のベッドの中以外に存在しない。そして夏妃も昨晩、同じベッドで就寝したわ。

・本当の金蔵は、その名誉を守れなんて、一度たりとも夏妃に命じたことなんてないんだから。

・俺(戦人)は夏妃伯母さん以外が犯人である推理を構築できる。他の解釈で異なる真実の提示が可能だ！！

・第5のゲームより登場した人物に犯人は名乗れマセン…！！

・第4のゲームにおける、俺(戦人)が、母朔羽日夢の息子でないとする赤き真実。第1のゲーム及び今回のゲームにおける親父の隠し事の気配。特に今回のゲームでは、俺の生まれに何か事情があることをはっきり明示している。

・あなた(戦人)はその(24時から)1時間の間、屋敷の食堂にいます！！　死亡時刻が24時からの1時間の間と特定はされていない。午前1時から事件発覚まで、いとこ部屋での犯行は不可能です！！　いとこ部屋で実際に犯行が行なわれたなら、手掛かりが提示されなくてはなりマセン。それが、朝まで室内の異常を監視していた探偵であるエリカ卿に与えられなかった以上、犯行は不可能デス…！！

・いとこ部屋の4人(楼座、藤台、朱志香、真里亞)の死亡は赤き真実で宣告されている！！　そしてその遺体は大勢が確認していますッ！！　そして全ての死体は検死を誤らないとすでに赤き真実で宣言済みです…！！

・この法廷が開廷した時、ラムダデルタ卿は宣言しておりますよ。24時を迎えての答え合わせと！

・藤台は死後、遺体は一切、移動されていない！　朱志香は死後、遺体は一切、移動されていない！　真里亞は死後、遺体は一切、移動されていない！　楼座は死後、遺体は一切、移動されていない！　源次は死後、遺体は一切、移動されていない！　蔵臼は死後、遺体は一切、移動されていない！　よって、遺体発見後に遺体が消失することはありえないッ！！　貴様(エリカ)の推理、遺体は金蔵が運び出したは、破綻する！

・証拠提示。右代宮金蔵と識別可能な遺体を提示する…！！　この閉ざされた六軒島では、この死体が祖父さまのものだと示せる客観的な方法はない。以上により、祖父さまの不在は証明され、夏妃伯母さんの、祖父さまを巡る不名誉は返上されるッ！！　さらに。これまでの死者全員の死亡時間に疑義が生じる以上、夏妃伯母さんに対し全員のアリバイは白紙に戻る…！！　もはや、夏妃伯母さんに対し犯行が不可能であるとの論法は通用しないッ！！

・されどあなた(戦人)は、いとこ部屋にて、識別不可能な遺体を確認されておりマス…！　それが重傷であったと仰るのデスカ?!　…ノックス第7条、探偵が犯人であることを禁ズ！！　探偵は古戸エリカだぜ、今回の俺(戦人)は探偵じゃないッ！！　そしてノックス第9条、観測者は自分の判断・解釈を主張することが許される…！！　ノックス第8条、提示されない手掛かりでの解決を禁ズ！　これまでのあなたは探偵デシタ！　そのあなたが今回は探偵でなく、私見を交える観測者であったことは示されていたのデスカ！！　それがない限り、あなたには主観を偽る権利はありマセンッ！！　第4のゲームにてベアトが示した赤き真実！！　全ての人物は右代宮金蔵を見間違わないッ！　つまり、この島では、祖父さまのふりはもちろん、祖父さまに見間違うような一切の現象は、“絶対に通用しないのだ”。風雨になびくシートを見間違え、それを何であったと誤認して語るのも、ノックス第9条の権利だ。‥‥しかしッ！　祖父さまだと誤認することだけは、赤き真実において、本ゲームでは許されていないッ！！

EP6 赤字

・あのベアトリーチェ(EP1～5のベアト)が誓うことは、二度とない。

・私(離ベアト)は、お父様(戦人)のために生まれてきました。

・これ(ベアトが空のカップから魔法で飴玉を出して真里亞にくれたこと)は本当の話！！　そんな細工は何もない！！　ただのテーブルとカップだよ！！

・あんた(真里亞)の言う、飴玉の魔法はただの手品ッ！！　ベアトリーチェとかいう、エセ魔女が魔法と称して見せた、単なる手品！！

・(“6人の部屋は全て密室でアル”)認める。(“密室の定義とは、外部より構築不可能であるコト”。)認める。(“密室の定義とは、内外を横断する一切の干渉が制絶されていることを指ス”。)認める。(“密室破壊時、室内には犠牲者（夏妃・絵羽・霧江・楼座・真里亞・戦人）以外存在シナイ”。)認める。(“密室破壊後、部屋に入ったのは、私(エリカ)を除き、蔵臼、留弗夫、秀吉、細田の4人のみである”。)認める。蔵臼、留弗夫、秀吉、細田たち4人は、夏妃、絵羽、霧江、楼座、真里亞、戦人たち6人の殺人にかかわっていない。

(“犠牲者たちは、他殺を除くあらゆる方法で死んではいナイ”。)認める。(“第一の晩の犠牲者6人の所在は、発見場所のとおりである。夏妃は自室、絵羽は貴賓室、霧江は蔵臼の書斎、楼座と真里亞は客間で、あんた(戦人)は客室”！)それを認める。(“隣部屋に所在するのは、秀吉、藤台、紗音、熊沢、南條である！”)認める。それ以外の全員が、いとこ部屋にいることを認める。

・いとこ部屋、隣部屋の両部屋の密封は保証されマシタ。客室の完全な封印を確認しマシタ。エリカ卿が戦人の存在を確認して以降、この密室は維持されていマス。(客室の)ベッドの上に、右代宮戦人は、いない。客室内に、エリカさんに発見不能な隠れ場所は、存在しません。例外トーク所を除き、ベッドルームに誰の姿もありマセン。バスルームに誰の姿もありマセン。例外トーク所を除いて、客室に戦人が存在しないことを確認しました。右代宮戦人は、客室内に存在しない。‥‥クローゼットも含め、一切の例外なくだ。あの時、私(エリカ)は、すぐに扉を閉め、チェーンロックを掛け直し、この部屋を封じました。エリカは、チェーンロックを修復したのよ。エリカはね、そのガムテープで、切断されたチェーンの切断面両端を繋いで“封印”したの。つまり、封印によってチェーンを修復し、それによってこの部屋を内側から再び密室にしたってわけね。ガムテープの使用制限は回数じゃなかったでしょ？部屋の数よ。‥‥‥3部屋までという、場所の制限だけ。‥‥‥エリカはその1部屋ここの客室を選んでるわ。だからエリカは、この部屋に何ヶ所でも、そして何度でも、封印する権利を持つッ。ガムテープの封印によって、チェーンロックが修復されて、元の機能に復帰していることを宣言します。そして、それにより、私は入室と同時に施錠を行ない、この客室を内側より再び密室としました。チェーンロックは施錠を、維持している。

・右代宮霧江ニハ、戦人ヲ救エナイ。右代宮霧江には、‥‥戦人を救えマセン。右代宮夏妃には、戦人を救えマセン。右代宮絵羽には、戦人を救えマセン。無駄ｄｅａｔｈ。楼座にも真里亞にも救えないのデス。(私(エリカ)は、慌しい屋敷内を駆け巡り、全ての現場を訪れ、全員を‥‥‥‥)しっかりと、殺し直したのですッ。殺した全員の頭部を完全に切断したわ。私が殺した5人全員は、‥‥私が殺す瞬間まで、ちゃんと生きていましたッ。

・謹啓、謹んで申し上げる。(隣部屋といとこ部屋の封印は)どちらも破られていないものと知り給え。破られていない封印とは即ち、未だ何者の出入りも拒みたることの証と知り給え。封印を破らずしての出入り、改めて言うに及ばず、不可能と知り奉れッ！！　この部屋は内側から作られた密室です。窓の封印は維在ですので、窓からの脱出はありません。バスルームからの脱出方法ももちろんない。‥‥はっきり断言しましょう。この扉以外に、脱出口はありません。しかしこの扉にはチェーンロックが掛かっています。外すも掛け直すも自由ですが、それは内側からしか出来ません。そして、扉から出ることさえ自由ですが、チェーンロックが掛かっていない状態での退出は、脱出とはなりえません。

・(嘉音に戦人の救出が可能よ。エリカ封印後に窓を出て客室の戦人くんと入れ替わり、チェーンロックを閉めて、クローゼットに隠れた。)不可能デス。窓も封印を維持していマス。無論、ロジックエラー時にデス。ロジックエラー時に隣部屋の窓の封印が壊されていたことを理由とする青き真実の使用を禁じるものと知り給え。当該の青き真実への回答義務は、発生しないものと知り奉れ‥！

・戦人を救出したのは、間違いなく嘉音本人である。戦人と嘉音は別人である。

・いとこ部屋は完全な密室が朝後まで保証されています。隣部屋は確かに封印されましたが、ロジックエラー時には、扉のみしかその維持が証明されませんでした。封印時の隣部屋に居たのは、秀吉、藤台、熊沢、紗音、南條である。そして、隣部屋の人数は5人である。この5つの名に該当する者以外は存在しない！

・戦人救出時、客室に入ったのは嘉音のみである。そなた(エリカ)の入室からロジックエラー時まで、客室を出入りしたのは、そなたと戦人と嘉音のみだ。そなたと戦人と嘉音で、3人である。3人、即ち3体が出入りした。そなたと嘉音は入ったのみ、戦人は出たのみ。(“私(エリカ)は救出者ではない”。)当然だ！　救出者とは、戦人の開けたチェーンロックを、再び掛け直した者、ということにする。戦人を救う意思があったかどうかは、問わないことにしておく。(“出入りの定義とは、客室と外部の境界

を踏いだかどうかである”。）認めようぞ。（“客室とは、　ベッドルーム、　バスルーム、　クローゼット内の全てを含む”。）認めようぞ。妾（ベアト）もその認識でいるぞ。そしてすでにそなたは、ベッドルーム、バスルームの２区分で、誰も隠れていないことを赤き真実で確認したはずだ。
・ゲームは、私（エリカ）が客室に入ったところで終わってしまったのだから、私は、自分で閉めたチェーンロックを、開けてさえいない。だから、私が退出した後に、私に続いて脱出、というのは通用しない。また、チェーンロック施錠は、入室と同時に行なっている。私が入室してから、チェーンロック施錠までの数秒間に、誰も退室は出来ないのだ。客室は、戦人様死亡時に封印したため、私が再び開けて封印を自ら破るまで、客室の出入りは一切不可能だ。よって、私の入室時、戦人は客室内のどこかに隠れていたことは確定する。戦人の脱出のチャンスは、私が封印を破った後のみ。さらに限定すれば、私がバスルームにいる間しか脱出チャンスは存在しない。
・ベッドルームに嘉音は存在しない。客室に、嘉音は存在しない。……もちろん、クローゼット、ベッドルーム、バスルーム、この全てにおいてである。
・初めまして、こんにちは！　探偵ッ、古戸エリカと申します！！　招かれざる客人ですが、どうか歓迎を！！　我こそは来訪者ッ、六軒島の１８人目の人間ッ！！！　（……申し訳ないが、）そなたを迎えても、１７人だ。

EP7 赤字
・安心なさい。（誰がベアトリーチェを殺したか推理するために必要な情報の）全てはここ（礼拝堂）に揃っている。
・（お茶会の事件について）これは全て真実（縁寿の絶叫で必後が遮られる）
※EP8 にて「～とは限らない」と続けようとしていたとベルンは言っています。

EP8 赤字
・一なる真実の書を、封印が解けて一番最初に読むのはあなた、縁寿よ。
・（絵羽の）日記には真実が記されています。
・「ベアトリーチェは、１９８６年１０月に、死亡した。よって、彼女が生み出した黄金郷は、完全に滅び去った。黄金郷に生かされていた、お前の親族たちも全員、滅び去った。お前の父も、母も、そしてもちろん戦人も、二度とお前のところに戻り、お前の名を呼ぶことはない」
・「赤き真実でッ！！戦人は死んだって宣言してる（のよ？！　なのにどうしてッ、どうして生き返れるの？！？！）」
・「（ベアト？！？！　どうして？！）赤き真実で死亡を宣言したのに！！」

各 EP 考察(小ネタ)

■　うみねこのなく頃に　Episode1　「Legend of the golden witch」
■第1日目　１９８６年１０月４日
「上上下下左右左右」（留弗夫）
※ＰＣ版。おそらくコナミコマンドだと考えられます。
「タテタテヨコヨコ丸書いて逆に回して倍率ドンドンさらに2倍」（留弗夫）
※ＰＳ３版。

■　新島飛行場到着　１０月４日（土）０８時００分　■
（六軒島は）全周が10km程度の小さな島だ。島のほとんどは未開の森林のまま残されている。
※六軒島が完全な円形だと考えると、直径は3km程度だと考えられます(直径×3.14＝10)。

■　六軒島到着　１０月４日（土）１０時３０分　■
「薔薇の庭園は記憶にあったんだナどよぅ…。このゲストハウスっつーのは記憶にねぇなぁ。これ建てたのは最近か？」（戦人）
門柱らしきものに「波来庵」と記されているが、みんなはゲストハウスと呼んでいたので俺もそれに習った。
※Trillion（英語の“兆”）の意味だと考えられます。ちなみに九羽鳥庵はquadrillion(英語の“1000兆”)でしょう。

そこには、初老の男の姿があった。使用人の長である源次である。
「……そこで何をしている。…紗音、早く厨房に戻りなさい」（源次）
「は、はい。……失礼いたしました……」（紗音）
「……」（嘉音）
紗音は慌まり、すぐに配膳ワゴンを押して立ち去ろうとする。だが、嘉音は言葉にできない何かを瞳に宿して、無言でそれを源次に訴えている。
「……どうした。何かあったか…？」（源次）
「…しゃ、……紗音は何も悪くないのに、あいつら…、」（嘉音）
「やめて嘉音くん…。……失礼しました。すぐに仕事に戻ります。嘉音くんも自分の持ち場に戻って。……お願い」（紗音）
「……姉さんがそういうなら」（嘉音）
「……。…何事もないなら、そうしなさい」（源次）
「……はい。……失礼します」（紗音）
※この場面の源次は、紗音しか認識していないと思われます。源次の２つ目と３つ目の台詞の間の紗音と嘉音のやりとりは心の中での会話だと考えると、源次の台詞の不自然さがなくなります。

■　ゲストハウス　１０月４日（土）１２時００分　■
「叩けば扉は開かれると誰が教えた！　その馬鹿者は磔にしたぞッ！！　お前もそうされたいのかッ！！　炉には鍋を掛けてニガヨモギを煮るがいい！　黙示録の煮汁はそれでも私をここから連れ出そうとする馬鹿者どもに飲ませてやれッ！　残りは酒に漬けるのだ！　ぁぁ、源次はどこだ！　源次を呼べい！！　苦艾の魔酒を用意させろ！　緑の妖精の囁きが届かぬ！！　ぁぁ、源次はどこだッ、源次を呼べぇぇぇいッ！！！」（金蔵）
※“苦艾(くがい)”とはニガヨモギのこと。“緑の妖精”はニガヨモギを用いたリキュール“アブサン”の別名。この場面で出てくる金蔵のその他の発言は『新約聖書』の“マタイによる福音書”“ヨハネの黙示録”に関連すると思われます。

■　食堂　１０月４日（土）１３時３０分　■
右代宮家は、明治・大正の頃までは隆盛を極めたそりゃあ立派な家柄だったそうだ。紡績工場をいくつも持ち、毎日笑い転げてるだけで金が転がり込んでくる富豪っぷりだったらしい。ちなみに祖父さまは分家筋で、本来なら右代宮本家とは何の関係もない人だった。当主継承権からも遠く、煌びやかな本家とは縁も遠かったらしい。ところが大正１２年の関東大震災で、当時、小田原に屋敷を持っていた右代宮本家はペッタンコ。東京下町に持っていた紡績工場は大火事で全焼し、右代宮家は一瞬にして主だった親族と財産を丸ごと失ったんだそうだ。それで右代宮本家の跡継ぎは誰だってことになったら、分家筋も分家筋の金蔵祖父さましか残ってなかったらしい。本人は後にこのことを、運命がひっくり返るほどの強運だったと述懐してる。
※金蔵は当主になったことを歓迎していなかったようですが…。そのことがきっかけでビーチェと会うことが出来、また、大成功を収めることも出来たため、結果オーライということなのでしょう。

■　肖像画の碑文　１０月４日（土）１３時３０分　■
「祖父さまはその資本金で儲けた挙句でこの島を買うんだぜ？　この島に来る前から黄金を持ってたってことになるじゃねぇか。この島にあるわけがないぜ」（朱志香）
「……そうとも限らないよ。その黄金が、元からこの島に隠されていて、それを確実に自分のものにするために、この島を丸々買い取ったとかね。何しろ１０ｔもあるんだもん。安全な場所に移すより、隠し場所そのものを確保する方が現実的だよ」（譲治）
※“これは推理小説的なギミック。登場人物がしてみせたもっともらしい推理は外れている可能性が高い。という王道を逆手に取る。更に“正解”を口にすることで、彼らに、それ以外に真相があるに違いないと思わせ、畑に巻く手法である（我告）”。

「条件の１つ目。まず、兄貴は親父の黄金を見つけていたことを認めること」（留弗夫）
「条件２。その黄金について、兄弟の取り分を認めこれを支払うこと」（留弗夫）
「条件３。黄金の分配は右代宮本家当主跡継ぎの肩書きに５０％。残りを兄弟の正当な取り分として分割。もちろん、蔵臼兄さんもこれには含めるわよ」（絵羽）
「条件の４。分配金は親父の死亡時に遺産分配に含めて清算する。ただし、手付金として俺たちの取り分の１０％を即納してもらう。支払いは来年３月までだ」（留弗夫）
「条件５。この取り決めはお父さんの遺言状に優先する。……・後になって、この取り決めが反故になるような遺言が出てきちゃかなわんちゅうこっちゃな」（秀吉）
「……条件に７を付けて貰おう。私以外の兄弟が黄金を発見した場合、速やかに私に引き渡すこと」（蔵臼）
※条件の６は？

秀吉は大量の金を手に入れなければ、自分が育て上げてきたもの全てを失いかねない瀬戸際にいたのである…。
「その通りさ。世の中なんだってカネでケリが付く。失った兄弟の絆だって買い戻せるようにな！　アメリカは権利要書などには五月蠅い国だ。だがカネさえあれば何でも和解できる。資本主義万歳だよ。…もっとも、和解金は数百万$にも及びそうだとの噂もあるがね？……・楼座は清く正しい妹だ。危険なマネーゲーム線には手を出さない。…だが、お人好しな性分が災いしたんじゃないかね…？　連帯保証人は、気安く引き受けるものではないと思うがね」（蔵臼）
……・何のことはない。彼らは全員が全員、現金ガスグニ大量ニ、喉カラ手ガ出ルホドニ欲シカッタ…！
※ＥＰ１はヤスが書いたというのが通説ですが、どうやってヤスはこんな情報を手に入れたのでしょう？

■　砂浜　10月4日（土）15時00分　■
「そして……、お前が朽ち時、そこにいるのは私であるだろう。私が最後まで生き残り、お前の目覚めを見守るだろう。……さぁ、来たれベアトリーチェ…。ようこそ、我が宴へ…！　私が生み出した全てと引き換えに、私にもう一度だけ奇跡を見せておくれ。……おおおお、…ベアトリーチェぇええ……。」（金蔵）
※“一度目の奇跡”とは“ビーチェに瓜二つだった九羽鳥庵のベアトが生まれたこと”だと考えられます。

■　手紙と傘　10月4日（土）18時00分　■
「……お趣味は真里亞さまのことをあまりお好きではない」（源次）
※もうゲーム盤が出揃っているため、この源次の発言はヤス補正が入っていると考えられます。

配膳台車を押して厨房に戻る途中の熊沢たちは、源次と嘉音に出会う。そこへ パンパンと、手を叩く乾いた音が響いた。一同が振り返ると、食堂から出てきた郷田だった。
「さぁさぁ皆さん。ディナーは配膳のタイミングも大事です。すぐにスープの配膳に取り掛かってください。源次さん、彼女らはお切なお仕事中ですのでお引止めにならないで下さい」（郷田）
「……」（嘉音）
嘉音は、尊敬する源次に対し見下したような冒涜言いをする郷田に敵意の眼差しを見せる。それに源次が気付き、表情に出ていることを咎めるかのように肩を一度、ポンと叩いた。嘉音は渋々としながらも顔を背け、表情を戻す。
「……郷田の指示に従いなさい。今は晩餐の配膳を急ぐように」（源次）
「ほらほら、時間がありません。たらたらしない！　急ぎますよ…！」（郷田）
郷田は紗音から配膳台車を奪うと、ぐんぐん押して先に厨房へと向かっていった。
「…では私どもも厨房に戻らせていただきます。…郷田さんも気の短い方ですからねぇ、…ほっほっほ」（熊沢）
「わ、私もこれで失礼いたします…」（紗音）
熊沢と紗音はその場を立ち去る。
※この場面の源次と郷田は、嘉音を認識していないと思われます(熊沢も)。源次が肩を叩いたのは紗音であると考えると、源次と郷田の発言から不自然さがなくなります。

■　餓の選びし大人　10月5日（日）06時00分　■
「おわぁッ、何だ何だぁッ?!　敵襲かぁ?!　回せ――！！」（戦人）
※『エリア88』のパロディと思われます。軍隊を除隊した主人公が街中でサイレンの音を聞き、この言葉を叫びながらベッドから飛び出すシーンがあります。ちなみに戦闘機のタービンなり、エンジンなりを回せという意味だと思います。

絵羽は自分が騙されたことと、何があったのか知らないが、急に夏妃が自信満々になったことを理解するのがやっとだった。絵羽は、夏妃の様子が、行きと帰りでまったく違うことに戸惑いを隠せなかった。…堂々としていて、悔しいが何らかの貫禄さえある。
※元々書斎にあった金蔵の死体の始末を源次に命じ、それがきちんと為されていたために安心し、自信満々になったとも考えられます。

■　惨劇の開幕　10月5日（日）08時45分　■
秀吉はそわそわしながら、先ほどの惨状を思い出しては、信じられない、この世のものとは思えない、悪魔の仕業やと呟き続けている。それらを時々、問い詰めの形に変えて南條にぶつけていたが、南條は医者らしく冷静に、少し見ただけでは何もわからない、警察が調べなければわからないと繰り返すのだった。でも、南條が冷静に見えたのは、あくまでも興奮や恐怖が抑えられない秀吉に比べればというだけの話。南條も実際は強いショックを受けていて、顔面は蒼白だった。
※秀吉も南條も共犯者ではありますが、あくまでアリバイ作りのための共犯者だったため、これらは芝居ではないと考えられます。

彼らは次々に食堂に飛び込むが、熊沢が真っ青になるほどの変化は見つけられなかった。……確かに、床に血の跡が残っていたのである。…しかし冷静に考えたなら、これは相当の出血を物語るのに間違いなかった。
「……ここにも血溜まりがあるよ。……これは一体……」（譲治）
※TIPS の“（蔵臼の Executa）薔薇庭園の倉庫内で死体が発見された。直接の死因は不明だが、死後に側頭部を損壊されたものと思われる。まずは全ての始まり。”と、2つの血溜まりから、この事件がどのように行われたか推理してみます。まず親族会議を行っている最中の食堂に紗音が現れます。銃を突きつけ「抵抗すると撃つ」と脅迫します。蔵臼は長男であり、ホストである責任感と、ボクシング経験者である自信から、紗音を取り押さえようとしますが、側頭部を撃たれて(突然だったのできちんと狙えなかった)死亡。もしくは食堂に現れた紗音がいきなり蔵臼の側頭部に銃口を突きつけ、発砲したと考えられます。それを見て、狂乱状態になった楼座が暴れたため、射殺します。銃声に驚いてやって来た郷田と、抵抗をあきらめた留弗夫に2人の死体を背負わせ、霧江に銃を突きつけて薔薇庭園の倉庫に移動します。そこで不意をついて残りの3人を射殺。一応ドラマチックなストーリーにしてみましたが、ようは体重の重い者(蔵臼、留弗夫、郷田)と体重の軽い者(霧江、楼座)から、残りの者に運べる重さの死体を2つ作って運ばせたということです(重い者を2人殺すと残りの者に運べない)。これには2つの目的があります。狭い園芸倉庫内で6人を同時に射殺するのは難しいため(抵抗されると抑えきれない)、人数を減らしておきたかったのと、死体を背負わせることで、とっさに抵抗出来なくするためです。殺す人間を選べたなら、戦闘能力の高い蔵臼と油断のならない霧江(怪しい古武術でも使いそう)を殺しただろうと推測できます。顔面を損壊させた理由は、銃で殺害したことが解らないようにするため、身元不明死体を発生させることによって偽装死をミスリードさせるため、紗音の死体に護身達を近づけないため、などが考えられます。蔵臼だけ側頭部が損壊なのは、側頭部を派手に吹き飛ばしてしまったことから、顔面まで削ると不自然な死体になってしまうためでしょう。あるいは紗音を顔面損壊にしてしまうと偽装死を疑われるため、半壊という設定にしたけれども紗音だけ半壊では不自然ですから、蔵臼も半壊にしたとも考えられます。ちなみに当初の計画では郷田は銃で脅して共犯にし、死体を運搬させるつもりだったのですが、夏妃を殺せなかったため、その身代わりになったものと思われます。

「あ――ッ！　思い出したわ、その銃っ！　懐かしいなぁ、拳銃師無しでスチーム・マックィーンがぶっ放しとったやつだわ！！　お父さんも洗いなぁ…！」（秀吉）
※『拳銃師無宿』と“スティーブ・マックイーン”のパロディだと考えられます。

■　オカルト　10月5日（日）13時00分　■
「…どうして、……奥様は生贄を免れたんだ…。もし奥様が選ばれてたなら、……紗音は、……紗音は、死ななくて済んだのにッ…。」（嘉音）
※当初の予定では紗音は第一の晩の被害者には入っていなかったのかもしれません。しかし、事件が発生すると互いが互いを監視する状況になるため、一人二役を続けるのは難しくなります。早いうちにどちらかを殺しておいた方が良いのですが…。

■　寄り添う二人　10月5日（日）19時00分　■
厨房から客室はそう離れていないから源次もひとりで行き来したが、客室は少し遠ざかる。夏妃にみだりにひとりにはならないように注意されたし、ついさっき、南條にも危機感をもっと持った方がいいと諭されたばかり。…源次は嘉音を伴い、二人で絵羽たちの客室を訪れていた。

「絵羽さま…！　申し訳ございません。お部屋を失礼させていただきます…」（源次）

ガチャン。…それはドアチェーンを引っ張る音だった。チェーンが掛けられていたのだ。チェーンは外から掛けられないものだ。それは同時に在室も示す。部屋の中からはテレビの音声も漏れ聞こえた。…灯り、チェーン、そしてテレビ。それらが示すのは明らかな在室なのだが、……気配がない。源次は扉の隙間より再び触羽を呼んだ。だが返事はなかった。
※この場面を目撃しているということは源次は共犯です。

……そして(嘉音が)渾身の力で蹴ると、チェーンは想像していたよりもはるかにあっさりと切断された。切断されたチェーンは左右に分かれ、ちゃりちゃりと音を立てながらまだ揺れ続けている…。
「……嘉音さん、……足元にお箸が……。…しかもこれは、…お嬢様のもの……」(熊沢)
※熊沢も共犯確定です。

■　ボイラー室　10月5日（日）――――――　■
バタン。
「い、今の音は……?!」(熊沢)
地下より聞こえたその音は、確かに扉が閉じる音だった。……熊沢も、問い掛けるように言いはしたが、それ以外の何の音でもないことをすでに理解している。熊沢はその音に大層驚き、再び腰をぬかしてへたり込んでしまう…。……なぜなら、今この瞬間、ボイラー室にいられる人間はいないからだ。嘉音は瞬時に状況を整理し、地下へ駆け下りる…！
※ますます熊沢は共犯です。

…嘉音は自身の絶命をすでに覚悟していたが、……与えられた死を、そのままの形で受け容れることにだけでも、最後の抵抗を試みる。…そして両手で胸に刺し込まれた凶器の柄を握り、……この世のものと思えぬ激痛に歯を食いしばりながら……、……抜く。
※刺したら本当に死んでしまいますから…。

■　籠城　10月5日（日）20時00分　■
「お屋敷が竣工したのは昭和27年と聞いています」(夏妃)
※１９５２年ですから、３４年前ということになります。

■　黄金の魔女　10月5日（日）23時30分　■
「……(夏妃)伯母さん。一気に飛び込んで左右に分かれよう。扉を開けてぱっとしたら、例のアイスピックがど真ん中に飛んでくるかもしれねぇぜ…！」(熊人)
※これはファミコンの『ミシシッピー殺人事件』のパロディかもしれません。

■　うみねこのなく頃に　Episode2　「Turn of the golden witch」
私(紗音)は、教えてもらったばかりのモーターボートで、この小島にやって来た。いや、小島とは到底呼べない。岩礁と呼んだ方が正しいだろう。そこには鳥居があり、鎮守の祠があった。私は意を決し、……恐る恐る祠に近付き、…そこに納められている鏡を手に取る。それは古ぼけて曇り、薄汚れた鏡。……ううん、これは鏡じゃない。…これは逃れえぬ今日までの私の人生、そして運命。これを、割るんだ。割って、……鏡の向こうの人生を掴み取るんだ。割らなければ、私の人生は永久に合わせ鏡。何もわずかも変わることはない…。さぁ、……割れ。　私を閉じ込める永遠に変わりなき運命を、叩き割れ……！
「……約束はお守りました。……今度はあなたが約束を守る番です。……私の願いをどうか叶えてください！　ベアトリーチェさまぁあッッ！！」(紗音)
※これは１９８４年頃のことだと考えられます。

■　素晴らしき理想の世界　■
「ふむ、馳走になったぞ。……そなた(紗音)には今度、ネロのドルチェ・ビータでも振舞おうぞ。薔薇は永遠の愛の象徴。今のそなたには薔薇のドルチェこそが相応しかろう」(ベアト)
※暴君で名高いローマの皇帝“ネロ”(37～68) は、アルプスから万年雪や氷を運ばせ、果汁、蜂蜜、樹液などをブレンドして作った氷菓“ドルチェ・ビータ”を好んで食べたそうです。また、イタリアでは本能のままに自由に遊び暮らすことを“ドルチェ・ヴィータ”というそうで、これをネロにかけた発言でもあるのかも。

■　文化祭　■
…辺りはまるで、スノーグローブに金の吹雪をまぶしたようにきらきらと輝く。
※“スノーグローブ”というのは、水の入ったガラスの球や筒に白い粒を入れたおもちゃです。逆さにすると粒がゆっくり落ちるため、雪が降っているように見えます。

今宵、蒔きたる恋のタネは2つ。…すでに蒔きたるタネと合めてこれで3つ！
※“**「魔法で生み出された家具の、僕がここに存在すること自体が、……魔法の奇跡の存在する証拠なのです。１つのブローチは１人の願いしか叶えない。……家具の僕たちは、この１つのブローチによって、どちらかしか、結ばれ得ないのです」(嘉音)(EP6)**
これが、在りし日の、甲高く笑うベアトリーチェが残して残した、恋の火種の、最後の一粒。”譲治と紗音、朱志香と嘉音、そして紗音と嘉音どちらかしか結ばれ得ない。これが“3つの恋のタネ”です。

■　チェス盤の準備　1986年10月4日　■
…今の楼座にとって、真里亞との絆を取り戻すことの方が大事だった。……真里亞は自分にとって、愛しい娘であるだけでなく、…今の自分の全てなのだ。
※これは楼座がそのように思い込もうとしているか、もしくはメッセージボトルの描写なのだと考えられます。

普段は料理以外にも雑事をこなさなければならないが、親族会議の日は料理人として専念することができる。元料理人の郷田にとって、一年間で最高の晴れ舞台に違いなかった。
※郷田は料理には苦労を惜しみませんが、それ以外の雑事はあまり好きではないようです。

「……お嬢様より、お子様方が泊まれるよう４人分の用意をするようにとのご指示を賜りましたが、いかがいたしましょう?」(紗音)
「…今年は6年ぶりに戦人さまがお見えになるそうだ。お嬢様もいとこ４人で夜更かしをされたいのだろう。……準備するように。奥様にはお伝えしなくて良い」(源次)
※源次は自己裁量で仕事をすることがあるようです。

「……六軒島は太古の昔、小豆島と呼ばれて恐れられてきました。アズキはアクジキが訛ったものと言われ、本当は悪食島と呼ばれていたのだと、漁民たちの間では伝えられておりました」(熊沢)

「前にも聞いたよ。この辺は怪談が多くて、海難事故が多かったから、漁民たちが恐れてむやみに近付かなかったって話だろ？」（朱志香）
「……悪食鬼には悪霊が住み着いていて、太古の昔から人々の魂を食らい続けてきました。…この島に関わり、命を奪われた人間はあまりにも多いのです」（熊沢）
「それを旅の修験者だか何だかが、例の社を作って鎮魂したんで収まった、ってんじゃなかったっけ？　…却説奥さ話だっぺ」（朱志香）
「その鎮魂の社はこの夏、暗き闇夜を引き裂く紫色の不気味な雷で打ち砕かれたとか…」（熊沢）
※一番最後の語は熊沢の創作でしょう。

■　霊客　１０月４日（土）１０時４５分　■
「ベアトリーチェ！　ハッピーハロウィン！　ほら、貰ったの！　ベアトにもあげる。うー！」（真里亞）
「うむ。ハッピーハロウィン。ほう、これを客にとな？　天国にも地獄にも行けず、煉獄の間にて彷徨う男の唯一の灯りも、こうして菓子となれば実に可愛らしいことよ。」（ベアト）
※“ジャックオーランタン”は、悪戯心遊び人が悪魔を騙し、死んでも地獄に落ちないという契約を取り付けたが、死後、生前の行いの悪さから天国へ行くことを拒否され、悪魔との契約により地獄へ行くこともできず、カブに憑依して安住の地を求め、この世を彷徨い続けている姿だとされているそうです。

■　「家具」と「人」１０月４日（土）１８時００分　■
「僕も、６年前に４人で遊んだことを思い出すよ。紗音はたいぶお姉さん風だったね」（嘉治）
※紗音の実際の年齢は3歳上なので、戦人と朱志香より１歳上です。

本当なら郷田さんは、自分が精魂込めて作った料理を、自らの手でお嬢様に配膳したい。……しかしお嬢様は、黄金の蔵の紋章を持った使用人しか書斎に入れないという厳しいルールを課されておりました。……だから郷田さんは、書斎の外でお嬢様に挨拶することはできても、書斎の中に料理を運ぶという栄誉を与えられたことは一度もなかったのでございます。
※郷田は金蔵と会ったことはあるようです。

「でもあいつ(ベアト)は言ったよ。…もし今夜、その婚姻指輪を受け取らなかったなら、姉さんを生贄に選ばないと約束した。……僕たちが揃って黄金郷へ行ける確率はとても低いと思う。１３人が生贄になる。生き残るのは５人だけ。…その中に僕たち２人が入れる確率は本当に低い。……でも、姉さんだけでもその約束が得られるなら、確率はもっと上がる！　僕は嫌だったいんだ！　黄金郷には救いがある。僕たちはそこへ辿り着き、人間を手に入れるんだ。そして姉さんと二人で、人間としての人生を歩みたいんだよ…！　そうすれば、本当の恋だって、……できるかもしれない！」（嘉音）
「……。…かつての私たちは、黄金郷へ行けることを夢見てたね。……そこへ行けば、どんな願いでも叶う。……私たちをこの苦しみから救ってくれる。……そう信じてた。」（紗音）
しかし儀式は、運命と偶然に選ばれた者を数人しか黄金郷へ招かない。……他は全て、儀式の途中で生贄として命を落とす。
※生贄になった人は黄金郷には行けないようです。

■　結婚指輪　１０月４日（土）２２時００分　■
「んで。……結婚として南條先生。……祖父さまに、ベアトリーチェという愛人はいたんですか」（戦人）
「……おりました。…いえ、私は会ったことはありませんぞ。…ですが、そういう女性と交際があったと金蔵さんから聞かされたことはありました。……相当昔にお亡くなりになられたそうで」（南條）
「……死んだ。……その間に子どもがいたとか？」（嘉治）
「それはわかりません。……ただ金蔵さんは、ベアトリーチェを蘇らせるために研究をしていると常々言っておりました。…普通は、愛人を失い忘れ形見がいたならば、そちらにその分の愛情を注ぐものです。……ですから、金蔵さんとベアトリーチェの間に子どもはいなかったろうと私たちは自然に考えました…」（南條）
※これらは南條の嘘です。

「うん。…ずっとずっと、永遠に一緒だよって、約束した。……だからね？　その瞬間に、……私たちの永遠は、完成したの。例え、私たちが生贄になってしまうとしても、もう、完成してるの。だから、いいの」（紗音）
※この考え方がEP8の入水に繋がるのだと考えられます。

「……興味はない。…私と夏妃は認める」（蔵臣）
「……く……。…信じられないし、…信じたくないけれど…。……それが、……現実なのね…」（夏妃）
「…夏妃。言葉を少し選びなさい。……彼女は当家の最高の賓客なのだ」（蔵臣）
「……わ、わしらも認める。…ぐぅの音も出ぇへん」（秀吉）
「ええ。…認めるわ。……一片の文句もない。まさか本当に……。……東京に、あなたに尊敬の念を覚えるわ」（絵羽）
「私もよ…。……すごいわ。純粋に尊敬する。……だから認めざるを得ないわ」（楼座）
「俺も認めるぜ…。……未だに信じられねぇ。…だが、……どうしようねぇ。悪魔を証明しちまった！　あんたの勝ちだ…！」（留弗夫）
「くっくっくっくっく…！　悪魔の証明は、そなたが好む証明不能への便利な言い訳だったが、……仇になったようだな？」（ベアト）
「……苛めるなよ、魔女さま。……俺はもうあんたを認めてるぜ。降参だ」（留弗夫）
「……霧江。また興味があるか…？　妾と全員一致しか好まぬ。お前ひとりが妾の存在を認めぬならば…、」（ベアト）
魔女が不敵に笑うと、兄弟たちは焦りだす。…魔女を不快にさせることに怯えているのだ。霧江はうっすらと目を閉じ、…しばらくの間、沈黙を守ってから口を開いた。
「…ごめんなさい。……降参よ」（霧江）
霧江だけが、最後まで魔女に厳しい目を向けていた。……だが、それは真実を受け容れるのをほんのわずかな時間、拒否したに過ぎない。目の前にある現実は、存在は、何も否定できないのだ。もう悪魔は証明されてしまった…！
「……私も、認めるわ。……あなたはベアトリーチェ。右代宮家の瞬間移動金庫師。…そして、偉大なる魔法の使い手。……魔女であることを認めざるを得ない…！」（霧江）
※ＥＰ３に以下の内容があります。“「……ベアトリーチェは、自分だけが在り処を知る１０ｔの黄金で、私たちに家督を売らせるつもりなのよ。…１０ｔの黄金の価値はどのくらい？　ざっと見積もって…、２０億？　……いえ、２００億ね。これだけを積まれたら、私たちは狂喜して彼女を次期当主に認めるわ」（霧江）
そもそも当主継承権と関係のない蔵臣以外の兄弟は、納得できるカネが支払われれば、喜んでベアトリーチェの当主継承を認めるだろう。本丸の蔵臣以外の堀は全て埋まるわけだ。そうなれば、交渉は彼女と蔵臣の一対一になる。強気を装ってはいるが、蔵臣の財政状況も非常に悪い。…兄弟たちの前では、虚勢を張っているが、内心は、金額次第では交渉に応じても良いと思っているだろう。”そのため、この場面は幻想描写でも、現実の幻想演飾でもなく、実際の場面であると考えられます(ベアトリーチェの喋り方は幻想修飾されている可能性がありますが)。恐らくベアトリーチェは自分が碑文の謎を解き、黄金と家督を手にしたことを親族に明かし、その事実を認めるならば、黄金と家督をやろうと親族に話を持ちかけたものと考えられます。その内容が書かれたのが、楼座に渡した手紙なのでしょう。彼らの話し方から察するに、おそらくベアトリーチェが紗音であることは認識しています。霧江はうますぎる話に不信感を持ったものの、ベアトリーチェの思惑が読めなかったため、降参したのでしょう。この後、彼ら

はベアトリーチェの指示に従い、真里亞の為にハロウィンパーティの準備をし、終わった後に乾杯でもして、毒が睡眠薬を飲まされ、殺害されたと考えられます。

■　ハロウィン　10月5日（日）06時00分　■
時計を持ったウサギを追いかけたアリスは、余計な好奇心を後悔したことはなかったのだろうか‥‥。
※『不思議の国のアリス』のことだと考えられます。

■　新しいルール　10月5日（日）06時50分　■
「何をして過ごすも自由だと言っておるッ！！　歌おうが踊ろうが！　首を吊ろうが撃えたぎる大釜に飛び込むも自由ッ！！　13人が死ぬまで好きに過ごせば良いのだ。そんなに退屈ならばなぜに6×9が42になるかでも考えていれば良いッ！！　それが人と宇宙の神秘の答えだッ！！」（金蔵）
※“ダグラス・アダムズ”のSF作品『銀河ヒッチハイク・ガイド』に登場する「生命、宇宙、そして万物についての答え」のことだと思われます。ちなみに本来ならば6×7＝42ですから、実際の在島者の数が18人よりも2人少ない16人であることにも掛けているのかもしれません。

「うむ。すまんな、我が友よ。‥‥‥‥‥さて。我が生涯を語るには、あの魔女との出会いから記さねばなるまい。‥紗音、筆記せよ。‥‥‥私がベアトリーチェに初めて出会ったのは、たしか昭和の何年だったか‥。‥確か、終戦の‥‥‥、」（金蔵）
※この話は EP7 で語られることになります。

「開かぬ礼拝堂と知りながら。‥‥‥それでもなお、奇跡の日を夢見ていたのでしょうな。‥‥‥‥金蔵さんは若い日にはとてもロマンチストな方だった。‥わかる気がします」（南條）
※南條と出会った頃には金蔵は40歳近かったはずなのですが‥。

「ラプラスの悪魔の座に及ばねば、思考を巡らせることひとつできないというのか、この無能がッ！！　‥‥‥それに貴様は情報不足がまるで自分の不利になるように言っているが、真実はまったく逆だぞ？」（ベアト）
※“ラプラスの悪魔”とは、現在の世界におけるあらゆる現象を完全に把握できる存在がいるならば、その存在はこれから未来で起きるあらゆる現象も完全に把握できるだろうという考え方のことです。

「ひゅうッ！！　言うじゃねぇかよ、推理マニアは怖ぇぞ?!　クリスティが墓の下で歯軋りしてるぜ！」（戦人）
※“アガサ・クリスティ”のことだと思われます。

■　容疑者　10月5日（日）07時30分　■
“(赤：嘉音はこの部屋で殺されたよ)”。
※これは人格死です。

「く、‥‥‥‥‥くそ‥。だからって、親族や使用人の誰かが犯人だって保証はねぇ！　お前が、例えばダンボール箱にでも隠れながらコソコソと近付いてきて、熟睡してる俺たちの部屋に忍び込んで鍵を奪った可能性だって充分あるじゃねぇか！」（戦人）
※コナミのファミコンゲーム『メタルギア』のことだと思われます。

■　狼と羊のパズル　10月5日（日）13時00分　■
「うむ。お前たちの知らない秘密の通路は存在せぬぞ。ノックスだったか、ヴァンダインだったか。何でもミステリーには秘密の通路があってはいけないらしい。そのお作法に妾も従ったということよ」（ベアト）
※こんなところで既にノックスとヴァンダインが出ています。

■　儚き抵抗　10月5日（日）18時00分　■
「押し付けあわずにはいられぬ人の世の罪、か。‥‥はて、どこの魔女に聞いたやら。まぁいい。‥‥そなたが思っているほど、妾も無慈悲ではないぞ?　くっくくくっくっく！」（ベアト）
※これは『ひぐらしのなく頃に解』に出てくる話だと思われます。

■　屈服　10月5日（日）21時00分　■
「お前が愛しい、恋しい‥！　私が間違っていた‥！　お前が微笑んでさえくれれば、他には何もいらなかったんだ‥。私が間違えた、私がそれを間違えて、‥‥取り返しのつかないことをしてしまった‥！　その償いに残りの全ての人生を捧げた‥！！　お前に詫びるために、私の罪を償うために、‥‥‥全て、‥‥捧げたんだ‥‥‥。‥‥頼む、私の死の際でもいい‥。　‥‥‥‥せめて、‥‥‥‥お前に、一言、‥‥‥報らせてぇ‥ぇ‥‥。ベアトリーチェぇぇぇぇぇぇ‥‥。うううう、ひっく、うううッ、うううううううう！」（金蔵）
※金蔵が謝りたいベアトリーチェは九羽鳥庵のベアトリーチェです。

■　復活　10月5日（日）23時30分　■
「そう言うな金蔵。脆く儚いクモの巣も、ヘロデの王から守ってくれることもある。‥‥‥この世に無駄なものなどないように、無駄な質問もまたない」（ベアト）
※イエスが幼い頃、ヘロデの王に命を狙われたが、ヘロデの王の兵隊はイエスがいた洞窟の入り口に設けられたクモの巣を見て、中を調べずに立ち去ったという昔話があるそうです(クモの巣が張られているということは長い間、誰も出入りしていないだろうと考えたのです)。

■　魔女の宴　10月5日（日）23時59分　■
「あっははははははははは‥。負け惜しみをぅ。悔しがってるのよぅ。」(???)
※ベルンには友達がいないことから、これはラムダだと考えられます。

■裏お茶会
「‥‥‥ま、まぁ、前回はお私がついつい疲れになって好きな場所から駒を進めていいわよって言ったら、ベルンのヤツ、お情けの空気も読めずに手持ちのポーンをぜーんぶ入城させた状態から始めて！！　何よあれ、あんなの負けでも何でもないんだからぁ！！　あぁ、思い出しただけでもむかむかするわ」（ラムダ）
※『ひぐらしのなく頃に解』の「祭囃し編」のことと思われます。

■　うみねこのなく頃に　Episode3　「Banquet of the golden witch」

「それは困りましたね。これはお館様が大層お気に入りになられていた壺のはず。……ほほほほほ、どのような折檻があるか、このベアトリーチェ、想像するのも恐ろしゅうございます」（ワルギ）

※この喋り方はワルギリアではなく熊沢です。つまりこのやり取りは実際の六軒島での熊沢と紗音のもので、それを幻想修飾していると考えられます。

何事かと行ってみると、……使用人たちが何人か集まり、砕けてしまっている壺の後片付けをしているところでした。使用人たちが言うには、どこからか紛れ込んできた黒猫が、壺によじ登って倒してしまった、と言うのです。壺が割れたという運命までは変えられなかったが、私が割ったという事実だけは、確かに変わった…。ベアトリーチェは、見事にその魔法で私の危機を救ってくれたのでした…。

※猫が犯人というのも幻想修飾かもしれません。というのは、六軒島に猫がいる描写がなかったためです。

■　少女時代　10月4日（土）　■

「お父様は、少なくとも“今”は、女に当主を継がせないと言っている。でも、それすらも所詮はお父様が決めたルールでしかないの。お父様が決めた以上、それを破棄出来るのもお父様。……人の気持ちなど、浜の真砂が尽きるより遥かに早く変わるわ。蔵臼が愚鈍な男であることは、私たちが立証しなくても、やがてお父様も理解する。…その時、男女の境の下らない因習は、それを説けたお父様によって取り払われるの。その日は必ず来るわ」（エヴァ）

※「女に当主を継がせない」というのは右代宮家代々のしきたりではなく、金蔵が決めたことのようです。

■　妾の準備はすでに万端よ　10月4日（土）14時00分　■

「うー。知り合いの魔女が言ってた。幸せは、みんなが信じなくちゃ叶わないんだって。」（真里亞）

※『ひぐらしのなく頃に解』のことだと思われます。

「黄金の隠し場所については、すでに金蔵さまが私の肖像画の下に碑文にて公示されております。条件は碑文を読むことができる者すべてに公平に。黄金を頂けたなら、私は全てをお返しするでしょう。それではどうか今宵を、金蔵さまとの知恵比べにて存分にお楽しみくださいませ。今宵が知的かつ優雅な夜になるよう、心よりお祈りいたしております。――黄金のベアトリーチェ」（真里亞）

真里亞がベアトリーチェから渡されたという手紙を読み終えると、誰もがしばらくの間、言葉を失った。

※手紙の内容が途中からになっています。読まれなかった部分がEP1と2と同じであるとは限りません。

■　19人目の可能性　10月4日（土）21時00分　■

「“ヘンペルのカラス”を使えば、様々な推論が実証可能なのです。……例えば、“私以外の人間＝愚かである”という命題があったとします。これを証明するには本来、私を除く全人類を調べ、愚かであることを証明しなければなりません。…しかし、何十億人も調べるなど、現実には不可能でしょう。戦人さまの18箱を開ける手間とまったく同じです。」（ロノウェ）

「くっくっく！　しかし“ヘンペルのカラス”ならば、その命題は対偶的にこう変換される。つまり“私以外の人間＝愚かである”を、そなた風に言うならば、チェス盤を引っ繰り返し、“愚かではない＝私”として証明しても良いということだ。……つまりどういうことだと思う？　くっくっくっく！“妾が賢明である”という事実を知るだけで、全人類が愚かであることの何十億人分もの証明が一度に終了してしまうわけだ。全人類が妾よりも愚かであることを、わずか1秒も掛けずに証明終了できる！！　世界最強最速のQED。これぞ“ヘンペルのカラス”ッ！」（ベアト）

※これを読んで「竜騎士07は馬鹿だから“ヘンペルのカラス”を理解していない」という人がいますが、これはベアトが戦人をからかう為にわざと間違ったことを教えているだけです。この程度のことも理解できない読解力で恥ずかしくないのでしょうか？　「自分は馬鹿です」と公言しているようなものです。

古いチャンバラ映画で誰かが言ってたぜ。「良い剣豪は一箇所だけ、わざと弱い部分がある」ってな。

※『七人の侍』のことだと思われます。

■　楼座と森の魔女　■

畜生、ムカつく魔女だってのに、染色体がＸＸだってだけで俺（戦人）も甘いもんだぜ…。

※女性の染色体はXX、男性の染色体はXYです。

「やはりな。ベアトリーチェは実在したんだ…」（留弗夫）

「…その姿は、まさに肖像画の？」（霧江）

「……ええ。まさにあの肖像画の通りよ」（楼座）

※肖像画はビーチェではなく、九羽鳥庵のベアトを描いたものなのかもしれません。

「あなた、黙って。……ずいぶん昔だけど、お父様は、森には狼が住んでいるから近寄ってはならないって、私たちを脅さなかった？」（絵羽）

「あぁ、そんなこともあったな。馬鹿らしいね。日本の狼はとっくの昔に絶滅しているというのに。まさに子供騙しだな」（蔵臼）

「記憶にねえなぁ？　そんな話、親父に聞かされたっけ…？　森には魔女だろ？　狼なんて話、聞いたことないぜ？」（留弗夫）

「あんたがまだ小学校だった頃よ。覚えてない？　そしたらあんた、むしろ狼を撫でてみたいなんて言い出すもんだから。お父様はすぐに狼の話を引っ込めて、魔女の話に切り替えたのよ。もうそのウソっぽいことと言ったら、あっはははははは」（絵羽）

「はっはっはっは。当時の留弗夫には、狼よりも魔女の話の方が興味深だったね。よく覚えているよ。私の背中にしがみ付いた夜があったことを覚えているかね？」（蔵臼）

※留弗夫は蔵臼や絵羽とは少し年齢が離れている印象です。金蔵は九羽鳥庵のベアトには、そのまま狼で通したようです。

「妾は、…もうベアトリーチェは嫌だ。妾が何者なのか、知りたい。ベアトリーチェではない、新しい人間を始めたい。だから、ここから連れ出して欲しい。……もう、紅茶もいらぬ。ドレスもいらぬ。金蔵とも二度と会わぬ。……ここより妾を連れ出してくれ。楼座」（九羽鳥庵のベアト）

※ここから出られるなら、美味しい紅茶も、美しいドレスも、父と慕う金蔵も、捨ててもいいという発言です。九羽鳥庵のベアトは金蔵のことを大切に思っていたようです。しかし、それ以上に、自分が何者であるのか知りたかったのです。

「《赤：この六軒島に19人以上の人間は存在しない》！」（ベアト）

※最大でも18人しかいないということです。実際には16人しかいませんが、18人より少ないため、OKです。

■　儀式の開始　10月5日（日）0時00分　■

「紗音。お館様が至急、書斎へ来るようにとの仰せだ。急ぐぞ」（源次）

「……え？　は、はい、かしこまりました…！　一体、何事なの…？」（紗音）

「不吉な予感がするってさ。‥‥自分で儀式を起こしておいて、都合のいい話さ」（嘉音）
「獅田に気取られぬよう、裏から入る。足音に気をつけろ」（源次）
※この場面以降、しばらくは修飾もない、完全な幻想描写だと考えられます。

■　マダム・ベアトリーチェ　１０月５日（日）０時２１分　■
「肖像画の魔女を馬車にすると、祟りがあるか。‥‥大怪我をして辞めた使用人もいるらしいし。‥怪我は勘弁だなぁ。俺もこの歳だ。二度とこんな厚遇の職場にゃ恵まれねえだろうよ‥。あー。肖像画の魔女さま。真面目に働きますんで、ひとつ穏便ご頼みます」（獅田）
※話し方がいつもと違います。こっちが地なのでしょう。

（獅田は）‥‥実際は、案外臆病な一面も持っていた。
※脅迫されればあっさり共犯者になりそうです。

「さぁさお出でなさい、墜落せし塔よ。一なる言語を操ぜ、その罪を知らしめよ」（ワルギ）
※『旧約聖書』の“創世記”中に登場する“バベルの塔”のことと思われます。かつて世界には言語は一つしかなかったが、人間が力を合わせて神の世界に至るバベルの塔を作ったため、神はバベルの塔を打ち砕き、人間の使う言語をバラバラにし、力を合わせることが出来ないようにしたという話です。

「私の手番は終わりませんよ。さぁさお出でなさい、イヴァルディの息子たち。我に相応しき槍を与え給えっ」（ワルギ）
※“イヴァルディ”は北欧神話に登場する小人（ドヴェルグ）。イヴァルディの息子がグングニルを作ったとされます。

「はっ！！　こんなところでグングニルが弓引けるとはッ！！　やっぱりお師匠様はすげえなあああ！！　爆ぜろ、役立たずの塔！　出でよ、巨人兵の戦列よ。その楯と胸で、神なる槍を防ぎきれ！！」（ベアト）
※“グングニル”は北欧神話の主神オーディンが持つ槍です。

巨人たちが構える巨大楯は、かつて巨人連隊全員が連なって構えた時、ヴィルヘルム王の居城を矢だけでなく、風雨からすら守り、天に向けてかざした時には雨粒の一滴すらも許さなかったという。
※“巨人連隊”は１８世紀初頭にプロイセン王国のヴィルヘルム王が組織した近衛兵団のことです。ヴィルヘルム王の趣味で身長６フィート以上の長身の男ばかりが集められたため“巨人連隊”の名前がつけられたそうです。

「‥‥道理ですね。人間の金属でいくら武装しようとも、神の槍は防げません。マダムの見事なエポレットメイトです。」（ロノウェ）
※チェスのチェックメイト（将棋の王手）のひとつで、キングが自駒に挟まれて逃げ場を失った状態でチェックされる形だそうです。

それこそは主神が女神に与えた絶対の防御壁。アイギスの楯。
※別名“イージスの楯”。ギリシャ神話の主神、ゼウスがアテナに授けたとされます。ペルセウスに与えられ、ペルセウスは姿を見ると石化するメデューサを退治する際、イージスの楯に姿を映し、それを見ながらメデューサの首を刎ねました。メデューサの首を嵌め込み、石化能力を得て、アテナに返還されたとされています。
。
「さぁさお出でなさい、ドヴェルグの兄弟たち。我に巨人を砕きし天の鉄槌を与え給え！」（ワルギ）
※北欧神話のトールが持つ“ミョルニルハンマー”のことと思われます。

「バックランクメイト！　安らかに眠りなさい。」（ワルギ）
※チェスのチェックメイト（将棋の王手）のひとつで、キングが一番手前の列で逃げ場を失った状態でチェックされる形だそうです。

巨大な鉄塊の旋風の前に、ベアトリーチェなど一粒の豆に過ぎない。その旋風がベアトリーチェを飲み込もうとした瞬間、ベアトリーチェの姿が巨大な戦塔に変わる。鉄槌は戦塔を砕き、凄まじい瓦礫を撒き散らすが、その後へと逃れていた彼女には届かなかった。
※これはキャスリング（キングとルークをすれ違わせつつ入れ替える特殊な動き）だと思われます。

すると月の中に、巨大な馬とそれにまたがる戦と死の神の姿が。彼と共に馬上にある先代ベアトリーチェの姿が。
※北欧神話の主神“オーディン”であると思われます。オーディンの馬は脚が８本あり、スレイプニルという名前です。

「スマザードメイト。楽しかったですよ、ベアトリーチェ！」（ワルギ）
※チェスのチェックメイト（将棋の王手）のひとつで、キングが駒に囲まれて動けない状態でチェックされる形だそうです。ちなみにここのチェックができる駒はナイト（騎士）だけです。“巨大な馬とそれにまたがる戦と死の神”はナイトを意味していると考えられます。

「最初に呼んだのは双鬼の塔ではない。四つ子の塔だったのよ。お師匠様の左右遥かに潜んだ隠し塔が描く、セブンスランクルークの死の境界線を、お師匠様はのこのこと踏み越えてきてくれた。‥‥チェックの発声が聞れてしまったことだけはマナー違反。率直に謝ろうぞ。‥くっくっくっくっくっく！」（ベアト）
※チェスにおいてルーク（塔）の駒をセブンスランク（手前から見て奥から２番目の列）に置くと非常に有利なのだそうです。ルークは横にどこまでも行けるので、初期配置である一番奥の列に敵のキングがいる場合、左右にしか動けなくなります。

■　ワルギリア　１０月５日（日）０６時００分　■
「おい、紗音ちゃん！　大丈夫か?!　返事をしろぃ！」（留弗夫）
「ゆ、揺さぶってはいけません‥。今、容態を診ます‥」（南絵）
ソファーの影だったので、部屋に入るまで気付かなかったのだ。そこには、胸元を血で真っ赤に染めた紗音が横たわっていた‥‥。
※この時の紗音は死んだフリです。共犯の南絵は留弗夫が気がつかないか、さぞかし慌てたことでしょう。

「‥‥‥‥‥私の弟子が、ずいぶんと迷惑をかけているようですね」（ワルギ）
「‥え？　‥‥‥あんたは‥」（戦人）
不意に話しかけられたので、振り返ると、‥薔薇庭園の東屋に、‥‥ついさっき、ベアトリーチェに倒されたはずの、先代ベアトリーチェの姿があった。
「‥‥‥てっきり死んだと思ったぜ。生きてたのか」（戦人）
「いいえ、死にましたよ。‥今の私は、取られた駒がチェス盤の外でくつろいでいるだけに過ぎません。落ち着いて。‥‥私はあの子のゲーム盤の駒に過ぎない。こうして

盤外へ取り除かれてしまえば、もはや何もできない存在。しかしあなたはあの子の対戦相手。あなたが自ら投了出さない限り、あなたには常にあの子に一矢報いる力があるのだから」（ワルギ）
※駒とプレイヤーの違いです。

「…ベアトリーチェはかつて私の名でしたが、騙ってしまった今、私は名前を持ちません。……ならば現版の名でも名乗りましょう。……ワルギリアス。…いえ、ワルギリアではいかがです？」（ワルギ）
「ワルギリア。ワルキュリア？　神話の女神の名前だっけか」（戦人）
※戦人が言いたかったのは北欧神話における戦乙女“ワルキューレ”のことと思われます。
「いいえ。ベアトリーチェの元へ導く者、という意味です。……煉獄山の頂上にて待つあの子の元へあなたを導く。その案内人に相応しい名前でしょう」（ワルギ）
※ダンテの『神曲』でダンテをベアトリーチェの元へと導いた、古代ローマの詩人“ウェルギリウス”の女版ということでこの名前にしたと思われます。
「…お忘れですか、お嬢様。多層世界は魔術です。無限の魔女の力と対になる、有限の魔女の力。無限の魔女にしか悟ることができず、そして無限の魔女にとってもっとも強力な効果を発揮します」（ロノウェ）
「シュ、“シュレディンガーの猫箱”かッ?!」（ベアト）
※箱の中に猫と毒ガス噴出装置を入れ、一定の確率で毒ガス噴出装置が作動するようにしたものです。毒ガスが噴出されれば猫は死にますが、噴出は確率によって起こるため、箱を開けてみるまで猫が生きているか、死んでいるか判断が付かないのです。まあ、長期間放置すれば、酸欠か空腹で自然に死ぬのですが…。

■　前哨戦　１０月５日（日）０７時００分　■
まず早朝。祖父さまと使用人全員の合計６人の死体が、屋敷中の各所から相次いで見付かった。まず、祖父さまはボイラー室で火にくべられ丸焼けに。使用人たちは屋敷内のそれぞれの場所で、魔法陣の描かれた部屋に閉じ込められて死んでいた。使用人たちの死因は正確には不明だが、南條先生の見立てでは、槍のようなもので突かれたか、……もしくは銃で撃たれた可能性が高いという。

「最初の遺体発見は紗音から。屋敷内の１階客間より発見されました。扉と窓は施錠され、密室を構成していました」（ロノウェ）
「……ベアトに説明要求。密室の定義を再確認」（戦人）
「ふむ。密室の定義は、内外の出入りが一切不能絶された室内を指す。当然、内外からの一切の侵入・脱出は愚か、干渉もできない。それは包括的に、隠し扉の否定、外部干渉の余地一切の否定を含む。……以後、この定義を“ベアトリーチェの密室定義”と呼称する！」（ベアト）
「細部確認。……外部干渉の余地の定義とは」（戦人）
「外部から、釣り糸やら長くて細い棒やら等を使って直接的に干渉するあらゆる余地だ。つまり、扉や窓にはそのような小細工を混ぜる隙間すらもないと判断せよ」（ベアト）
「どうかな？　仮に隙間がなくても、リモコンなどの電波は干渉できるはずだぜ？」（戦人）
「良かろう。電波など、それに類する遠隔操作技術も干渉不可能であると定義に追加する」（ベアト）
「客間には内線電話もあるぜ。それと連動した仕掛けは遠隔操作にはならねぇのか?!」（戦人）
「電話はすでに使用不能だろうが。…ああ、もう面倒だ。それも含めようぞ。直接、間接のあらゆる方法で、室外よりの密室内への干渉は不可能だ」（ベアト）
「声やノックは？　密室に入らずに外部から干渉できるはずだぜ？」（戦人）
「……密室であっても、声を掛けることやノックは不可能ではなかろう。意思疎通の可否は密室の定義に反しない」（ベアト）
「つまり、外部との伝達方法までは遮絶していると定義できないんだな？」（戦人）
「そうなります」（ロノウェ）
「了解したぜ。……紗音ちゃんの客間はその“ベアトリーチェの密室定義”を満たすってんだな？」（戦人）
「その通りだ」（ベアト）
……紗音の遺体はマスターキー１本を所持。発見した親族がこれを回収」（ロノウェ）
「ベアトに御褒要求。今回のマスターキーの本数は？」（戦人）
「…ふ。前回と同じ。《赤：各使用人が１本ずつで５本だ。》」（ベアト）
「ってことは、密室にはまだならねぇってわけさ。マスターキーはまだ４本余ってる。紗音ちゃんを殺害後、４本の鍵の何れかで施錠するだけの話だ」（戦人）
「その通りでございます。……そして、見付かったのはマスターキーだけではありませんよ」（ワルギ）
「はい。……遺体のすぐ傍らに、紋章入りの洋形封筒が、中に手紙はなく、２階客室の鍵が入っていました」（ロノウェ）
「……２階客室の鍵…。それは、２階客室の扉を、マスターキー以外に唯一開けることができる鍵だ、という定義でいいのか？」（戦人）
「うむ。問題ないぞ。そして、マスターキーと違い、その１本しかない」（ベアト）
「つまり、ある特定の部屋を開けるには、マスターキー５本に加え、その１本しかないというわけです」（ロノウェ）
「……これはつまり、次は２階客室へ行け、というメッセージなのか？　となると、大人たちは２階客室へ移動したな？」（戦人）
「はい。２階客室の扉もまた施錠され、魔法陣が描かれていました。……親族は紗音の遺体脇より入手したその鍵によって開錠。室内にて熊沢の遺体を発見。室内は密室。定義は“ベアトリーチェの密室定義”に準拠。熊沢はマスターキー１本を所持。これを親族が回収。そして紗音同様に遺体の傍らに洋形封筒を発見。中には３階空え室の鍵が。親族は３階空え室へ移動」（ロノウェ）
「そして３階空え室の扉にも魔法陣で、さらに施錠されていて？」（戦人）
「はい。室内にて郷田の遺体を発見。室内は密室。“ベアトリーチェの密室定義”に準拠。郷田はマスターキー１本を所持。これを親族が回収。そしてこれまで同様に紋章入りの洋形封筒を発見。中より２階貴賓室の鍵が。親族は２階貴賓室へ移動」（ロノウェ）
「……何なんだこいつは…？　てめえ、何を企んでやがる…？」（戦人）
「くっくっくっく。そう慌てほどのものでもあるまい？　密室ではあるが、それを開けるマスターキーはまだ何本もあるではないか。律義にマスターキー以外の固有の鍵も進呈している」（ベアト）
「……気に入らねぇ展開だぜ。……だが領域は狭めてきた。この調子で６人、絞ってくってわけか？」（戦人）
「はい、その通りです。２階貴賓室にて源次の遺体を発見。マスターキー１本を回収。地下ボイラー室の鍵を発見。地下ボイラー室へ移動。地下ボイラー室にて金蔵の遺体を発見。礼拝堂の鍵を発見。礼拝堂に移動。礼拝堂にて嘉音の遺体を発見。マスターキー１本を回収。１階客間の鍵を発見。……以上で６名の遺体発見の再構築を終了します」（ロノウェ）
「補足です。金蔵の遺体の傍らで発見された洋形封筒には、礼拝堂の鍵と一緒に手紙が同封されておりました。手紙の内容はすでにご確認の通り。碑文の謎を解くよう改めて催促する内容です」（ロノウェ）
「……ってことは。……何だよこれ。最後の嘉音くんのところに、一番最初の紗音ちゃんの客間の鍵があったってことは…。密室が６つ、数珠繋ぎになってるってことなのか？」（戦人）
「その通り！　６つの密室が数珠繋ぎになっておる。それぞれを開錠する鍵は、それぞれ隣り合う密室によって閉じ込められている。つまり、６つの密室が１つの巨大密室を形成し、その中に全てのマスターキーと、固有鍵全てを閉じ込めてしまっているのだ…！《赤：ちなみに、６つの部屋の扉や窓はいずれも普通。オートロックのような、鍵を使用せず施錠できるような仕掛けは存在しない。》くっくっくっく、どうだよォ、縛りなモンだろおぉおおおぉ？？？　うっひゃっひゃっひゃああ！」（ベアト）

「南條は全員の死亡を確認。ただし誤診率の否定は“悪魔の証明”により不可能。‥‥つまり、誰かが生きているのを南條が見逃した可能性をゼロにすることはできません」（ロノウェ）
※部屋の配置から、窓を破って入れるのは1階客間のみです。その後、封印しておく鍵で、だんだん上に親族を誘導します。その間に死んだフリをしていた紗音は嘉音の扮装をして礼拝堂へ移動し、窓から入って施錠するか、もしくは扉の施錠が内部から可能であれば、施錠し、嘉音として死んだフリをします。南條は共犯です。

「よっしゃ、ここで叩くぜ、御唱要求だッ！！“被害者6人は全員死亡している”！！」（戦人）
「ふぇッ?!　おわったったぁ！！　くっくくく、済まぬ済まぬ、いいぞむじるぞ。《赤：金蔵、源次、紗音、嘉音、郷田、熊沢の6人は死亡している！》」（ベアト）
※紗音と嘉音は人格死です。
「綿て御唱要求！　6つの部屋には誰も隠れていない！　俺たちが認識していない人物の存在を否定してみせろ！」（戦人）
「応ずる。《赤：6つの部屋には誰も隠れていない！》」（ベアト）

「くっくっくっく！　良かろう良かろう、赤き宝刀にて切り伏せよう！《赤：6人は即死であった！》　即死とはつまり、攻撃を受けて即座に行動不能になったという意味だ。まぁ、完全な意味での死亡には数秒、もしくは数分をかけたかもしれん。だが何れにせよ、自らの意思で何かの行動を取ることは完全に不可能であった。その意味において、即死と断言できる！」（ベアト）
※金蔵は病の攻撃を受けて即座に行動不能になったのです。

「‥‥あ、赤き真実にてそのチェックを斬る！！《赤：6人はトラップで殺されてはいない》！」（ベアト）
「トラップの定義は?!」（戦人）
「ぷっくっく…。仕掛け人が直接関与することなしに殺人を遂行できる全ての仕掛け、という定義でよろしいかと思いますよ」（ロノウェ）

「あぁ！！　だが、自殺なんて甘い言い方じゃ追い詰められねぇぜ！！　ベアト、こいつで詰めだ！！　御唱要求ッ！！“6人は全員他殺である”！！」（戦人）
「‥ま、待て！　いやその、‥‥言う言う！　望み通り赤を行使するぞ！《赤：6人は誰も自殺していない！》　どうだ?!　これで満足かッ‥?!　くっくくくかっかかかか！　切り返したぞ、切り返したッ！！！」（ベアト）
「‥‥要求した御唱が改ざんされていますよ。誤魔化されないように」（ワルギ）
「そ、そうか！“6人全員他殺”とは言ってない。“6人全員自殺に非ず”とこいつは言い換えた！　ということは、他殺でも自殺でもない人間が混じっているということだ」（戦人）
※病死した金蔵のことです。

■　黄金郷の鍵　10月5日（日）09時00分　■
「鮎は香りが良いことから香魚とも呼ばれるとか。私は食べたことがありませんが、塩焼きにするととてもおいしいそうですよ」（夏妃）
「なんや、夏妃さん！　鮎の塩焼き、食ったことあらへんのか！　うまいでぇ！　今度、ご馳走したるわ！」（秀吉）
「旅民の料理だ。君の口には相応しくない」（蔵臼）
※蔵臼は夏妃には上品であって欲しいようです。

「でしょう?!　‥‥でも、みんなも知っての通り、お父様は真里亞のことを毛嫌いしてて、ほとんど言葉を交わしたこともない。それに、お父様はかつて真里亞に全然違う名前をつけるように言っていたの。それを私が勝手に真里亞にした。お父様はそれをとても怒っていたわ。‥‥その経緯を考えると、財産や家督を引き継ごうという大切な碑文に、真里亞の名を引用するとはとても思えなくて」（楼座）
※この発言は結構痛いのですが、ゲーム盤ですのでヤス補正が入っていると考えられます。

「ああ、カモメカモメカチンカチン、みたいなヤツさ。“カ”を抜いたらなぁに？　みたいな。夏妃さんは育ちがいいから知らねぇだろ」（留弗夫）
「‥カモメカモメ??　“カ”を抜くと、え？　???」（夏妃）
「よしなさい。君には相応しくない品のない遊びだ」（蔵臼）
※蔵臼は夏妃には上品であって欲しいようです。

■　戴冠式　10月5日（日）10時00分　■
迷わず、灯りのスイッチを入れると、まるで蜘蛛か何かを思わせるような無骨な灯りが点々とつき、地下へ伸びる階段をぼんやりと浮かび上がらせる‥。灯りがついたはずなのに、むしろその薄暗さを引き立てているようで不気味だった。灯りのスイッチ以外にも、開閉と書かれたスイッチもあった。…これで、多分、開け閉めができるのだろうが、もし万が一、開けるの方が壊れていたら、私はこの不気味な地下に、永遠に閉じ込められてしまうかもしれない‥。だから私（絵羽）は、とりあえず、開閉のスイッチには触れず、‥‥鉈を構え直して、ゆっくりと階段を下りていく。
※絵羽視点の話になっています。また、扉が開いていたということは、誰かが絵羽が来る前に閉める暇もなく出入りした可能性があります。

「‥‥‥何百億円の黄金があろうとも。殺人の罪を犯すリスクには、割が合わないわ。むしろ、それをダシにされて、蔵臼兄さんたちに搾り取られるのがオチよ」（楼座）
「同感よ。‥‥ここに現れたのが、兄さんや留弗夫であるくらいなら、‥‥あんたであったことは不幸中の幸いかもしれない。‥私は兄弟で、あんたを一番信用してるもの」（絵羽）
※この時点で楼座を殺すとアリバイのない絵羽に嫌疑が掛かりますし、死体を移動させるのも大変です。爆弾の存在を知り、親族の皆殺しを絵羽が計画していたとしても、この時には無理なのです。

「うむ。妾はそれを認めようぞ。今やこの積み上げられた黄金の全て、右代宮家の全てをどうしようもそなたの自由ぞ。何しろ、今この瞬間より、そなたはもう右代宮家の当主なのだから」（ベアト）
「ほ、‥‥本当に？　本当よね？　本当よね?!」（絵羽）
「興奮するでない。妾はそなたを平面に褒めておる。その証に、そなたにこれを授けよう」（ベアト）
ベアトリーチェは自らの指にはめていた指輪を抜き取ると、それを絵羽に突き出す。恐る恐るそれを受け取ると、‥‥それが指輪であることがわかった。
「‥‥こ、‥‥これ‥‥‥、まさか‥‥‥‥」（絵羽）
「うむ。金蔵より返還された、右代宮家当主の証である黄金の指輪だ。今よりそれはそなたのもの。それを指にはめ、兄弟たちの前で高々と掲げるが良い。そなたが今や右代宮家の家督を継いだことに、誰も疑いを挟めぬであろうぞ。くっくっくっく。我こそは黄金の魔女ベアトリーチェ！　右代宮家顧問錬金術師！　金蔵との契約に従い、そなたに今こそ全てを受け継ごうぞ。‥金蔵に託した全ての黄金。そしてそれにより築き上げた全ての財産。そして右代宮家の家督と名誉。そして、我が力と無限の魔女の称号をそなたに引き継ごう。‥‥先代に託い、称号と共に妾の名、ベアトリーチェもそなたに譲り渡す。‥‥今こそそなたが名乗るが良かろう！」（ベアト）

絵羽は立ち眩みのようにふらふらと立ち上がり、ベアトリーチェの手より黄金の杖を受け取る。その手はかすかに震えていた。その杖を握った途端。‥‥‥彼女は眩き黄金の輝きに包まれた。自らの内より黄金の縁が湧き出すかのよう。黄金の魔女を継承した瞬間に、絵羽は自らの魂の奥底から何かが生まれ変わるのを感じた。それは一言で例えるならば、エネルギー。黄金色をしたエネルギー。まるで、それまでの自分が生まれた時からずっと閉じ籠けていて、‥‥‥生まれて初めて目を覚ましたかのような覚醒感。瞳の奥にある本当の瞳が、生まれて初めて目を覚ますのを感じた。

「こやつらは、妾に仕えし家具たち。継承祝いに、そなたに遣わそう。‥‥‥そなたこそは、黄金の魔女を継承した後、自らの復活の儀式を執り行ってもらわねばならぬ。その儀式において、煉獄の七姉妹たちは欠かせぬ役割を果たす。‥‥‥他者揃いだけでは立つぞ。手足とするが良い」（ベアト）
※この場面で、当主の指輪、黄金、爆弾、煉獄の七杭、貸し金庫のキャッシュカードが絵羽に受け継がれたわけですが、爆弾に関しては見てわかるものではないため、対面にせよ、手紙にせよ、ベアトと絵羽の間で情報の伝達が行われたことがわかります。

■　新しき魔女　１０月５日（日）１０時３０分　■
「…お願いだから静かにして…。どうしたらあなたは立ち止むの？　どうしたらあなたはママの言うことを聞いてくれるの？」（楼座）
「……」（真里亞）
ぴたりと。真里亞が不自然なくらいに立ち止んだ。‥‥‥すると振り返り、ぽつりと言った。
「……真里亞の薔薇を見たら、ちゃんと明日まで静かにしてるよ」（真里亞）
「本当？」（楼座）
「うん。…薔薇庭園に行って、真里亞の薔薇を見たら、もう大人しくする」（真里亞）
「……」（楼座）
「本当だよ、ママ」（真里亞）
「……」（楼座）
※ベアトはこの時点では義式を止めていますが、ベアトも第二の晩の犠牲者は楼座と真里亞の予定だったのでしょう。ですから、あらかじめ真里亞に楼座を薔薇庭園に誘い出すように指示していたのです。絵羽はそれをベアトから教えられていた可能性があります。

「これ、悪病るでないぃ…！　黄金の魔女の道は一日にしてならずだ。そなたとて、第十の晩を終えるまでは半人前よ…。今は黙って妾の指導に従うのだ。…良いな…？！」（ベアト）
※これは明らかにベアトが絵羽に殺人を引き継ぎといったわけではなく、絵羽が殺人を引き継いでしまったが為の、後付けの幻想描写だと考えられます。

■　生贄の予告　１０月５日（日）１１時００分　■
「留弗夫が薔薇庭園中央にて、楼座、真里亞の遺体を確認。その後、ゲストハウスに戻って応援を呼び、両名をゲストハウスに運び込みました。南條の検死を信頼できるならば、楼座の死因は延髄部への棚の先端部分による刺突。真里亞については素手による絞殺と考えられます。ただし“悪魔の証明”により誤診率は否定できません」（ロノウェ）
「‥‥‥妾が宣にて語る。《赤：楼座と真里亞は死亡した》。《赤：死因は南條の見立て通りだ》」（ベアト）
「赤で否定を行います。《赤：楼座と真里亞の二人は他殺です》」（ロノウェ）

また、現場には楼座が持っていた銃が残されていた。わざわざ残されていたのだから、何かの罠ではないかとみんな疑ったが、秀吉が小枝を棒用に使って空撃ちを試してみたところ、問題なく発砲できた。その結果、装填されている５発全てが問題なく発砲できた為、それには再び弾丸が詰まされ、成人男性で唯一武装していなかった秀吉に渡されることとなった。しかし、５発を発砲できてしまったことは、ある疑心暗鬼を生み出すことになった。このショートバレルのウィンチェスター銃の装弾数は５発。つまり楼座は、１発も発砲しなかったのだ。にもかかわらず、彼女らの死因はおそらくは素手によるもの。これが意味するところは、銃撃知りによる犯行の可能性である…。
※単純な事故の可能性もありますが、絵羽なら素手でも楼座くらい殺せますので、元から殺す気だった可能性もあります。

「そうよ。その夢を持ち続けてるから、私はこの歳のままで生き永らえているの。‥‥‥あなたはその夢を、大人になることで捨てたわ。‥‥‥いくら待てども、時計を持ったウサギなど訪れないし、ハンプティダンプティにも会えはしない。もちろんトランプの国に招かれたりも絶対にない。あなたはそう、諦めてしまったから、大人になったのよ。だからもう、魔女になりたいなんて思わない。…それが本当の自分の夢であったことも忘れてしまったの。」（エヴァ）
※『マザーグース』の登場人物ですが、『鏡の国のアリス』にも登場します。

彼らには与り知れないことだが、ベアトは赤で、彼ら６人の、…いや、今回、すでに出ている犠牲者全員の死亡を宣言している。全てが茶番で、犠牲者たちは実は生きているという淡い夢は、‥‥‥気の毒だが、ありえないのだ…。
※EP8の“ベルンの壮麗”でわかることなのですが、赤字による死亡宣告は、出された瞬間での死亡を確定します。

「……何てことを‥‥‥！　あれだけの莫大な黄金なのよ?!　楼座たちに分け前をあげたって、まったく問題はなかったでしょうに…！」（絵羽）
「あるわよ。…あれは右代宮家の当主だけが引き継げる黄金なの。だからこそそれは、全て丸ごと当主の栄誉そのものなの。‥‥‥それにわずかほどでも傷をつけることは、この私、新しき黄金の魔女、ベアトリーチェが絶対に許さないわ」（エヴァ）
「…あなたは魔女の碑文通りに殺人を続けるつもりなの…？　まさか、あと５人も人殺しを続けるつもりなの…？」（絵羽）
「ええ。その面倒な儀式を終えないと、私の魔女としての力は完全なものにならないらしいの。‥‥‥ねえ“私”。…この魔女の力は本当にすごいわ。私たちが実現してきた全てが、本当に実現できる。夢が夢でなくなる力なの…！　この力を知ってしまったら、もう魔女はやめられない。儀式を完全に終えて私の力が完全なものになれば、きっとそれをあなたにも教えてあげられるわ。くすくすくす、くっくくくくくくくく！」（エヴァ）

「‥‥‥大丈夫、安心して？　残る５人の生贄については、あんたの家族はお外してあげるわ。そうね、留弗夫、霧江、蔵臼、夏妃。…あとは老いぼれの南條なんかどう？　ちょうどいいわ、この５人を殺すわね。くすくす、あなただけに明かす殺害予告ってところかしらぁ。くすくすくすくす！！」（エヴァ）
※絵羽とエヴァのやり取りは絵羽の心の葛藤を意味するのかもしれません。

「む、…そうか…？　…しかしだな、犠牲を崩すのはなかなかに難しいぞ…？」（ベアト）
「すでに手は打ってあります。きっと引っ掛かるはずです。頭のいいやつなら、むしろ必ず」（エヴァ）
※これも後付けの幻想描写だと考えられます。霧江を引っ掛けるために吸殻を残したわけではなく、霧江に気づかれてしまったのです。

■　ホールの死闘　１０月５日（日）１３時００分　■
留弗夫と霧江、そして秀吉の３人は、それぞれに勇ましい言葉を残し、ロビーを出て行くのだった…。霧江は預かったマスターキーで玄関を開錠する。
※この時点まではベアトも屋敷に入れませんでした。

「‥‥失礼ながら。先代さまより、不必要な残酷なる殺害は控えるようご指示を賜っております。そして、第四の晩以降は、生贄の棺ご方に作法がございます。それには煉獄の七姉妹の力を借りねばなりません」（ロノウェ）
※神文と煉獄の七杭の関連は絵羽が自分で気がついたのかもしれません。道具一式がまとめて置いてあれば、使用法を推測するのは容易でしょう。

３人はすでに厨房に到着し、食料を集めていた。毒が混ぜられているかもしれない可能性も考え、魅力的な野菜や果物の類を選び、安全な缶詰だけをダンボールまるまる一箱分集めた。かなりの量量だが、台車に積めば何とか運べる。これだけあれば、１０人なら明日の朝食まで余裕が持てる。船を待つにはそれで充分だ。男２人は護衛役に専念のはずだったが、この量さの荷物では台車であっても霧江には辛い。力自慢を自称する秀吉が台車役を代わり、護衛役は留弗夫夫妻が勤めた。留弗夫は勝手口の扉の鍵を開けようとする。厨房への荷物の運び込みは、家人たちが出入りする屋敷内を決して通りはしない。だから、勝手口の外には搬入用のスロープもあるだろう。きっと台車はここから出られる。
※本当は霧江でも運べたのでしょうが、秀吉から銃を奪うために、演技をしたと考えられます。

先制攻撃は留弗夫。しかし、その銃弾が着弾するより、ベルフェゴールが留弗夫の背後を取る方が早い。そこには腕より伸びる紫色の奇跡を振り上げる姿が。しかし、その腕が留弗夫の首を撥ねるより、信じられないことに、留弗夫が背後に銃を撃る方が早い。ソードオブ銃を片手でリロードするアクションからそのまま、銃口が背後へ伸びていた。それはびったりとベルフェゴールの胸元に突きつけられている…。チン、カランコロン‥！　それはリロードで排莢された空薬莢が今更壁を叩く音だった。つまりそれはすでに次弾装填が終了しているということ。振り返りもせず、ベルフェゴールの胸元に完全に銃を突きつけている留弗夫はニヤリと笑う。
※EP7で留弗夫がこの銃の扱いに長けていたことが明らかになっています。ですから少なくとも銃の操作に関しては幻想描写ではないと考えられます。

「‥‥‥‥‥‥‥‥お前、‥‥まさか、絵羽なのか。」（留弗夫）
「それはかつて私の名だった。でも今は違うわよ、留弗夫。」（エヴァ）
「言わなくてもわかってるさ。黄金の魔女、ベアトリーチェだって言うんだろ？」（留弗夫）
「ふっふふふふふふふ、あっはははは！　どうしてわかったの？」（エヴァ）
「‥‥楼座が殺された時から、想像はついてたさ。‥‥‥楼座、許しな。お前の地獄に、お前の大嫌いな姉を送っちまうことをよ…！！」（留弗夫）
※留弗夫は楼座と真里亞を殺したのは絵羽だと見当をつけていたようです。

「そ、そういう問題ではないというに…！　あまりに品がなかったり残酷だったりするとだな、…その、気を悪くする者もおるかもしれぬし…」（ベアト）
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥。‥‥先代さまがどこかで戦っているとかいう、ゲームの相手、ですか？　ロノウェに聞きました」（エヴァ）
「‥‥あ、あのお喋りめ。‥‥‥まぁ、正直に言うとそういうわけだ。ちょっと目に余るとその、…抗議を受けてな？」（ベアト）
「先代さまにわざわざ伝言などさせず、直接抗議にいらっしゃればいいのに。…臆病な方です」（エヴァ）
「‥‥‥こことはその、異なる世界の住人だからの。私を介さねばならぬのだ。まぁとにかくだな、」（ベアト）
「‥‥‥‥‥‥‥‥。‥‥‥ということは、その方は私に何か干渉したくても出来ない。そして私も干渉したくても出来ない。それくらいに遠い世界の、無縁な方との駆引きでよろしいですか？」（エヴァ）
「う、うむ。‥‥例えるならとても近い２本の平行線の世界とでも言おうか。とても身近な世界なのだが、平行線ゆえに２本の線が交わることは決してない。そんな世界と、とりあえずは駆引きしてくれれば良い」（ベアト）
「‥‥‥‥先代さま。とても不思議に思うことがあります。…どうして先代さまは、その別世界の方とゲームをして、魔女だと認めてもらわなければならないのですか？」（エヴァ）
「それはだな、…全ての人間に魔女の存在を認めさせることが、完全なる支配に繋がるからである。ひとり頑固者がおってな、どうあっても姜を魔女とは認めんのだ」（ベアト）
「先代さまは、どうやらその何者かに認めてもらえないと魔女になれないようですが、私は思います。誰に認められずとも、もう立派な魔女です。‥‥‥先代ということで、あなたに形式的な敬意は率げますが、それは私の好意であって義務ではありません。‥‥‥もう私は、あなたの助言など求めていないし、これからどうすれば良いか、どう遊べば良いかはっきりわかってます。‥‥‥だから１３人殺しの儀式までは、あなたへの最後の敬意だと割り切って行ないます。しかし、そのやり方や、その後のことについては、あなたに口出しされる謂われはまったくありません。‥‥‥‥‥‥そういうことでひとつ、よろしくお願いします」（エヴァ）
※エヴァはあくまで“ゲーム盤における魔女”であるため、上層世界には干渉しないようです。そもそも“エヴァ”は“ゲームマスターのベアト”が殺人を続ける絵羽を幻想修飾しただけの存在です。このベアトは“駒のベアト”であるため、それを理解していないのだと考えられます。

「…あなたには、あの子と大きな違いがひとつあります。あの子はすでに魔女かもしれない。もちろんあなたも魔女です。ゲーム盤の上の世界では。‥‥‥しかし、ゲーム盤の外の世界で魔女だと認められるには、ゲームの対戦者である戦人くんに認めてもらわなくてはならない。‥‥‥あなたはそれを理解してゲームを始めたはずです」（ワルギ）
「‥‥‥魔女である証拠を暴風のように見せつけ、姜を拒否する気持ちを吹き飛ばし屈服させれば、‥‥‥‥姜を魔女と認めると思った。…前回、うまく行き掛けたので、もう一息だと思ったのだ…。ね、…姜は、これからどうすれば良いのだ」（ベアト）
「あなたが自分で考えるのです。‥‥‥幸いにも、あなたはもうゲーム盤の駒を降りて、新しき魔女に委ねました。じっくりと自らについて思案する時間があるでしょう」（ワルギ）
「‥‥‥‥‥‥戦人はもう敵意の塊じゃねぇかよぅ。魔女は認めない、そして姜も認めない。‥‥‥それで、どうやって戦人に認めてもらうんだよぅ…。北風で駄目なら、…今からのこの太陽で照らせって言うのか…？　この姜が、今更‥‥」（ベアト）
※ゲーム盤の駒である“駒のベアト”にとっての目的は、戦人に自分を魔女と認めさせることなのでしょうが“ゲームマスターのベアト”の目的は、戦人に約束を思い出してもらうことです。ですから、何かと妨害や干渉が入るのでしょうし“駒のベアト”は“そのように設定された駒であるため”戦人に自分魔女だと認めさせたら、自分はゲーム盤の外の世界でも魔女になれると本気で信じているのでしょう。

■　魔女の定義　１０月５日（日）１３時３０分　■
銃弾は？　‥‥‥秀吉のベストの胸部が、じわりと赤い染みを広げる。銃口に対し背を向けていたのに、…銃弾は秀吉の胸部に打ち込まれていた。
※これはこの場面が幻想修飾されていることをプレイヤーにわからせるための演出だと思われます。

…留弗夫たちがゲストハウスを出てから、すでに３０分は経過していた。その時、廊下から勢い良く開く扉の音と、絵羽の金切り声が聞こえてきた。…その声は秀吉の名を呼び絶叫している。‥‥‥演劇にうなされた彼女が、何か悪い夢でも見て夫の名を呼んでいるように見えた。‥‥‥その騒ぎが聞こえたのだろうか。ロビーの扉が勢いく開き、２階に行っているはずの戦人たちが顔を覗かせる。蔵臼、夏妃、絵羽。そして戦人、譲治、朱志香、南條。…ゲストハウスの全ての人間が、玄関に集い、現状を把握した。
※往復時間と殺害時間、杭を刺す時間を考えると、３０分はかなり際どい時間です。煉獄の七杭はあらかじめ準備していたのでしょう。

「……職人、綸羽、藤治、南條の４人は屋敷のホールにて、留弗夫、霧江、秀吉の３人の遺体を発見」（ロノウェ）
「……第0から第六の晩ってことか？　なら死体には、頭、胸、腹にそれぞれ、例の悪魔の杖が？」（職人）
「はい。……留弗夫の頭に一本、秀吉の胸に一本。そして霧江の腹部に一本、悪魔の杖が打ち込まれています。３人には争ったか、あるいは逃げ回るかしたと思われる着衣の乱れがあります。３人の遺体は寄り添ってはおらず、犯人と遭遇後、ある程度の抵抗を試みたと推定されます」（ロノウェ）
※机以外の細工をする時間があったとは考えられず、殺された時の状況そのままのはずです。

「……今、俺は実然と思ったことがある。……どうして俺がお前と、こんなおかしなゲームを延々と続けてるのかだ。……これは俺を屈服させるためのゲームじゃない。……お前が、本当の意味で、無限の魔女に認められるための試験ではないのか、ってな」（職人）
「…し、……知らぬわ。…妾がそなたにゲームを申し込んでいるのはその、……単なる暇潰しだ…。誰の思惑でもないわ」（ベアト）
「俺は今、ワルギリアから魔女の定義を聞いた。それによるならばベアト。お前は魔女ですらない。その修行の途中で、自らの力を誤解した見習いってことになる。……これは魔女と人間の戦いのはず。ならば魔女でないお前に、俺の相手としての資格はない。……わかるな？」（職人）
「……妾がまだ、……見習い魔術だと、……申すか……。ならば、妾はいつ、そなたの対戦相手だと再び認められるのか。……いつ、このゲームを再開できるというのか」（ベアト）
「……さぁな。…それは少なくとも、今じゃない。……お前が俺の言った話をちゃんと理解出来て、本当の魔女になった時。…俺はお前を再び、ゲームの対戦相手だと認めるだろうよ」（職人）
「そ、そのような抽象的な言い方ではわからぬ…。どうすればお前の許しを乞えるのか、はっきりと聞かせよ…」（ベアト）
「いいや、これで十分だ。あとはお前が考えろ。……俺が言いたいのは以上だ。…理解ができないなら、ワルギリアやロノウェに相談してみろ。…お前みたいなガキンチョは、まず大人の言葉に耳を傾けるところから始めやがれ。……ワルギリア。ゲームは一度中断する。ロノウェが代行を降りた以上、あとはベアトが勝敗者として相応しい資格を持つのを待つしかない」（職人）
「……了解しました。……ベアトが、その資格を得たと認められるまで、ゲームを対局者不在のまま進行させます。ベアトもそれでよろしいですね？」（ワルギ）
※ゲーム盤で行われている“下のゲーム”と、ゲーム盤の上位世界でゲーム盤のゲームを楽しむ“上のゲーム”、同時進行している二つのゲームがあり、“上のゲーム”を中断するということです。

「……僕は下に行って、もう一杯、コーヒーをもらってくる。……うちの母さん、コーヒーの淹れ方にはこだわりがあるんだよ。みんなもおかわりはいるかい？」（藤治）
職人くんと朱志香ちゃんは、軽く首を横に振る。僕はそれ以上をしつこくせず、マグカップを持って部屋を出た。
廊下の窓にまで全て鎧戸が下ろされている為、廊下はとても薄暗い。一応、南條先生の部屋も訪れ、コーヒーのおかわりはいるかと聞いたが、こちらもいらないと言われてしまった。……母さんの本格的な淹れ方のコーヒーは、どうも一般受けしないらしい。一度、紗音にその淹れ方で飲ませてあげたことがあったが、……おいしいけど、少し濃いですね。と言われたことがあったような…。
※藤治の視点になっています。部屋を出たところまでは実際の場面で、南條の部屋を訪れた時に真相を聞かされ、屋敷に向かったと考えられます。

「……顔を洗ってくるわ。…ごめんなさいね、寝ちゃってたわ。……戻ってきたら、またコーヒーを入れるわね。……特に濃い、明日の朝まで眠気が残らなくなるようなやつを」（綸羽）
「うむ、頼む。……郷田の淹れるコーヒーより、お前が淹れるコーヒーの方が私の好みに合うからな」（蔵臼）
※睡眠薬の味を調整し濃いコーヒーを作る言い訳です。

「綸羽に限らん。……留弗夫にも、楼座にも。…私がした兄らしいことと言えば、それを横羽に語り、彼らを苛めただけだ。……父のようになりたくて、私なりに必死だった。…だが、いつもそれは及ばず、そのはけ口を彼らに向けてしまった…。しかし、それは言い訳にならん。…綸羽にも、未だ癒が癒えぬほどに、深い心の傷を負わせてしまっただろう。……悔いているが、今更それを許されたところで、その傷が癒えるわけもない…」（蔵臼）
「……もし、あなたとあなたのご兄弟が生まれた家が、右代宮家でさえなかったなら……。……もっともっと普通な、楽しい兄弟の関係であったでしょうに…」（夏妃）
「…それを言ってはならん…。……綸羽は生涯、私を憎み続けるだろう。そしてその資格がある。…私は、それを甘んじて受け止めるつもりだ。……綸羽、……すまん。……もちろん、許さなくていい…」（蔵臼）
※これが蔵臼の本心だったのでしょう。

職人はさっきから、窓を開け、鎧戸を開けては外を確かめる仕草をして、それを次々に繰り返していた。
「……ん。…この窓は静かだな。…なるほど、この窓は他と違って建物の構造上、風が吹き込まないわけか」（職人）
「そのようですな…。こんなにも外は豪雨なのに、雨も風も入ってこないとは不思議な気持ちです」（南條）
「南條先生。…今、窓を開けた時、音を感じたかい？」（職人）
「え？　……いえ、気にはなりませんでしたな…。よく油が効いてると思います」（南條）
「つまり。誰も見ていない廊下の窓から、ひょろっと抜け出すことは可能なわけだ。しかも、この窓なら風も吹き込まないから、風圧でカーテンや扉が音を立てることもない。……静かなもんさ」（職人）
職人は身を乗り出し、下の地面を見る。…藤治が飛び降りたかもしれない跡を探しているのだ。……しかし、降りしきる雨の中の芝生には、一見、そういう痕跡は残っていないように思えた。
「……こういう窓が、１階にもあるのかもしれない。誰にも気付かれずに表へ出ることは可能だな」（職人）
「しかし扉は愚か、窓は全て施錠されて鎧戸まで閉まっていましたぞ…？　出ることは可能でも、閉めることは不可能だ…」（南條）
「閉められるぜ？　こうやって、カチャンとな」（職人）
職人は、何を当り前なことをという仕草で、開いた窓を閉め、施錠する。
「……ま、……まさか、職人さんは……」（南條）
「最後に、中の人間が鍵を閉めれば、こんな密室は朝飯前だ」（職人）
「し、しかしそれでは、……それでは、……おおおぉぉ……」（南條）
南條は青ざめながら首を何度も横に振る。…職人が口にしたそれは、想像するのも恐ろしいある事実を突きつけているからだ…。
「……俺の想像したトリックならな？　しかし、こんなトリックを使えば、怪しまれる人物は極めて限定される」（職人）
南條の前でそれを口にしたくないが、…職人とずっと一緒にいた朱志香を除けば、…それが出来るのは南條と、…綸羽しかいない。
「わ、…私はそんなことをしませんぞ…！　え、えぇ、誓ってもいい…！！」（南條）
「……となると、綸羽伯母さんと南條先生のアリバイ合戦ってことになる。…俺たちは、二人とも怪しんで、それぞれを別々に監禁すれば良いだけの話。……逆に言えば、このトリックは、もっと生存者が多ければ有効かもしれないが、これだけ人数が減った状況下では、大して有効ではないんだ」（職人）
…いや、それどころか、自分の首を絞める可能性だってある。……むしろ、外に犯人がいるように見せ掛けるため、わざと鍵を開け放したり、窓を破ったりした方が好都合なはずなのだ…。

「……もしこの失踪劇が、今日の昼にでも起これば、俺は自信満々にこの脱を発表しただろうよ。…だが、この段階に至っては全然自信が持てないぜ。……何なんだ、こいつは。…一体何を意味してやがるんだ。……この“密室”はよ……」（戦人）
※窓が開いたままだと、戦人たちが目を覚ました時、絵羽たちが下から上がってきた時、すぐに譲治の不在が疑われ、発覚します。南條がそれを避けるために施錠したと考えられます。

■　魔女法廷　１０月５日（日）１８時０３分　■
絵羽伯母さんに習って、俺たちも大声で譲治の兄貴の名を呼んだ時。…絵羽伯母さんが何かを見つけ、足を止めた。そこは客間の扉の前だった。
「……これは……？　な、南條先生、ちょっと来てもらえるかしら……」（絵羽）
「な、何事ですかな……」（南條）
大人たちから、客間の扉などに、不気味な魔法陣が書かれている、という話は聞いていた。……血を想起させる真っ赤な塗料で書きなぐられ、だらりと滴り落ちるように描かれたそれは、不気味という言葉で言い表す他がない。しかし、それは朝から描かれていたはずだ。……すでにそれを見ているはずの絵羽伯母さんが、改めて不審に思う何があるのかと、俺と朱志香は扉を凝視した…。
「……確かに、……こんな数字が、書かれていた記憶はありません」（南條）
「えぇ、なかったわ。……不気味な魔法文字みたいなのは書かれていたけど、数字は書かれていなかった」（絵羽）
二人が言うには、朝の時点では、魔法陣だけが描かれていたという。しかし、今そこの魔法陣には、その上辺りに、８桁の数字が新たに記されていた。０７１５１１２９。…何の意味があるのかわからないが、何を思い、この数字を記したのか、想像したくもない。魔法陣を描いたのと同じ塗料だろうが、…明らかについ最近、記されたものだ。魔法陣の部分と乾き方や色の具合がまったく違った。
※譲治を殺さざるを得なかったベアトが書いたと考えられます。

「ま、…魔方陣、というものかもしれませんな。……ある種の数字遊びに魔術が宿るという考え方です。どの列を足しても同じ数字になる、みたいなものを、皆さんも見聞きしたことがおありでしょう…。」（南條）
※例えばこんなのです。
２　９　４
７　５　３
６　１　８
縦、横、斜め、どの列を足しても“１５”になります。

「視力を失った人間って、反魔法力も、対魔法抵抗力もゼロになるんですって。つまり、今のあんたはアイソレーテッドポーン。意味がわかるかしらぁ？」（エヴァ）
※チェスの用語です。孤立したポーン、つまりただ取られるだけの駒です。
「……んな、……何ですと……？」（南條）
目の前にいる人物が何者なのか、南條には理解できるわけもない。…増してや、彼女が何を口にしたのか、さらに理解できるわけもない。
「……南條先生？　どうしたんです……？」（朱志香）
目の見えない朱志香は声だけでしか状況がわからない。…でも、南條が、不安そうな声を出したのが聞こえた為、何か良からぬことが起こったのかと身を硬くした。
「や、……やめてくれ……！　殺さないでくれ…！！　わしには病弱の孫がおる…！　ここでは死ねんのだ…！　頼む、見逃してくれ…ッ！！　ヒイィ！！！」（南條）
「…南條先生…？　南條先生ッ?!」（朱志香）
朱志香はベッドの上から、呼び掛けるしかない。…声の加減を聞く限り、南條は廊下にいて、何者かと対峙しているのだ。そして怯えている。彼が消えた今、生命を脅かされているのは間違いなかった。
「よせ、やめろッ！！　ヒィイイイイイイイ！！！」（南條）
「第九の碑に魔女は蘇り、誰も生き残ればしない。くっひひひひひひひひひひひひ！！」（エヴァ）
魔女は黄金の杖を先を南條に向ける。…何をするつもりかわからなくても、南條にはそれが、自分の命を奪おうとしている行為に違いないと想像がついた。バンッ！という鋭い音が響いた。
※朱志香が聞いた南條の声は現実なのでしょうが、南條を殺したのはベアトで、エヴァは幻想です。

しかし、よく知るはずの部屋は、目が見えなくなっただけで、暗闇の密室も同然だ。棚か何かにぶつかってしまい、その上に積んであった菓子缶や瓶のようなものが降ってきて、彼女の頭にぶつかる。…今の彼女には、それを防ぐために頭を守ることすらおぼつかない。…視界を失うだけで、人はここまで無力なのかと痛感する。もちろん、そんなことに感心している暇はない。彼女はとにかく逃い回って、その場を逃げ出そうとするのだが、よくわからないモノに次々にぶつかり、色々なモノが降ってきてはぶつかって、まるで部屋全体が生きていて、彼女を逃がすまいと意地悪をしているように感じるのだった。
※パニック状態の朱志香に一人で部屋から脱出するのは不可能です。

「……まさか、お嬢様。……朱志香を助けるおつもりですか。危険です。」（ロノウェ）
「わかっておる…。どうせ助けても、黄金郷の扉が開けば魔女の裏の怖み者よ。……しかしそれでも、…あやつの殺し方に比べれば遥段慈悲深い。…魔女の裏は恐るべき方法にて命を奪うが、二度は奪わぬ。生死を弄ばぬ。…しかし、あやつは違う。何度でも殺す。面白半分で殺す！　そこにはわずかほどの慈悲もない。……妾はせめて朱志香を、そのような残酷な運命から救いたいと思う。」（ベアト）
「……確かに、それを行なうことは、良き魔女として讃えられることでしょう。……しかし、新しきベアトリーチェさまは、すでにお嬢様のことを敵視なされています。…もう一度姿を見られることがあったなら、……今度は逃れる術はありませんよ？」（ロノウェ）
「……。……譲治を紗音に会わせた時。……妾はようやく、魔女とはどういうものなのか。そして魔法とはどういうものなのかを理解したのだ。……妾は魔女だ。魔女であらねばならぬ。そして戦人に対戦相手だと認められ、……今度こそ戦人に魔女だと認めさせなければならぬのだ。……その為の道は長く険しいかもしれない。…しかし、今ここでその一歩を踏み出さねば、……妾は魔女を名乗れぬのだ。」（ベアト）
「お気持ちはわかりますが、どうやってお救いになるつもりです？　今のお嬢様の身に使える魔法は多くありません。紗音を蘇らせる時ですら、譲治の力を借りたではありませんか。」（ロノウェ）
「……うむ。…だからこそ、朱志香だけは救えるかもしれぬのだ。……今、あやつは嘉音に助けを求めている。……その想いの力を借りれば、妾の魔力にてもう一度、冥府の扉を叩けるかもしれない。」（ベアト）
※譲治と南條を殺したことで、ベアトの心臓が絵羽に伝わることはなくなったため、猫箱を守ることができました。しかし、朱志香を放置しておくと証拠隠滅を図る絵羽に殺されることになります。幸いにして朱志香は目が見えなくなっているため、嘉音のフリをすれば、猫箱を守ったまま朱志香を助けることができます。朱志香がせめて安らかな死を迎えられるように、絵羽から逃れられる場所まで誘導した。それを幻想修飾したのが、以降の場面だと考えられます。

ロノウェが飛ばした黄金蝶が完全に消え去ってしまった頃、‥朱志香は塔間に辿り着いた。目が見えていればすぐに辿り着けたはずの場所でも、今の朱志香にとっては、長い長い冒険だった。
「‥‥さぁ、お嬢様。客間に辿り着きました。これからお嬢様を、窓際のカーテンの束のところまでお連れします。‥その中に隠れれば、きっと安全です」（嘉音）
※ベアトは嘉音のフリをして朱志香をカーテンに隠し、そのまま朱志香と話をしながら１０月５日の２４時を迎えたと考えられます。

殺人を仕込んだオランウータンは人間にはカウントされてないなんて屁理屈を言われちゃ敵わない。
※エドガー・アラン・ポーの『モルグ街の殺人』のことと思われます。

「うむ。‥ニンゲンに指せぬ一手なら。‥‥妾が、魔女であるがゆえに指せる一手で、そなたを迎え撃ってやる‥」（ベアト）
「魔女であるがゆえに指せる一手‥‥？　‥‥お、‥お前、何をする気だ‥」（戦人）
「妾が、赤にて。魔女を否定する」（ベアト）
魔女だけが使える赤で。‥赤で魔女を否定する。それは、自らの剣で、自らの喉を掻き切るも同じことだ。
※悪魔であるロノウェが使っていますし、この世で死後に召喚された秀吉が、EP4では戦人や縁寿も使っています。使用には“魔女の許可”が必要なのかもしれません。
「そなたに手はない。しかし妾に手はある。‥‥この一手、逃せばあやつは魔女として真の意味で復活し、今度にそこの島の全てを支配する。‥全ての悪夢はあの女の自由自在となり、この島は永遠に、邪悪なる魔女の妄想を繰り返す無間地獄に落ちるだろう。‥‥‥そなたは、それを許せるというのか。‥親しい家族たちが、永遠にあの魔女の悪夢に弄ばれても良いと、そういうのか」（ベアト）
※ゲーム盤を乗っ取られるということでしょうか?

「戦人。‥‥ひとつだけ、縛みがある。‥‥耳を、塞いでくれぬか」（ベアト）
「耳を‥‥？　どうして‥？」（戦人）
「‥‥‥妾はこれより、赤にて魔女を否定する。あやつの赤で歪め詰めた盤面を切り裂いて見せる。‥‥さすれば、‥‥‥妾もまた魔女の姿を失うだろう。‥‥そなたも妾が語る赤き真実を聞けば、妾の正体を、理解することになる。‥‥‥そなたひとりが耳を塞いだところで、真実は何も変わらぬ。‥‥だが、‥それでもそなたにだけは、耳を塞いでほしい。‥‥‥‥‥‥そなたの前だけでは、‥魔女で、いたいのだ。‥‥縛む」（ベアト）

「‥‥‥‥‥さぁ良いか。‥戦人に代わり、そなたのチェックメイトを外す。１５人が死に、３人しか残らぬチェス盤にて、何が起こったのか。‥妾がこれより赤にて暴く。その赤き真実を聞けば、‥‥‥偽りの魔女二人を、共に貫いて殺す！」（ベアト）
赤で魔女を否定することは即ち、‥‥‥彼女のみすぼらしい姿を知ることになるということ。戦人は、両の手を自分の耳に当てる‥。‥‥‥彼女の最後の、‥‥魔女としての名誉を守るため、自らの耳に手を当て、‥真実を拒否する。

ベアトが赤にて、何かを語っている。その辛辣な内容に、邪悪なる魔女までもが耳を塞ごうとする。‥‥‥それは、赤き真実。力ある言葉。‥‥‥自らの存在を否定する言葉。魔女にしか使えぬ、魔女を否定する唯一の言葉。ベアトは語る。赤き真実にて、魔女が歪めた真っ赤な盤面を切り裂く。人間には解けぬ難題を、魔女にしか解けぬ一手で、説明し、追い詰めていく。戦人には聞くことを許されない“真実”。もしも戦人が束縛を破り、それをこっそり盗み聞いたなら。‥‥‥たちまちの内に戦人は、ベアトとのゲームの勝者となり得るだろう。‥‥‥この島の全ての謎を理解し、全ての魔法とトリックと、密室と呪いと祟りと伝説と、‥怒りと悲しみの物語を全て理解するだろう。しかし、‥‥‥それを知るのは、戦人が自らの手で真相に至った時だけなのだ。そう。‥ベアトリーチェは、‥‥‥その真相に、戦人が自ら辿ってくれることを、最初から願っている。それは、教えられて至るのではない。戦人が自らの力で、辿り着かなくてはならない、真実。ベアトと邪悪な魔女の中央に、眩い光が集まり、どんどんと強くなっていく‥‥。それは‥、真実の力。太陽が破裂し、全てが吹き飛ばされた時‥。‥‥‥そこには銃を持った紳士の姿があった。
※魔女は全ての魔法を否定されると正体を暴かれるようです。

■　魔女幻想　■
「‥‥‥‥‥これでもう、‥妾は魔女ではない。‥‥‥‥‥‥だが、必ず、妾は再び魔女になるぞ‥。‥‥‥そして、‥‥‥再び黄金の魔女と呼ばれるに至って、‥‥‥‥再び、‥‥‥そなたの対戦相手だと認められに、‥‥‥‥帰ってくるから‥‥‥‥」（ベアト）
「いや。‥‥‥‥お前は、魔女だったぜ。‥俺は、見てたぜ。‥‥‥‥お前が、あの邪悪な魔女を、‥‥‥すっげえ魔法で吹き飛ばして、その正体を暴き出すところを、‥俺はちゃんとこの目で見ていたぜ‥」（戦人）
「あ、‥あれは魔法ではなく、‥‥‥赤き、」（ベアト）
「いいや、魔法だったぜ。‥‥‥‥お前は確かに、黄金の魔女だった。‥‥‥‥お前自らが否定しようとも。‥‥‥‥俺が認めてやるよ。“お前は確かに、‥‥黄金の魔女だ”」（戦人）
‥‥‥‥戦人がその言葉を口にした時。真っ暗だった世界に、‥ぽっと一粒。‥小麦の種のように小さな黄金の一粒が微く光った。それは‥小さいけれど力強く黄金色に輝く。そして、‥‥‥背中を寄せ合って座っていた二人を照らし出す‥。だから、二人は互いに自分の姿を自覚する。戦人は自分の姿を見ても、そう驚かなかった。‥しかしベアトは、自分の姿を見て、少し驚く。‥‥‥戦人が見ても、いつもの彼女の姿だと思うのだが、‥‥‥彼女はその姿をしばらくの間、驚いていた‥。
※全ての魔法を自ら否定したためベアトは正体を暴かれましたが、戦人が魔女であることを信じたため、黄金の真実により、ベアトは再び魔女の姿を取り戻したと考えられます。

「使用人の子となんて‥！！　駄目です、うちの朱志香がやれるわけありません‥！！」（夏妃）
「いいじゃないかね。好きな相手くらい、自由に選ばせてやるといい」（蔵臼）
※蔵臼は朱志香には甘いようです。

「前回、黄金郷の扉がようやく開いたが、お前はサインを拒んだ。‥‥‥記憶にはないだろうがな。お前がサインを拒んだ為、この世界を再び閉ざしてしまったのだ」（金蔵）
※プレイヤーの戦人が駒から離れていたため、認識していない場面で駒戦人がサインを拒んだようです。これはゲームマスターによる干渉でしょう。

■　うみねこのなく頃に Episode4　「Alliance of the golden witch」
■　新しき客人　■

「気の長い話だね。あなた(戦人)勝つ気あるの？　有限も、その扱いを間違えれば無限と化す。今のあなたたはすでに、亀すら追い越せないアキレスなのよ。……なるほどね、私が必要なわけだ。こんなザマじゃ、何億年を掛けようとも、無限の魔女に勝てるわけがない。」(縁寿)
※ゼノンのパラドックス“アキレスと亀”のことです。“あるところにアキレスと亀がいて、2人は徒競走をすることとなった。しかしアキレスの方が足が速いのは明らかなので亀がハンディキャップをもらって、いくらか進んだ地点（地点Aとする）からスタートすることとなった。スタート後、アキレスが地点Aに達した時には、亀はアキレスがそこに達するまでの時間分だけ先に進んでいる（地点B）。アキレスが今度は地点Bに達したときには、亀はまたその時間分だけ先へ進む（地点C）。同様にアキレスが地点Cの時には、亀はさらにその先にいることになる。この考えはいくらでも続けることができ、結果、いつまでたってもアキレスは亀に追いつけない”という屁理屈です。

「風変わりね、名前よ。私のことはグレーテルと呼んで」(縁寿)
「じゃあ、俺はヘンゼルとでも名乗った方がいいか？」(戦人)
※“ヘンゼルとグレーテル”はグリム童話の一篇で、愚かな兄ヘンゼルを聡明な妹グレーテルが助けるお話です。

■　縁寿と真里亞　■

私は洗面の鏡の縁に寄りかかるようにしてしゃがみ込みながら、鞄を開き、一冊の凝った古めかしい装丁の本を取り出す…。これは、……大の仲良しだった真里亞お姉ちゃんの日記。3つ年上の、ちょっぴり不思議な人だけど、とても温かい、素敵ないとこのお姉ちゃんだった。いつも私の手を引っ張って楽しい遊びに加えてくれた。……親族の集まりで一番楽しいのは彼女に会えることだったことを思い出す…。真里亞お姉ちゃんの日記は、日々の出来事を書き残したというよりは、もう一人の自分に今日の出来事を手紙で伝えるような、そんな文体で記されている。この日記帳は、彼女の遺品の中から見つけて私が密かに持ち帰ったもの。
※真里亞の日記は二人称で書かれているようです。

今日は真里亞の誕生日。毎年は彼女の誕生日を、必ず素敵なレストランで過ごすようにしていた。
※毎年は真里亞を好きになろうとする努力をしていたと思います。

「何で“さくら”なの？」(縁寿)
「うー！　TVアニメの主人公の名前～！」(真里亞)
※ＰＳ３版ではタイトルが変かされています。
「うー！　カードマスターさくらの主人公～！」(真里亞)
当時、テレビで大人気だったアニメの主人公の名前だ。
※ＰＣ版ではこちらです。『カードキャプターさくら』のパロディだと考えられます。

「うー、全然平気～！　ほら、聖徳太子なのー、うー！　だからさくたろにも好きなものを買ってあげられるよ。一緒に食べよう！　さくたろもヨーグルト食べる？」(真里亞)
※現在の一万円札の肖像画は福澤諭吉ですが、これは１９８４年１１月１日から発行されました。それまでの一万円札の肖像画は聖徳太子です。

■１２年後の世界　１９９８年１０月
「嘘じゃ、縁寿ちゃん。あんた、ビルの天辺から飛び降りたんだって？」(小此木)
「追っ掛けがウザかったんで、ちょっと撒こうかと思って。下の方の階で、改装工事してて転落防止ネットがあるの、知ってましたし」(縁寿)
縁寿はあっけらかんとした様子でそう言い放つが、実際には奇跡中の“奇跡”だ。改装工事中の転落防止ネットを何層も突き抜け、アトリウムの宙を飾っていた色とりどりの横断幕に受け止められては滑り落とされ、…最後の横断幕１枚にふわりと受け止められて無傷で地上に降り立ち、すたすたとその場を後にしたなんて…、番組収録顔負けだ。
「いくらネットがあるのを知っていた、たってぇ、高さ２００mの超高層だよ？」(小此木)
※この高さから落ちたら、挽き肉になるわけです。

彼の名は天草十三。元々は縁戚伯母さんの親戚の一人。軽口とお喋りが過ぎて伯母さんには嫌われてたっけ。親戚たちの中では一際若いが、見掛けの軽薄さとは裏腹に、自衛隊第一空挺からフランス外人部隊をハシゴして、海外の民間軍事会社や高級警備会社に次々身を置くなど、なかなか優れたユニークな経歴を持つ。
※ゴルゴ１３がモデルだと思われます。“ゴルゴ”はキリストが処刑された“ゴルゴダの丘”で、キリスト繋がりで“島原の乱”の“天草四郎”から名字をとったのでしょう。ちなみに自衛隊第一空挺はエリート部隊です。

「ブラックウォーターでエクササイズの指導を」(天草)
※アメリカの民間軍事会社です。

(親戚)「あれ、もう帰っちまうのかい。お茶漬けでも食ってけばいいのに」(小此木)
※京都で客に茶漬け(ぶぶづけ)を勧めるのは「帰れ」を意味するため、京都の旧家である須磨寺への嫌味です。

■　赤き真実、青き真実　■
「推理小説なんかのクライマックスはいつもこうだった。……名探偵が容疑者を一堂に集め、たったひとつの推理を披露して、それを華麗に当てて見せるんだ。まるで、一本の矢で見事にリンゴを射抜くウィリアム・テルのようにだ。だからこそ、それが美徳みたいに誤解しちまってた。」(戦人)
※14世紀初頭にスイスの中央部のウーリに住んだとされる伝説の英雄です。代官に反抗し逮捕されたのですが、息子の頭の上に置いた林檎を見事に射抜く事ができれば自由の身にすると約束され、林檎を見事射抜いたとされています。

■　縁寿の回想　■
「真里亞はこの日記で、この夜の出来事を、とてもとても楽しかったと記した。なのに、日記を読んだ縁寿は、この夜の出来事を、とてもとても悲しかったと読んだ。これは、幸せな夜を記したものなの。……これが、この夜の“真実”。お願いだから、その幸せな真実を、……新しい、そして異なった真実で塗り潰さないで」(真里亞)
※初めてこの場面を読んだとき、真里亞は辛かった現実を楽しかった幻想で塗りつぶそうとしたのだと考えましたが、おそらく真里亞は本当に楽しく過ごしたのです。

「……やっぱり、縁寿は可哀想な子。……君を幸せにしてくれるカケラは、こんなにもたくさん、身の回りに落ちているのに、それを見つけられない。……なのに、不幸せなカケラばかり見つけてしまって、傷付き続けている。……だから縁寿は傷付くことに怯え、……傷付けるものが身の回りにないかどうか、それを確かめ終わるまで、幸せ探しすら始められない。あのね？　幸せのカケラも、不幸せのカケラも、どちらもいっぱいあって、世界を満たしてるの。だから、身近の幸せが見つけられない人は、

どこまで探しに行っても見つけられない。……チルチルとミチルが青い鳥を探したみたいに。縁寿はその正反対。……不幸せなカケラがまったくない世界を探してる。でも、それだって青い鳥と同じなんだよ。だから、永遠に縁寿は自分の幸せを、見つけられない。……戦人はヘンゼルなの？　青い鳥なんじゃないの……？」（真里亞）
※『青い鳥』において、チルチルとミチルは青い鳥を求めて旅に出ますが、見つからなくて家に帰ってきたら、家にいました。

ワルギリアは、手をひらひらさせてから、手の平を上に向け、空気を軽く掴み取るような仕草をする。そしてその握り拳をさくたろうの前に差し出す。……そして拳を開くと、そこには一粒だけパックされたタイプののど飴があった。
※このワルギリアは熊沢です。つまりこの場面は完全な幻想描写ではなく、幻想修飾された場面です。
ベアトは真里亞の手掴みから、魔導書を借りると、パラパラッとページを華麗にめくる。…そして様々な魔法陣が記されたページの途中に空きページを見つけ、そこを押し広げる。そして、にやりと笑ってさくたろうを凝視してから、一気にペンを走らせた。
最初は何を書いているのか理解できなかった真里亞も、途中からその書面の崇高らしき魔力を理解し、瞳を輝かせ始める…。
「すごいよさくたろ！！　待ってて、もうすぐだよ、もうすぐだよ！　ベアトすごいベアトすごい！！」（真里亞）
「……力める書面の筆記において、この子の才能は崇高らしい。あなたになら魔界の書記官すら務まりそうですよ」（ワルギ）
「これでどうか…！　まずまずであろう…！」（ベアト）
ものすごい集中力で書かれていたそれが完成し、ベアトは書面を遠目に改めて見直す。……まんざらでもない仕来らしい。そしてそれを覗き込んだ真里亞も感嘆の声をあげる。
「……すごいよベアト！！　可愛いー！！　うーうーうー！！」（真里亞）
※このＥＰの最後のほうで以下の場面があります。“「こっちは何？　何このへたくそなライオンの落書き。……さくたろう？　変な名前！　一番大好きなお友達だって。そうなの？　これがあんたの友達？　親友？　このライオンが？　ねぇねぇ？」（間）”このときベアトが書いたのが、このさくたろうの絵なのだと考えられます。

■１２年後の世界　１９９８年１０月
「あれは忘れもしない。１９８７年４月のことです。私は友人から、ある奇妙な依頼を受けました。……とある大富豪の遺品である蔵書が大量に競売に掛けられていて、その一部に、民俗学的にも考古学的にも、あるいはオカルト的な意味でも極めて価値の高いものが含まれていると思われる、その価値を内密に見て欲しいというのです。それらの蔵書は、六軒島での難を逃れたものと説明されていました。それを、島の所有者である右代宮絵羽氏が競売に出したというのです。まず、蔵書を鑑定してわかったことは、右代宮絵羽氏には民俗学的な素養がまったくなく、そしてその蔵書の本来の持ち主である右代宮金蔵氏は、日本で五指に入る悪魔学の権威であったことは、間違いないということです」（大月）
１９８７年４月。都内の大手古物商が、歴史的価値が高いと思われる大量の古文書を入手する。これは、右代宮絵羽が競売に掛けるよう依頼して預けたものであった。当時、絵羽は唯一の生き残りとして右代宮家の家督を継承し、全ての財産を独占したかに思われていた。しかし、当時は事故から半年しか経っておらず、危難失踪が成立していなかった。その為、絵羽は家族の生命保険さえ降りず、経済的にかなり困窮していたと思われる。絵羽は金目のものは何でも売り払おうとしたらしく、彼女が難を逃れたときに所在していた九羽鳥庵に収められていた蔵書も、この対象となったのだ。そして、後に「右代宮蔵書」と呼ばれるそれらの古文書は、古物商によって鑑定のために集められた権威たちの検印を抜いた。
「少なくとも神秘学の見地から言えば、その発見が世界に与えた衝撃は死海文書発見にも匹敵するものでした。『右代宮蔵書』には、なんと千年以上にも亘る間、その存在だけが知られているにもかかわらず、発見されていなかった数々の極めて重要な文献さえ含まれていたからです」（大月）
金蔵がどのようにしてそれらを収集したかはわかっていないが、その莫大な富を湯水のように使い、同じ趣味を持つ同士の大富豪から買い取ったことは間違いあるまい。そんな、好事家たちが死蔵して独占欲を満たしたくなるほどに価値のある蔵書が２０世紀末に大量に発見、公開されたことは、全世界に衝撃を与えた…。
「この一件により、“Ｒｏｋｋｅｎｊｉｍａ”の名は全世界に知れ渡ることになります。そして同時に、六軒島の事故によって、未発見のさらに価値のある蔵書が大量に失われた可能性が高いことも、全世界に衝撃を与えました。これにより、六軒島と右代宮金蔵の名は、我々にとって忘れ得ないものとなったのです」（大月）
絵羽によって金蔵の蔵書が世間に流出されるまでは、六軒島は、誰の記憶にも留まらない無名の島に過ぎず、……そこは斯じて、魔女の島ではなかったのである。しかし、右代宮蔵書が世界的に知れ渡り、六軒島のイメージは一気にオカルト的になる。
「そして、そこへ起こるのが例のメッセージボトル事件です。これが、あの島を、魔女の島に変えた。伊豆諸島の無名の小島が、オカルトの島へ、そして謎の魔女、ベアトリーチェの島へと変遷して行ったのです。右代宮蔵書とメッセージボトル、このどちらが欠けても、六軒島魔女伝説は成り立たなかったと言えます」（大月）
※現実の絵羽は貸し金庫のキャッシュカードを手に入れなかったか、もしくは秀吉の会社の買収阻止の為に、貸し金庫の金を全て使ってしまったと考えられます。

■　さくたろ　■
楼座は髪を振り乱しながら激昂する。立ち上がった時の勢いでティーカップが倒れ、その音よりも遥かに大きい音で何度もテーブルを叩いた。白目を剥いて錯乱している、という表現すらも充分に妥当と思えるその激昂ぶりに、民生委員の女性は叫び返らずにはいられない。……それは、廊下からこっそり様子をうかがっていた真里亞でさえも。母が激昂するところを何度も見てきた。でも、こんな怒り猛る様を見るのは初めてだった。それを見て真里亞は確信する。……それはもはや、母親ではない。母親の体に憑依した、邪悪なる別の存在だ…。
※“黒い魔女”はこの時、誕生したようです。

「４人もお友達がいて良かったわ」（楼座）
楼座はそう言いながら、真里亞の手からウサギの１つを掴み取る。そして、よく見せ付けるように真里亞の眼前に突き出した。……可愛らしい、トランペットを持ったウサギの、駒のような小さな人形。それがゆっくりと、掲げるように高く上げられる。そしてそれは、目で追えない速度で壁に叩き付けられた。粉々だった。小さく頑丈だったそれは、激昂する母の怒りを受け止められるほどではなかった。
※シエスタ５５６の最期です。

……黄色いぐしゃぐしゃの布地と溢れ出た綿が、私の眼前いっぱいに突きつけられる。そして、ママの表情を通して、邪悪な存在が、はっきりと断言した。
「“さくたろうは、死んでしまいました”」（楼座）
※このままさくたろうは捨てられてしまったのでしょう。もし、このさくたろうの残骸が残っていれば、ベアトにもさくたろうを蘇らせることが出来たはずです。

■　魔女の島へ　■
「聞こえは悪いがそういうことです。吾唯（わがただ）足るを知る、っていうヤツですね。……俺がこれでいいと思った人生なら、それはとやかく言われてどうこうってもんじゃない。縁寿さんの人生も、この旅も同じです。縁寿さんは外の誰にも、とやかく言う権利なんてない。旅の意味と成果は、縁寿さんだけが決める。縁寿さんにとって有意義な旅になったなら、それで充分なんですよ。」（天草）
※京都の龍安寺にある“知足の蹲踞（つくばい）”に書かれている言葉です。円柱状の石の上部の真ん中に水を溜める部分が四角で彫られており、その四角を“口（くち）”に見立てて、それぞれ“口”を使った漢字の“口”以外の部分が四方に彫られています（例えば上には“五”が彫られており、“口”と合わせて“吾”になる）。ちなみに蹲踞（つくばい）というのは、茶室に入る前に手や口を清めるための手水を張っておく石のことだそうです。

■　右代宮金蔵　■

「デヴィリッシュプリティの最新作、ジャックザリッパー・クリスマスブラッド。……ニンゲン界の田舎娘には理解できないセンスでごめんね？」（ガァプ）

※『Angelic Pretty』のパロディだと思われます。

「リーチェにはアリグレがお勧めね、アリスアンドザグレイブヤード。今度一緒に６６６にお洋服見に行きましょうよ。たまには魔界にもいらっしゃいな。」（ガァプ）

※『ALICE and the PIRATES』と『１０９』のパロディだと思われます。

■　地下牢　■

……この地下牢の中に、ごたごたと置かれていると思った家具は、家具ではなかった。それは、……人間ひとりを閉じ込める小型の檻や、拘束台、あるいは、……拷問台。それらは錆付き、埃にまみれているため、忘れられたものであることは間違いない。

※本来は鉄格子で閉じられている井戸から脱出できたように、この地下牢も実際には存在しないと考えられます。

■１２年後の世界　１９９８年１０月

私（縁寿）は下ろしていたナップザックから（真里亞）お姉ちゃんの臨終書を取り出す。……そしてベアトリーチェがお姉ちゃんに託した文章のページを開き、その筆跡と照らし合わせる……。……・・・特徴ある筆跡は、間違いない。この一億円の現金を送りつけたのは、……ベアトリーチェ自身だ……。同じ封筒と内容物は、かつて熊沢と同居していた息子にも届けられていた。中身もまったく同じ。暗証番号と銀行の本店を記した手紙。磁気カード。ナンバープレート付きの鍵。ナンバープレートの刻印はＡ１１３.私のところにもおかしな封筒が届いたんだ‥、１２年前に…！！　中を開けたら、よくわからない鍵とかカードが出てきて、困惑したのを覚えてる。私はがっかりし、それをどこかに放り出してしまったはず‥。あの封筒はどこにやってしまっただろう？　あの後のゴタゴタでどこかに紛失してしまっているだろう。

※絵羽が秀吉の会社を守るために密かに召し上げた可能性があります。

■　次期当主　■

「ほほほほ…。あなた（蔵臼）が１００％の力を発揮したとして、あなたの戦闘力はせいぜい６。対してこの子の戦闘力は１０００。つまり、あなたが１００人束になっても、絶対に勝てないということです」（ワルギ）

蔵臼と山羊の２倍の踏み込みで４倍。奇襲が味方してクリティカル確約でさらに２倍で８倍。その上、立てた負けフラグの数だけ倍率が掛かって２０倍で１６０倍。一見、すごい倍率だが、それでも蔵臼の戦闘力は６。１６０倍しても、戦闘力９６０。山羊の１０００にはギリギリ届かない‥！　クロスカウンターは４倍の破壊力。これはボクシングの常識だ。そしてそれを弾き、右ストレートが叩き込めたならダブルクロスカウンターで８倍の破壊力。これもボクシングの常識だ。それをクロスされてしまったら……。トリプルクロスは、テコの原理で破壊力は１２倍！　これもまた、どうしようもないくらいにボクシング界の常識！！　民明書房の本にだって載っているッ！　戦闘力、１１５２０…！！　今の蔵臼のパンチなら、最初の塔の天下一武闘会（※ＰＳ３版では“某武闘会”）なら余裕で優勝できる威力‥！！

※『あしたのジョー』におけるボクシング界の常識です。民明書房とは宮下あきらの『魁!!男塾』以降のコミック作品に登場する架空の出版社です。様々な格闘技のエピソードが出典付きで紹介されるため、何も知らなければ信じてしまうところですが、そもそも出典元の書籍も出版社も存在しないというオチなのです。僕も当初は信じていましたが『ひき氷屋三代記―我永遠に氷をアイス―』で流石におかしいと気がつきました。戦闘力１１５２０は『ドラゴンボール』における戦闘力の空白地帯ですが、ナッパとベジータの間くらいです。

「私が見たことを、ありのままに話す。‥戦人くんは、きっと私の頭がどうにかなってしまったんだろうと思うに違いない。……ええ、思ってくれていいわ。私だって、何を見たのか、未だに整理がつかない」（霧江）

※この台詞は『ジョジョの奇妙な冒険』のポルナレフの台詞のパロディです。原文は以下の通りです。「あ‥ありのまま、今、起こった事を話すぜ！　おれは奴の前で階段を登っていたと思ったら、いつのまにか降りていた。な‥、何を言っているのか、わからねーと思うが、おれも何をされたのかわからなかった‥。頭がどうにかなりそうだった‥。催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ‥」

■　惨劇の原因　■

「待ちな。……俺はもう今さら次期当主が誰かなんて下らねえゲームには興味ねえぜ。俺のゲームは、クソジジイとお前と、……みんなを殺したヤツら全員にそれぞれジャイアンパンチをブチ込むことだ。顔面が陥没するアレな」（戦人）

※これは説明するまでもないと思いますが『ドラえもん』のジャイアンが繰り出すパンチです。

■１２年後の世界　１９９８年１０月

「だが、九羽鳥庵への出入りは、ある日を境にぷっつりとなくなっちまった。今から大体３０年前だから、……昭和４３年頃だったと思う」（川畑船長）

※西暦で直すと１９６８年です。

「……絵羽伯母さん。今日まで付き合ってくれてありがとう。これでお別れよ。ハバナイスドリーム。シーユーヘル」（縁寿）

「クール」（絵羽）

そして、……その顔を穿つ、軽い音が響き渡る。

※この時、縁寿は天草で射殺されたわけです。

■夜お茶会

真里亞は、礼拝堂に呼び出されてテストを受けたのでは…？　……それがどうしてこの死体だらけの食堂にいて、母親の脳に並んで、死んでいるのか……？

※真里亞はそもそも礼拝堂には行っていないと考えられます。真里亞が出発してから戦人が屋敷に行くまでに結構時間がありますから、その間に真里亞は屋敷に入り、その後ベアトが施錠したのでしょう。

■　うみねこのなく頃に散　Episode5　「End of the golden witch」
「うっふふふふ。さぁすがベルン～。骨し方もエグいわねぇ。…そういうことよ戦人ぁ。あんたにはゲームを降りることなんて許されてないの。あんたもベアトも、私たちの退屈を紛らわせるゲーム盤の駒でしかない。…あんたのそのわけのわかんない怒りや苛つきさえも、私たちには退屈を紛らわす最高のお菓子。」（ラムダ）
※この発言はメタ世界の戦人とベアトが駒であることを意味しているのかもしれません。

金蔵が右代宮家の当主に突然抜擢され、右往左往していた頃のことを覚えている南絃は、蔵臼のその姿に金蔵の当時を懐かしむ。
※南條が金蔵に会ったのは金蔵が当主になってから２０年経った後です。竜騎士０７さんが勘違いしたのでしょうか？　それともこの場面が嘘の場面であることの証拠でしょうか？

■　奇跡の魔法　■
金蔵の当主継承は唐突だった。当時の金蔵は、右代宮家の本家から遠い、分家筋の一青年に過ぎなかった。
※一番若く考えても、金蔵が当主になったのは１５歳くらいだと考えられます。

■　正式なミステリー　■
「…朝から胃痛を起こしている蔵臼に比べ、夏妃は何と落ち着いたことか。我が息子が情けない」（金蔵）
※と夏妃は思ったわけです。

「スリランカに行った友人が、薔薇の香りの素敵な紅茶を送ってくれました」（夏妃）
「ほう、ディンブラかっ。悪くない。ならば茶請けはパティスが良いぞ」（ベアト）
※この時点でのベアトは夏妃の空想であるため、これは夏妃の一人芝居です。

「ま、こんなのゲーム前の前座よ。料理の前のアペリティフ」（ラムダ）
※食前酒のことです。

金蔵の死を看破されないかと、蔵臼は前日から不安で押し潰されそうになっていた。親族会議が終わり、一気に疲れが出たのだろう。……しかし、そんな胸中をおくびにも出さず、あれだけ普段どおりに振舞えるのだから、蔵臼の度胸もたいしたものだ。
※蔵臼もどうしてなかなか大した胆力です。

「……朱志香が生まれる前は、主人は色々な国に私を連れて行ってくれました。嫁ぐまでは、一度も海外旅行をしたことがなかったので、どれも新鮮な体験でしたよ。主人は、お父様と違ってアジアの国が好きで。香港、台湾、韓国にタイ。マレーシアも行きましたっけ」（夏妃）
※蔵臼は夏妃に喜んで欲しかったのだと思います。

「……で。あそこで夏妃とお茶を飲んでるベアトだけど。大丈夫よね…？」（ベルン）
「あぁ……。…大丈夫だ」（戦人）
「金蔵の時と同じよ。ベアトリーチェなんて存在しない。あれは、魔女の力を借りて危機を乗り越える妙案を思いついたと信じる夏妃が生み出した偽りの魔女女神。二人が並んでお茶を飲んでるように見えるのは、ゲームマスターであり、“物語の語り手”であるラムダデルタがそう解釈しているからだけよ」（ベルン）
※ゲームマスターは偽りの光景を見せることが出来るようです。この時点ではゲームが始まっていないため、探偵領域も無効のようです。あるいは今回の戦人が探偵ではないからなのかもしれません。

■　奇跡の魔女　１０月４日（土）１９時００分　■
「は、はははは。エリカちゃんも、碑文の謎に挑戦してみたくなったのかい？」（譲治）
「……はい。灰色の脳細胞が騒きまくりです。ですので、謎解きを、さっそく始めたいと思います」（エリカ）
※アガサ・クリスティのミステリー小説の主人公“エルキュール・ポアロ”の口癖からのパロディと考えられます。

■　辿り着きし者　１０月４日（土）２２時００分　■
「……私がこのタイミングでここへ遊びに来たのは、きっとそれを望む偶然の神々のお導きでしょうよ…。……守ってあげる。右代宮夏妃。対価は不要よ。あんたに仕えてるリーチェから、すでにたっぷり前払いされてるわ」（ガァプ）
「前払い？　はて、妾がいつ…？　記憶にないぞ…」（ベアト）
「くすくすくす…。……あなたがどこにしまったか思い出せない、マジックアイテムの数々。ずいぶんとチョロまかせてもらってるもの」（ガァプ）
「んなっ！！　見つからないのは、やはりそなたの仕業だったか…！！　返せー！！　幻の銀水晶とムーンスティック返せー！　まだくっ付けて遊んでないのにー！」（ベアト）
※『美少女戦士セーラームーン』に出てくるマジックアイテムです。

■　黄金狂乱劇　１０月４日（土）２２時４７分　■
「で、どうするわけ？　リーチェとゴールドスミスのルールなら、戦人が碑文を解き、主となることを選ばない以上、私たちはこれでお役御免じゃないの？」（ガァプ）
「妾はまだ夏妃に仕えておるぞ。戦人が碑文を説いたからお役御免では、あまりに筋理を欠くというもの。……魔女は契約違反を許さぬが、不筋理もまた許さぬ」（ベアト）
「……でしょうな。親族会議を終えるまでは、きっちりとお仕えするべきでしょう」（ロノウェ）
※駒ベアトは碑文の謎が解かれた時点で、お役御免になるのですが、このゲームのゲームマスターであるラムダは放置したようです。

（金蔵こ）「貴様など、片羽をもがれた堕天使ではないか。揃わぬ翼なら、置き土産に捨てて行け」（ベアトリーチェ）
※これは「夏妃に片翼の鷲を与えてやれ」という意味だと考えられます。
「……ふむ。……それも良かろう。夏妃ならば、我が翼を背負うに相応しいかも知れぬ。…しかし、……ここからが正念場となるぞ。……褒美は用意した。無事にこの試練を乗り越えてみよ……、夏妃…」（金蔵）
※これは「試練を乗り越えたなら、片翼の鷲を与えるから頑張れ」という意味だと考えられます。

■　本当の親族会議　１０月４日（土）２３時４９分　■
……男が命じたとおりに、私はアンティーク時計を、持ち上げる…。そこには、一枚のトランプのようなものが。……？　時計の保証書か何かかしら……。そう

思い、手に取り、裏返す……。
※夏妃の一人称になっています。
「……それに台風の最中であっても、エリカとかいう来客があったはずだ。あんたの屋敷は広い。電話だってそこいら中にあるしな。あんたは今夜もう、その部屋を出てはならないし、どこにも電話を掛けてはならない。電話が鳴かってきても取ることも許さねぇぜ。そして今すぐ灯りを消し、布団を被って寝ろ。そしていつもの時間に起床しろ」（１９男）

……夏妃は時計の下から見つけたカードを、絶叫とともに握り潰してしまう。それはタロットカードのような絵柄が書かれていて、……漢字で一文字、“秋”と書かれていた……。
※これ自体は手品でも出来ます。例えば“秋”以外のカードも用意し、“春”のカードをカーペットの下に、“夏”のカードを鏡台の裏に、“冬”のカードをベッドの下にそれぞれ入れておき、夏妃の返事によって「見ろ」という場所を変えればよいのです。

■　１９年前の復讐　■
乱暴に受話器を置く。……電話の切り方ひとつで、後味をいくらでも悪く出来ることを、“彼”はよく心得ている…。
「じゃあね、お休み、カアサン。……ハイ、一丁上がり。これで夏妃は今夜は部屋から出てこないわ」（ラムダ）
「……器用ね。あんた、声を変えられるの？」（ベルン）
「くすくす！　声くらい、誰だって変えられるわよぅ」（ラムダ）
※これはラムダが喋っているのではなく、ラムダが１９男の駒に話させています。

■第2日目　１９８６年１０月５日
「……鏡台……、……鏡治いいいいいい！！！」（絵羽）
「あんまりやないか……。こんな真似が…、どうして許されるんや…！！」（秀吉）
二度と目覚めぬ鏡治の兄貴の亡骸に、絵羽白母さんと秀吉伯父さんはすがり付いて、……泣いていた。
※これは芝居ではなく、絵羽と秀吉はゲームマスターであるラムダに鏡治の死体を見させられている可能性があります。

俺は、そっと毛布を引き上げ、……鏡治の兄貴の遺体を覆った。その首は、……ぱっくりと開いていた。…多分、口よりも、……大きく、深く裂けていた。そこのベッドには、……朱志香が眠っている。……朱志香も、鏡治の兄貴とまったく同じだ。ベッドの中で、……静かに眠るようなのに、……首が、ぱっくりと切り裂かれて、その傷口を無残に開いている……。そして、それは真里亞も同じだった。……真里亞だけではない。犠牲者は、さらに一人。同じベッドに添い寝するように横たわっている、……楼座叔母さんもだった。鏡治の兄貴、朱志香、真里亞、…そして楼座叔母さん。……この部屋には、４人の人間が首をぱっくり切り裂かれて殺されている。
※戦人にも死体が見えている可能性があります。

「……ご安心を。死者の尊厳を冒すことが目的ではありませんので。別に喉の切り口なんておぞましいモノ、覗きたくありませんし」（エリカ）
※探偵であるエリカが死体を見れば、その場に死体がないことがわかったはずですが、エリカは死体を確認しませんでした。

嘉音は恐る恐る源次の毛布を剥ぎ、……源次の変わり果てた姿に、……絶句した。
「な、何よこれ。首がスッパリ、やられてるぅ！」（ベルゼブブ）
「……鋭利だ。…相当の刃渡りのものでなければ、ここまでの切り口には出来まい」（ベルフェゴール）
「ど、どういうことよ。碑文の謎を戦人が解いたんでしょう？　どうして殺人が起こるわけ?!」（レヴィアタン）
「わからん。……いずれにせよ、厄介なことになるぞ。ベアトリーチェさまと夏妃さまにご報告申し上げた方がいい」（ベルフェゴール）
「ベルフェは急いでルシ姉に報告を…！！」（レヴィアタン）
※くどいようですが、これも死体が見えている可能性があります。

突然の電話の音に、夏妃は飛び起きる。夏妃は頭を振るい、眠気を払ってから、受話器を取る。
「……おはよう、カアサン。……よく眠れた?」（１９男）
※これは外線ではなく、内線のようです。つまり現在、六軒島に１９男はいるのです。

……ふふ。…この子、バカそうなフリして、なかなかだわ。決して挑発に乗りやしない。魔女の間ってもんが何か、本当のゲームマスターのベアトより、よっぽど理解してるじゃない。そしてどうやら、ガァプもそれをよく理解してるみたい。……この死体消失の一手。ラムダとベアトの双方にとって、なかなか有効だわ。
※このPCのベアトも夏妃と同じくゲームマスターのラムダに泳がされている可能性があります。

静まり返った屋敷の、使用人控え室……。毛布で頭まで覆われた、源次の遺体が横たわっている……。その狭い部屋の天井に、漆黒の穴が開き、……艶かしい足が生え、…ガァプが舞い降りる。
「……ごめんね、源次。そこでゆっくり永眠してたいだろうけど、そういうわけにはいかないの。右代宮家の最後の当主、夏妃に死してなお率公するために、ここから消えてちょうだい」（ガァプ）
**　ガァプは毛布を捲り、安らかに眠る源次に、そう語り掛ける…。そして深く刻まれた首の傷をじっと見る…。**
「……見事な切り口じゃない。……まさに一刀で斬ったのね。……こんな真似が出来るヤツが、顕現しているの……？　嫌ね。…これが可能な心当たりのあるヤツに、ろくなヤツがいないわ」（ガァプ）
※ガァプは自分が死体を消したつもりでいますが、そもそも最初からなかったものと考えられます。

「ふ、……ふふふふ。おかしな三角対決になったものよ。我輩はそれぞれが敵であり、時に意図せずして連携しておる。……三つ巴が、２対１になったかと思えば、逆に１対２にもなる。……ほらあれだ。中国のバトルロイヤル！　三国志とやらに似てるとは思わんか？」（ベアト）
※ベアトの言葉が正しいとすれば、ラムダがベアトと夏妃を泳がせているため、三つ巴の状況が発生していると考えられます。

■　魔女を貫く十の楔１０月５日（日）０８時０４分　■
「私の知り限り、ミステリー史で、最も死者が出る連続殺人は、犯人も含めて全員が死亡したイギリスの某作品の、１０人です。日本ミステリー界では、占星術師が探偵を務めたあの作品かと」（エリカ）
※ＰＳ３版では作品名がぼかしてあります。
「私の知る限り、ミステリー史で、もっとも死者が出る連続殺人は、アガサ・クリスティの『そして誰もいなくなった』の１０人です。日本ミステリー界では、多分、島田荘司の『占星術殺人事件』ではないかと。まぁ、こっちは１０人未満ですが」（エリカ）

※ＰＣ版ではきちんと作品名が出てきます。

「日本ミステリー界の話だが。……新本格よりも先に、新戦前派の一人が別の作品を書き上げているぜ」（戦人）
※ＰＳ３版では作品名が濁かしてあります。
「日本ミステリー界の話だが。……『占星術殺人事件』より、坂口安吾の『不連続殺人事件』の方が先だぜ」（戦人）
※ＰＣ版ではきちんと作品名が出てきます。

「留弗夫さま、……大丈夫でしょうか……」（紗音）
「大丈夫よ。あの人、アクション映画向きだし。それにスポーツだって得意なんだから」（霧江）
「……得意のスケートが、ハシゴ登りにどう役立つか聞かせて欲しいぜ…。……♪俺はぁ、イナ・バウアー～、常に大ピンチ～…っとくらぁ」（留弗夫）
※『24-TWENTY FOUR』のシーズン６の日本でのCMソングのパロディと思われます。「オレはジャック・バウアー、つねに大ピンチ♪」。イナ・バウアーはフィギュアスケート金メダリスト、荒川静香の得意技です。

「うにゃ？　パスが通らないにぇ。」（シエスタ４１０）
「４１０、キャップスロックを解除してもう一度…！」（シエスタ４５）
※キーボードのキャプスロックが有効になっているため、入力される文字が大文字になっており、小文字であるパスワードが正しく入力されていないのだと考えられます。

Die The death Sentence to death Great equalizer is the Death.
※死を選ぶよ、死刑を宣告する、死は全ての者を平等にする。という意味だそうです。

「は、はっはっははははは…。……お前、……やるなぁ……。」（ベアト）
「お前のゲームで、何回殺られたと思ってんだよ。」（戦人）
戦人の胸に受け止められたベアトは、呆然としながら、……珍しく戦人を讃える。戦人もいつものように、へらっと笑って見せた……。
※この戦人はプレイヤーの戦人が操作していないため、これまでのゲームの記憶を持っているわけがないのですが、この場面自体が幻想描写であるため、こういうこともありなのだと考えられます。

■　推理と検証　１０月５日（日）１１時００分　■
「……先ほどの戦いでは、ありがとうございマシタ。最後の最後に、慈悲を与えてくれたこと、感謝いたしマス」（ドラ）
「あの“俺”は俺じゃねぇぜ。……ラムダデルタが操ってたんだ」（戦人）
俺は、第5のゲームには途中から参加している。“この時点”では、まだ参加していない。だから、俺が参加するまでの間、“俺”という駒は恐らく、ベルンカステルか、もしくはラムダデルタによって操られているはずだ。
「……あいつら、どういう気まぐれだろうな。妙にカッコ良くしてくれやがって。あれじゃまるで俺が、ベアトを助けに来たナイト様みてぇじゃないか」（戦人）
※ラムダとベアトが戦人に活躍させようとしたわけではなく、駒戦人がＡＩで行動した結果だと考えられます。
「ラムダデルタ卿は、魔女とニンゲンのそれぞれが均衡し、ドローゲームとなることを望んでいます。……エリカの登場により、天秤がニンゲン側に大きく傾いたので、ベアトに加担するように物語を操ったのでしょう」（ワルギ）
「それは知っているマス。しかし、駒は、出来ないことは出来ナイ。そして、本来の性格に相応しい行為を得意とスル。……だから、あれは確かにあなたの、……戦人の成し得たことデス。だから、あなたに感謝するのデス」（ドラ）
※この時、戦人は駒が自分で動くことを知らず、ドラノールは戦人がそれを知らないことを認識した上で、わざと、きちんと説明していないと考えられます。

「（赤：“金蔵が存在しない”）のは、すでに確定事項のハズ。ラムダデルタ卿もベルンカステル卿も、それをよくご存知のはずデス。なのに、二人とも金蔵が存在する余地を残してゲームを進めてイマス。……まるで二人で結託して、金蔵を否定させないかのようデス」（ドラ）
「つまり、“祖父さま”を、わざと逃がしたと…？」（戦人）
「ハイ。何かの意図があるに違いありマセン」（ドラ）
「……確かに少し、おかしいですね。…ラムダデルタ卿とベルンカステル卿は、魔女が優勢にならない限り、対立する関係にあるはず。……現在の流れでは、二人が結託することは考え難いのですが…」（ワルギ）
※ラムダはベルンが真相に至らないように、夏妃を生贄にしようとしています。ベルンもそれがわかった上で、夏妃を犯人に仕立てあげようとしています。

「……呼んだのはベルンカステル卿かもしれない。しかし、この世界に受け入れたのは、ベアトです。……この子が望まなければ、あなた（ドラ）は迷路庭園を抜け、ここへは至れなかったのだから。……ね、…ベアト……？」（ワルギ）
「この黄金郷には、ベアトが望まない限り、誰も辿り着けないのか」（戦人）
……しかし俺は、ベアトが望まない人間がここに辿り着いたことがあるのを知っている。縁寿だ。…前回のゲームで、縁寿は招かれざる客人でありながら、……ここへ一人、辿り着いて見せた。あれも、……ベアトが望んだこと、……なのか……？
※駒ベアトは望まなかったでしょうが、ゲームマスターのベアトが望んだのです。

「謹啓、謹んで申し上げる。《赤：親族会議に前に、エリカ、譲治、朱志香、真里亞、南條、郷田、熊沢は、屋敷より退出し、ゲストハウスへ移動したものなり。》」（ガートルード）
「謹啓、謹んで申し上げる。《赤：残りは、蔵臼、夏妃、源次の３人のみが2階廊下におり、それ以外の全員は食堂におりること、申し上げ奉る。》」（コーネリア）
《赤：蔵臼、夏妃、源次の３人は、その手紙に触れてさえいない！》（ラムダ）
「《赤：食堂の全員の誰も、いいえ、もっとシンプルな言い方をするわ。２４時の時点で屋敷内にいた誰一人！　あの手紙を廊下に置いた者はいないわ。》」（ラムダ）
「《赤：蔵臼、夏妃、源次の３人は、ノックをしていない！》」（ラムダ）
「《赤：これは、扉だけはノックしていないという、限定的な意味じゃないわよ？　音が伝わる柱だろうと録音したカセットテープの再生ボタンだろうと、そのノック音を生み出したことは断じてないという意味！　無論、直接的にも間接的にも、意図的にも偶発的にも、無意識的にもね！》」（ラムダ）
「謹啓、謹んで申し上げ奉る。《赤：２４時の時点で、2階廊下にいた、蔵臼、夏妃、源次の３人と、食堂にいた全員以外の、一切のニンゲンは屋敷内に存在しなかった》旨、申し上げ奉る」（ガートルード）
「謹啓、謹んで申し上げる。《赤：蔵臼、夏妃、源次の３人に加え、食堂の全員もまた、ノックしていないこと、申し上げる。このノックとは、ノック音を生み出す、直接的、間接的、意図的、無意識的、偶発的な全てを含めるものなり。》」（コーネリア）
「《赤：つまり、屋敷にいた人物全員が、ノック音の発生源とは成り得ない、という意味デス。……そしてこの“全員”とは、誰も把握していない、観測されていない人物であったとしても含みマス。》」（ドラ）

「この廊下に置いた、という赤も、もっと細かく言い直すね。《赤：屋敷内の誰一人、手紙を廊下に置いた者はいない。それは直接的、間接的、意図的、偶発的、無意識的、全ての概念でよ。》」（ラムダ）
「“《赤：２４時の時点で、屋敷以外に存在するのは、エリカ、臙治、朱志香、真里亞、南條、郷田、熊沢のみである》”！」（ラムダ）
「臙治、誰んで申し上げる。《赤：屋敷以外の全員は、親族会議即位後、屋敷内にて何を行なうことも不可能なり。》」（ガートルード）
《赤：全ての人物は、ノック音を認識することはない。》（ラムダ）
「《赤：ノックは、人が手で扉を叩くもの》よ？」（ラムダ）
※誰もノックの音など聞かなかったし、そもそも手紙などなかったのです。ラムダの赤字を抜けて手紙を出現させるのは簡単で、ようは“廊下に手紙がなければそれで良い”のです。誰かが鞄から取り出そうが、机の上に置いてあろうが。

■　クローゼット　１０月５日（日）１２時３３分　■
「今のところ、出ている死体は５人。……見ての通り、首をスッパリよ」（ガァプ）
臙治、朱志香、真里亞、楼座、源次。５人はいずれも、鋭利な何かで首をばっくりと切り裂かれている……。その切り口は、本当の口よりも大きく開き、……もはや、口を呼吸のために使う必要さえないと感じさせるものだった。
「……なるほど。《赤：臙治、朱志香、真里亞、楼座、源次の死体は、誰が見ても、一目で死亡が確認できる》、というわけですね」（ワルギ）
「うむ？　赤か？　まぁ、お師匠様にケチっても始まらぬ。そうとも、《赤：死んだフリなど絶対にありえぬ、誰もが一目で死亡を確認できる死体であるわ。》」（ベアト）
「なぜリーアは赤を……？」（ガァプ）
「さぁて。……しかし、常にお嬢様のことを想われている方です。お嬢様に利する何らかのお考えがあってのことでしょう」（ロノウェ）
※赤字で死亡を宣言できる以上、この時点では明らに殺人偽装ではなく、殺人になっています。

客室内の空気は、……冷え切っていて、誰かが自分を待ち伏せている、という気配はまったくなかった。

ガチャガチャ！！　その時、突然、施錠された扉を無理やり開こうとする音が聞こえて、私（夏紀）の心臓を飛び上がらせた。
「……何や、開いとったんか」（秀吉）
どかどかと、彼らしい足音が入ってきて、扉を後手に閉めて、施錠するような音がする。チェーンロックを掛けているらしい音も続いた。
「……念のためや。どうせ、この天気じゃ、夜と変わらんわ」（秀吉）
そう呟きながら、ガタガタと何かをしている。……恐らく、窓の鎧戸を閉めているのだろう。

「だ、誰やあんた…ッ」（秀吉）
え?!　心臓が止まる。きっと、ベッドに突っ伏していただろう秀吉さんが、がばっと起き上がったらしい音が聞こえた。……き、……気付かれた……？
「どこから入ったんや……。……な、…何やそれ…。……ま、待たんかい…！　ちょ、……ぬお、……むッ。」（秀吉）
彼は明らかに、誰かと取っ組み合いをしていた。……一体、誰と?!　いや、誰であるかは問題ではない。恐らくは犯人で、彼の命を今まさに奪おうとしているに違いない…！
※秀吉の一人芝居です。

「鎧戸は。……外からはびくともしませんでした。今、確認してきました」（エリカ）
彼女は今になって到着し、廊下からひょっこりと顔を出す。
「お待ちかね申し上げます。で？　室内の状況は？」（エリカ）
「……エリカちゃん。…現場をそのままで保存したいだろうが、今回はちょいと折れてもらうぜ…？」（留弗夫）
「……どうぞご勝手に。私にとって興味があるのは、金蔵さんの書斎よりはるかにまともな密室が出現したことだけです。死体には興味ありませんので、どうぞご自由になさって下さい」（エリカ）
「……搬出していただいて結構ですよ？　死体。　それとも私が邪魔ですか？」（エリカ）
エリカは、扉の前から下がりその場を譲る。……絵羽たちは秀吉の遺体をシーツに包み、郷田と留弗夫の二人で担ぎ出す…。
※エリカが死体を確認していないため、この時点で秀吉は生きていたと考えられます。

みんながぞろぞろと出て行き、空っぽになった客室に一歩だけ踏み入り、……じっと室内を見渡して、その光景を目に焼き付けた。そして、ふと、脇のクローゼットに目を留める。ゆっくりと、……エリカは、……クローゼットに手を伸ばす……。
「……っ。」（エリカ）
乱暴に、エリカの肩が後から掴み寄せられる。
「……行くぜ、探偵さん。団体行動を乱すなって、修学旅行で習わなかったか」（戦人）
「私が旅行に行くと、必ず人が死ぬってお約束がありまして」（エリカ）
※探偵のお約束です。
「おらッ、何してやがるガキども！　早く来い…！！」（留弗夫）
留弗夫が急かす。エリカは舌打ちし、クローゼットを睨み付けた後、戦人に促されながら客間へ一度戻るのだった…。
※戦人はゲームマスターのラムダの干渉を受けて、エリカを止めた可能性があります。

……黄金郷は、いつまでも終わらない雨が、降り続いている。戦人の姿はない。もうじき、戦人が第５のゲームに参加した時間になるので、駒のコントロールが戦人に引き継がれる。つまり、ベルンカステルが、犯人を特定したというこの終局の段階になって、ようやくゲームへの参加が認められたというわけだ。だからついさっき、この東屋を出て行った。
※EP1～4ではプレイヤーの戦人が傍観人をコントロールしていたようではなかったですが…。むしろゲーム盤には干渉できないようでした。

■　幻想大法廷　１０月５日（日）２４時００分　■
「……右代宮金蔵だ。書斎の窓より抜け、六軒島の何処かに潜んでおる」（金蔵）
※そんな訳はないのであって、屋敷のどこかに死体があるはずです。
「右代宮蔵臣。現在は捕らわれの身で、どこかに監禁されている」（蔵臣）
※この時点では殺されていないため、この発言は嘘です。

「‥‥私にはポップコーンを。」（ベルン）
「ああ、そうだったわね。‥‥‥悪魔の観劇はポップコーンと相場が決まってると、あんたが決めたんだもんね。」（ラムダ）
※『ひぐらしのなく頃に』で「私もまた舞台の上の出演者なのに、私ひとりが舞台に上がらず観覧席でポップコーンなんか食べてたら、成功する劇も失敗する。」という内容があります。

「カスパロフもディープブルーも無敗じゃないわ！」（ガァプ）
※カスパロフは15年連続世界チャンピオンになったチェスの選手、ディープブルーはカスパロフに勝利したチェス専用のスーパーコンピュータです。

「これらは夏妃さんの部屋から発見された、過去の日記帳です。近年ではほとんど書かれていませんが、右代宮家に籍を入れたばかりの頃については、詳細な記述があります」（エリカ）
「‥‥ひ、‥‥人でなし‥‥。‥‥人の日記を、‥‥読むなんて‥‥‥」（夏妃）
※ある意味“恨み帳”である夏妃の日記が近年は書かれていないということは、夏妃は幸せだったということです。

「私は愛のない結婚を強要された、花嫁という名の人質だと、‥そう思っていました‥‥。ですが、‥‥夫は、‥‥私を人質などと見下しはしませんでした‥‥。‥私の事情を理解し、同情と慈しみを与えてくれました‥‥。夫だけは、‥‥私の理解者だったのです‥！」（夏妃）
「‥‥なるほど。それは一理あります。確かにあなたの日記には、蔵臼さんがあなたの事情を知って、気遣ってくれる描写が、いくつか散見できます。しかしあなたはそれを、こちらの日記帳の４７ページで、むしろ気持ちが悪いと描写していますね？　以下、朗読します。“蔵臼の気遣いは、むしろ私を惨めにさせるだけ。そうして私を尊しめているのではないかとさえ思う時があります”。‥‥以上から、夏妃さんが、そんな気遣いを見せていた夫を嫌悪していたことがうかがえます」（エリカ）
「ま、‥‥待ちなさい‥！　た、確かに最初はそう思ったこともあります‥！　まだ日々を不安に過ごす私が、気遣いを素直に受け取れず、羽推してそう記してしまったこともあったかもしれません‥！　私はやがてそんな夫の気遣いに気付いて、その気持ちを受け入れるようになるのです‥！」（夏妃）
「その記述は、日記帳のどこにも登場しませんが？」（エリカ）
「に、‥‥日記にさえ書かない、秘められた気持ちというものもあります‥！」（夏妃）

「あらゆる証拠品と証言から多角的に推察して、あなたが夫に激しい嫌悪を持っていたことは明らかです。そして逆に、あなたが仰るような、やがて受け入れるようになっていたことを示す証拠は存在しません」（エリカ）
「‥‥‥わ、私は夫を愛していました‥！！　あなたが何と言おうと、私たちは愛し合っていました‥！！　私が悪態ばかりを日記に記していたことは、夫にも謝らなければならないことです‥！　しかし私は夫に心を癒やされていました‥！！　それは例え、証拠で示せなくても、‥‥それが真実なんです！！」（夏妃）
※そもそも“恨み帳”ですから良いことは書いていないのです。

「後期クイーン以降。探偵の推理さえも筋書きに組み込まれている可能性がありますから。本当に油断ならない時代になったものです。」（エリカ）
※推理作家“エラリー・クイーン”が書いた推理小説の中で後期に書かれた作品のことです。

「何という、おぞましいことでしょう。‥‥夏妃さんは、右代宮家に復讐するためにまず。右代宮家の全てを乗っ取ろうと企てたのです。その為、夏妃さんは、体を武器に、金蔵さんを籠絡したのです」（エリカ）
「そんなことはしませんッ！！　私は自分の体を夫以外に許したことは、ただの一度もありませんッ！！」（夏妃）
※夏妃が妊娠できなかったのは、蔵臼の原因で、朱志香は蔵臼の子どもではなく金蔵の子どもでは？　という説がありましたが、以下の赤字があるため、事実ではなかったようです。
「《赤：以上により、祖父さまの不在は証明され、夏妃伯母さんの、祖父さまを巡る不名誉は返上されるッ！！》《赤：夏妃伯母さんは純潔にして貞淑だ！　貴様ら好みの下劣な物語は許さないッ！！》」（戦人）

■法廷
「‥‥エリカ、ドラノール。‥‥あなたたちは、引き続きこのカケラに留まり、残る第１から第４のゲーム全てを解明しなさい。もはや、魔女幻想を主張する哀れな仮初魔女は存在しない。‥‥剥き出しの真実を、惨酷的に暴いてやりなさい」（ベルン）
「過去の４つのゲームはすべて、夏妃の犯行と、そのイレギュラーで説明可能です」（エリカ）
※EP2では第一の晩に夏妃は死んでいて、探偵である戦人がその死を確認しているため、どう考えてもそれ以降の殺人は不可能です。
「（シエスタ姉妹は）‥‥高い確率で、犯行に用いた凶器が彼り代ではないかと推定されマス」（ドラ）
※ウィンチェスター銃の弾丸である“.45ロング・コルト弾”と“410ゲージショットシェル”のことだと考えられます。

「最後には、ベアトも剥製にしてやりたいわ。そして大広間に高々と飾ってやるの」（ベルン）
「白樺湖畔？」（ラムダ）
「ニンゲン狩りの伯爵よ」（ベルン）
※ＰＳ３版では“銀河鉄道”の名前が出てきませんので、難易度が高いです。ラムダが言っているのは京極夏彦の『陰摩羅鬼の瑕』のことと思われます。
「銀河鉄道？」（ラムダ）
「夜じゃない方」（ベルン）
※ＰＣ版では“銀河鉄道”の名前がきちんと出ています。『銀河鉄道999』のことと思われます。主人公、星野鉄郎のお母さんは永遠の命を持つ機械伯爵のニンゲン狩りで殺され、剥製にされてしまいます。ベルンが言っているのは宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』です。

「大丈夫よ。愛する二人に、カケラの海は渡いわ」（ラムダ）
「第三の男？」（ベルン）
「天井桟敷だったば」（ラムダ）
※両方とも映画で、後者は『天井桟敷の人々』のことと思われます。

■????
誰もいない大聖堂に、‥‥‥天を見上げた姿のまま、赤き太刀に胸を貫かれ、地面に縫い止められた戦人が、‥‥立ち尽くしている。戦人はとうに、絶命している。いや、‥‥‥ここでは死という概念は、思考の停止しか意味しない。だから戦人は、ある意味、死んではいない。‥‥真実を巡る戦いに敗れ、屈服した彼にもはや、抗う思考の力はない。だから、‥死んでいる。ベアトは、‥‥そっと、戦人に触れる‥‥‥。そして、‥‥戦人の胸に、額を押し当てる。鼓動は‥‥、‥‥すでにない。それは屈服したから、だけではない。魔女たちによって、ゲーム盤から追放されたからだ。‥‥だからもう。‥‥戦人が誤ってくることは、‥‥ない‥。だからもう。‥‥‥黄金の魔女、ベアトリーチェには。存在する理由が、‥‥‥なくなった‥‥‥‥。‥‥‥ありがとう‥。‥‥うそつき‥‥。‥さよなら‥‥。そして‥‥‥、‥ごめんね。そして、‥‥

黄金の魔女は、…その役目を、……終えて、…黄金の残味と、散った。
※EP5では一応ベアトの本体が残っていましたので、駒ベアトも残っていましたが、本体が消えてしまったため、EP6では駒ベアトすら残っていません。

“ドラゴンはなぜ、昼間は寝てばかりいるのか”“騎士と戦うためだから”
※騎士(Knight)と夜(night)を掛けています。

第1のゲームのラストで、この物語が、メッセージボトルによって後世に語り継がれていることが明記されている。……誰かが事件を、物語に、記した。つまりこの物語は全て、……メッセージボトルを執筆した人物という、観測者によって、私見が含まれた世界ということになる。つまり、観測者は神ではない。ニンゲンなのだ。よって、その記述の真の意味での公正は、保証されていない。
※ヤス補正が入っている駒がいると考えられます。

「足元がお留守だわ、お嬢ちゃん。《赤：……全てのゲーム開始時に、右代宮金蔵は死んでいる！》」（ガァプ）
※『ドラゴンボール』のパロディと思われます。

「……なるほど。……アクロイドが誰もいなくなったと思ったら。……これはいつの間にか、……。……くすくすくす、あっはははははははははははっはっはははははッ！！　とんだ傑作集だわッ！！」（ベルン）
※アガサ・クリスティの『アクロイド殺し』『そして誰もいなくなった』『オリエント急行の殺人』のことと思われます。

■　うみねこのなく頃に散　Episode6　「Dawn of the golden witch」
■　偽ざる気持ち　■
「……ほんの2週間の月日でさえも百年の魔女を名乗るに相応しい永遠となりうるのだ…」（フェザ）
※『ひぐらしのなく頃に』の古手梨花のことと思われます。

■　迷惑な客人　■
「うー！！　じゃあ次の問題ねー。3つのコップと6枚のコインがあります。3つのコップそれぞれに、コインが1枚、2枚、3枚になるように分けて下さい。うー！」（真里亞）
「おいおい、そんなの簡単じゃねぇかよ。最初のコップにコインを1枚、次のコップに2枚、最後のコップに3枚入れて出来上がりだぜ」（朱志香）
「ではそれを、5枚のコインでも出来るでしょうかー！　うー！！」（真里亞）
※最初のコップにコインを1枚、次のコップに2枚、最後のコップに2枚入れて、最初のコップを残りの二つのどちらかに重ねて出来上がりです。

■　魔法の原点　■
「ここまでわかることは、やはり、六軒島の夜の支配者と呼ばれた、亡霊ベアトリーチェは、存在しないということだわ。夜の屋敷で起こる不可解な現象の、総称に過ぎない。即ち、ベアトリーチェとは人物名ではなく、現象名に過ぎないのよ。奇怪な何かが起これば、それは全て、黄金の魔女の仕業…。そういう“魔女の居得る環境”こそがベアトリーチェ自身。……それが累積して、１９８６年に至る。……これこそが、真犯人が被っているヴェールなのよ。そしてそれを被っているのは紗代もなく、ニンゲンの誰かだわ」（縁寿）
「この、魔女たちの過去物語の時点ではそうも断言できよう。……しかし、その魔法だけで、１９８６年も戦い抜けるとは思えぬぞ……？」（フェザ）
※ＥＰ４のベアト２のことを指すと思われます。

■　迷惑な客人　■
「……世話者は、８つに切り分けろとしか言ってません。等分は条件に含まれませんでした。……まぁ、折り方を工夫すれば等分も可能ですが、お頭の硬い皆さんには、説明が混乱するので省きます。うっふふふふふふふ……。」（エリカ）
※１６センチのスライスチーズがあったとして、最初に１センチのところで折り曲げて、あとは2センチごとに折り曲げていって波線を作り、切るときに各片が2センチの“くの字”の形になるように切ればよいわけです。

■　恋人たち　１０月４日（土）２２時０３分　■
「エリカさんくらいのお歳の方が、一番、自分自身との付き合い方が難しいと思います」（紗音）
※エリカと同年代のはずの紗音がこのような発言をするのは、紗音の本当の年齢がもっと上であることの伏線と思われます。

■　別の解釈の魔法　１０月４日（土）２２時５９分　■
……年々、見違えるように成長していく譲治に、紗音は心を奪われ始めていた。しかし、身分の違う自分とは恋仲になれるわけがないと、諦めていた。そんな彼女に、黄金蝶のブローチを与え、励ました。諦めるということは、確率ゼロということ。しかし、魔法の力で、ひょっとしたら叶うかもしれないと思えば、確率は、少なくともゼロよりは高くなる。ゼロは永遠にゼロだが、ほんのわずかでも確率が存在するなら、……ゼロの時と比べれば、あり得ない奇跡が起こったと言っても過言ではないだろう。ニンゲンが、自ら確率をゼロに閉ざす“諦め”を、魔法によってそこだけを取り除く。諦めないニンゲンには、どんなにわずかであっても、達する可能性がある。そしてそれは、確信すればするほど、高くなる。紗音が黄金蝶のブローチに強く願い、その効果を確信し、……譲治に気に入られるために、小さな努力を積み重ねただろうことは、想像に難くない。
※ベアトが紗音に鎮守の社の鏡を割らせたのは“諦め”を取り除くためだと考えられます。

■　恋愛の後悔　１０月５日（日）００時０７分　■
「……言ったでしょ、嫌妬の地獄で生きてきたって。刺されそうになったことの二度や三度あるんだから。わかるのよ、不意打ち直前の男狂気が」（霧江）
霧江は鉄拳をひょいとかわし、その拳に手を添え、激しく壁へ打ち付ける。
※霧江の戦闘能力は高そうです。

■　小さな矛盾　１０月５日（日）０２時２２分　■
金蔵を除く全ての生存者は、ゲストハウス2階へ、2部屋に分けて軟禁することとなった。一方は、いとこ部屋。蔵臼、留弗夫、朱志香、源次、嘉音、郷田。6人。一方は、隣の部屋。秀吉、譲治、紗音、熊沢、南條、エリカ。こちらも6人。いとこ部屋は、静かな緊張感に満たされていた。この部屋には6人。蔵臼と朱志香、そして留弗夫。……それから、もっとも疑われている、源次、嘉音、郷田の、男性使用人たちが、ここで軟禁を強いられている。朱志香は毛布に包まりながら、蔵臼の膝にもたれかかっている。膝枕とはしているが、寝付けないようだった。無理もない。この異常な状況下で母の死を受け入れるには、またまた時間がかかるだろう…。……嘉音は、こういう時にこそ、朱志香の脇にいてやりたいと思ったが、威圧感を持って睨みつけてくる留弗夫の前で、それは難しいようだった。留弗夫はずっと沈黙しているが、彼の内なる感情の

全てが目に出てしまっていた。だから、源次も嘉音も郷田も、自分たちが騙されていることを、易はずとも理解できていた。そして隣の部屋には、エリカを初め、秀吉、譲治、紗音、南條、熊沢の6人がいた。いとこ部屋と、部屋の構造と窒息しそうな緊張感は同じだが、……まだそれでも、多少は落ち着いた雰囲気だった。
※エリカはいとこ部屋の人間は確認しましたが、隣部屋の人間は確認していません。

「いとこ部屋に対し、隣の籠は部屋を、これより“隣部屋”と呼称します。よろしいですね?!」（エリカ）
「わかりやすいな。了解した。……それで？」（戦人）
「今からする所在確認は、生死を問いません。体の所在と考えて下さい。そしてもちろん、現時点でのことです。では参ります」（エリカ）
「“第一の晩の犠牲者６人の所在は、発見場所のとおりである。夏妃は自室、絵羽は黄貴室、霧江は離ヨの書斎、楼座と真里亞は客間で、あんた（戦人）は客室”！」（エリカ）
「……いいぜ。《赤：それを認める。》」（戦人）
「グッド。続けます。“隣部屋に所在するのは、秀吉、譲治、紗音、熊沢、南條である！”」（エリカ）
「《赤：認める。》」（戦人）
「グッド。続けます。“いとこ部屋に所在するのは、それ以外の全員である”！」（エリカ）
「１７人いる島だから、６を引いて５を引いてさらに６を引けば、ちょうどゼロになって、所在不明の人間はゼロになる。という思い込みは大変危険です。戦人さんも、この辺の名前と人数のトリックで、第３のゲームの南條殺しで、さんざん苦しめられたはずです」（エリカ）
「……そうだな。……あの時のトリックは、１８人分の名前と、実際に存在する１８人が食い違うことで、未知の人物が混入する余地を許していた」（戦人）
「認める。《赤：それ以外の全員が、いとこ部屋にいることを認める。》」（戦人）
※嘉音が隣部屋にいることは赤字で宣言されていません。

■　悪魔の結婚式　■
「我が主も、……ロジックエラーの地獄に落ちたことがあるというのですか…？」（エリカ）
「あるわ。ロジックエラーを起こしたのはあの子ではないけれど」（ラムダ）
「……主がゲームマスターではない…？」（エリカ）
「そうよ。……当時、あの子はまだ、自覚さえしていない小さな駒だったわ。ロジックエラーを起こしたのは、ベルンの主であるゲームマスターだった」（ラムダ）
「……我が主も、……魔女の駒だったのですか」（エリカ）
「ええ。……あの子の主、……これがまた酷いヤツでねぇ。……自分で作ったゲームのはずなのに、途中でゴールが分からなくなっちゃって。……スタートとゴールがつながった、ドーナツみたいな、壊れたすごろくを作ってしまったのよ」（ラムダ）
「ゴールをなくしたとは……？」（エリカ）
「ロジックエラーってことね。……どうやれば自分の望むゴールに辿り着けるか、そいつは自分のすごろくを、ロジックを描けなかった。だからいつまでも、すごろくは壊れたままで、ゴールがなかった。……ならば自分一人で、勝手にそれを悩んで考え出せばいいのに。……そいつはあろうことか、その考えることさえも、駒であるベルンに任せっきりにしたのよ。……“無限の猿の定理”って、知ってる？」（ラムダ）
「……強が、無限の時間の中でデタラメにタイプライターを打ち続ければ。……いつか偶然にも文字列が、ハムレットとまったく同じ文章になるかもしれないという理論、いえ、暴論ですね」（エリカ）
「……ひどい地獄よね。……ベルンは、無限の時間の間、意味もわからずデタラメにタイプライターを叩かせられて。……ゲームマスターは、自分さえ思いつかないゴールを、彼女に作らせようとしたのよ」（ラムダ）
※これは『ひぐらしのなく頃に』における“羽入”と“古手梨花”の関係を『うみねこ』世界のルールで説明したものと思われます。

「どうして、……僕たちは生まれたんだろうね。生まれた時、すぐに死ねばよかったんだ」（嘉音）
「……それは、お父さんの罪だね」（紗音）
「そうさ。だからあいつも死ね。みんな死ね」（嘉音）
「うん。みんな死ぬよ。もうすぐね。……そして、すぐにみんな群って合えるよ。もう私たちは、籠の中の小鳥じゃない」（紗音）
※お父さんというのは金蔵のことです。

…あっちのシャンデリアにいるのは、シエスタ１２７。2km先の対人目標を精密狙撃で粉々に粉砕できる、やり過ぎのバケモノ狙撃手。…向こうのシャンデリアにいるのは、シエスタ２０。発射速度は毎分６０００発。しかし今日は携帯弾倉なので、全弾を２秒で出き終える。
※アンチマテリアルライフルに使用される50 BMG（12.7×99mm NATO）（12.7×108mm ロシア）と20mmガトリング砲がモデルであると思われます。

それが外側に生えているものなら、地獄の番犬の首輪などで見たこともある。
※“ケルベロス”のことだと考えられます。

■　赤と青の真実　■
「００より、シエスタ１７、シエスタ３８、シエスタ４５、コードR、鎮成発令」（シエスタ００）
※１７という数字は380ACP弾（9mm×17）くらいでしか出てきませんので、これがモデルなのでしょうか？　３８は38ロングコルト弾がモデルであると考えられます。

ふふん。ここに固執する程度では、小林少年止まりですね。
※江戸川乱歩の『怪人二十面相シリーズ』に登場する少年探偵団の小林少年のことと思われます。

「復唱要求。“戦人救出時、客室に入ったのは嘉音のみである”」（エリカ）
「認めようぞ。《赤：戦人救出時、客室に入ったのは嘉音のみである。》そういう話のつもりだが…？」（ベアト）
「復唱要求。“私の入室からロジックエラー時まで、私と戦人と嘉音以外に、入退室した者は存在しない”」（エリカ）
「《赤：認めようぞ。そなたの入室からロジックエラー時まで、客室を出入りしたのは、そなたと戦人と嘉音のみだ。》」（ベアト）
「復唱要求。“それは即ち、３人のことである”」（エリカ）
「《赤：認めようぞ。そなたと戦人と嘉音で、３人である。》」（ベアト）
「定義確認。この3人の定義は体の数に等しいと考えていい？　3体が出入りをしたってことですよね？」（エリカ）
「《赤：無論だ。３人、即ち3体が出入りした。そなたと嘉音は入ったのみ、戦人は出たのみ。全ての名は本人以外に名乗れないと赤き真実ですでに語っている。よって、エリカ、戦人、嘉音の名はいずれも、本人にしか名乗れぬのだ。》」（ベアト）
「復唱要求。“私は救出者ではない”」（エリカ）
「《赤：当然だ！》　そなたは探偵ではないか。安心せよ、余はそれを尊重する！」（ベアト）
「定義確認。“救出者の定義とは？”」（エリカ）

「《赤：救出者とは、戦人の開けたチェーンロックを、再び閉じ直した者、ということにする。戦人を救う意思があったかどうかは、問わないことにしておく。》」（ベアト）
「御問要求。“出入りの定義とは、客室と外部の境界を跨いだかどうかである”」（エリカ）
「《赤：認めようぞ。》」（ベアト）
「御問要求。“客室とは、ベッドルーム、バスルーム、クローゼット内の全てを含む”」（エリカ）
「《赤：認めようぞ。》クローゼット内を客室でないと言い逃れる気などさらさらないわ」（ベアト）
「定義確認。客室内とは、ベッドルーム、バスルーム、クローゼット内の３区分である」（エリカ）
「《赤：妾もその認識でいるぞ。そしてすでにそなたは、ベッドルーム、バスルームの２区分で、誰も隠れていないことを赤き真実で確認したはずだ。》」（ベアト）
「……《青：“戦人の客室失踪”トリックは、以下の通りです。……戦人は私の室内探索中、クローゼット内に隠れていました。そしてバスルームの騒ぎの間に、チェーンを外し、室外へ脱出しました。この時、廊下には嘉音が待機していました。嘉音は入れ替わりで客室に入り、チェーンを施錠しました。これが戦人失踪のトリックです。》《青：……そしてその後、彼は、……ベッドルーム内に隠れました。私が、ベッドルームに不審者がいないことを確認した後のことですので、それは有効です。よって、救出者嘉音は、ベッドルームに潜伏しています。》」（エリカ）
「《赤：ベッドルームに嘉音は存在しない。》」（ベアト）
「《赤：客室に、嘉音は存在しない。……もちろん、クローゼット、ベッドルーム、バスルーム、この全てにおいてである。》」（ベアト）
※クローゼットには納棺があります。

しかし、この魔女のゲームではそれは、立派な、……“ロジックトリック”…。チェスで言えば、ダブルチェック。いや、ディスカバードアタック、……いやいや、ディスカバード・ダブルチェックメイト……？
※ダブルチェックは二つの駒で同時にチェックをかけることです。ディスカバードアタックは例えばクイーンの前にナイトを置いておき、ナイトを動かすことでクイーンの道を開けて攻撃する方法です。ナイトを動かすことによってナイトで敵のキングをチェックし、クイーンの道が開いたことでクイーンでも敵のキングをチェックすればダブルチェックメイトになります。

「《赤：初めまして、こんにちは！　探偵ッ、古戸エリカと申します！！　招かれざる客人ですが、どうか歓迎を！！》《赤：我こそは来訪者ッ、六軒島の１８人目の人間ッ！！！》」（エリカ）
「……申し訳ないが、」（戦人）
「《赤：そなたを迎えても。》」（ベアト）
「「《赤：１７人だ。》」」（戦人&ベアト）
※戦人とベアトが言っているのは“在島者の数”です。エリカが言っているのは“登場人物の中で自分が何番目に登場したか、という順番”です。「初めまして」なのは、物語のエリカの登場シーンまで話を遡らないと、１８人目にならないためです。日本語では、数を表す数字と、順番を表す数字が同じであるため、わかりにくいのですが、英語ならこれが分けられているため、わかりやすいかもしれません。英語では前者はone、two、three、four で、後者はfirst、second、third、fourth です。もっとシンプルな解釈もあります。１８人は“人間の人格の数”だと考えるのです。金蔵は既に死んでいるため幻想存在であり、魔女や悪魔と同格であるため、数に含まれません。

■夜お茶会
戦人からは、銀で作った、領主婦人のみに許される紋章の指輪が。
※EP7 の理御の指輪と同じものでしょうか？

■　うみねこのなく頃に散　Episode7　「Requiem of the golden witch」
■　サロ共和国　■
「東洋人がイタリアの本を？！　へぇ、例えばどんな？」（ビーチェ）
「ニッコロ・マキャヴェッリ。ダンテ・アリギエーリも。だからあなたが弥遠の淑女であることも存じていますよ」（金蔵）
※ベアトリーチェはダンテの『神曲』に登場するヒロインの名でもあります。

■　海から来た魔女　■
「その後、彼女（ビーチェ）は？」（ウィル）
「しばらくの療養の後、右代宮家の使いの方が来て、小田原に移すと仰いましてな。引き取られていきました」（南條）
「それから数年の後に、子供を儲けられましてな」
※ＰＣ版では九羽鳥庵のベアトは、金蔵とビーチェの子どもでした。
彼女に金蔵とは血の繋がらない忘れ形見がいたことを南條が知るのは、その後しばらく経ってからのことである。
※ＰＳ３版では金蔵と血が繋がっていないことになっています。おそらくＣＥＲＯ規定に引っ掛かったのだと考えられます。しかし、実はこっちの設定の方が納得がいきます。金髪・碧眼は劣性遺伝のため、日本人とのハーフには生まれませんし、自分の娘に手を出すような人間と源次はともかく、南條や熊沢が親交を持ち続けるのも不自然です。また　ビーチェも故国において金蔵と同じく、家の事情による望まぬ配偶者を得ていたのだとしたら、同じ立場である金蔵との共感が深まります。ちなみにどういうことであれば、九羽鳥庵のベアトが金蔵と血が繋がらないかというと、常識的に考えられるパターンは２つです。１つはビーチェはイタリアですでに結婚しており、子どももいたが潜水艦での長旅には耐えられないため、置いてきていたというパターンです。この場合、イタリアからその子どもを連れてこなければならなくなり、のちに出てくる“**彼女（九羽ベアト）と引き換えに死んだベアトリーチェ**”という内容と矛盾します。また、九羽ベアトには戸籍がなかったそうなので、非合法手段でイタリアから連れてきたことになり、かなり厳しくなります。もう１つは、ビーチェはイタリアで妊娠しており、日本に来てから出産したというパターンです。これならばＰＣ版の設定ともかみ合うため、どちらかを取るならこっちでしょう。

出産がうまく行かなかったそうで……
※ＰＣ版ではこのようになっています。
だが南條がそれを知ったときには、ベアトリーチェは既にひどく身体を患い、今際の際にあったらしい。残された娘は金蔵に託され、そして……。
※ＰＳ３版では、設定変更の影響でこのようなことになっています。

「インゴットには、片翼の鷲が刻印されていたと聞くが？」（ウィル）
「片翼の鷲、……というよりは、片翼に見えてしまう鷲、というべきでしょうな。ヨーロッパに多いでしょう。翼を広げた鷲を紋章にしたものは。……サロ共和国の国旗にも、鷲が、……いやいや、鷹でしたかな？　が、刻まれています」（南條）
「刻印が薄かった、……あるいは粗雑だったということか」（ウィル）
「そうです。……戦時下の粗雑な刻印でした。本来は翼を広げた鷲の紋章が刻印されるべきだったのでしょう。それが、ちょうど斜めに断ち切ったように半分、薄れて消えていたのです」（南條）
「翼を広げた鷲が半分消えて、……それが、片翼の鷲に見えた？」（理御）

「金蘭は、自分の運命を大きく変えたベアトリーチェの黄金に片翼の鷲を見て。それを自分の紋章にすることを決めたに違いあるまい」（ウィル）
「……果たして正しく刻印されていたなら、それは共和国旗の鷲だったのか、……それともまさか、双頭の……」（南條）
※双頭の鳥を国旗とした国の中に黄金伝説が残っている国があるのでしょう。

■　ベアトリーチェの眷属　■
「自分は精霊の子だと解釈したお前が、そこから次第にオカルトに傾倒していくことは容易に理解できる。……そこからだ。そんなお前が、ベアトリーチェとどこで出会い、どのように交流していったか」（ウィル）
「それは本当にある日、突然の、唐突なこと。……六軒島に住まう、ベアトリーチェという魔女に、私は会ってみたかったの、同じ魔女として」（真里亞）
「その頃にはもう、自分が魔女という自覚があったのか」（ウィル）
「あった。その頃には、聖書とオカルトでは、大人にも負けないくらいの知識があったから。だから私は、魔法は使えずとも、自分を魔女だと信じていた。……きひヒヒ、ちょっと滑稽だね。だから、私は魔女見習いなの」（真里亞）
「いつ、ベアトリーチェと出会った」（ウィル）
「よくは覚えていない。でも、その出会いはよく覚えている。それは、とてもとても唐突だった」（真里亞）
「そなたが、……右代宮真里亞か」（ベアト）
いつの間にか、……彼女はそこに座っていたのだ。私のことをそなたなどと呼ぶ人を、私は知らない。すぐに、彼女は、私の知らない誰かだと直感する……。
「……あなたは、だぁれ？」（真里亞）
「会いたいと言ったのはそなただ。妾の島に、魔女が訪ねてくるから出迎えてやったというのに、そなたは妾の名を問うというのか」（ベアト）
※紗音がいきなりベアトの口調で話し始めたのだと考えられます。

「……その時のベアトリーチェの印象は？」（ウィル）
「こういっては悪いけど。知識だけなら私が上だった」（真里亞）
※紗音はミステリーには詳しくても、魔法の知識はなかったのでしょう。

「真里亞の体に乗り移ってもいいよって言ったけど、（ベアトリーチェは）島からは離れられないから出来ないって言ってた」（真里亞）
※紗音の体に乗り移っているという設定のようです。

「１９８６年の六軒島で、ベアトリーチェに実際に会えたのは、郷田を除く使用人４人とお前と南條の、合計６人だけだったということか」（ウィル）
※九羽鳥庵のベアトの秘密を知る人間ばかりです。

■　貴賓室の怪談　■
「真里亞の声は、予めカセットテープにでも録ってあって。それを午前2時ちょうどに電話して再生ボタンを押した。そしてほどほどのところで、配電盤が何かで停電させた。……それから、予め貴賓室のどこかに隠れてた誰かが、気持ち悪く笑いながら、人形を持って出て行った。……そう考えりゃ、辻褄は合うぜ。」（朱志香）
※まさしくその通りなのでしょう。当日泊まっていたという源次と熊沢と紗音が協力したと考えられます。

■　こいつが、犯人だ　■
「夏妃は数学的確率で見て、２５７万８９１７分の２５７万８９１６の確率で、あんた（理御）の育児を放棄するわ」（ベルン）
※１億のカケラの中に、夏妃が理御の育児放棄をするカケラは２５７万８９１６個しかない可能性もあります。

■　新しき生活　■
「家でのお部屋も一緒だね」（紗音）
紗音との２人での生活なら、やっていけそうだった…。

「学校に通いながら働く子など、あの子以前には前例もありませんでした」（夏妃）
「正直、最初の挨拶の時に驚いたよ。明らかに幼かった。他の子たちは１６歳から１８歳くらいなのだが、その子だけはさらに１０歳は幼く見えた」（蔵臼）
「福音の家から来る若過ぎる使用人は、あくまでも社会勉強として当家に訪れているのであって、そもそも、使用人としての旅前はあまり期待していません」（夏妃）
「そうだな。やはり大人の、年季の入った使用人たちに比べると、どうしても頼りないものだ」（蔵臼）
「それが、未就学の子を受け入れるなんて。家事はおろか、社会勉強どころか義務教育もまだではありませんか。お父様にどんなお考えがあったのか存じませんが、明らかにおかしいと思いました」（夏妃）
「親父殿には申し上げたさ。せめて中学を出るまでは福音の家で学ばせるべきではないかとね」（蔵臼）
「そうしたら、金蘭は何て？」（フルフル）
「決まってるさ、こう答える」（ゼパル）
「「おお、ベアトリーチェ～～！！」」（ゼパル&フルフル）
「はっはっは…。当時はもうすっかりオカルトかぶれの書斎篭りさ。余計なことを言えば、我が思考の旅の邪魔をするなと怒鳴られる」（蔵臼）
「お父様のお決めになることは絶対ですから。……しかし、あの子についてだけは、腑に落ちませんでした」（夏妃）
「福音の家にも問い合わせたさ。そしたら源次さんに聞いてくれという。源次さんに聞いたら、お嬢様に聞いてくれという」（蔵臼）
※いきなり６歳の女の子が使用人としてやって来た時、金蘭は全てを悟ったでしょう。しかし、源次がそうだと言わない限り、事実は確認しようがないのです。

「ねぇ、ガラシさん～。何でヤスだけは3人部屋じゃないわけですか～」（レヴィアタン使用人）
ヤスというのはきっと私のこと。私は物心ついた時から親がいないので、まったく覚えがないが、……一応、安田という苗字が与えられていました。その安田で、私のあだ名はヤス、らしい。
「知らないわよ、部屋の割り振りは源次様が決めてんだもの。私だって納得いかないわよ」（ルシファー使用人）
「ですよねー！　普通、２ぃ２ぃにしますよねぇ？！」（レヴィアタン使用人）
※ヤスと紗音以外に使用人は3人います。それならば使用人は5人のはずなのに、４人で勘定しています。

■　劇になる日々　■
「それ、どんなお話？」（紗音）
「全員が招待状で招かれて、小さな島にやってくるところから始まるんだ」（ヤス）
※ＰＳ３版ではタイトルが出てきません。

「それ、何で作品？」（紗音）
「アガサ・クリスティ。『そして誰もいなくなった』。……面白い。まるで六軒島で事件が起こってるみたい」（ヤス）
※ＰＣ版ではちゃんとタイトルを出しています。

「この魔女、せいぜい４９５年程度しか生きていまいぞ」（ガァプベアト）
※『東方紅魔郷』のキャラクターである“フランドール・スカーレット”のことであると思われます。彼女のテーマ曲“U.N.オーエンは彼女なのか？”やスペルカード“秘弾「そして誰もいなくなるか？」”の名前、および『紅魔郷』エクストラステージを魔理沙でクリアした際の会話シーンは、アガサ・クリスティの小説『そして誰もいなくなった』が元ネタで、フランドールが“何者とも判らぬ者（unknown）”であることに通じています。

■　新しき日々　■
その年、ごっそりと福音の家の使用人たちが辞めることとなった。我だけを残し、福音の家から来た仲間たちは一斉に、この島から卒業していった…。せっかく後輩が入ってきても、先輩たちが私のことを、ヤスはよく物をなくして云々と吹き込んだため、新しい仲間が来ても不愉快なままだったのだ。その、不愉快な先輩も同輩も後輩も、一度に辞めることとなった。
「じゃーね、ヤス。あんた、物を無くしたりするんじゃないわよ」（ルシファー使用人）
「……未だに謎よね。どうしてヤスはここに推薦されたの？」（レヴィアタン使用人）
「それを言ったら、未だに奥様がヤスの勤務を認めている方が驚かされる」（サタン使用人）
「逃げ出さないだけまし、根性があるってもんだ。しっかりな、ヤ・ス」（ベルフェゴール使用人）
「……みんなとは、ついにお友達になれなかったね」（紗音）
※誰も紗音に話しかけません。ちなみにこの時“ルシファー使用人”は寮を出て、アパート暮らしなどをしながら六軒島で働いていたと思われます。

新しく来る使用人は、相変わらず私よりも年上だろうけれど。私が先輩として色々教えなきゃ。

「明日音と申します。よろしくお願い致します」（アスモデウス使用人）
「鐘音（べるね）と申しまーす。よろしくお願いしまーす」（ベルゼブブ使用人）

「まさか、紗音ちゃんも。それ信じてるわけじゃないですよねー？」（鐘音）
※ここまでの話ではじめてヤス以外の人間が紗音に話しかけました。しかし、これは紗音に話しかけたのではなく、ヤスに話しかけたのです。ヤスの名前は安田紗音なのです。

「……鍵束がなくなった時には、私が見ていない隙にヤスが、ひょいってどこかに隠したんだろうと思えた。……でも、鍵束から、ひとつだけ鍵が消えてて、それがありもしないところから出てくるなんて、考えられない」（鐘音）
「その鍵だけあんたが見てない隙に、引っこ抜いたんじゃないの…？」（明日音）
「そんなの出来る？！　実際に！　鍵束を丸ごとひょいっと隠すならともかく、鍵束から鍵をひとつ抜き取るって、考えれば考えるほどに簡単じゃないよ？！　カチャカチャ、ガチャガチャ。すぐそこで私が背中を向けているのよ？　そんなこと悠長にやってたら、いくら私が鳥頭でも気が付く！」（鐘音）
「その、紛失した鍵はどこから見つかったの？」（フルフル）
「私の、……ロッカーから。……いいよ、ヤスがこっそりやったって仮定してもいい。そう考えると気楽になれるもん。……でもね？！　じゃあ、どうやってロッカーに入れたわけ？！　ヤス、私たちとずっと一緒じゃん？！　私がないないって大騒ぎして、あちこち探し回ってロッカーの中で見つけるまで、ずっと一緒だったじゃん？！」（鐘音）
※ヤスが自分の鍵束から鍵を外して鐘音のロッカーに入れておき、自分の鍵束と鐘音の鍵束をすり替えたのです。

「……紗音。……起きてる…？　……。……私、使用人やめる。もう決めたの、紗音。今日まで楽しかった。この部屋はあげるね。あなたひとりで使って。じゃあね。さようなら」（ヤス）
※ＰＳ３版では、この場面で初めてヤスの声に音声がつきます。

「紗音のような素敵な使用人も悪くはない。……でも、魔女の楽しさを知ってしまったら、もうそれは退屈な憧れ。もう戻れない」（ヤス）
「紗音はどうするのか」（ガァプベアト）
「……紗音は紗音で、これからも尊敬される使用人でいてくれればいい。彼女は彼女のままで。ただ、これからは私と二人ではなく、彼女だけになるけれど。あなたが魔女で、私の友人という設定はそのままで。ベアトは私ということに世界を変更する。だからあなたは今から、ベアトリーチェじゃない魔女」（ヤス）
※ここまでの場面に出てきた紗音はヤスの心の中の友達であり、理想の自分だったのです。

私は、自分の抜け出た腕枕に向かって手を伸ばしながら、……待って、と言っていたようだった。寝惚けておかしなことを口走って、その勢いで目が覚めてしまった経験は、ないことはないけれど。……腕枕を抜け出して、こうして立ったまま目が覚めた経験なんて、今までに一度もない。ひょっとしてこれが、……噂に聞く、夢遊病なのかしら…。私、疲れてる……？　……寝なきゃ。寝直さなきゃ。私は、自分のベッドに、踵を返す。……？　振り返ったところで、自分のベッドなどそこにはない。今、背を向けたベッドしか、この部屋にはないのだから。この部屋にいるのは私一人で、ベッドも私の背中に一つしかないなら……、……それはつまり、私のベッドということではないか。……なぜだか、釈然としない。ベッドの布団は、誰かが這い出たように、乱れている。誰かが這い出た…？　この部屋は、私の一人部屋じゃないか。なら、それは私のベッドであり、這い出た跡とはつまり、私がさっきまでこの布団に寝ていたということではないのか…？　……でも、どうしてか、……このベッドが、……自分のベッドだと思えない。しかし、私、紗音は、他の子たちは相部屋なのに、私一人だけ一人部屋を与えられている。だからベッドも一つ。無論、それは私のベッドのはず。
※実は一人部屋であったことがわかりました。

■　新しき元素　■
「１９８６年に戦人さんが帰ってくるという事実が変わらぬ限り。……何かの悲劇は起こったでしょう」（クレル）
「そうだな。……戦人が帰ってくるのが、一年早いか遅いかだったら。……事件は起こらなかったかもしれねェ。いや、何か小さな事件は起こったかもしれない。そしてそれはきっと、誰にも解くことの出来ぬ、謎の不可能事件となっただろう」（ウィル）
※紗音か、嘉音のどちらかが消えざるを得ないことだと考えられます。

■１９８３　事件まであと３年
弟の殺害は、福音の家で仲の良かった、年下の男の子。名前は、……福音の家のルールに従い、音の一字を与えよう。
※嘉音の年齢は１９８６年の時点で１６歳です。紗音も１６歳ということになっていますが、本人がそのように語った場面はありません。つまり紗音は自分の年齢が１９歳であると認識しているわけです。

■１９８４　事件まであと２年
「うーうー！　じゃあ今度はベアトの番！　真里亞のお友達の、ウサギさんたちにも、また絵を描いてあげて！　さくたろうみたいに！」（真里亞）
「ふむふむ、良かろうぞ。その魔導書を貸すが良い」（ベアト）
「うりゅー！　ベアトは絵がとっても上手だから、とっても楽しみ！」（さくたろう）
「どんな絵になるの？　どんな絵になるの？　ウサギさんたち、楽しみ！　うーうーうー！！」（真里亞）
「森の音楽隊であったな。…音楽隊、音楽隊…。…ふぅむ。よしよし、こんな感じではどうか…」（ベアト）
※シエスタ姉妹の誕生です。

「…碑文の謎に挑む資格は、全ての者に許されている。無論、それは使用人も例外ではない。…お前は、挑んでいるのか？」（源次）
※この場面では紗音と嘉音がいますが、源次は紗音だけに話しかけています。これは紗音しか認識していないためと思われます。

「なるほど、やっと蔵臼さまの話が繋がったよ。ほら、お婚約が好まれる、ピンロウ」（嘉音）
「…そう言えば蔵臼さま。あれは台湾では煙草のようにポピュラーな嗜好品だと仰ってましたっけ…。それでお婚約はピンロウを…」（紗音）
※金蔵は夏妃が来た時に、ピンロウは止めたはずですが…。懐かしがって紗音に話したのかもしれません。

■　魔女の森る日　■
誰が来たのだろう。まさか、金蔵？　このような場所（地下貴賓室）にいることが知られたら、酷く叱られるのでは…。（ベアト）

「お婚約は、碑文を最初に解いたものに、黄金と家督の全てを譲り渡すと仰られた」（源次）

「…皆さんは、…知っていたんですか……私のことを……」（ベアト）
源次も熊沢も、南條までもが、無言で頷く。

「……ベアトリーチェ。……いや、……理御。そなたに与えようと思っていた、名前だ…」（金蔵）
「…あなたの、本当の名前でございます」（源次）
金蔵は、枯れ木のような手を差し出す。その指には、右代宮家当主であることを示す、片翼の鷹の紋章が刻まれた指輪が輝いていた。それを引き抜くと、強く握り締めながら、私に向かって突き出す。…わたしはどうしていいかわからない。引き寄せられるように、おずおずと、…私は両手を、手の平を上にして差し出す。金蔵は、その手の上に、…拳をぐっと押し付けてから、ゆっくりと手を開き、指輪を預ける。

「右代宮金蔵ッ、我が生に一切の未練なしッ！！　もはや何もなし！　心残りも遺り残しも何もなし！！」（金蔵）
金蔵は天を見上げながら、喝采する客席に向かって両手を上げて応えるかのような仕草をしながら、…大きな声で笑い棟ける。……金蔵の笑い声が響き、…消えた時。彼は、操り人形の糸が切れたかのように、…カクンと膝をつき、……ゆっくりと、……倒れた……。脈を取ったりしていた南條は、小さく首を横に振るとゆっくりと立ち上がる。
「……大往生だ。…何の心残りもないだろう」（南條）
※この場面は『北斗の拳』のパロディかもしれません。

「……この黄金は、全てあなたのものです。…現金化をご希望でしたら、そのように手配することも出来ます」（源次）

私の胸の痛みは、お金では癒せない。ただ、……彼が帰って来て欲しいだけ。

「この地下貴賓室へ至る鍵です。これを使えば、もう仕掛けを使う必要はありません」（源次）
「わ、私が当主なんてそんな…。それに、次期当主は蔵臼さまでは…」（ベアト）
「碑文の謎を解いた者が次期当主である。……これはお預かりしている遺言状にも明記してございます」（源次）
※これらの場面は紗音がベアトに修飾されているだけで、あとは全て現実にあったことと考えられます。

私が何者か、今日、私は得ることが出来た。誰から、いつ、どのようにして生まれてきたのか。……それを、時間をかけてゆっくりと、彼らから聞いていこう。それだけで、もう、充分なのだ。
※その後、紗音は金蔵とビーチェの馴れ初めの話や、九羽鳥庵のベアトの話も聞いたのでしょうが、紗音はそれを事実だとは思わなかったのです。

■　魔女幻想、散る　■
「私は、…委ねる、決断をしました。先代当主より全てを受け継いだ儀式の時のように。…私もまた、奇跡という名の運命に身を委ねることを選びました」（クレル）
ルーレットに、身を委ねたと言った方が、正しいかもしれない。私は、私たちは、…自分たちの運命さえ決められなくて。全てを運命に託したのです。誰かが解けれるかもしれない。あるいは全員が制圧されて、解放されるかもしれない。さもなくば誰かがこの愚行を、止めてくれるかもしれない。
「…どの運命をルーレットが指し示そうとも。私はそれに従うことにしました。私は、運命に、抗わない。…抗ったって、…いつだって運命は私に、非情だったんですから…」（クレル）
人の可能性は無限だと、ニンゲンたちは軽々しく口にする。しかし、無限の魔女は、…本当は有限であることを、知ってしまった。だから彼女は、その有限の運命の中に、無限を見出そうとした。自分の運命を、神に委ねることで、無限を見出そうとした。しかしそれは、自分の運命の放棄ではない。なぜなら、運命のルーレットに、絶対の意思で臨んだから。誰も碑文の謎を解けないなら、誰も絶対に逃れられない、絶対の運命。それで島を閉ざした。自分ごと。１９８６年１０月４日から５日は、絶対の意思で封じられ、……その狭い時間と島の中で選ばれるいずれかの運命に、…彼女は身を任す。
※運命のルーレットに身を委ね、その結果に必ず従う。これこそが『ベルンの手紙』に書かれたルールＺの１つではないでしょうか？

■　Episode7　「Requiem of the golden witch」完　■

■夜お茶会

「実はね。……今年、職人くんが戻ってくると聞いて、……僕は最初、いやな気持ちだったんだよ。……6年前。……君と本当に仲が良かったのは、職人くんだった。僕は君ともっと仲良くなりたいと思っていたけれど、まったく間に割り込むことなんて出来なかった。……僕は本当にみっともないね。今日、君に指輪を渡す時、断られるかもしれないと怯えた」(藤治)

「どうしてですか。……私が藤治さんの指輪を、どうして拒むと？」(紗音)

「職人くんが、帰ってきたからさ。君は本当は、今でも職人くんのことが好きで、……。……彼が帰ってきた今、僕は用済みなんじゃないかなって、……怯えたんだ」(藤治)

「……もし、私の気持ちが職人さまに移るのではないかと怯えるなら。そんなことを絶対に思わせないくらいに、強く愛して下さい。……私が、あなたと以外の男性のことを考える暇なんかないくらいに、愛して下さい。私だって怖いんです。私より魅力的な女性なんて、これからもいくらでも現れるでしょう。あるいは、至らぬ私に愛想を尽かすこともあるかもしれない。生涯、あなたの気持ちを私だけに繋ぎ止めていられるか、怖いんです。……私は、右代宮藤治さんという素敵な方を射止めました。そして、生涯、私を愛すると誓わせ、それを誓う指輪をこうして贈らせました。その指輪を、こうして薬指に通した上で、正面に告白します。私は確かに仰る通り。……6年前、職人さまのことが好きでした。多分、藤治さんより、好きだったと思います。でも。それは6年前の話です。今の話では、ありません。職人さまへのその気持ちは、この6年間で整理され、思い出と一緒に過去へ、決別したものです。今の私は、あなたを愛するためだけに存在します」(紗音)

※戦人への恋心はベアトの人格に預けてしまったため、紗音の人格は譲治だけを愛しているのです。

魔女はなおも歩み寄る。そして一同の人垣を割り、その向こうに置かれている、アンティーク時計のところへ行った。その時計は、なかなか立派な装飾を持つ、大きなものだった。それを撫でながら、魔女は言った。

「……この時計の仕掛けも、皆さんにご説明しましょう。皆さんは黄金だけでなく。この島の全てを手に入れられたのですから。この島の地下には、戦時中の旧日本軍の地下基地跡が眠っています。そしてそこには、９００ｔもの爆薬も眠っているのです。専門家の推定では、直径1km、深さ数十mの大穴が開くとか。この爆弾は、特別な仕掛けで爆発します。……私が今、操作した、これが起動のスイッチです」(ベアト)

魔女はアンティーク時計の上部のスイッチをいじる。

「この状態で２４時を迎えると、爆発します」(ベアト)

「つまり、残り何時間で爆発する、というのではなく。２４時ぴったりにしか爆発しない時限爆弾というわけね。……半世紀も前の爆弾でしょう？　本当に爆発するの？」(霧江)

「はい、もちろん。爆薬も信管も健在です。……試しましたから」(ベアト)

「そうか、やっとわかったよ。鍵守の社が跡形もなく消え去ったのは、そういうわけか…」(蔵臼)

この夏、鍵守の社が、岩礁ごと、跡形もなく消え去った。

「如何にも。……半世紀を経てなお爆薬が健在であるか、あの社で実験させていただきました。結果は、皆さんもご承知の通りです。この地下貴賓室は、基地跡の地下通路に通じています。それをまっすぐ進めば、島の反対側にある隠し屋敷、九羽鳥庵に出ることが出来ます。距離は約2km。そこまで逃げられれば、爆発からも逃れられるでしょう」(ベアト)

※これは教えられないと分からない仕掛けです。EP3の絵羽は何らかの方法でこれを教えてもらったと考えられます。

発砲音の残響が収まると、……魔女は口からどろりと血を零し、そのままベッドに倒れた。

※この怪我ではとても生きて潜水艦基地まで辿りつけるとは思えません。ですから、この場面は実際の出来事ではないと思われます。赤い塗料を使っての死んだフリも考えられますが、全てを諦めたこの場面でそんなことをする意味があるとは思えません。

霧江は、自分が手にした銃が、銃身の長さから装弾数が5発だろうということはすぐに見抜いていた。……そう。霧江も留弗夫も、この銃には深く精通していた。父親の影響で、西部劇の銃に興味を持っていた留弗夫は、同型の装弾銃を所持していたのだ。そして霧江も同じ銃を扱う資格を持ち、二人で射撃を楽しむほどに、……この銃には精通していた…。この場にいる人数は、魔女を加えて8人。自分たち以外に6人いる。装弾数は5発。……1発、足りない。皆殺しには銃弾が足りなかったのだ。

※EP3で留弗夫と霧江が銃を自在に操ったのは単なる幻想描写ではなかったようです。

そして彼女(絵羽)は、静寂に包まれた黄金の部屋で目を覚ます。傍らには愛する夫の屍。蔵臼夫婦の屍に、楼座の屍。

※魔女が卒倒したのはベッドですし、絵羽が気を失っている最中のことですから、ベッドまでは気が回らず、魔女の屍には気がつかなかったと考えられます。

「イ、イタリア人の黄金を寄うだと？　卑怯者め、右代宮、貴様、それでも軍人かぁああぁ？！」(？？？)

「……お、お父様……？　わ、私はお父様のことを敬愛いたしております……。で、でも、……そのお父様の気持ちには、その……」(ベアト)

「どうして…！！　どうしてあなたたちは私を助けたんですか？！　どうして死なせてくれなかったんですか？！　私はあのときの大怪我で、……こんな体で生きさせられている！！　こんな体で生きていたくなんてなかった！！　こんな、恋をすることも出来ない体で……！！　そんなの、そんなの、生きる価値がないんじゃないですか？！　そんなのニンゲンじゃない…！！　家具じゃないですか！！」(？？？)

※上記3つの場面が、切り裂かれたクレルの体から溢れてきました。僕はこれはヤスが心に秘めていた真実、あるいは「本当はこういうことだったんじゃないの？」と思っていた真実なのだと思います。ヤスは金蔵が嫌いでした。ですから、金蔵の死後に源次から、金蔵とビーチェの話を聞いた時、それを真実だとは信じられなかったのです。その証拠が2つ目です。このベアトは九羽鳥庵のベアトだと考えられますが、金蔵のことを「お父様」と呼んでいます。

“「……ベアトリーチェ。先ほどから呼んでおる。聞こえなんだか…？」(金蔵)(EP3)

「……む。そうであったか？　すまぬ。ぼんやり考え事をしていた。許せ。……妾は何者なのか。この問いに、今日まで応えてくれた者はおらぬ。……なぜか皆、目を逸らし、はぐらかす。……そなたとは長い仲だ。妾はそなたを、無二の友であり、そして父ですらあると思っておる。……だからどうか教えて欲しい。そなたは知っているはずだ。…妾が何者であるかを。……」(九羽鳥庵のベアト)

「(赤：六軒島の森の中には、九羽鳥庵という隠し屋敷が実在します)。それが、今、話をしていた場所です」(ロノウェ)(EP3)

「この、九羽鳥庵の庭でくつろいでるベアトと、…さっきの祖父さまとの会話は、真実なのか？」(戦人)

「はい。真実です。かつて、(赤：実際にこの場所で、お二人はこのような会話をなされました)」(ロノウェ)

「はい。(赤：ここは１９６７年の世界)。１９年前の世界でございます」(ロノウェ)(EP3)”

※しかし、実際の九羽鳥庵のベアトは上記のように金蔵のことを呼び捨てにしていました。ヤスは真実を知らないため、常識的に考えて九羽鳥庵のベアトは金蔵のことを「お父様」と呼んでいただろうと思ってしまったのです。3つ目はヤスが源次と南縁に言いたかったけれども、心の中に抱えていた言葉でしょう。

■裏お茶会

「……私、まだ全然ゲームマスターをやっていないのよ？　……私はベアトの執筆をやっただけ。そしてハラワタを引き摺り出しただけ。……まだ、何もやっちゃいない」(ベルン)

※お茶会で語られた物語のゲームマスターはベルンではないわけです。

■　うみねこのなく頃に散　Episode8　「Twilight of the golden witch」
戦人は懐より、首飾りに繋がった大きな鍵を取り出し、縁寿に差し出す。それは戦人の手の平いっぱいの大きさがあり、幼い縁寿には一握りしても余るほどの大きさが感じられた。金色に輝き、凝った意匠が施された美しい鍵。その重みだけで、さぞ大切な鍵に違いないとわからせてくれた。
「これは縁寿だけの、大切な鍵だ」（戦人）
「何の鍵なの……？」（縁寿）
「使うべき時は、すぐに来る。そして縁寿が、自分で決めるんだ。……わかるね？」（戦人）
手に持った時は、ずしりと重いと思ったのに。首に掛けてみると、普通の首飾り程度の重さにしか感じられなかった。
※※想で修飾された絵羽の日記の鍵ですから、実物はそれほど大きくないようです。

■　６歳の縁寿　■
あの日も、６年前と何も変わらず、祖父さまはハッピーハロウィンの声とともに客間にやって来たよ。そして、俺との６年ぶりの再会に涙を零してくれながら、……俺とプレゼント交換をした。……祖父さまは、縁寿が来れなかったことを残念がっていたよ。だから、縁寿にぜひ渡してくれと、霧江さんにプレゼントボックスを預けていた…。
「そんなプレゼント、私は知らない、受け取ってない…！！」（縁寿）
※最初は信じていましたが、よく考えてみたら金蔵はとっくの昔に死んでいるのでした。

「……これは、俺のゲームだ。だから確かに、これは俺の物語であり、俺が騙っている。だからこそ、もしもお前が島に来ることが出来たならという、ＩＦを提ぜることが出来る」（戦人）
「ほらッ！　お兄ちゃんの物語じゃないッ！！　全部お兄ちゃんの、……嘘っぱちの作り話じゃない！！」（縁寿）
「……そうだな。これは全て俺の、作り話だ」（戦人）
「どうして私に、真実を教えてくれないの？！」（縁寿）
「……真実より、……もっと大切な。……どうしても伝えたいことがあるからだ。それをわからせるためのものが、俺のゲームだ」（戦人）
※“全て”がどこまでを指すのか、それが問題です。

魔女は、そっと左手を差し出し、縁寿の顔に近づけた。そしてゆっくりと手の平を開いてみせた。縁寿は魔女の手の表と裏を確認する。（中略）魔女はゆっくりと、その右手の拳を開く……。すると、……そこには……。魔女は、可愛らしく包装されたその飴玉を、縁寿にプレゼントする。
※略せば一目瞭然です。

■　黄金の返還　■
「おや。Ｍ・ザッキーはお嫌いで？」（天草）
※『うみねこ』に楽曲を提供している人の中に“M.Zakky”という人がいますので、その人のことかと。

■　ハロウィンパーティ　■
この楽しい時間の中に、いつまでもいたい。……永遠に。私の心の中に浮かんだ願望を、幼い私が代弁する。
「さ、……さっきまでの楽しいのが、ずっと続いて欲しいのっ」（縁寿）
少しニュアンスが変わってしまった気がする。それでも、それが私の偽らざる願いだった。
※この時の縁寿は瑪瑙に“半乗り”くらいの感じだったのでしょうか？

■真里亞の出題
２人乗りの船を使い、全員が対岸に渡らなければならない。こちらの岸には、農夫とその妻と羊飼いと羊と牛と肉と野菜がある。（これらはそれぞれ、船では１人分として扱う）船は、農夫と妻と羊飼いの３人にしか漕げない。妻は、農夫と一緒でない時に羊飼いがいると、駄々落ちをしてしまう。羊飼いは、農夫か妻が一緒にいない時に肉があると、盗み食いしてしまう。羊は、羊飼いと一緒にいない時に野菜があると、それを食べてしまう。牛は、人間が誰か一緒にいない時に野菜があると、それを食べてしまう。肉は、積み下ろしが大変なので、一度船から降ろしたら、もう積めない。野菜は、傷みやすいので、一度しか船に乗せられない。最低何手で達成することができるだろうか…？　選択肢５つ。「１０手未満」「１０手以上１５手未満」「１５手以上２０手未満」「２０手以上２５手未満」「それ以外」
※人間以外も含めた全部が対岸に渡る場合を考えてみます。妻が肉と船に乗って、対岸に肉を下ろして１手。妻が船で戻って２手。農夫が妻と船に乗って、対岸に妻を下ろして３手。農夫が船で戻って４手。農夫が牛と船に乗って、対岸に牛を下ろして５手。農夫が船で戻って６手。農夫が野菜と船に乗って、対岸に野菜を下ろして７手。農夫が船で戻って８手。農夫が羊飼いと船に乗って、対岸に羊飼いを下ろして９手。妻（羊飼いでも可）が船で戻って10手。妻（羊飼い）が羊と船に乗って、対岸に渡って11手。

「全然わかんないわよ、これ、難易度どのくらいなの…？」（絵羽）
「せいぜい２０ピカラットってところかなぁ？　本当に難しい問題が、まだまだこの本には載ってるんだから！」（真里亞）
※『レイトン教授シリーズ』に登場するナゾの難しさを表す指標です。数が多ければ多いほど難しいナゾということになるらしいです。

■霧江の出題
三人の女の子がいます。
美代子「私が一番年上よ」
沙都子「梨花は一番年上じゃありませんわ」
梨花「美代子は嘘吐きなのですよ。にぱー」
この中の、一番年上の子だけが本当のことを言っています。さて、一番年上の子は一体、誰…？　選択肢３つ。「美代子」「沙都子」「梨花」
※『ひぐらしのなく頃に』の登場人物、田無美代子、北条沙都子、古手梨花のことと思われます。

■譲治と朱志香の出題
赤い箱と青い箱と緑の箱がある。このうち１つにはメダルが入っている。残りの２つは恐ろしいビックリ箱になっている。私は赤い箱を選んだ。そしたら朱志香は言った。
「本当にそれでいいのかい？　ビックリ箱はすごく怖いんだぜ。１個開けて見せてやるからな」（朱志香）
そう言って緑の箱を開き、それがビックリ箱であることを示してくれた。残るのは、赤い箱と青い箱の２つだけ。
「その赤い箱を開くかい？　それともチェンジするかい？」（譲治）
さて。赤い箱と青い箱。どちらにメダルが入っている確率が高いだろう…？　選択肢３つ。「赤い箱の方が高い」「どちらも同じ」「青い箱の方が高い」
「譲治兄さんに教えてもらったけど。チンプンカンプンで。……とにかくよくわからないけど、今のケースだと、青い箱は、赤い箱の約2倍、メダルの確率が高いって言うんだ」（朱志香）
※箱は3つだから、可能性は赤に入っている場合、青に入っている場合、緑に入っている場合、３通り考えられます。赤を開けたときにメダルを手に入れられるのは、赤に

入っている場合の、１通りだけ(約３３%)。しかし、青を開けたときは、青に入っている場合と、緑に入っている場合の２通りでメダルが手に入ります(約６６%)。もし箱が１００個あったなら、赤を開けたときにメダルを手に入れられるのは、赤に入っている場合の、１通りだけ(１%)。しかし、青を開けたときは、残りの９９通り(９９%)でメダルが手に入ります。

■　人間と魔女の宴　■

「じゃあじゃあ、次は私が問題を出す番ねー！　えっとねえっとね、１ホールの３分の１のケーキと４分の１のケーキと５分の１のケーキがお皿に載ってるの！　１ホールを食べるのには３０分かかるとして、食べ終わった時、お皿にケーキはいくつあるでしょう?!」(ラムダ)
※答えは「ひとつもない」です。

■　ベルンの出題　■

そして、今度は南條先生が殺された。殺されたのはゲストハウス内の玄関。
「そもそも、《紫：ゲストハウス内で南條先生を殺すことは不可能なんだ！》」(鏑台)
※嘘がない地の文でゲストハウス内で殺されたと言っているのに、鏑台はそれが不可能だと言っています。嘘をついているわけですから、鏑台は犯人である、と考えていましたが、この解釈では駄目なようです。

■　八城十八　■

出版社の人間たちが、使用人によって玄関へ送られる。ようやく静けさを取り戻した書斎で、八城十八は、ふーっと息を吐き出しながら、ソファーに全身を預けて天井を見上げる。
「疲れるが、たまには人の子の刺激も悪くない」(幾子)
「……定期的に人と会いなさいよ。……ボケるわよ、引き篭もってると」(ベルン)
本棚の上の黒猫が軽やかに絨毯の上に飛び降りる。するとその姿は、音もなく歪んで、ベルンカステルの姿となった。

八城が棚よりジャム瓶のようなものを取り出し、その中身の梅干を一粒、宙に放る。ベルンカステルの姿は瞬時に黒猫に変わり、それを空中でキャッチしてから、カリカリとかじり出す。
※幾子が飼っている梅干が好きな猫、ベルンを幾子が幻想修飾したのがベルンカステルのようです。

「私は子供じゃないわ！！　自分で考えて行動できる、１８歳の女よ…！！」(縁寿)
「たわけがッ！！　過去のことしか、何も考えることが出来ぬ6歳の小娘であろうが！！」(ベアト)
※6歳のころから過去に囚われた続けた縁寿が１８歳になっても、6歳のままであったのなら、１３歳のころから戦人を待ち続けたヤスも、１３歳のままだったのではないでしょうか。

■　真実の書　■

「もちろんよ。私だって早く読みたいもの。すぐに(フェザリーヌを)呼ぶわ」(ベルン)
※ベルンが真相を知っているのなら読む必要はないはずなのですが…。

「我が主より、お茶を振舞えとの命令ですので。飲む気がなくても、漏斗を突っ込んで流し込みますから、そのつもりで。」(エリカ)
※これはフォアグラを作る時の方法です。

「つまり、こいつはアラモの砦ってわけさ」(笹井夫)
※１８３６年にテキサスがメキシコから独立を求めて戦った時の拠点です。

「これにて、八城先生の会見を終了いたします…！　報道各社の皆さん、本日は誠にありがとうございます！　引き続きまして、右代宮絵羽氏の日記の朗読時間に移りたいと思います」(司会者)
ホテルマンが、ペールで覆われた台車を押してくる。そして、八城が頷くのを確認してから、そのペールを剥ぎ取った。そこには、……右代宮絵羽の日記が。一なる真実の書が、その到着が待ちかねるのを待っていた。八城はそれを胸に抱えると、ミステリアスに笑う。一斉にフラッシュが瞬き、一なる真実の書を、眩く浮き上がらせた……。
「以上で会見を終了させていただきます！　それでは皆様、会場の方へ移動をお願いいたします…！」(司会者)
八城は日記を抱えたまま、ホテルマンたちに護衛されながら会見場を後にする。彼女が、関係者以外立入禁止と書かれた扉をくぐるまで、取材陣たちはなおも何かのコメントを取ろうと、彼女を取り囲み質問を投げ掛けるのだった。扉をぱたんと閉めると、……世界がぐにゃりと歪む。ホテルマンたちはマントを羽織った黒猫の姿に変わる。八城も、フェザリーヌの姿となっていた…。
「すごい熱気じゃない。……楽しめた？」(ベルン)
「……疲れる。……だが、悪くない。それにしても、この日記は重いな」(フェザ)
フェザリーヌが日記を放ると、それをベルンカステルが受け取る。
※これは別にフェザリーヌが幾子に化けているわけではなく、観測者がいなくなったため、幻想修飾が可能になっただけです。

■　八城幾子　■

……推理小説、作家。……世評。……。忘却の霧の向こうで。私(十八)はかつて、……ミステリーとか、……そういうものについて、議論を交わして戦っていたことがある気がする。その当時に身に付けた、ミステリーとの戦い方が、……疼く。
※これはゲーム盤におけるベアトとの戦いではなく、以下の場面のような、かつて紗音と交わしたミステリー談義のことだと考えられます。
“**トリック。錯誤。誘導。からかう。引っ掛ける。一瞬に笑う。……こんなトリックを知ってますか…？　前に読んだ本に、こんなトリックが……。**(EP6)”

私が幼くて自分勝手だったから、覚えてさえいなかった。いつも私を甘やかしてくれる、やさしかったお祖父ちゃん。あのハロウィンのクイズパーティ自体は、確かに幻。あんなことは、確かになかったけれど。……親族のみんなで集まる席に、……あのパーティに勝るとも劣らない、……楽しいことが、いつだってあったじゃない……。
※縁寿の言葉を信じたいところですが、実際のところはどうだったのかわかりません。

■　緑青の選択　■
ビッグバンが起こり、宇宙創生が起こり、……いくつもの銀河が生み出されては消え、生み出されては消え。そしてビッグクランチを起こし、宇宙が終焉したかと思うと、間髪を入れずにビッグバンが起こり、再び宇宙が生まれるのだ。それはまるで、神々の遊びだ。
※“ビッグクランチ”とは膨張を続ける宇宙が、いずれ自身の重力によって収縮に転じ、宇宙にある全ての物質と時空が無次元の特異点に収束することです。実際にそんなことが起こるかどうかはわかりませんが…。

フェザリーヌが頭に浮かべる、あの馬蹄状の記憶装置。あいつはあれがないと、自分の存在を保てない。破壊は不可能だが、……もしわずかでも衝撃を与えることが出来れば、……記憶装置をバグらせることが出来るかもしれない。過去に、フェザリーヌが記憶装置にダメージを受けて、人格変容を来したた事例があるのだ。
※馬蹄状の記憶装置とは十八のことではないでしょうか。あるいは『ひぐらしのなく頃に』の“羽入の角”なのかもしれません。

■第3日目　１９８６年１０月６日
職人とベアトの姿は、……六軒島の地下の海水循環基地の廃墟にあった。ベアトは水際に下りると、大きなシートを取り払う。そこには一艘のモーターボートがあった。
「これを船に積め。重いぞ」（ベアト）
「わぉ。黄金のインゴットじゃねぇかよ。全部、埋もれちまったかと思ってたぜ」（職人）
「こんなこともあろうかと思ってな。ひとつくすねておいたのだ」（ベアト）

「そなたはモーターボートの経験は？」（ベアト）
「あるわけないぜ」（職人）
手馴れてはいなかったが、ベアトは何度かの試行錯誤の末、エンジンを掛ける。

「……生きれぬ。妾はもう、数え切れぬほどの世界で、数え切れぬほどの罪を犯した。妾が殺した命の数が、罪の数が、多すぎる」（ベアト）
「俺たちの世界では、何の罪も犯しちゃいないさ。お前に罪があるなら。それを犯させた俺にも罪がある。……だから、お前の十字架は、俺たち二人で背負おう」（職人）
職人がベアトに習った通りに操作すると、ボートはゆっくりと滑り出す……。

夢か幻のように、……黄金の魔女の姿は消えていた。……そして、一緒に積み込んだはずの、インゴットも。

職人は、すぐに海へ飛び込みました。だから、職人は間に合いました。また魔女の姿を見ることが、間に合いました。魔女は職人を見上げ、薄っすらと笑っていました。言葉は、聞こえません。でも、はっきりと聞こえました。言ったろ、職人。妾は極悪な魔女だから、罪など償わぬと。生きてなど、償わぬと。職人は必死に、言葉を返しました。でも言葉は全て、泡となって吐き出されるだけでした。漆黒の闇へ沈み行く彼女を、職人は懸命に追いました。そして、……その手が、……届きました……。どんどん、周りは真っ暗になっていきます。息苦しくなり、頭や耳が痛くなります。職人の指が、……少しずつ、解けていきます。そしてとうとう。二人の指は、……離れました。その途端、……職人は上の、光の世界へ。そして魔女は下の、闇の世界へ。……より強い力で引き裂かれていきます。魔女は、職人の体が眩しい海面へ向かって浮かんでいくのを見て、安堵しました。職人の体が光の世界へ、点となって消えたのを見届け、……魔女はゆっくりと目を閉じます。そして奈落の世界へ落ち行くことに、永遠の孤独の世界に、全てを委ねました。その時、……彼女は、感じました。そんなはずはないのです。だって、職人はもう、遥かかなたで点になっているのに。でも、それは職人でした。魔女を追ってきた、職人でした……。二人は互いをきつく抱き締めました。……もう、運命は二人を引き裂こうとはしませんでした。二人は一つとなって、……奈落へと沈んでいきました……。そして、何も見えない真っ暗な世界で、……ぽっと、輝きました。それは温かな、黄金の輝き。それは、黄金の薔薇でした。
※ベアトの姿と喋り方は故意修飾されていますが、この場面は実際にあった場面だと考えられます。ベアトは最初から死ぬつもりでボートに乗ったのです。インゴットは入水の際に重石として使うために持ってきたのでしょう。職人はベアトを助けようとして自分も海に飛び込んだものの、結局、助けることは出来なかったのです。

■夜お茶会
「物語は適当なところで猫箱にしまうべきなのだ。……猫箱を巡っての長き物語なのだから、その終焉も最後までを記さず、猫箱にしまってしまうのが良いのではあるまいか…？」（フェザ）
フェザリーヌは、自分以外に誰もいない書斎で、……誰にともなく、そう語る。もちろん、誰かが相槌を打つわけもない。しかしフェザリーヌには、それが聞こえたらしい。ウンウンと頷くと、にんまり笑う。
「わかっている。もう少しだけを書き足し、そこで筆を置こう。……それで、そなたとはお別れだ」（フェザ）
※誰と話しているのでしょう？

「カケラの海は広大だわ」（ラムダ）
「殻の中の幽霊」（ベルン）
※『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』のことと思われます。

■数十年後の未来
それは、……肖像画。六軒島の、もうひとりの主の、肖像画。
「……記憶のものに、……まったく同じだ……」（十八）
「右代宮金蔵が肖像画を描かせた職人が写真を持っていました。……それをもとに書き起こさせました」（ゆかり）
「……」（十八）
私は、ただただ、呆然としていた。長く大きいテーブルには、ハロウィンパーティーのご馳走が並び、子供たちがそれを頬張っている。施設の先生が、ほら、お客様がいらっしゃいましたよ―っ、と声を掛ける。　……子供たちが一斉にこちらを向いて、……立ち上がり、駆けてきた……。子供たちの笑顔と瞳が、……私を、歓迎する。あぁ、……知ってる。……みんなの顔を、……私は知っている……。遅かったな、遅かったですね、……ようやく来たよ、やっと来た……。待ちくたび れたぞ、職人ァ。……すまねぇ。来るのが、遅れちまった。そなた、何故、車椅子なんぞ座っておるのか。ほら、手を貸してやるからシャンとせい。ベアトが歩み出て、……車椅子に座る職人に、手を差し出す。職人は、……その手をゆっくりと掴み、……ゆっくりと、……立ち上がる……。……俺は、……。聞けっ。ここにようやく、我らは全員が集ったぞっ。今宵、黄金郷はここに復活する。割れんばかりの拍手が、職人を祝福する。そこには、みんないた。みんな、みんな、みんな。そしてベアトは職人を抱き締める。強く強く、……二度と離さないように抱き締める。本当に、……よく帰ってきたな……。帰ってきたぜ。遅くなったな。……もう、離さぬぞ。　あぁ。俺にもう、離さない。俺たちは、永遠に一緒だ。
※この場面でようやく十八は職人の記憶を受け入れ、職人が蘇ったのです。

■コラムコーナー1

■至りたければ考察するな?

僕が『最終考察』と『真相解明読本』を読んで不思議に思ったのは、EP1からまじめに考察に取り組み、僕より遥かに多くの時間と情熱をこの作品に掲げてきたであろう“考察の先輩方”が、あまりにも至っていなかったことです。全く考察をせずに全EPを終了した僕でも理解できていたことが、理解できていませんでした。何でかなーと考えて、こんな例え話を思いつきました。

あるところに『うみねこ山』という山がありました。その山に登った竜騎士07さんはみんなにこう言いました。「私はあの山で数々の宝を見つけた、とくに頂上の宝は素晴らしかった」。その話を聞いて、多くの人が『うみねこ山』に挑みます。以前に竜騎士07さんが紹介した『ひぐらし山』には多くの財宝が眠っていたためです。ロープウェイが建設中でしたが、完成を待てない人達は、地図も持たずに山に飛び込みました。『うみねこ山』は道が迷路のようになっており、地図を持っていなかった人達はさんざんに迷い、悩み、苦しみましたが、とうとう頂上に辿り着きました。しかし、頂上には何もありませんでした。その人達は竜騎士07さんを口々に罵りました。そして山を降り、二度と『うみねこ山』に足を踏み入れることはありませんでした。

誰もが『うみねこ山』のことなど忘れてしまった頃、ようやくロープウェイが完成しました。僕はロープウェイを使って頂上まで行きました。頂上に着くと他の人から聞いていた通り、何もありませ。しかし、山の頂上からの眺めは最高です。「竜騎士07さんが言っていた“素晴らしい宝”とはこれのことか!」僕は納得しました。「しかし、竜騎士07さんは他にも宝があると言っていた。今度は自分の足で登ってその宝を探してみるか」僕は今度は麓から『うみねこ山』に挑戦しました。絶壁があったため、どの道を通ればよいかわかっており、全く迷うことなく進むことが出来ました。心に余裕があるためか、周囲の自然が飛び込んできました。「こんなところに美しい花が!」「こんなところに珍しい昆虫が!」数々の発見をしながら、僕はふたたび『うみねこ山』の頂上に立ちました。やはり素晴らしい眺めでした。前回よりも空気が澄んでいるためか、より素晴らしい眺めに思えました。そしてふと、竜騎士07さんの言っていた“数々の宝”とは、僕が道々で見つけた花や虫たちであったことに気がつきました。「季節が変われば、また違った花や虫に出会えるかも」そう思った僕は、季節が変わるたびに『うみねこ山』に登りました。果たして予想通り、登るたびに新たな花や虫を見ることができました。そしてふと思いました。「僕は竜騎士07さんが教えてくれた全ての宝を見ることができたのだろうか?」と、おしまい。

“考察の先輩方”は確かに、僕よりも山で過ごした時間は長いです。しかし、道を探すことに集中していて、花や虫に気を配る余裕はなかったのではないでしょうか? 「この苦労に見合う素晴らしい宝が頂上にはあるに違いない」そんな思いが過剰になって目が曇ってはいなかったでしょうか? きっと竜騎士07さんは「頂上に行けば、誰もがこの宝の素晴らしさに気づける」と思っていたに違いありません。しかし、実際はそうではありませんでした。みんな“自分が求める宝”が頂上にあると信じて疑わなかったのです。そしてそんなものはなかったことに失望し、竜騎士07さんを嘘つき呼ばわりするのです。

ちなみに僕にも限界はあります。竜騎士07さんが頂上に登った日は、1000年に一度のベストコンディションで、僕は何度登っても、その美しさを味わうことは出来ないかもしれません。また竜騎士07さんは「このクワガタ、サイコーだよなー」と思っているのに対し、僕は「このカタツムリ、カッコいい!」と思っているかもしれません。しかし、竜騎士07さんも僕も『うみねこ山』の頂上からの眺めは素晴らしく、花や虫も良い」という共通認識を持っています。ですから、多少の認識差こそあれ、同じように『うみねこ山』を愛することが出来るのです。そういうわけで、この本を読んでいる人は手遅れでしょうが、1周目は考察しないほうが良いかもしれません。

■周回プレイのススメ

僕はこの作品を複数回プレイすることをオススメします。犯人は紗音。紗音と嘉音は同一人物である。金蔵はEPの開始時点で死亡している。探偵である戦人(EP5と6ではエリカ)が目撃していない場面の描写は想の可能性がある。これらを前提として再プレイすると、それまでとは全く違った世界が見えてきます。また、僕は作品を6周半(EP1~4を7回、EP5~8を6回、プレイ)しましたが、1周目では特に泣いた覚えはありません。しかし、今では涙なくしては見れない場面がいくつかあります。何故そうなったかというと、長い時間この作品に触れていたため、感情移入しているというのはもちろんあるのですが、より理解が深まったため、登場人物の気持ちに共感できるというのが大きいと思います。1周目の僕はこの作品への理解が不足していたため、泣けなかったのです。

■何故『うみねこ』はここまで評価されないの?

理由は2つあると思います。1つは“この作品を理解できる人間が少ない”。1000人に1人も理解できていないのではないでしょうか? もう1つは“ヒロインの価値観”です。僕は『うみねこ』は『嵐が丘』だと思っています。『嵐が丘』は名作だといわれていますが、実は高く評価する人はあまりいないのです。『買い被られた名作』という本があるのですが、それで真っ先に取り上げられているのが『嵐が丘』です。何故、名作といわれつつこんな評価を受けるかといいますと、ヒロインの“キャシー・アーンショー”が非常に特殊な価値観を持っているためです。この価値観に共感、あるいは理解を示せる人にとってのみ、『嵐が丘』は名作たりえるのです。竜騎士07さんが『嵐が丘』を読んでいるのかは不明ですが、おそらく竜騎士07さんにとって『嵐が丘』は名作だろうと思います。 こんなとんでもないヘードルを2つも抱えるこの作品が“名作”と呼ばれる日は永遠に来ないのではないでしょうか? 正直、僕ことっても他人に勧められる作品ではありません。『嵐が丘』と同じく、大抵の人間には理解できないでしょうから。しかし僕にとってこの作品は紛れもなく“名作”です。

■『うみねこ』は『エヴァンゲリオン』?

僕は『うみねこ』のEP8が出た後の騒ぎで『新世紀エヴァンゲリオン』を思い出しました。TV放送された25話と26話はとんでもない出来で、大騒ぎになったものです。当時、インターネットはまだ普及していませんでしたが、あれが現在で、庵野監督がブログかツイッターでもしていたら、炎上どころか爆発していたのではないかと思います。しかし、一人ひとりのファンの怒りの深さは『うみねこ』の方が大きいのではないかと思います。というのは『新世紀エヴァンゲリオン』の場合、悪いのは明らかに庵野監督でした。手抜きの作品を世に送り出して開き直っているのですから当然です。ですから、ファンはただ庵野監督を責めればそれでよかったのです。しかし『うみねこ』の場合、竜騎士07さんは「考えれば分かる」と言って世に送り出しました。ということは“わからない”のは竜騎士07さんが悪いのではなく“わからない自分”が悪いのです。これは辛いです。竜騎士07さんに「わからないのはお前が馬鹿だからだ」と言われているも同然なのですから。そういうわけで逆ギレしたファンは、やり場のない怒りを竜騎士07さんにぶつけるのでした。

■真相が明かされなかったけど?

この点を評価しない人が多いと思いますが、僕は評価しています。というのは、それゆえに僕は“この作品に挑む楽しさ”を味わえたから(味わえているから)です。僕はこの作品を6周半しましたが、新たな発見がなかったことは一度もなかったです。どの周でも必ず、新たな答えと新たな謎に出会いました。この“新たな発見”が無茶苦茶楽しいのです。こんな楽しみがあることを30年以上生きてきて、初めて知ることができました。これはこの作品に挑んだ人間にしか味わえないものです。ですからこの本を読む人はある意味気の毒です。この楽しさを味わうことを自ら放棄することになるのですから(「まだ自分は本気を出していないだけ」と思える人は、ここでこの本を閉じてもう一度この作品に挑むことをオススメします。そして「これ以上お呼ばがかけても無理」というところまでいったら、再びこの本を開いてください)。

あと“ネットの集合知”のレベルの低さにも感謝です。ネットで調べても僕が求める答えを見つけることが出来なかったが故に、僕はこの作品に挑んだのですから。そしておそらく、この本を読んでさえ、この作品を理解できない人が大勢いると思います。そういった連中を哀れみ、優越感に浸る楽しみもあります。いったい一粒で何度美味しいのでしょう、この作品は。

トピック考察(五十音順)

■赤字とはどのようなもの？
※はじめて出て来たのは、EP2の以下の場面です。
「妾とそなたのゲームに新しいルールを追加しようと思う」（ベアト）(EP2)
「新しいルールぅ?!　…どうせお前が有利になるルールなんだろう?!」（戦人）
「まさかまさか。そなたらが求めて止まなかったものを与えようというのだ。貴様ら無能どもがいつも嘆いてみせる思考停止の理由、“情報不足”！　そして、それに対し情報を与えると今度はその情報の真偽を疑う“根拠否定”！　便利よのぅ？　無能を棚上げする奇こ小気味良い言葉よ。この便利な言い訳を妾は取り去ってやろうというのだ。感謝するが良い、くっくっく！」（ベアト）
「扉から入ったというお前に対し、俺はそんなはずはないと否定した。…－その否定が逃げ口上だと言いたいのか」（戦人）
「そうだ。だから妾はこれより、《赤：真実を語る時、赤を使うことにする》」（ベアト）
「ど、どういうことだ…?!　説明を怠るな！」（戦人）
「妾がどのような魔法の一手を仕掛けようとも、そなたには常に“情報不足”や“根拠否定”を繰り返すことで延々と逃げ続けることができる。…これでは最終的に妾が勝つことが変わらぬとしても、あまりに退屈を極める。…－その為、妾はそなたが望む“情報”と“根拠”を与えてやろうと思う。しかし、そなたは妾の言葉ひとつひとつを疑って掛かるだろう。それ自体は悪いことではない。妾もそなたを屈服させるためにあらゆる手を指す。互いに最善手を探りあうその姿勢は嫌いではない。…－しかしそれではゲームにもならぬ。だからこのルールを設けた。《赤：妾が赤で語ることは全て真実》！　疑う必要が何もない！」（ベアト）
「それを信じろというのか…！」（戦人）
「妾はそなたとゲームをしている。ゲームのルールは神聖！！　それを軽んじる者に参加の資格はないッ！！」（ベアト）
※そして、以下の記述もあります。
夏妃は、何とか今年も乗り越えて、右代宮家の名誉を最後まで守ってみせると豪語し、金蔵は頼もしいとそれを讃える。ベアトもまた、夏妃の貫禄を、蔵臼よりも当主に相応しいと讃えている。……しかし、……この書斎に今いる、本当の人数は…。それを思った時、…－いや、思っただけで、ベアトが胸を押さえて呻く。(EP5)
「…－安心しろ。ここはゲーム盤の、まだ外だ。だから俺は、そこにいるお前や祖父さまを否定はしない」（戦人）
胸の奥の痛みを抑えるベアトの手に、俺は自分の手を重ねる…。俺はすでに、ベルンカステルに対して言っている。魔女幻想を否定するのは、１９８６年の親族会議の二日間だけで充分なのだ。
「《青：お前は前回、全ゲームの開始時に祖父さまが死んでることを赤で宣言した。しかし、ゲーム開始以前の祖父さまの生死については言及していない。…－つまり、今この場に、祖父さまが存在していても、何の矛盾もないってわけだ。》」（戦人）
彼女に触れる俺の手が、ほのかに青く光を放ち、…－彼女の胸の奥に染み透っていく。その光は、ベアトの胸の奥の棘を、…－やさしく包み込む…。
「…－《青：そして、この場にいるベアトリーチェの存在だって、否定することは出来ない。ゲーム盤の外、即ち１９８６年１０月４日以前の島の人数については赤で宣言されていないんだ。だから、ここにベアトリーチェが存在しても、何もおかしいことはない。》」（戦人）
※つまり特別に言及しない限り、赤字はゲーム盤の中においてのみ通用するルールであることがわかります。このことは以下のようにEP8でも再び取り上げられています。
ゲームマスターである戦人には、赤き真実を使うことも出来る。しかし、赤き真実というルールは、魔女のゲーム盤にだけ出てくるものだ。ニンゲンの世界に、赤き真実など、存在しない。自らが見て、聞いて。…－信じるに足ると、自らが信じたものを、赤き真実として受け入れるのだ。(EP8)
※また、以下のように本人の信じる信じないにかかわらず、真実こしか使えないようです。
「そなたは、右代宮明日夢から生まれた」（ベアト）(EP4)
「《赤：俺は、右代宮》、…－、…－ふぐ、……－っ?!　…－?!?!」（戦人）
その時、突然、息が詰まる…。急に窒息したような息苦しさに襲われた。ど、……どういうことだ…－？　も、…－もう一度…－。
「俺は、右代宮明日夢から生まれた…。…クソ、俺は右代宮明日夢から生まれた…。……－な、何だ？　さっきまでは簡単に出来てたのに、急に赤がうまく出来なくなったぞ…?!」（戦人）
「……－復唱を拒否するのか？」（ベアト）
「拒否なんかじゃねぇ…！！　なぜかうまく行かねぇんだ…！！　俺は右代宮明日夢から生まれた…！！　何でだッ?!　畜生、何で赤が使えないんだ?!　そんな馬鹿なッ?!?!」（戦人）
※以上のようにゲーム盤の中では絶対的なルールではありますが、以下のように柔軟性を持つことも判明しています。
「自分のトリックを否定する赤き真実は、大きなルール違反だ。しかし、その赤き真実に抵触しない別のトリックに即座に差し替えられるなら、いささかアンフェアではあるが、その赤き真実は認められる」（フェザ）(EP6)
※赤字は死亡の確認の為に使用されることが多いのですが、どのタイミングでの死亡を確定しているのかが不明でした。しかし、EP8のベルンの出題で以下のやりとりがあります。
《赤：第一の晩の犯人は確実に６人を殺している。》(EP8)
「“第一の晩の犯人は確実に６人を殺している”。もしこいつを、第一の晩の時点で言われていたなら、俺は素直に受け取っていたかもしれない。しかし、第二の晩の時点で言われたことを加味すると、別の意味も見えてくる…！」（戦人）
「まさか、……－第二の晩の殺人までを含めて、“確実に６人を殺している”という意味なのか…?!」（ベアト）
※つまり赤で死亡を確定されたその時点での判定であることがわかります。ということは、EP3の第一の晩における連續密室で死亡が確定した人間は、以降の殺人には関わらないわけです。ところが以下の２つのやりとりが存在します。
「いやその、……－そ、そうだ！　二重人格とかはどうだ…！　元々お前が鮎羽伯母さんのもうひとつの人格であったように、…－例えば、朱志香にもうひとつの、魔女的人格があって、それが“朱志香以外”を名乗って南條先生を殺したとか…！！」(EP3)
「惜かね。すでに赤で語っているわ。《赤：朱志香の目は完全に塞がれていて、彼女に殺人は不可能》！　彼女にどんな人格が憑依しようとも、彼女の肉体では殺人を行なえないの！」（エヴァ）
「本来、人は人であり、人格そのものを指して人とは呼びません。しかし、人格を人と認めるニンゲンたちにとって、それはさながら他人のようなものでしょう…」（幽子）(EP6)
私たちにとって人格が人そのものならば。たとえ同じ肉体を共有していても、異なる人格を指して別人であると言い切れるだろう。人は同じ人間であっても、別人になる得る。いや、生い立ちと無限の可能性によって、無数の数の別人になる得るのだ。
※前者においては“別人格”による赤字のすり抜けを否定していません。また、後者においても“人格を人と認めても良い”という趣旨の発言がなされています。つまり複数の人格を持つ人間が、特定の人格を赤字で死亡確定されても、別の人格で行動することが肯定されているのです。全EPを通じてこのトリックが最大限に活用されていると考えられます。一方で以下の２つのやりとりで、根拠もなしに絶対性を持つがゆえに、ミステリーとしては切り札になりえないことが判明しています。
「戦人。…－謝罪しマス。私たちは全力では、ありませんデシタ」（ドラ）(EP5)
「……－わかっていますよ。…－《赤：“金蔵は全ゲーム開始時に死亡している”》。すでにベアトによって語られている真実です。……あの戦いは、戦人くんには、引き分けに持ち込めれば上々。勝ち目は絶対にないはずの戦いでした」（ワルギ）
「…－そうだな。…－一言そう言われちまえば、それで終わっちまう戦いだった。…－なぜ、その赤を使わなかった？　まさかステイルメイトだからとでも言うのか？」（戦人）
「《赤：ノックス第２条。探偵方法に超自然能力の使用を禁ズ。》その赤き真実を、私たちは直接使うことが出来マセン」（ドラ）
「《赤：右代宮夏妃は犯人にあらずッ！！！》」（戦人）(EP5)
赤き真実は、証拠も証明も必要なく、ただ、真実……！！　これでドラノールをよろめかす…！！　例えそこまでだとしても、…－俺に残られる、最初で最後の一撃だ

…！！
「《赤：ノックス第2条。探偵方法に超自然能力の使用を禁ず。》」（ドラ）
……え……、　俺の、……赤き真実が、……ドラノールの赤き太刀に、弾き飛ばされる……。
「……この法廷で、魔女以外が赤き真実を語るなら、それに相応しい証明を構築してちょうだい。エリカはこれまで、その手順を踏んできたはずよ…？」（ベルン）
確かにエリカ自身は、ここで一度も赤を使っていない。……常にその証言は、御霊要求の形で、魔女であるベルンカステルにさせている……。
「あなたのその赤き真実は、あなたが自分で手に入れたものではないわ。……超常存在から授けられた、超自然の真実よ。即ち、推理ではない。デタラメな思いつきと同じ、ということよ……」（ベルン）
※以下のやりとりは、赤字同士が矛盾していますが（最初に読むはずの縁寿が読んでいないのに、幾子が内容を保証しています）、これは前者はゲーム盤での赤字、後者は現実世界での赤字であるため、問題はないと考えられます（もっとも何故、現実世界で赤字を使えるのかという疑問が残るのですが）。
「え、……縁寿ちゃん、開いて…！　あの日記は、伯母さんのデタラメが書いてあるだけで何の意味も……」（絵羽）（EP8）
「ごまかしは不要よ。あんたの日記にはあの日の真実が記されていると、すでに赤き真実で断じられているのよッ！」（縁寿）
「……ば、馬鹿な。ゲームマスターの戦人以外の誰が、赤き真実を使えるというのか…！」（ベアト）
「……。……アウアウローラね」（ラムダ）
「正解よ。……“一なる真実の書”は、１９９８年という未来世界の存在。その中身に赤き真実で保証を与えるという大役が、他の誰に出来るっていうの…？」（ベルン）
「……いいわ。赤き真実で約束してあげる。……《赤：一なる真実の書を、封印が解けて一番最初に読むのはあなた、縁寿よ。》」（ベルン）（EP8）
「こういっては何ですが。日記の中に記された内容が真実であるとの保証はあるのでしょうか？　故人の私的記録に過ぎないという穿った見方もあるようですが」（報道者）（EP8）
「いいえ、私が保証します。《赤：日記には真実が記されています。》」（幾子）
※もっとも抜け穴的な解釈もありえます。封印が解けて一番最初に読むのは縁寿でも、その封印をする前に誰かが読んでいたなら、それは赤字に抵触しません（絵羽がした封印と限定されていないため）。
「読きかな人の子よ。……そなたらにも、そしてこの私にも、この中身を見る資格などありはしない」（幾子）（EP8）
※ということですから、鍵を持つ幾子が鍵を開けてその資格がありそうな十八に中身を確認させてから、再び鍵を掛ければ良いわけです。

■明日夢はどんな人？
※実は明日夢に関する記述は作品中に僅かしかありません。
「……あいつ、どーいうわけか乗り物系がダメでなぁ。自転車と車以外はほぼダメだったぜ。どこか遠出しようとすると、アレはダメだコレはダメだ、怖い怖い落ちる落ちるぎゃーぎゃーとうるせぇ女だったさ」（留弗夫）（EP4）
「……彼女（明日夢）がバスや飛行機でぎゃあぎゃあ喚く時、私はその手配と経費を適正に処理できた」（霧江）（EP6）
※乗り物を嫌がったことは事実のようです。
「……留弗夫さんと、最初から付き合っていたのは私だったのよ。……明日夢さんが、白々しく間に入り込んできて、…ちゃっかりと懐妊したのよ。……留弗夫さんは悪くないわ。あの女が、体を武器にして誑し込んで、さらに嫌らしく立ち回って、留弗夫さんに婚約せざるを得ないよう追い詰めたのよ」（霧江）（EP3）
「（明日夢は）……留弗夫さんの取り巻きの一人よ。…いえ、取り巻いてさえいなかったわ。ただのファンのひとりだったわ」（霧江）（EP6）
「話したことはあるんですか…」（朱志香）
「もちろん。……私は彼女のことをよく知ってるわ。留弗夫さんが、明日夢さんの名前さえ知らなかった一番最初からね。……あの子も、きっと頭のいい子だったのよ。狡猾だったわ。……私は、頭の良さで目立とうとしたけど、……彼女はまったくその逆で目立とうとしたの」（霧江）
「……頭の、…愚さで……？」（朱志香）
「くす…。……疫病神の猛き立て方がうまいって意味よ。媚びてイチャついてくる女たちの中で、……彼女の仕草のひとつひとつが、派手な女たちに食傷を起こしていた留弗夫さんには目立って見えたのよ」（霧江）
「明日夢さん、……あんなごぼんやりしてそうなのに。…留弗夫さんを咥え込んだら、離しやしない。……“だから何ですか、どうぞお引取下さい”、ですってよ。……バスひとつ乗るにも、怖い怖いと縋にまってた、あの小娘が。……あの時、悟ったわ。…本当に狡猾だったのは、彼女だったってね。……そうよ、乗り物恐怖症だって、留弗夫さんの気を引くための嘘だったわ。……」（霧江）（EP6）
※以上は霧江の主観であり、霧江の価値観で歪められた明日夢像です。
留弗夫はいつしか、……霧江の力を認めつつも、静かで温かな包容力に憧れるようになっていた。明日夢は、それを全て満たしていた。難しい情況は一切聞かない。話しても、わからないからと首を振る。でも、誰よりも体を気遣ってくれて、静かに毛布を掛けて朝までじっと側にいてくれた…。（EP6）
「間もなく、二人は結婚するわ。……明日夢さんは、それをすぐにお父さんに打ち明けたけど、お母さんは逆だった」（縁寿）（EP6）
※こちらが正しい明日夢像でしょう。“だから何ですか、どうぞお引取下さい”というのは、明日夢が妊娠していたときに、霧江が「自分も妊娠しているのだから留弗夫をよこせ」と迫った時の明日夢の返事だと考えられます。おとなしい明日夢ことって霧江など、女ヤクザみたいなものです。それでも生まれてくる子どもの為に、母親としてなけなしの勇気を振り絞ったに違いありません。それを鋭い霧江に見抜かれなかったのですから、一世一代の大芝居だったことでしょう。
「……だから俺は、お前たち３人に謝らなきゃいけない。……明日夢には、血の繋がらない赤ん坊を押し付けた。……あいつはおっとりしてるように見えて、案外鋭かったからな。……ひょっとしたら、気付いてたかもしれない。…でも、自分を母と慕う戦人を、最後まで愛情たっぷりに育ててくれたよ」（留弗夫）（EP8）
※おそらく本当に気がついていたのでしょう。それでも戦人を自分の子として可愛がったのです。
「……そうですね。私も聞かせてもらったことがあります。……明日夢さまも呆れておられましたっけ。……学校では大層、女性に人気で、トラブルが絶えないのはきっと留弗夫さまの血のせいに違いないと」（紗音）（EP6）
※意外なことに紗音とも交流があったようです。おそらく似たもの同士、話が合ったのでしょう。

■“一なる真実”とはどのようなもの？
真里亞は１９９８年にはいません。死んでいますからね。（すべて）
※いきなりインタビューからの引用という禁じ手ですが、これで少なくとも真里亞が死亡していることは確定です。そのため、顎部の骨は失ったが生きているという可能性は消滅します。また、以下の４つの内容に注目すると、大体どのような内容であったかは推測できます。
「思い出せ。一番最初の願いを。……一なる真実を知ってなお、思い出せ」（戦人）（EP8）
一なる真実。みんな死んでしまって、誰も帰ってこないという非情なる真実を知って、……なお、思い出せ。一番最初の、願いを。
答えは一つしかない。全ての犯人は、彼女（絵羽）なのだ。彼女は全ての財産を独占し、大富豪となった。そしてその後、それを愛息子に受け継がせることが出来なかったことを悔やみ、私（縁寿）を呪った。……あのクソババアのことは、思い出すだけでも反吐が出る。（EP8）
『これが、《赤：六軒島事件の真相なんですって！！》』（EP8）
「……認めないわ」（縁寿）
『あんたが認めなくたって！！　これが真相なんでしょう?!《赤：だって、＊＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊！！　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ッ！！！》』
「……認めないわ、認めないわッ、……そんな真実、私は認めない、……認めない……」（縁寿）
『《赤：あんたが認めても認めなくても、真実は変わらなァい！！　だって、赤き真実で証明された、一なる真実が、これなんだからぁあああああああああああぁ！！》』

くすくすくす、……うふふふふふふふ、はっはははははは…！！　何が真実よ、馬鹿馬鹿しいわね、下らない…！　それを真実かどうか決めるのは私よ？　赤き真実だって、そんなの私は認めない、許さない、絶対に納得したりしない…！！
「赤き真実は絶対?!　誰にとっての絶対?!　あんたたちにとっての絶対でしょ？　私にとっての絶対じゃないッ！！　私の真実は、あんたたちの真実に、穢されたりなんかしないッ！！」（縁寿）
「……縁寿、落ち着いて？　知りたいと願ったのはあんたでしょう？」（ベルン）
「ははははは、あっはははははははははは！！　私の真実は、絵羽伯母さんが犯人！！　絵羽伯母さんがみんなを殺したのよ！！　悪いのは全部絵羽伯母さんッ！！　お父さんもお母さんもお兄ちゃんも、みんなみんなただの犠牲者…！！　誰も悪くない誰も悪くない…！！　だってそうじゃない、だってそうじゃないッ！！」（縁寿）
――伯母さんはいつだって、縁寿ちゃんの味方よ。
「ははははは、あっはっははははははははははッ！！！　ああ、わかったわ、あんたの言葉の意味ッ！　うふふふふ、あっはははははははははははは！！　そうよ、絵羽伯母さん、あんたが犯人よ、あんたが犯人！！　それを認めない世界の方が、おかしいのよ壊れてるのよ…！！　正しいのは私ッ、私は赤き真実を、世界の全てをッ、否定する…！！！」（縁寿）
「……そう。……じゃあ、あんただけに記せる、赤き真実を記して御覧なさい。……でも、ニンゲンはどうやって赤き真実を記すの？」（ベルン）
「あるわよ！！　ニンゲンにしか記せない、真っ赤なインクがあるじゃない！！　正しいのは私ッ！！　間違ってるのが世界！！　私が記してあげる！！　本当の赤き真実で、私が真実を記してあげるッ！！　はっはははははは、あっはははははははははッ！！　記してあげるッ、これが私の記す、真っ赤な真実ッ！！　お前たちの世界の真実など、私は受け入れるものかああああああああああああああああッ！！！」（縁寿）
縁寿の体が、バルコニーを越える。泳ぐように飛べた宙は、なぜかこの時だけ無感覚だった。縁寿の体はまっすぐに、……眼下の闇に落ちていく。
「……」（ベルン）
ベルンカステルは、ただ静かにそれを、いつまでも見下ろしている……。
「……無事で、とはとても言えない姿だったけれど。……良かったわ。帰って来て」（絵羽）（EP8）
「……絵羽、……伯母さん……」（縁寿）
「私のことをいくらでも、憎んでくれていいから。……だから、お父さんとお母さんに、百万回キスをしてあげて。……あなたのことをいつも想っているみんなにも、キスをしてあげて」（絵羽）
「絵羽……、……伯母さん……」（縁寿）
「……あなたのもう一人のお母さんに、どうかたいまと言ってあげて」（霧江）
私はお母さんに背中を押され、……ただただしく歩み寄る。もう一人の、お母さんに。
「……絵羽……、……お母さん……」（縁寿）
「……縁寿ちゃん……」（絵羽）
「あの日、……私が、そう呼べていれば…、……私は、……何も誤ることがなかったかもしれない……。……私たちは、……新しい世界を、二人で生み出せたかもしれない……」（縁寿）
「もういいのよ。……縁寿ちゃんは帰って来てくれたわ。……だから、もう何も言わなくていいのよ…」（絵羽）
「お母さん……。……お母さん……」（縁寿）
「お帰り、縁寿ちゃん…。……あなたは私の可愛い娘よ……」（絵羽）
「絵羽お母さん……。……あなたはいつまでも、……そして最後まで、……私の一番の味方だった……」（縁寿）
二人は静かに抱き合い、……互いの肩に顔を埋めて、泣いた。
※絵羽を犯人だと信じ、憎んでいた縁寿が、一なる真実を識ることによって、完全に考え方が逆転しています。また、縁寿が絶望して自殺を選ぶほどの内容であったこともわかります。つまりEP7のお茶会における内容は到達していると考えられるのです。ちなみに鳴きこのシーンがとても好きです。何故なら、信じていた両親に絶望して自殺を選んだ縁寿が、それ故にもう一人の母の愛に気づき、立ち直ることが出来たからです。

■ウィルの推理の解答は？
「第1のゲーム、第一の晩。園芸倉庫に、6人の死体」
「幻は幻に。……土には帰れぬ骸が、幻に帰る」
※園芸倉庫にあった紗音の死体はマネキンであったと考えられます。これは本物の死体とは違って腐らないため“**土には帰れぬ**”。それでもって本物の“**骸**”ではない為“**幻に帰る**”のです。もしくは完全な秀吉の狂言で、偽の死体すらなかったかもしれません。“**土は土に**”というのは“見たまま”という意味のようですので、死体も偽の死体もないのでは“**土には帰れぬ骸が、幻に帰る**”のは当然と言えます。
「第1のゲーム、第二の晩。寄り添いし二人の胸は鎖で守られし密室に」
「幻は幻に。……幻の鎖は、幻しか閉じ込めない」
※紗音は“今後の計画の打ち合わせ”という名目で秀吉夫婦を訪ねたと考えられます。秀吉はシャワー中ですが、紗音は“既に死んでいる”ため、人に見つからないうちに絵羽は紗音を部屋に招き入れます。紗音は隠し持っていた拳銃で二人を殺害後、鈍器に杭を突き刺して、普通に部屋を出たと考えられます。嘉音として再覚醒した時にはそもそもドアチェーンなど掛かっていなかったのです。後は部屋に入ってからドアチェーンをかけ、チェーンカッターでチェーンを切断したと考えられます。そのため“**幻の鎖**”です。
「第1のゲーム、第四の晩。密室書斎の老当主は炎熱の森の中に」
「幻は幻に。……幻の男は、あるべきところへ」
※金蔵は物語が始まった時点では既に死亡しているため“**幻の男**”なのだと考えられます。“**密室書斎**”にははじめからいなかったか、もしくは書斎に踏み込まれる事態を恐れて移動させられたのでしょう。
「第1のゲーム、第五の晩。杭に胸を串ぢし少年の最後」
「幻は幻に。……幻想の魔女と杭は、幻想しか貫けない」
※嘉音の自作自演だと考えられます。そのため“**幻想の魔女と杭**”なのです。杭を抜いたのは本当に刺したら死んじゃうからです。この作品、全編を通じて“杭が刺さっていない死体”は怪しいです。赤字による死亡宣告は“人格死”で潜りるためです。
「第1のゲーム、第六、第七、第八の晩。歌う少女の密室に横たわる3人の骸」
「幻は幻に。……盲目なる少女が歌うは幻。密室幻想」
※“盲目なる少女が歌うは幻”ですので、真里亞は何らかの形で嘘をついていることになります。証言が嘘なのか、壁に向かってずっと歌を歌っていたというのが嘘で、何らかの形でベアトを制動したのか(扉の施錠を解除した、扉を施錠した、電話をかけたなど)、判断できる材料がありませんが…。
「第2のゲーム、第一の晩。腹を割かれし6人は密室に拝謁に」
「幻は幻に。……黄金の真実が、幻の錠を閉ざす」
※最初から鍵はかかっていなかったため“**幻の錠**”なのだと考えられます。現場にいたメンバーによる“**黄金の真実**”です。紗音と嘉音が同席しているのを楼座と郷田が目撃していますが、共犯であるためか、この場面が幻想描写であるためか、もしくはゲームマスターに“見させられている”可能性があります。
「第2のゲーム、第二の晩。寄り添いし二人は、死体さえも寄り添えない」
「幻は幻に。……役目を終えたる幻は、骸さえも残せない」

※嘉音という“**役目を終えた**”だけであるため“**骸さえも残せない**”のだと考えられます。“**嘉音はこの部屋で殺された。**”と赤字で宣言されていますので、嘉音は人格死です。以後は紗音とベアトリーチェとしてしか登場できなくなります。

「第2のゲーム、第四、第五、第六の晩。夏妃の密室にて生き残りし者はなし」

「土は土に。……棺桶が密室であることに、疑問を挟む者はいない」

※紗音が郷田と譲治を殺した後、部屋を内側から施錠して自殺したと考えられます。

「第2のゲーム、第七、第八の晩。赤き目の幻想に斬り殺されし二人」

「土は土に。幻は幻に。……幻に生み出せる骸はなし」

※紗音が縛られて熊沢を殺して、現場にいた源次と郷田と口裏を合わせて偽証したと考えられます。もしくはこの時点では死んだことにして、どこかに隠れていたのかも。

「第3のゲーム、第一の晩。連続密室が繋ぎし、６人の骸」

「幻は幻に。……輪になる密室、終わりと始まりが、重なる」

※客間の紗音は死んだフリ、みんなが移動している間に嘉音になり、今度は礼拝堂で死んだフリをしたと考えられます。最後の礼拝堂と最初の客間で死んでいる人が同じだから“**終わりと始まりが、重なる**”のです。二人の人格を切り捨て、以後はベアトとして行動します。

「第3のゲーム、第二の晩。書斎庭園にて親子は骸を重ねる」

「土は土に。……語られし最期に、何の偽りもなし」

※絵羽が二人を殺害したと考えられます。ただし楼座は誤って殺してしまったと考えられますし、真里亞は叫ぼうとしたのを抑えるつもりで絞殺してしまったのでしょう。銃を回収しなかったのは気が動転していたためと思われます。

「第3のゲーム、第四、第五、第六の晩。屋敷にて倒れし３人の骸」

「土は土に。……語られし最期に、何の偽りもなし」

※絵羽が留弗夫、霧江を殺害したと考えられます。秀吉が射殺されたのは、腹を撃たれた霧江が死ぬ前に最後のあがきで絵羽を撃とうとした際に庇ったのでしょう。

「第3のゲーム、第七、第八の晩。夫婦二人は東屋にて骸を晒す」

「土は土に。……明白なる犯人は、無粋の刃を振るいたり」

※絵羽が織江と夏妃に睡眠薬入りのコーヒーを飲ませて絞殺(銃だと銃声が二階に聞こえるため)した後、台車に乗せて東屋に運んだと考えられます。

「第4のゲーム、第一の晩。食堂にて吹き荒れる虐殺の嵐」

「幻は幻に。……黄金の真実が紡ぎ出す物語は、幻に帰る」

※親族会議の出席者全員が口裏を合わせたと考えられます。

「第4のゲーム、第二の晩。二人の若者は試練に挑み、共に果てる」

「幻は幻に。……黄金の真実が紡ぎ出す物語は、幻に帰る」

※朱志香の電話の話は演技だったと考えられます。

「第4のゲーム、第四、第五、第六、第七、第八の晩。逃亡者は誰も生き残れはしない」

「土は土に。幻は幻に。……虚構に彩られし、物言わぬ骸」

※霧江の電話の話は演技だったと考えられます。紗音が戦人以外の全員を殺し、銃が井戸に落ちるようにして自殺したのでしょう。

「第4のゲーム、第九の晩。そして、誰も生き残れはしない」

「土は土に。幻は幻に。……虚構は箱箱に閉ざされることで、真実となる」

※紗音が小窓からシャッターの鍵を投げてもらい、シャッターを開けてから郷田と熊沢に首吊りのフリをさせてから射殺。適当な鍵を郷田のポケットに入れてからシャッターを施錠したと考えられます。真里亞はそもそも礼拝堂には行っておらず、戦人が来る前に屋敷の中に入り、毒薬を飲まされたと考えられます。

「私は、だぁれ……？」

「幻は、幻に。……約束された死神は、魔女の意思を問わずに、物語に幕を下ろす」

※時限爆弾なので時間が来れば爆発します。屋敷周辺にいれば死亡確定です。

■ウィンチェスターM１８９４の威力は？

以上のシナリオに従い、遺体を破壊する。銃創の跡が見つからないように、その部位は丁寧に破壊しておく。フラウロスに、腹を引き裂かれ、腸を引きずり出され、食い千切られ、それを丁寧に再現しておく。(我告)

ベアトは殺戮道具を仕舞うと、次に持ちのライフルを取る。そして熊沢のふくらはぎの辺りに狙いを付け、引き金を引いた。銃声は軽い。……ドラマや映画で聞くような、ドギューンなどという音ではない。せいぜい、シャンパンの栓を抜いたくらいの音だった。しかし、血の塊が弾け、そこにはぶくぶくと血の溢れ出す痛々しい穴が穿たれた。(我告)

※というようにあまりたいしたものではないようです。その一方でEP4とEP7では以下のように描写されています。

……惨いのは誰も一緒だが、紗音ちゃんの可愛らしい顔が半分吹き飛んでいるのを正視するのは、とても辛かった……。(EP4)

怒りの銃口が留弗夫の眉間に押し付けられる。発砲の光が辺りを真っ白に染め上げる。しかし、礼拝堂の壁は、真っ赤に染め上げられた。留弗夫の後頭部で、トマトを潰したような真っ赤な飛沫が、勢いっぱいに広がっていた……。留弗夫の無残な亡骸が、ひさしからぽたぽたと垂れる水滴に晒される。目は見開いたまま。後頭部には握り拳ほどの大きさに、ぐずぐずの焼き肉状の穴が開き、……その中身を外気に晒していた。(EP7)

※どうも、至近距離から発砲するとかなりの威力があるようです。もしくは散弾を使用するとこういうことになるのかもしれません。ということは、以下の死体はウィンチェスターM１８９４を至近距離で発砲したか、散弾を使用して損壊された可能性があります。

(留弗夫たちの遺体は)歯茎が剥き出しになってて口をぽっかりと開けているから！　でも、前歯は飛んでいるし、そもそもそれを覆う頬っぺただってぐちゃぐちゃで剥き出しで！(EP1)

※ところが以下のように、この死体に酷似した状況が人の手でも作り出されているのです。

……だって朱志香の顔面はもう、……鼻は折れ、目は潰れ、……歯も飛び、……可愛らしかった鼻筋はおろか、顔面であったと認めることさえ難しいくらいの、……血塗れの肉塊に、変わり果てていた……。霧江はようやく、銃床で朱志香の顔面を殴り続ける仕事を止める。(EP7)

※ＴＩＰＳにも以下のように書かれていることから、射殺後、銃創の跡を消すために、道具を使って加工した可能性のほうが高いでしょう。

死後に顔面を損壊されたものと思われる。(EP1)

※『我らの告白』には以下の描写もあります

ベアトがソファーの陰に腰を回める。そして再び立ち上がった時、その両手には金蔵のコレクションの、ソードオフライフルが握られていた。ドレス姿とアンティークな銃の組み合わせに、絵羽たちはまるで、貴婦人が扇子か何かを手にしたくらいにしか思わなかった。少なくとも、その銃口が鉛の散弾を吐き出すまでは。

※普通の銃弾だけでなく、散弾も使用できるようです。シエスタ４５とシエスタ４１０はそれぞれ“４５ロングコルト弾”と“４１０ゲージショットシェル”のことを意味していると考えられます。

■絵羽の日記とはどのようなもの？

「……絵羽会長は、秘密の日記を持っていて、それには厳重に鍵前を掛けていて。……出先に行く時も必ず持って行ってた、ってぇ話は、親族仲間から聞いたことがあります」(天草) (EP8)

「……秘密の、……日記……。それがどうしてここに……」（縁寿）
「右代宮絵羽が息を引き取った病室にあったものです」（幾子）
その日記は、ベッドの裏側に隠されていた。その為、絵羽の死後も長く発見されずに、病室内に留まった。それを偶然、病院の関係者か、もしくはその病室に関わった患者か家族が発見したのだろう。……当然、その頃には六軒島ミステリーは、大きなムーブメントになっていた。幸運だったのは、この日記を手にしたウィッチハンターたちが、高尚な人間たちばかりだった点に違いない。彼らは、鍵前を破壊して真実を暴くという無粋を嫌い、……このミステリアスな鍵前の向こうに、あの日の真実が眠っているという事実だけに、純粋に酔いしれた。そのお陰でこうして、……絵羽の日記は、傷一つ付けられることなく現存しているのである…。
「……まさか、この日記に。……絵羽伯母さんが、あの日、何があったのかを記している……、とでも言うの…」（縁寿）
「中を読めば、全てがわかるでしょう。……しかし、その鍵前を外す鍵の行方がわからないのです」（幾子）
私は、はっとする。そして自らの胸を見る。そこには兄が掛けてくれた、あの鍵があるはず……。
「え？　な、……ないッ。か、……鍵…！」（縁寿）
「……どうしたんです、お嬢。鍵って？」（天草）
「私がずっと首に掛けてたでしょ?!」（縁寿）
「……俺は知りませんぜ。鍵なんざ、ぶら下げてましたか…?」（天草）
すぐに理解する。ニンゲンの世界で、私は鍵を手に入れてはいない。鍵を持っている私は、……魔女の世界の、ゲーム盤の上の私だ。
「鍵を持っている私に戻して。この日記を開けるわ」（縁寿）
フェザリーヌが指を立て、くるっと回すと、再び世界はぐにゃりと歪む。フェザリーヌの書斎に戻ると、私の胸にも、すうっと、首に掛けられた鍵が戻ってくる。しかし今度は、同じようにすうっと、……机の上に置いていた日記が消えてしまう。
「日記はどこに?!」（縁寿）
「ゲーム盤のどこかに存在するだろう。そなたに与えられる鍵穴の一つである以上、必ずどこかに存在するはず」（フェザ）
「お兄ちゃんが、どこかに隠している…?」（縁寿）
「……戦人があんたとのゲームを気取る以上、それは恐らく、完全な意味では隠されていないわ」（ベルン）
「どういう意味…?」（縁寿）
「戦人にとって奪われたくないキングであっても。それはゲーム盤に置かれていなければ、ゲームとして成立せぬということ」（フェザ）
「つまり、……あの、右代宮家のどこかにあったということ…?」（縁寿）
「あるいは、すでにそなたには一度、目にする機会が与えられているのかも知れぬ。……黄金郷が一番最初に見せる契約書に、極小の字にて、すでに恐怖なる罠が記してあるかのように」（フェザ）
「……戦人がゲームマスターとして、ミステリーの作法とやらに則るなら。……“手掛りは必ず提示され”、“戦人が負ける選択肢も、必ず提示されている”。……縁寿。思い出しなさい。……あんたはすでに戦人の世界で、絵羽の日記を見ているはずよ」（ベルン）
その時、……私の脳裏に、……この最後のゲームが始まる、一番最初の光景が思い返される。あの礼拝堂で。……祭壇の上に置かれていた、“鍵前の掛けられていた本”……。あの本に興味を示したら、……兄は獣だと、きっぱり言い放った……。
「あれが、……絵羽伯母さんの日記……」（縁寿）
「そうよ。右代宮絵羽の日記。あの日の真実を記した、“一なる真実の書”」（ベルン）
「……一なる、真実の書……。それに、本当の真実が記されているの？　だってそれは絵羽伯母さんの妄言の可能性も……。」（縁寿）
「赤き真実で、私が断じよう。……《赤：右代宮絵羽の日記、“一なる真実の書”には、１９８６年１０月４日から５日にかけての、六軒島の真実が記されている。》」（フェザ）
「……“一なる真実の書”は、右代宮絵羽が記した」（幾子）（EP8）
原稿用紙の山に隠れるように、……絵羽の日記があった。
八城は、ふっと笑いながら、原稿用紙の山を払い除けて、“一なる真実の書”を取り出す。そして、施錠された引き出しを開く。（EP8）
「……縁寿が望むのだ。……この書の封印は解かれる運命にあるのだろう。……縁寿は一なる真実に至り、一なる真実は猫箱の封印を開いて、全てを白日に晒す」（幾子）
その時、廊下に人の気配がする。ノックの音と同時に、ベルンカステルは黒猫の姿に戻る。八城は立ち上がる。そして、開いた引き出しを再び閉めて、施錠する。その引き出しの中には、……黄金色に輝くあの鍵が、横たわっていた……。
「……いいわ。赤き真実で約束してあげる。……《赤：一なる真実の書を、封印が解けて一番最初に読むのはあなた。縁寿よ。》」（ベルン）（EP8）
「偽書作家としての先生は、ネット上で真実に至ったと公言されておりました！　それはつまり、もう先生は日記の中身をご覧になっているということなのですか！」（記者）（EP8）
「……そして、それはもうじき、皆さんにも公開されることとなるでしょう」（幾子）
「こう言っては何ですが、日記の中に記された内容が真実であるとの保証はあるのでしょうか？　故人の私的記録に過ぎないという穿った見方もあるようですが」（記者）
「いいえ。私が保証します。《赤：日記には真実が記されています。》」（幾子）
「聡きかな人の子よ。……そなたらにも、そしてこの私にも、この中身を見る資格などありはしない。……しかし、思えばこれもなかなか愉快な催しであった。死者の眠りを暴き、好き勝手に噂を吹聴する人の子の面白き一面を見ることが出来た。……行くぞ、ベルン。今宵の宴にはこれで充分であろう…」（幾子）（EP8）
その肩に黒猫が飛び乗り、八城は一なる真実の書を抱えて舞台袖に消える。
※縁寿は１９９８年には幾子と会えなかったため、これらの出来事のほとんどが妄想、もしくは平行世界の描写と思われます。しかし、いくつかは現実の描写、もしくは現実に通じる内容であるとも考えられます。問題なのは幾子がなぜ、日記の鍵を持っているのかということです。僕は、絵羽から贈られたのではないかと推測します。まず、絵羽は日記を残した。これは真実を誰かに伝えたいという思いからだと考えられます。それなのに日記は鍵が掛かった状態で発見され、その鍵は見つからなかった。これは絵羽が真実を奇跡に託したからではないでしょうか？　日記の鍵が壊されない奇跡、鍵を持ったものが鍵が壊されないままの日記を手にする奇跡。これら２つの奇跡に真実を託したのです。
伊藤幾九郎の最初の偽書、「Banquet of the golden witch」は、九羽鳥庵で右代宮絵羽が難を逃れるまでを全て描いており、これこそ六軒島の真実ではないかとさえ囁かれ、ワイドショーでまで取り上げられたことがある…。（EP6）
※ということですから、絵羽がこれを読んでいても不思議はありません。縁寿が偽書から幾子に辿りついたように、絵羽も幾子が六軒島の真実に限りなく近付いている者であることに気が付いていました。流石に戦人が生きていたとは考えなかったでしょうが、これだけ真実に近付いている者になら、真実への鍵を与えても良いと考えたのではないでしょうか。ただし以下のように。
「ええ。伊藤幾九郎〇五七六が、私、八城十八の別のペンネームだと見破ったのはあなただけ。実に見事なるかな…」（幾子）（EP6）
※とありますので、絵羽は幾子ではなく、伊藤幾九郎〇五七六に贈ったと考えられます。ちなみにEP8にて以下の内容があります。
「右代宮家長男、蔵臼の妻、夏妃は、日々の不満や鬱積を、日記に記すことでそれを封印するという、ある種のまじないをしていたことが、すでに知られています」（幾子）（EP8）
※夏妃の日記と同じように、絵羽も誰にも見せる気はなかったと考えることも出来ます。しかし、思わぬ事件によって突然の死に見舞われた夏妃と違い、絵羽は以下のように自らの死期を悟っていました。
単調な電子音が、ずっと繰り返されている。衛生的、という名の無機質な白が、その部屋の基調。…そこは、とある大学病院の病室だった。庶民ではとても一夜のベッド代さえ払えないその個室が、彼女（絵羽）の最後の部屋となることは、医師も本人も疑いはなかった…。（EP3）
※もし誰にも見せる気がなかったのなら、体が自由になるうちに処分してしまったのではないでしょうか。

■絵羽は縁寿を憎んでいた？

※最終的には絵羽は縁寿を憎むようになったものの、当初は受そうと努力したし、最期の瞬間まで憎しみつつも気遣っていたと思われます。

当時から絵羽おばさんのことはあまり好きではなかった。一見、やさしくしてくれるけど、お父さんたちのことをどこか馬鹿にしてるような雰囲気が気い。私にも透けて見えていて、それが苦手だった。だから絵羽伯母さんが私を引き取ることになると決まった時、何となく嫌だった。私を引き取った絵羽おばさんは言った。あなたは右代宮家の栄光と歴史の全てを背負わなければならない。そしてそれを背負うに相ふしい次期当主となるために、死に物ぐるいで勉強に励むのがこれからの人生となる。右代宮家のために、残りの人生を捧げなさい。‥‥‥そう言い切った。私は初めての食事でテーブルマナーについて、厳しい指導と詰問を受け、その躾を怠ったとしてお父さんとお母さんへの恩口まで聞かされなければならなかった。初めてのパーティでのマナーについても、同じように厳しい指導を受け、その無様さを公衆の面前で嘲笑され、お父さんとお母さんへの侮辱に耐えなければならなかった。(EP4)

※絵羽の躾は能かに厳しかったでしょうが、それは絵羽にとっては自分が歩んだ道であり、愛情を注いだ譜台にも歩ませた道でもあります。決して縁寿が憎くて歩ませたわけではないのです。また、留弗夫夫婦に夫と息子を殺され、自分も殺されそうになったわけで、怒りを感じるのは当然です。霧江の告白によって、霧江が縁寿を愛していなかったと考えていることから、縁寿こそんな母親を忘れさせるためにも、非難するのは当然のことでしょう。

‥そこは、とある大学病院の病室だった。庶民ではとても一夜のベッド代さえ払えないその個室が、彼女の最後の部屋となることは、医師も本人も疑いはなかった‥。ベッドの上にいるのは、‥‥‥‥絵羽なのだろうか。そうだと言われなければ、信じられないくらいに彼女は老け込み、やつれていた。肩の脇に控えていた体格の良いスーツ姿の男が、インカムで外部と小声でやり取りをしている。‥絵羽の身辺を固める護衛だった。今の絵羽は、事前にアポイントがなければ、誰の面会も拒んだ。部屋が騒がしいのは、まだ明るい時間なのにカーテンを閉め切っているせいだ。‥室内には常に1人、そして廊下とロビーに、さらに3人の護衛が控えている。それらは全て、絵羽の身辺を守るためのもの‥。(EP3)

「‥‥暗い上に空気もひどいわ。カーテンでも開けたら…？」(縁寿)(EP3)

「‥‥‥‥‥そうすると、あんたの依頼した殺し屋が、窓越しに撃ってくるって寸法なのかしらぁ‥‥？」(絵羽)

‥‥少なくとも、絵羽は自分が命を狙われていると信じていた。右代宮家の莫大な財産は、その全てが右代宮絵羽によって占有されている。今や、金蔵の子孫たちは絵羽と縁寿の2人だけ。‥‥絵羽が死ねば全ての財産は縁寿に相続される。…そしてさらに縁寿まで殺されることがあれば、‥‥‥その財産は、縁寿の母である霧江の実家に相続される。

絵羽は、縁寿を長く憎んでいた。大切な一人息子の譜台を失い、‥‥‥自分の財産の相続人が、１２年前のあの日、親族会議を欠席して生き残った彼女だけだということを知ったからだ。絵羽は縁寿を疎み、嫌い、そして憎悪さえした。彼女を特別な学校へ隔離し、人並みの幸福や青春から遠ざけ、生涯を飼い殺すつもりであった。‥‥‥しかし、絵羽は不治の病を患い、その余命は皮肉にも、‥‥１２年前の親族会議で、金蔵に宣告されていたのと同じものになっていた‥。絵羽も縁寿も、‥互いを憎しみあっている。最後の瞬間は だというのに、‥早く相手が死ねばいいのにと、憎しみあっている‥。(EP3)

※絵羽が死ねば、縁寿は須磨寺家から命を狙われることになります。つまり絵羽が自分を守ろうとするのは、縁寿を守るためでもあると考えられるのです。また、本当に心の底から縁寿を憎んでいたのなら、縁寿を真実から遠ざける必要はないわけです。また、以下の内容から絵羽が徐々に心を病み、最終的には縁寿を憎むようになったことがわかります。

老紳士(小此木)は、絵羽亡き後、彼女が築き上げた企業グループを任された重鎮の一人だった。彼の会社はかつて、秀吉の会社と友好的な関係にあり、秀吉や絵羽とも親密な交流があった。その為、秀吉を失った後の絵羽が、唯一本音を漏らせる人物だったともされる。家族を失った絵羽が心を病み、縁寿に辛く当たるようになると、彼はその間の緩衝材的な役割も担ってくれたため、心が救せるほどではないが、縁寿にとっても助けやすい人物だった‥。(EP4)

「‥‥晩年の会長は、少々病んでいた。縁寿ちゃんに相当キツい言葉も掛けたろうが。‥‥‥あれは本意じゃなかったはずなんだ」(小此木)(EP8)

「これが、真実なのよ。１９８６年１０月４日からの二日間の、猫箱の中身よ。この後、絵羽は九羽鳥庵で爆発を逃れて生き残るわ。‥‥‥そして、猫箱の中身を欲するあなたに、最期の瞬間まで沈黙を貫くことで、この真実を、永遠に猫箱に閉ざした。絵羽一人が生還する。いくら警察が事故だと断定しても、世間は納得しようとしなかったわ。そして、亡き夫に代わり会社を切り盛りしようと張り切れば張り切るほどに敵を作り、彼女が壮大な陰謀の女王であるかのようなイメージを作り上げていった。‥‥‥彼女は真実を語りたかったでしょうね。語ったとて証拠もなく、誰も信じない真実を。‥‥‥‥絵羽の心は次第に壊れていった。あなたも絵羽を拒絶し、絵羽もあなたを拒絶するようになった。歪みきった最後の瞬間は、親子の関係、愛息子の面影をあなたに重ねては苦悩し、ますます歪んで壊れて」(ベルン)(EP7)

そんな中、おかしなメッセージボトルが漂着し、話題になっていた。六軒島で黄金を巡る、奇怪な連続殺人事件があったことを疑わせる怪文書。誰もが爆発事故を否定し、陸軍説に傾いた。そんな中、絵羽を犯人だと名指しする説まで生み出され、ますますに彼女を苛んだ。しかし、絵羽はそれでも、それらすらも、猫箱に利用した。そして、死ぬ最後の瞬間まで、彼女は守りきったのだ。その猫箱を開く、鍵前を。

‥‥‥私が絵羽に引き取られた当初、私たちはまだそれほど、険悪な関係にはなかった。私は彼女に何度も聞いた。あの日、あの島で何があったのか。彼女の答えは後に全て、覚えていないに統一される。しかし、彼女も混乱していたのだろう。一番最初だけは、私の問いにこう答えたのだ。何も、話すことは出来ない、と。彼女は口を滑らせたのだ。彼女はあの日、何があったか、知っている。(EP8)

いくつか作中から確実に分かる部分としては「絵羽は何かを知っている。でも縁寿には頑なに最後まで語らなかった」ということ。それといくつかのメタ世界で語られている、彼らが真実だと称するいくつかの描写が、解釈は異なれどある種の共通項が見られるということ。その辺りから考察すれば、細部は違ってもあの島で起こったことが「恐らくある特定の人間がよからぬ事件を起こしたのではないか」と推測できる。(中略)絵羽は犯人ではなく、犯人を知っていてなお濡れ衣をかぶって惰まれ役を買ってでも、彼女は縁寿のために何かを隠しているんじゃないかという推測が成り立つはずです。(最考敬)

※また、縁寿との友好な関係を築くことを諦めた代わりに、憎まれ役を担うことで、縁寿に生きる力を与えたかったのではないかとも推測できます。以下の発言は「地獄で私に馬鹿にされたくなかったら、立派に更生して天国に行けるようになりなさい」という意味なのではないでしょうか？

「くっくっくっくっく！！　そうねぇ、そうでしょうねぇ。‥もいわ、好きなだけ私を罵るといいわ。そしてその評価を、あなたが背負うのよ。‥‥‥清貧が美人、金持ちは死ねというのが日本の文化。あんたはやがて、何をしてもしなくても、日本中から妬みと恨みの象徴に祭り上げられていく。…くっくっくっくっく！　そんな生活の中で生きていくあなたのこれからの人生は、どんなにも歪なものなのかしらね‥？　あんたの味方は誰もいない！　あんたの悩みなど誰も聞かない。あなたを罵ることは公然としたスポーツになる。そしてそれを誰も止めない！　あぁ、縁寿！　うっふふふふふふふふふ、あぁ、本当に楽しみよ。‥あんたはどんな人生を送って、どう終えるのかしら‥！世界中の誰も信用できず、誰も愛せず、誰とも語り合えない人生をたっぷり満喫しなさい‥！！　その苦労話を持って地獄へ堕ちてくるのを、私はのんびりと待っているわ。うっふふふふふ、あはっはははははははは、わーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ、がはっ、げほげほ、がはっ！！」(絵羽)(EP3)

※絵羽自身、自分よりあらゆる点で劣りながら、長男というだけで次期当主の座にいる蔵臼への怒りと憎しみを原動力にして自らを高めたわけですから、縁寿にもそれを期待したのだと考えられます。絵羽の意算は、対象を喪失した縁寿の虚脱感に思い至らなかったことにあるでしょう。何せ自身の場合は“事件”という大イベントで蔵臼を失っていますから。また、絵羽と蔵臼の関係と、縁寿と絵羽の関係では、その“重さ”が全く違います。そもそも縁寿が気に入らないのなら、再婚して自分の子どもを持つなり、養子を迎えるなりという選択肢もあり得たわけで、それをしなかったあたりにも絵羽の本心が伺えるのです。

■絵羽は本当に強いの？

絵羽伯母さんが2、3歩、ステップで間合いを取ると、相変わらずに捻れ捻れしちまう上段後回し蹴りを、親父の鼻先ピッタリ1cmのところで止めてみせる。美容だから何だかで太極拳を始めて、そこから中国拳法に興味を持って、それで空手だテコンドーだカポ　エイラだと渡り歩き、‥最近は何を習ってんだっけ？(戦人)(EP1)

「側頭部直撃だと一発で昏倒するわよぅ？　この間、演武でミスって相方、泡吹いちゃったんだからねぇ？」(絵羽)

絵羽は夏妃と揉み合いになる。すぐに戦人が止めに入るが、絵羽は逆に、戦人の下腹部に鋭い横蹴りを入れて、うずくまらせてしまう。(EP5)

※身長180cmの戦人を一撃で行動不能に陥れるあたり、本当に強そうです。

■EP1～4で本当に謎は解ける？
※インタビューで竜騎士０７さんは以下のように語っています。
(聞き手) 事件の謎そのものは、『EP4』までの情報を総合すると解くことが可能なんですね。(真相５)
可能であると断言します。ただしそれは物語中でも言っているように、私が可能だと思っていても、受け手の皆さんが可能かどうかは別の話なんです。例えば作品の中には「誰が犯人で」「何が理由で」「どうやって」というのを隠したつもりでいる。ただ、「何が理由で」という動機は人の心の問題じゃないですか。(中略) 中には理解できない人もいるだろうと思います。
※また、ウィルも以下のように語っています。
「１９８６年のベアトリーチェを殺せるのは、それを生み出したヤツだけだ」(ウィル) (EP7)
「ヒントは山ほどあったわ。思えば、ベアトリーチェのゲームだったもんね」(ベルン)
「そうだな。‥‥ベアトリーチェと戦人の第４のゲームで、その因縁ははっきりとした。そしてその時点で、ベアトリーチェが誰であるか、そしてその心が、わかった」(ウィル)
「心とは？」(理御)
「‥‥動機だ。‥‥ベアトリーチェが、１９８６年１０月５日に、自らの運命さえ賭す、ゲームのような事件を起こさねばならなかった、動機だ」(ウィル)
「さすがだわ。第４のゲームの時点で、フーダニットとホワイダニットが推理できてたなんて。‥‥じゃあハウダニットは？」(ベルン)
「犯人が誰であるかわかれば、それを推理することは不可能じゃない。‥‥第３のゲームの遠隔殺害は、なかなか器用にやったもんだと拍手さえしたくならァ」(ウィル)
「第４のゲームラストの、私はだぁれ？、はわかった‥‥？」(ベルン)
「１０月５日２４時に必ず、場所を問わずに、殺せる“犯人”。その時点である種の仮説は可能だ。‥‥それこそ、黄金郷のもう一つのお宝、ってわけだ」(ウィル)
「‥‥へぇ。第４のゲームまでに、‥‥即ちあなたは、ベアトのゲームだけで、全ての答えに至れたと？」(ベルン)
「可能だ。‥‥その後の、ラムダデルタのゲームと戦人のゲームは、それをさらに補足するヒントの塊だ。‥‥この、お前のゲームさえもな」(ウィル)
※以上の情報から、EP1～4で謎が解けるのは間違いないようです。まず最初に確定できるのは、フーダニットとホワイダニット。これは以下の２つの部分です。
「‥６年前のことですと、あまり覚えてはおられないのですか？　私は、つい昨日のことのように鮮明に覚えておりますが‥」(紗音) (EP3)
「紗音は記憶力がいいからね。６年前に、戦人くんがどんなことをしていたとか、言っていたとか、よく覚えてるんじゃないかい？」(譲治)
「そういやそうだよな。紗音って妙なところで記憶力がいいんだよな。ちなみに、６年前の戦人はどんなだったんだ？　何かエピソードを覚えてないのかよ？」(朱志香)
「そうですね。‥‥確か、お帰りの際はこう仰っていました。“また来るぜ、シーユーアゲイン。きっと白馬に跨って迎えに来るぜ。”」(紗音)
「《赤：右代宮戦人には、罪がある》」(ベアト) (EP4)
「‥‥どんな罪だってんだ。どうせ、叩いたとか誤魔化したとか、下らねぇ罪だろ」(戦人)
「《赤：そなたの罪で、人が死ぬ。》」(ベアト)
「う、嘘だ…！　俺は誰も殺してなんかいない…！！　じゃあ言えよ！　俺が誰を殺した?!　いつ？　誰を？　どうやって?!」(戦人)
「《赤：そなたの罪により、この島の人間が、大勢死ぬ。誰も逃さぬ、全て死ぬ。》」(ベアト)
「は、‥‥‥はぁッ?!?!　な、何をワケわかんねぇこと言ってんだッ?!　俺がみんなを殺したっていうのかよ?!　俺は殺人鬼かッ?!」(戦人)
「そなたが直接手を下すわけではない。‥‥‥しかし、そなたが罪を犯したからこそ、６年にもわたる歯車の狂いにて、亜澄が生じ、‥‥今夜、これだけの人命が失われるのだ。そなたは、この惨劇の原因の一つである」(ベアト)
※普通に考えて、ただ会いにくるだけで“**白馬に跨って迎えに**”は来ません。恋愛絡みの約束であったことが伺えます。６年間も来なかったことによって、その約束を反故にしたことが戦人の罪だと推測できるのです。ハウダニットは、碑文の謎を解いたことによる黄金の獲得、爆弾の存在、一人三役(紗音、嘉音、ベアト)、これらが状線として登場していれば良いでしょう。まず、黄金の獲得は以下の３つの部分。
「‥片翼の鷲の紋章が刻印されてる‥。‥前に母さんが話してたのを聞いた。‥‥‥これはお祖父さまの黄金伝説の金塊だよ‥‥！！」(譲治) (EP2)
ひとつ１０ｋｇも重さがある黄金のインゴットが、‥何と三つも、テーブルの真ん中に積み上げられていた！
「‥え、えぇ。旦那様が仰るには、‥黄金伝説を裏付ける黄金は、１つしか見付かっていないのだそうです。その１つをですね、旦那様はお持ちになられていたのです。そして、こうも仰っておりました。お爺様の黄金伝説を裏付ける黄金はこれ１つしかないとも‥」(熊沢) (EP2)
しかし、気になる点もある。“碑文を解いた者”が、右代宮家に連なる人間に限定されていない点だ。原文通りなら、謎を解いた人間がどこの馬の骨であっても、右代宮家の家督を継承できることになってしまう。いや、それどころか、右代宮家の全ての財産を何者かに奪われてしまう可能性だってあるのだ。(EP3)
迷わず、灯りのスイッチを入れると、まるで妖魔か何かを思わせるような無骨な灯りが点々とつき、地下へ伸びる階段をぼんやりと浮かび上がらせる‥。灯りがついたはずなのに、むしろその薄暗さを引き立てているようで不気味だった。灯りのスイッチ以外にも、開閉と書かれたスイッチもあった。‥これで、多分、開・閉が可能ができるのだろうが、もし万が一、開けるの方が壊れていたら、私(絵羽)はこの不気味な地下に、永遠に閉じ込められてしまうかもしれない‥。だから私は、とりあえず、開閉のスイッチには触れず、‥‥銃を構え直して、ゆっくりと階段を下りていく。(EP3)
※まず1つ目で、犯人が黄金を入手していることがわかります。２つ目で、右代宮家の親族でなくても黄金を継承できることがわかります。３つ目で、既に誰かが地下貴賓室に出入りしていたことがわかります。爆弾の存在は多くの状線があるため、以下に列挙します。
「‥‥‥‥‥あれ‥。‥‥確かさ、この辺りに小さい岩の上に鳥居みたいなのがなかったっけ。‥そうだ、確かにあったぜ。島に近付いてくると最初に迎えてくれる目印みたいなもんだったからよく覚えてるぜ」(戦人) (EP1)
「へー、戦人すごいじゃねぇか。６年ぶりなのに、よく覚えてるもんだぜ」(朱志香)
「あったね‥！　僕も思い出したよ。鎮守の杜と鳥居みたいなものが、岩の上にぽつんと建ててあったよ。‥‥そう言えばないね。去年は確かにあったと思う」(譲治)
「ない。ない。うーうーうー！」(真里亞)
「大方、波か何かでさらわれちまったんだろー？　小さい岩だったしな、だいぶ風化で脆くなってたんだろさ」(戦人)
「私もそうだと思ってるんだけどよ。なくなっちゃったのはこの夏のことなんだよ。何でもよぅ、」(朱志香)
※波の穏やかな夏に、鎮守の杜と鳥居が建てられるほどの岩がなくなってしまうのは不自然です。
その後、やって来た警察により現場検証が行われました。最後まで生き残ったと思われる子どもたちの遺体はついに発見されませんでしたが、発見された身体の一部や、想像を絶する凄惨な現場状況で、警察は子どもたちも含めた18人全員の存命は絶望的だと思わざるを得ませんでした‥。それから数年後。近隣の島の崖崩れで波間を漂う不思議なワインボトルが、漁師によって引き上げられました。その中にはぴっしりと細かい文字で書かれ、細く丸めたノート片が詰め込まれておりました。それこそが、‥‥‥‥この、物語。筒に包まれた１９８６年１０月４日からの謎と怪異に満ちた二日間の正体を、人々はこのノート片によって初めて知ることになります。そしてワインボトルのノート片は、この謎に満ちた事件を語りつつも、その真相については語っていません。書き記した人物の自筆によれば、‥彼女の名前は右代宮真里亞。なお、警察による懸命の捜査の結果、真里亞については、身体の一部、‥頭部の一部が発見されています。歯科の治療記録により誰の遺体の一部であるか特定できた貴重な例でした。‥その凄惨な状況に、誰の身体の一部か特定できない部位も多数あったのですから、その頭は非常に幸運な一部だったと言えるでしょう。(EP1)
今度は、譲治の全身に赤い模様が広がっていきます‥。それはまるで、紅茶にたっぷりと落としたミルクが描くかのような美しき霧模様。それらがじわりと、そして全体に、広がっていきます。やがて、‥‥その赤い模様はさらに隣の朱志香にも‥‥。もう譲治は人の形をしてはいません。‥まるで、お料理でおいしいお肉を削いだ後に残した残骸の山のよう。‥せいぜい、人の痕の痕跡を残すのは、下顎の部分とあばら骨の形状くらいでしょうか。そして、赤い模様がどんどん色濃くなる朱志香も、同じ末路を辿ることは明白でした。哀れ、朱志香も同じ末路。‥譲治と同じ、お夫妻さんの残骸のよう。真里亞の全身にも赤い模様がじわりじわりと触んでいきます‥。(EP1)
「真里亞。ママがもしも倒れたら。あなたは走りなさい。海岸へ行くの。そして泳いで泳いで泳ぎなさい！　この島のどこにも、生き延びることのできる場所はないッ！！」

（楼座）（EP2）
「……で、一足早くその隠し館で待っていた絵羽伯母さんは、そのお陰で事故の難を逃れた。と？　絵羽伯母さんが、全ての財産を奪うために、事故を装ってみんなを殺し、自分だけ難を逃れただけかもしれない」（縁寿）（EP4）
右代宮絵羽は、１２年前のあの日。……なぜかひとり、屋敷から２kmも離れた隠し屋敷にいて、難を逃れた。（EP4）
※これは逆に言えば屋敷から２kmも離れなければ助からなかったということです。
「警察が、あれだけ散々調べて、事件性を見出すことが出来なかった。……警察がそう断じた。それで六軒島殺戮はお決着じゃないのかなぁ」（小此木）（EP4）
※どのEPも毎回１０人以上の他殺死体が発生しているわけで、警察がそれを発見できなかったということは、よほどのことがあったと考えられます。
その先の急傾斜を越えると、……急に視界が開けて、鮮烈な海の風が、ざあっと私（縁寿）の髪を散らした……。そこはさながら、ちょっとした丘の上だった。……眼下には、島の広大な眺望が。私には荒れ果てた森と岩場が広がっているようにしか見えない。……でも、何となく、あの辺りが屋敷だろうと察しが付いた。その丘からの急な下り坂は、１２年間の風雨で土砂が崩れてしまったのかもしれない。（EP4）
※屋敷が完全になくなってしまうほどの何かが起こったことが、この場面でわかります。
すると、……殺人の目の前に、カーテンのように透けた、希薄な姿のベアトがもうひとり、現れる。……磔にされているベアトはもう気を失っている。しかし、新しく現れた希薄なベアトは、無表情な瞳で、……静かに俺を見て、……そして、言った。（EP4）
「……《赤：右代宮戦人。今から私が、あなたを殺します。》……《赤：そしてたった今。この島にはあなたと以外誰もいません。この島で生きているのは、あなただけです。島の外の存在は一切干渉できません。》……《赤：この島にあなたはたった一人。そしてもちろん、私はあなたではない。なのに私は今、ここにいて、これからあなたを殺します。》……私は、だぁれ…？」（ベアト２）
※希薄で無表情なもう一人のベアト。時限爆弾という物体であるためと考えられます。また、誰もいないのに戦人を殺せるということで、人ではないことがわかります。一人三役は戦人の前に紗音と嘉音が同時に現れることはないこと、嘉音の死体が消えること、また以下に列挙する内容でもわかります。
紗音がベアトリーチェについて知っていることはそう多くない。まず、彼女は幽霊のような存在で神出鬼没。そして誰にでも知覚できるわけではないらしい。何でも、人毎に波長のようなものがあり、魔女を知覚できるか否かについては激しい個人差があるのだという。こうして言葉を交わせるほどに交流できるのは紗音と嘉音だけ。（EP2）
※何故、紗音と嘉音だけが言葉を交わせるのかというと、同じ肉体に宿る人格だからです。
魔女はにやりと笑うと、源次を置いてさっさと歩き出す。……その足取りは、屋敷の中を充分に知った家人のようだった。源次はその後を仕えるように追う。ちょうどその時、客間から霧江が出てきた。…化粧直しにでも出たのだろう。そして、源次を従えるようにして歩く魔女の姿を見て、表情を崩さぬ程度に驚いた。（EP2）
「……初めまして」（霧江）
「留弗夫の後妻だったか」（ベアト）
※ベアトは、屋敷の構造を熟知しており、初対面であるはずの霧江の名前を知っていました。紗音だからです。
謎の女は霧江に言った。名乗らず、うすうす想像がついているくせにと嘲笑った。……そこから連想する人物。…そして、彼女と瓜二つの、肖像画の魔女…。（EP2）
※遠目では肖像画の魔女と見分けが付かなかったわけで、六軒島でそのような変装が出来そうな人物は、紗音か嘉音か朱志香しかいません。しかし朱志香はこの時、戦人や譲治と共にゲストハウスにおり、抜け出してくるのは難しいでしょう。
「真里亞は、以前にベアトリーチェと会ったことがあるの…？」（楼座）（EP2）
「うー。毎年会ってる」（真里亞）
「毎年…？　この、六軒島のお屋敷で？」（楼座）
「うー」（真里亞）
「いつから会ってるの？　何年前から！」（楼座）
「…うー。……わかんない」（真里亞）
「わからない?!　どうして！　去年？　一昨年?!」（楼座）
「……もっと前から。……うー」（真里亞）
…この島には右代宮家の屋敷があるだけだ。だから、この島に自分の知る以外の人間がいるわけないのだ。なのに真里亞は、何と毎年、親族会議の席にあの怪しげな女と出会っていたという……。
「うー！　ベアトリーチェにね、お手本書いてもらうの！　ほらほら、見て！　見て！」（真里亞）
真里亞は嬉々としながら手提げを漁る。……そして、一冊の自由帳を取り出し、そのページを開き始めた。真里亞が開いたそれらのページには、これまた不気味な魔法陣が書かれていた。……しかもそれは一目見て、真里亞が書いたものではないとわかった。筆圧や線の太さ、図形の綺麗さ。……これだけから書いた人間の素性を推し量ることはできないが、確実に真里亞より年齢の高い人物が書いたことは理解できる。
「うー。真里亞はベアトリーチェの弟子だから、お師匠の言うことはちゃんと聞くの」（真里亞）
※ベアトは真里亞に何度も会っており、さらに文字まで残しています。つまりベアトは実在していることがわかります。また、人格の話は以下で取り上げられています。
「いやその、……そ、そうだ！　二重人格とかはどうだ…！　元々お前が絵羽伯母さんのもうひとつの人格であったように、……例えば、朱志香にもうひとつの、魔女的人格があって、それが“朱志香以外”を名乗って南條先生を殺したとか…！！」（戦人）（EP3）
「最かね。すでに赤で語っているわ。《赤：朱志香の目は完全に塞がれていて、彼女に殺人は不可能》！　彼女にどんな人格が憑依しようとも、彼女の肉体では殺人を行なえないの！」（エヴァ）
※以上のことからEP1～４で謎を解くための伏線はきちんと用意されていることがわかるのです。

■EP2で真里亞のジャックオーランタンのマシュマロ菓子をどうやってベアトは元に戻したの？
真里亞が手に持っているあのお菓子を楼座は突然奪う。するとそれを地面に叩き付け、何度も何度も踏みつけた。（EP2）
魔女は、真里亞が憧り縋っているお菓子に気付く。…それは楼座が踏みつけて惨めな姿になった、真里亞のお菓子。（EP2）
「……うー。踏んづけて潰れちゃった。……ベアトは元に戻せる…？」（真里亞）
「容易いことよ。貸すが良い」（ベアト）
…即興の民謡のような、歌うように語る不思議な言葉と共に、魔女はお菓子を宙に放る。宙に放り上げたお菓子が、……金色に弾けて…、いや違う。それは黄金の蝶。何匹もの黄金の蝶に散り、…それは宙に手をかざす魔女の手に集まっていく。するとそれは、……信じられないことに、……潰った時そのままの綺麗な元の姿に戻っていた…。
※“■魔法とはどのようなもの？”で抜粋してあるのですが、ベアトが魔法で元通りに出来たということは、元通りにする方法を持っていたということになります。その理由は以下の通りです。
真里亞にとっては、今朝、楼座に買ってもらったジャックオーランタンのマシュマロ菓子が何よりの宝物なのだろう。…何本も買ってもらったらしく、会う人会う人にトリックオアトリートを求めては、逆にお菓子を与えているのだった。（EP2）
「…そうだ…。……さっき僕がもらったのと交換してあげるよ」（嘉音）（EP2）
嘉音は、さっき真里亞にもらった同じお菓子がポケットにあったことを思い出す。
※嘉音が同じ菓子を貰っていました。潰れたお菓子をどこかに始末して、それと取り替えたのです。

■EP2 で樓留は何故助からなかったの？
※EP2 において樓留はベアトの共犯者であり、爆弾の存在も教えられていたようです。そしてベアトが死んだ後も生き残っていたのに、結局、爆弾の爆発で死んだと思われます。何故こんなことになってしまったのでしょう。まず以下の描写に注目してください。
「うおおえええええええええええええッ！！　ええええええあああああああああああ！！」（樓座）（EP2）
幼少期のトラウマが蘇る。樓座の胃の中で怪物が暴れ狂い、熱い毒を吹き上げるのを感じた。…そして堪らず、床にそれを吐き出す。
※上記は1章で樓留が親族6人の遺体を発見した場面です。とても演技とは思えません。樓留は親族6人が殺されていることを、この時まで知らなかったのです。あるいは殺されたことは知っていても、こんなエグい加工が施されていることは知らなかったのです。つまり共犯者ではあっても、あくまで協力者であり、計画の全貌を理解しているわけではないのです。その為、以下のような行動をとるわけです。
……しかし、樓座叔母さんもまた、俺と同様に遺体が気になるのは少しだけ意外だった。俺はこの期に及んでも、何かの手違いがあれば、犯人や真相をこの手で暴いてやりたいと思っている。しかし樓座叔母さんは違ったはずだ。……樓座叔母さんは確か、犯人探しよりも身の安全が最優先の方針だったはず。その樓座叔母さんが、わざわざ臨城の客間を出てまで遺体を確認したい理由が少し見えなかった。（EP2）
紗音ちゃんの遺体は、化粧台の前にうつ伏せに、血の海に倒れていた。血の飛沫が飛び散り、酸く割れた鏡で、彼女はこの世で最後の自分の顔を見たのだろうか。…うつ伏せのため、彼女の顔は見えなかったが、見ずとも想像はついた。うつ伏せの血の海に、傍らに転がる悪魔の姿…。……残るのは第四の魂。頭をえぐりて殺せ…。俺の仕は、すっかり疲れきって死んでいたのかもしれない…。こんなことしてはいけないとわかっているのに、…彼女の顔をあげ、それを確認する。……そして、自分の想像が完全に的中していることを、確認した。（EP2）
「こら、戦人くんッ！！　警察が来るまでそっとしておかないと駄目よ！！　勝手に触って、どういうつもり?!　せっかくの現場証拠がおかしくなっちゃったらどうするのよッ！！」（樓座）
樓座叔母さんに激しく怒られ、後ろ襟まで引っ張られる。樓座叔母さんは3人の検死が終わると、この部屋を再び施錠すると宣言し、一方的に俺たちを追い出し、俺に預けたマスターキーを奪い返して、再び施錠した。旅行の兄貴が要求した叔母さんの部屋の、本来の鍵を持っていたらしい。それも回収していた。
※樓留は紗音であることは知っています。その紗音の死が信じられなかったため、確認する必要があったのです。戦人を慌てて紗音から引き離したのも、本当は紗音が生きていると思ったためです。しかし、実際に死んでいることを自分の目で確かめてしまいます。そのため、以下の2つの場面が発生するわけです。
「どこなの、ベアトリーチェッ！！　姿を見せなさいッ！！　ベアトリーチェぇぇぇ！！」（樓座）（EP2）
樓留はとうとう礼拝堂までやって来る。
「その笑いを止めなさいッ！！　……あぁッ、私が笑いたいくらいよッ！！　そうね、アレは間違いなく魔女だったわ、間違いなく魔女だったッ！！　私はわかってなかった、魔女を名乗る人間だと信じてたッ、違うッ！！!…あれは、本当に魔女だった！！　私はあんなのに誤魔化されないわよッ！！　いるんでしょう?!　出てきなさい、姿を現しなさいッ！！　ベアトリーチェぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！！！」（樓座）（EP2）
※爆弾の存在を教えられ、協力すれば命は助けると言われていたのに、その本人が死んでいるわけです。何かのトリックがあると思って、足掻いてみたのですが、どうしようもなく、結局、爆弾の爆発で死んでしまったわけです。以下の場面と同じようなやりとりがEP2の最初の場面であったと考えられます。
「その通りだ。爆発から逃れる方法は二つしかない。一つは、姿しか知らない方法によって、時限装置を解除すること。もう一つは、この格子の向こうの地下通路より島の反対側へ行き、爆発を逃れることのみだ。……見ての通り、この格子の施錠も我が手中にある。いずれの方法で生き残るにせよ、姿を拒むことなど出来ないのだ」（ベアト）（我告）

■EP2 の終盤で戦人は何故、金蔵を目撃したの？
※まず、EP5 にて以下の内容があります。
「ノックス第8条、提示されない手掛かりでの解決を禁ズ！　これまでのあなたは探偵デシタ！　そのあなたが今回は探偵でなく、私見を交える観測者であったことは示されていたのデスカ！！　それがない限り、あなたには主張を偽る権利はありマセンッ！！」（ドラ）（EP5）
※EP2 での戦人は探偵であったこと。また、探偵は私見を交える観測者であってはならないことがわかります。このことは以下のように別の言い方でも表現されています。
無意識に“見間違えること”は、ゲーム上許されていない。しかし、意図的に、見ていないモノを“見たと騙ること”は出来る…！！　そしてそれは、公正な観測を義務付けられた“探偵”には許されない行為……。（EP5）
※そして金蔵については以下のように説明されています。
「俺は今回のゲームで！　碑文の謎の仕掛けを解いた時、祖父さまを目撃している。……すでに赤で示されている通り、祖父さまは存在しない。その目撃は不可能だ！　よって俺の視点に客観性がないことはすでに示されているッ！！」（戦人）（EP5）
「それは風雨につなびくシートか何かを、あなたが誤認しただけの可能性がありマス。ノックス第9条を示す伏線とはなり得ませン…！！　誤認は全ての観測者に許された権利デス！！」（ドラ）
「第4のゲームにてベアトが示した赤き真実！！　全ての人物は右代宮金蔵を見間違わないッ！　つまり、この島では、祖父さまのふりはもちろん、祖父さまに見間違うような一切の現象は、“絶対に適用しないのだ”　風雨につなびくシートを見間違え、それを何であったと誤認して語るのも、ノックス第9条の権利だ。……しかしッ！　祖父さまだと誤認することだけは、赤き真実において、本ゲームでは許されていないッ！！」（戦人）
「……金蔵を見たと主張された時点で、誤認識ではなく、意図的。……即ち、観測の客観性が否定されていることの証。…というわけデスカ……」（ドラ）
※つまり探偵である戦人が金蔵を目撃することはありえないのです。それなのにEP2 では目撃しているのです。これには2つの可能性がありえます。まず1つ、以下のように戦人が泥酔していて正常な判断力を欠いていたためです。
戦人は酒瓶を勝手に開け、存分に飲酒を満喫していた。今や、彼の飲酒を咎める人間などどこにもいないのだ。両足を、贅沢なテーブルクロスの上に大胆に下ろし、気が遠くなるほどの値打ちがあるだろう銘酒を、瓶ごと傾けて味わうのだった…。その時、……ノックが鳴った。戦人はようやく自分のお迎えが来たことを悟る…。
「お～ぅ、鍵なんか掛かってねぇぜ。誰でも入ってきてくれ。そして自己紹介を頼むぜ。人間なら名前を名乗ってくれ。ベアトリーチェだってんならバストのサイズを教えてくれ。俺ァこう見えても、ちょいと知られたおっぱいソムリエなんだじぇえ？　…ひっく」（戦人）
※結構酔っ払っているようです。もう1つはこの戦人が駒だったため。このシーンの1つ前の戦人の状況は以下の通りです。
完全に頭に血の上った俺と樓座叔母さんの間に真里亞が割って入る。真里亞の泣き声に、俺はふと我に返る。…その途端、情けなくなった。涙が溢れ出した。
「……そうなんだよ…。……全部、……魔女のせいだったんじゃないかよ……！！　鍵がどうこうとか、トリックだのアリバイだの……、全部全部馬鹿らしかったんだ！！魔女の仕業なのに、俺たちは同じ人間同士を信じあうこともできなくて…！！　なぁ樓座叔母さん、ニンゲンの犯人なんて最初からいなかったんだ、全部魔女の仕業だったんだ。だから、樓座叔母さんが犯人のわけがないし、俺や真里亞だって、そして源次さんだって他のみんなだって、犯人のわけがないんだあああぁッ！！　どうしてこんなことにッ！！　俺はどうして、……大好きだった樓座叔母さんとこんなことの怒鳴りあいをしてるんだよ?!　やさしくって、大好きだった叔母さんと、……どうしてこんな罵りあいをしてるんだよ?!　何で何でみんなで殺しあわなくちゃならねぇんだよッ?!?!　叔母さんを疑ってなんかいないんだ、誰も疑ってなんかないんだ、全部魔女の仕業だったんだ、ベアトリーチェの仕業だったんだ、全部全部ッベアトリーチェが魔法で行なった事件だったんだッ！！　ベアトリーチェぇぇぇぇぇぇ、頼むからここに現れてくれよ、そして自分が全てやったと俺たちに告白してくれよッッ、もうごめんだ、こんな疑り合いはごめんなんだッ！！　だから俺たちを許してくれ、解放してくれッ、互いの死を見届けあうまで疑りあわなきゃならない地獄から解放してくれ！！　俺にやさしい親戚たちをいとこたちを、返してくれよ！！　もう嫌だ嫌だ全部嫌だッ！！　お前は確かに実在する、お前の勝ちだ！！　姿を見せてくれよ、おおおおおおおおぉ、ベアトリーチェぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！　ベアトリぃいーチェぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！！！」（戦人）
※そして EP3 でも以下のような内容があります
俺はぼんやりと薔薇庭園を歩く。……雨は降っていて風は苛むのだが、俺の体が濡れるわけじゃない。…でも、傘も指さず風雨の真っ只中にいるという、荒涼感だけはあっ

た。(EP3)
「……俺はひょっとすると、…あいつのゲームにとっくの昔に負けているのかもしれねぇな」(戦人)
…実は前回のゲームで、もうはっきり決着はついてしまっていたのではないだろうか。何しろ俺は、一度は屈服したのだから。
「前回、黄金郷の扉がようやく開いたが、お前はサインを拒んだ。…・・記憶にはないだろうがな。お前がサインを拒んだ為、この世界を再び闇に閉ざしてしまったのだ」(金蔵)(EP3)
※戦人はベアトに屈服しているのです。また、この場面では戦人の一人称だったのに、次の場面では三人称に変わっています。あとは以下の2つの内容です。
その魔女とは、…・初対面のはずだった。しかし、…俺はこの魔女を知っている。初対面なのに、…肖像画の中で、…・知っている…・・！(EP2)
「源次。戦人のために酒を振舞え。この男により相応しき酒は何か…？」(ベアト)
「…・若き日よりお前様が愛されている、いつものあのお酒を」(源次)
「それが良いぞ、振舞ってやれ。…・よくぞ来たな右代宮戦人。まずは座れ。……・そなたは妾の名を何度も呼んだな？　それに免じ、妾との面会を許した。…そしてお前は妾に何を聞く？　何を尋ねるのか？　…・黄金郷の扉はもうじき開かれる。魔女たちを迎え入れての妾の復活を祝う宴はもうじきだぞ。…それまでの間、お前の問いにいくらでも答えてやろう」(ベアト)
「き、…・聞きてぇことは山ほどあるッ！！　この島で何が起こった！　そしてどうしてこんな事件が起こった?!　密室については聞きたいッ！！　礼拝堂は?!　朱志香の部屋は?!　使用人室は?!　夏妃伯母さんの部屋は?!　そして客間は?!　聞きたいことはまだまだあるッ！！　魔女の正体は！！　本当にベアトリーチェは魔女なのかッ！！　何が目的だ、俺たちに何をさせたい、俺をなぜここへ呼んだんだッ！！　答えろ全てだッ！！！」(戦人)
「…・お前、…・さっきから何を騒いでるんだ……。…お前が、…・べ、…ベアトリーチェだとでも言うのかよ…」(戦人)(EP4)
「イ～エェェェェェェェェス、アイアァあああムッ！！　金蔵の１３人殺しの儀式のお陰で、ようやく妾は復活したぞ…！！　口があるといい、舌があるといいッ！　こうしてそなたと話せることの何と楽しいことかッ！　そう言えば、お前とはあれだけ何度も何度も惜まれ口を叩き合ってきたのに、こうしてゲーム中に盤上で会話をしたのは初めてだなァ」(ベアト)
「何やらとても新鮮だッ！！　そなたとは確かにこの世界でも何度か会えては来たのだ。まるですれ違うかのようにな」(ベアト)(EP4)
※以上のようにEP2においてゲーム盤で会話をしているのに、EP4では初めてだと言っています。つまりEP2の終盤でプレイヤーの戦人は魔女に屈服し、駒から離れてしまったのです。プレイヤーがいなければゲームマスターは駒を自由に出来ます。このあたりの説明は“■駒とはどのようなもの？”で…。

■EP3の礎台と南縞:謎が殺したの？
※おそらくこの作品中、最高難度の殺人です。犯人と方法自体は簡単です。現に竜騎士０７さんから以下のような発言があります。
(聞き手)南縞殺しの犯人を最後の謎にしたのはなぜでしょうか？(真相３)
あれはお土産です。これが解けないなら、魔女を認めざるを得ないんじゃないかな。でも、今回は頭脳Ｉをかなり丁寧につけたので困しないでください。(中略)それでも赤字に隙があるみたいで、色々な方々がそれぞれの方法で抜けてきます。次回はそれもバサバサ刈り取りますよ(笑)。
※しかし、動機がわかりないのです。EP3では第一の晩の後に、絵羽と楼座が碑文の謎を解いてしまいます。すると以下の内容により、ベアトは人を殺せなくなってしまうのです。
「(赤：妾は約束は守る)。碑文の謎を解けば、黄金郷へ至ることができるだろう。さすれば、儀式は終わる。それ以上、誰も死ぬはせぬ」(ベアト)(EP2)
「…・妾は怪しはする。もちろん人も騙す。人間と変わらぬ。……だが約束として口にしたことを反故にしたことは一度もない。人間はどうか？　約束を、必ず守るのか？」(ベアト)(EP2)
「どうするのです、ベアト。…・碑文の謎を解く者が現れたなら、儀式は取り止める約束ですよ」(ワルギ)(EP5)
「うむ。…そういう取り決めであったな」(ベアト)
「……そういう取り決めだ。うむ」(金蔵)
「ど、どういうことよ。碑文の謎を戦人が解いたんでしょう？　どうして殺人が起こるわけ?!」(レヴィアタン)(EP5)
「わからん。…・いずれにせよ、厄介なことになるぞ。ベアトリーチェさまと夏妃さまにご報告申し上げた方がいい」(ベルフェゴール)
「ベルフェは急いでルシ姉に報告を…！！」(レヴィアタン)
※第二の晩以降の殺人は、誤って楼座を殺してしまった、あるいは黄金を独占するために楼座を殺した、絵羽が起こしたものだと考えられます。しかし、絵羽が秀吉や礎台を殺すわけはありませんし、南縞:は物理的に殺すことが不可能です。正直、正解を出している自信はないのですが、以下に僕が考えるこの殺人の解答を記します。まず考えられるのが、以下の説明による“儀式の終焉による約束からの解放”です。
「儀式に従い、妾は気まぐれに13人を生贄とする。だが、それ以上を殺してはならないとの決まりはない」(ベアト)(EP2)
※ベアトの約束を“碑文の謎を解けば、黄金郷へ至ることができるだろう。さすれば、儀式は終わる。それ以上、(儀式によっては)誰も死ぬはせぬ”と読み解くのです。つまり“儀式と関係ない殺人はOK”という解釈です。現にEP1では儀式が終わったのに夏妃を殺していますし、上記発言の続きは以下の通りです。
「…妾が楽しければ幾人でも殺すッ！！　だから殺す！！　妾を思いッ切り笑わせて見せろよ、家具ぅウウッ嘉音ンンンンッ?!?!」(ベアト)(EP2)
※次は“黄金の魔女を引退したことによる約束からの解放”です。
「うむ。金蔵より返還された、右代宮家当主の証である黄金の指輪だ。今よりそれはそなたのもの。それを指ではめ、兄弟たちの前で高々と掲げるが良い。そなたが今や右代宮家の家督を継いだことに、誰も異論を挟むぬであろうぞ。くっくっくっく。我こそは黄金の魔女ベアトリーチェ！　右代宮家顧問錬金術師！　金蔵との契約に従い、そなたに今こそ全てを受け継ごうぞ。…金蔵に託した全ての黄金。そしてそれにより築き上げた全ての財産。そして右代宮家の家督と名誉。そして、我が力と無限の魔女の称号をそなたに引き継ごう。…・先代に従い、称号と共に妾の名、ベアトリーチェもそなたに譲り渡す。…・今こそそなたが名乗るが良かろう！」(ベアト)(EP3)
「…ベアトは約束したよね?!　真里亞を黄金郷へ連れてってくれるって約束したよね?!　そこではママとも仲良しになれて、みんなずっと笑い合えるの…！　そこへ連れて行ってくれるって、約束してくれたよねッ?!」(真里亞)(EP3)
「……そ、…そのだな。…その約束はもう、…守れぬ。……碑文の謎を解く者が現れたから、…・妾はもう、黄金の魔女ベアトリーチェではないのだ。…・だからすまぬ。…そなたとの約束はもう守れぬ…・」(ベアト)
「あなたが自分で考えるのです。…・幸いにも、あなたはもうゲーム盤の駒を降りて、新しき魔女に委ねました。じっくりと自らについて思案する時間があるでしょう」(ワルギリア)(EP3)
※以上のように、ベアトは黄金の魔女を引退してしまいました。すると黄金の魔女であったときの約束は無効になるという考え方です。現に真里亞に約束は守れなくなったと言っています。次はかなり無茶なのですが“このEPではそんな約束はしていない”です。EP1とEP2のＴＩＰＳの“魔女の手紙”とEP3の“魔女の手紙”は内容が違います。また、真里亞が読み上げた手紙の内容も途中からになっており、特別条項の部分は読まれていないのです。ですからこのEPにおいては、そもそもそんな約束はしていない、と言い張ることも出来るのです。次は“書き手とゲームマスターの癒着”です。これは“■メッセージボトルとはどのようなもの？”で説明する内容が絡んでくるため、簡単に説明してしまいます。偽書の書き手である“八城十八”は現実の結果と同じである“絵羽が生き残る筋書きの偽書”を書いた。一方で“ゲームマスターのベアト”は偽書の内容を破綻なく取り入れたゲームを作ることに失敗した、ということです(“約束を守る”というのはゲームマスターのベアトの約束であり、偽書の書き手とは関係のない話ですから)。最後は“駒のベアトとゲームマスターのベアトは別だから”。これは“■ベアトリーチェは駒のベアトとゲームマスターのベアト、二人いる？”で説明します。“殺人の正当性”の解釈は以上です。以降は第一の晩のあとに何があったのかを推測だけで説明します。絵羽が碑文の謎を解いたことを、何らかの方法で約音は察知します。梯子を持ち出して礼拝堂で作業をしているのをたまたま見かけたのかもしれませんし、あるいはEP7でヤスが地下貴賓室に入ったときにすぐに原次が現れたことから、察知するための仕組みがあるのかもしれません。その仕掛けが礼拝堂で作業を始めれば作動するなら、ある程度時間はあるでしょう。まもなく絵羽がやってくる状況下で、ベアトは荒てて絵羽への手紙を書きます。そこには時限爆弾の仕組みと使用方法を記しておきます。そして絵羽が来ないうちに、どこかに隠して絵羽の様子を伺います。

誰も出入りできない地下貴賓室をベアトは拠点にしていたはずで、ここに煉獄の七枝やキャッシュカードが置いてあったはずです。絵羽と実際に会った可能性もあるのですが、以下のように至近距離だとベアトの正体は、見破られてしまいます。

「こ、……こら驚いたわ……。まさに肖像画の魔女に瓜二つやで……。そのドレス、特注したんかいな……」（秀吉）（我告）

※だとすると、後に屋敷で絵羽ことどめを刺されるはずで、会ってはいないと考えられます。その後やって来た絵羽は手紙を読んで爆弾のことを知り、煉獄の七枝とキャッシュカードを入手します。しかしキャッシュカードはともかく、煉獄の七枝は結構大きいですし、持っていく意味もありませんから、そのまま置いておいたでしょう。ちなみにベアトは荒ていたため、キャッシュカードの番号を手紙に書き忘れていました。その後ベアトは絵羽の後を追跡し、ゲストハウスの様子を伺います。絵羽は楼座を再度説得するタイミングを図っていましたが、廊下での真里亞とのやり取りを聞き、秀吉に協力してもらって窓から抜け出して薔薇庭園に向かいます。絵羽は薔薇庭園で楼座の説得に失敗し、揉み合いの中、楼座は足を滑らせて事故死します。その場面を目撃した真里亞が泣き叫んだため、慌てた絵羽は思わず真里亞を絞殺してしまいます。二人を殺してしまった絵羽は恐慌し、ゲストハウスに逃げ帰ります。ＴＩＰＳに“**（楼座のExecute）彼女こそが、新しい魔女誕生のための生贄…。**（EP3）”とあるように、絵羽は楼座と真里亞を殺してしまったため、魔女の儀式を継承せざるを得なくなるのです。その後、食料調達で屋敷に向かった留弗夫達をベアトと絵羽が別々に追跡します。絵羽は秀吉が残した煙草の吸殻から、霧江が絵羽のことを疑っていることに気がついていたのです。屋敷で留弗夫たちに追及された秀吉は、アリバイ工作した事実を話さざるを得なくなります。そのため、絵羽は不意をついて留弗夫と霧江を射殺します。しかし、膀胱を撃たれた霧江は抵抗せず、絵羽に反撃しようとしますが、それを秀吉が庇って死んでしまいます。これはＴＩＰＳの“**（秀吉のExecute）油断した。まだ生きていたなんて……。**（EP3）”“**（霧江のExecute）腹と言うのは、何ともあっけなく殺してくれる。**（EP3）”から推測できます。絵羽がいつから確文と現在の状況の一致に気付いていたかは不明ですが、絵羽はこの時、以降の殺人を“確文の見立て殺人”に見せ掛けることで、犯行を魔女に押し付けることにします。そして地下貴賓室から煉獄の七枝を持ち出し、三人に確文どおりに突き刺して、再びゲストハウスに戻ります。ベアトはその隙に屋敷に入り込み、紗音の服装で死んだフリをします。三人がこの場で死んでいる以上、確認の為に誰かが来ることは確実だからです。その後、絵羽は蔵臼と夏妃に睡眠薬入りのコーヒーを飲ませ、絞殺した後、薔薇庭園の東屋に運びます。その間に譲治はコーヒーの件で南條の部屋を訪ね、南條から紗音に協力させられたことを打ち明けられます。南條は絵羽が儀式を継承していることを知らないため、以降の殺人も引き続き紗音が行っていると考え、説得できるのは譲治しかいないと考えたのでしょう。その後、譲治は窓からゲストハウスを抜け出し、南條が施錠します。これは譲治の失踪の発覚を遅らせるためです。譲治が説得を終える前に譲治の失踪が発覚し、みんなが屋敷に押しかけては説得に失敗するかもしれないと考えたのでしょう。屋敷にたどり着いた譲治は施錠されているため、扉を叩いて紗音を呼びます。ベアトは南條が真相を譲治に打ち明けたことを知り、扉を開けて譲治を迎え入れます。譲治に誘惑されたベアトは譲治を殺します。既に紗音は人格死しているため、譲治を殺すことに抵抗はなかったでしょう。しかし、絵羽への罪の意識からキャッシュカードの暗証番号を記すことにします。それがＴＩＰＳから推測できます“**（譲治のExecute）彼の魂と引き換えに、魔女は8桁の数字を与える。０７１５１１２９。唱えれば、小さな黄金蟲が、開かれる。**（EP3）”。譲治が帰らなければ、みんなが屋敷にやってきますので、再びベアトは死んだフリをします。これが幻想で以下のように描写されています。

ベアトの眼前で、鏡穴より飛び込んできた黄金の蛇が、愛し合う二人（譲治と紗音）をぐるぐるっと取り囲んで、二人の心臓を瞬時に貫通した。……しかも律儀に、紗音の胸の穴にもう一度、黄金の蛇を貫かせた…。（EP3）

※紗音が２回撃かれているのは、この死んだフリが２回目であるためです。ちなみにこの時に譲治が生きていて、後に南條を殺してから自殺したという説があります。しかし、以下の内容から、とても肯定できる説ではありません。

譲治は、紗音と出会ったことで、生まれ変わろうと決意した。雰囲気に押し流されやすくて、頼まれると断れず、都合よく周りに使われてしまう気弱な自分と決別しようと誓った。…彼女の人生を、より幸福にするために、強い男になろうと決心したのだ。だから。…もしも紗音との出会いがなかったなら、……右代宮譲治という男は、もっと別の、異なった人生を送っていただろう。そしてその人生における彼は、今の彼ほど立派な男ではなかったに違いない。自分が紗音の後を追って自殺するようなことがあったなら、彼女はきっと深く落胆するだろう。……逆だって同じだ。自分が死に、それを追って紗音が自ら命を捨てるようなことがあったなら、自分で自分が許せなくなってしまう。……だから彼は、悲しんだり、怒ったりする感情をはるかに超越して、……感謝することにしたのだ。紗音と出会え、豊かな日々を与えてくれて、…そして自分に、人のために努力することの意味を教えてくれた。その結果、自分の憧れた姿の自分を与えてくれた。…それに感謝しようと思った。（EP3）

※こんなことを考えた譲治が、そのすぐ後に自殺するでしょうか？

譲治の兄貴は、紗音ちゃんの遺体と一緒に倒れていた。胸が真っ赤に染まっている。そして見開いたままの瞳からは、…絵羽伯母さんには悪いが、……生きている気配を感じることはできなかった。南條先生は脈を取るような仕草をした後、…首を横に振り、もはや死んでいることを無言で告げる。それを押しのけ、絵羽伯母さんは再び譲治の兄貴にしがみ付くと、あらん限りの声を張り上げて泣き叫んだ…。（EP3）

※瞳を見開いたまま死んだフリが出来るのかという問題がありますし、探偵である戦人が遺体を確認しています。また、絵羽がすがりついているため、生きているならこの時に気がつくはずです。また、何故、譲治が南條を殺す必要があるのでしょうか？　南條は身拵されたと考えられますが、譲治はどこで銃を入手したのでしょう？　そもそもEP6で以下の内容があります

「１７人いる島だから、６を引いて５を引いてさらに６を引けば、ちょうどぜロになって、所在不明の人間はぜロになる。という思い込みは大変危険です。戦人さんも、この辺の名前と人数のトリックで、第３のゲームの南條殺しで、さんざん苦しめられたはずです」（エリカ）（EP6）

「……そうだな。……あの時のトリックは、１８人分の名前と、実際に存在する１８人が食い違うことで、未知の人物が侵入する余地を許していた」（戦人）

※つまり南條殺しには“名前と人数のトリック”が隠れっているのです。譲治犯人説は“名前と人数の赤字”を抜けるための就であるため、ありえないことがご理解いただけると思います。以下、説明を続けます。事情を知る南條を生かしていては、いつ魔女幻想が破られるか知れたものではありません。そのため、ベアトは南條も殺すことにします。幸いなことに南條は朱志香の治療の為に孤立し、しかも朱志香は目が見えません。すかさずベアトは南條を殺します。譲治もそうなのですが、これらの殺人は“魔女幻想を守るため”なのか“ミステリーとしてのギミック”なのか、イマイチよく解りません。これでもうすることはないのですが、ベアトは朱志香を不憫に思います。このままだと間違いなく絵羽に殺されるためです。絵羽としては爆弾の威力を自分の目で確かめたわけではないし、そもそもそれが本当のことかさえわかりません。自分以外に生存者がいなければ、爆弾の話が嘘で死体が残ってしまっても、いくらでも誤魔化せます。万全を期すなら自分以外の生存者は殺しておく必要があるのです（現に戦人を射殺しています）。そこでベアトはせめて朱志香が安らかに死ねるようにしようと決心します。そして、嘉音のフリをして（本人ですが、嘉音は人格死しているため）朱志香を誘導し、匿います。そして爆発のときまで嘉音のフリをして朱志香を慰めるのです。以上が僕が考えたEP3の真相です。ちなみに以下の台詞：紗音の服装から着替える暇がなかったため、触れられると正体が発覚するからだと考えられます。

「僕は今、蜃気楼の煙よりも儚い存在です。…生者であるお嬢様に触れられれば、たちまち掻き消えてしまうほどに。……だからどうか、触れようとしないでください。…僕も、……お嬢様に触れたい気持ちを、……抑えているのですから」（嘉音）（EP3）

■EP4で戦人の母親が霧江だと確定できる？

※まず“**（赤：右代宮戦人は右代宮明日夢の息子ではないわ。）**/**（赤：右代宮戦人は、右代宮明日夢から生まれた。）**”この二つの赤字が両方とも成立するということは、右代宮戦人は二人いることになります。明日夢以外の女性から生まれた戦人と、明日夢から生まれた戦人です。“**（赤：そなたは、右代宮明日夢の息子ではない）**”以上の赤字があるため、今この場にいるのは前者の戦人ということになります。“**（赤：金蔵の孫である戦人にしか赤縁相手の資格がない）**”ということですから、この戦人は金蔵の血を引いている必要があります。ここでポイントなのが以下の赤字です。“**（赤：戦人は明日夢の息子ではない）**”この戦人は戸籍上も実際上も明日夢の息子です。しかし、赤字でそれを否定されるということは、赤字でいう“息子”とは遺伝学上の“息子”であるということになります。ということは“**（赤：縁寿は、……俺の妹だ）**”と言えるからには、この戦人は遺伝学上で縁寿の兄なのです。縁寿の両親は留弗夫と霧江です。金蔵の血を引いていなくてはならない以上、父親は留弗夫です。ただ、母親を霧江と断定できるかは疑問が残ります。血が半分でも“**（赤：縁寿は、……俺の妹だ）**”と言えるのか判断材料がないためです。そのため結論は“確定できない”です。ちなみにEP8の最後まで行っても、やはり確定はできません。

明日夢さんは戦人くんを身籠ってたわ。そして同じ頃、私もまた男の子を身籠ってた。…運命的なことに、私たちの出産日は共に同じ日だったわ。

「そして明日夢さんは戦人くんを出産したわ。…だけれど私は流産したの。……思ったことがあるわ。もし流産したのが明日夢さんで、出産したのが私だったなら。……留弗夫さんは婚約を解消して、私と結婚してくれたかしら？　……でも私は子どもを産めなかった。だから明日夢さんが死ぬまで。そして縁寿を懐妊するまで、私は明日夢

さんを呪ったわ、姉妹したわ」(霧江) (EP3)
「そういうこと。お母さん(霧江)は、お父さん(俊弗夫)の右腕として活躍しながらも、その陰ではお姉様に、他の女性を切り離していったわ。……お母さんの恋の成就は、もはや時間の問題だった」(緑寿) (EP6)
※とは言ってもこれだけ伏線があるため、確定的ではあるのですが…。ちなみに「戦人は明日夢の息子ではなく、娘ではないか?」と考えることも出来ますが、以下の赤字がありますので、それは否定されます。
「《赤:早く帰ってきて、お兄ちゃんッ!!　私を独りぼっちにしないでッ!!!!》」(緑寿) (EP4)

■EP4の園芸倉庫での殺人はどのようにして行われたの?
※普通に考えれば、窓から射殺したと推測せざるを得ません。しかし、以下のように窓から射殺するのは困難な様子です。
シャッターを下ろし、施錠する。そして縁台は、倉庫の脇の小さな窓へ向かう。それは格子が入った小さな窓で、明かり取りと換気くらいしか出来ないものだった。(EP4)
※実際のところ、犯人は中の二人に呼びかけ、窓から鍵を投げてもらった後、鍵でシャッターを開けて中に入り、二人に首吊りの芝居をさせ、射殺した後、適当な鍵を郷田のポケットに入れて、外に出てからシャッターを閉めて施錠したと考えられます。その証拠が以下の内容です。
「さっき、嘉音くんが使用人室に鍵を戻すところを見たわ。壁にぴっしりと鍵が掛けられていて、とても素人にはどこに何が掛けてあるのかわからなかった。犯人は、その中から倉庫の鍵を見事選び出したのよ? しかも、札も何も付いていない鍵を手にして、薔薇園園園にある倉庫の鍵だと理解した」(絵羽) (EP1)
園芸倉庫のシャッターを破ることにした。斧で殴りつけてシャッターを破り、その隙間から番線カッターを突っ込み、ジョキジョキと鍵の要領で穴を開ける。そして、郷田さんと熊沢さんの死体と、俺は再び対面した……。その結果、新しい事実がわかる。まず、二人は首を吊って死んでいるのではなかった。二人の足はちゃんと床についている。……そして二人の額には、銃で撃たれたような跡があった。ロープの長さは一般的な首吊りを考えると、かなり長めに取られている。その上、二人の身長に合わせて長さが変えてあった。つまり、背の高い台田さんも背の低い熊沢さんも、どちらもちゃんと地面に足がつくことが出来るギリギリになるように、長さが調整してあったということだ。また、そのロープに体重を預けて佇んでいる二人は、どちらも膝から下が少し余っている。これは二人がこのロープを首に掛けて直立したなら、長さが余ることを意味している。多分、直接の死因は頭部への銃撃。郷田さんに預けたシャッターの鍵はどこにあるのだろう…。その鍵は、……彼のズボンのポケットに入っていた。ご丁寧にも、園芸倉庫の鍵とプレートまで付いている。(EP4)
※EP1ではなかったプレートがEP4ではつけられています。これは何もついていなければ、戦人がその鍵が本当に園芸倉庫に鍵なのか確認するかもしれなかったため、念のためにつけたものと考えられます。またＴＩＰＳで“(郷田のExecute)彼らは自らロープに首を掛けた。たまには面白い趣味だった。(EP4)”とありますので、二人の首吊りが自演であることがわかります。

■EP4のもう一人のベアトリーチェは何者?
「……何も、……思い出せぬと、言うか」(ベアト) (EP4)
これにて、未練は尽きたか……?
「……。……う、む…」(ベアト)
望み無き賭けも、賭けねば未練が残ろう。……それで良いのだ。賭けることに意味がある。
「……そうかも知れぬな。…ならば、これにて。妾の未練も、ゲームも、終わりだ」(ベアト)
そなたはどうする…?
「…さぁな。……妾はもう、何の興味もない。……すまぬが、妾はこれにて、ゲーム盤を降りさせてもらいたい」(ベアト)
……そうか。……わかった。
「あとのゲームは妾が引き継ぐ。……そなたは休め」(ベアト２)
「……うむ。……」(ベアト)
「後のことは、全て妾が終わらせる。……そなたは全てを忘れて枕に顔を埋めよ。羽の布団は、そなたを全てからやさしく守ってくれるだろう」(ベアト２)
「後片付けを、……頼む」(ベアト)
「任せよ。……あとのことは全て任せ、眠れ」(ベアト２)
戦人に問い掛けをしていた魔女は姿を消し、後より現れたもうひとりの魔女が残る。確かに瓜二つの、同じ魔女だったが、……その表情はどこかとても淡白で冷め切っていて、……それまでの饒舌いした風とはいえ、元気の良かった彼女とはかけ離れていた。
「……今から、……全て…を、晒すから。……それが、……妾の心臓。……戦人なら、……殺せるから…。……私の全て…。…心臓……。……潰して。……貫いて。……ね……?」(ベアト) (EP4)
……彼女の顔が、少しだけ斜めに傾ぐ。そして、右腕が光を失って、どさりと落ちた。……しかし左腕だけは光を失わず、そのまま天に差し出されていた。すると、……
……戦人の目の前に、カーテンのように迫った、希薄な姿のベアトがもう一人、現れる。……磔にされているベアトはもう気を失っている。しかし、新しく現れた希薄なベアトは、無表情な瞳で、……静かに俺を見て、……そして、言った。
「……《赤:右代宮戦人。今から私が、あなたを殺します。》……《赤:そしてたった今。この島にはあなた以外誰もいません。この島で生きているのは、あなただけです。島の外の存在は一切干渉できません。》」(ベアト２)
……俺は、理解する。これは、……ベアトリーチェが魔女でいることが出来る、……“最後の謎”なのだ。それを、ベアトは俺に差し出そうとしている。俺に、……最後の謎を解いて、殺してくれと、……懇願している……。
「……《赤:この島にあなたはたった一人。そしてもちろん、私はあなたではない。なのに私は今、ここにいて、これからあなたを殺します。》……私は、だぁれ…?」(ベアト２)
※EP7でウィルが解答しています。本来のベアトと様子が違うのは爆弾という物体であるためと考えられます。
「第４のゲームラストの、私はだぁれ?、はわかった……?」(ベルン) (EP7)
「１０月５日２４時に必ず、場所を問わずに、殺せる“犯人”。その時点である種の仮定は可能だ。……それこそ、黄金郷のもう一つのお宝、ってわけだ」(ウィル)

■EP5でエリカは金蔵が死んでいることを知っていたの?
「金蔵さんって、いつから、いらっしゃれないんですか……?」(エリカ) (EP5)
「右代宮、金蔵さん」(エリカ) (EP5)
「……何か。…招かれざる客人よ」(金蔵)
「あなたは、存在していませんね。……遺産問題で、あなたの死を知られたくない人間たちによってその死を隠蔽された、亡霊です」(エリカ)
※恐らくかなり早い段階で夏妃たちが金蔵の死を隠蔽していることを確信していたものと思われます。

■EP5で金蔵の死体は何故見つからなかったの?
※探偵であるエリカが遅刻中をくまなく探しましたが、夏妃のベッド以外の場所からは金蔵の死体は見つかりませんでした。では、金蔵の死体は夏妃のベッドの中にあったのでしょうか?　いいえ、違います。以下の内容をよく読んでみると、とんでもない真相が明らかになります。
「ラムダ。金蔵の２４時から朝までの行方について、確認するわ。……《赤:金蔵は２４時から朝まで、ずっと同じ部屋に滞在したわ。》」(ベルン) (EP5)
「……?　そりゃそうでしょ、死体なんだから。……。…いやごめん。そうよね、そうでしょうね。口を挟まないわ。面白そうだから続けてちょうだい」(ラ

ムダ)
「……これより金蔵という言葉を“生きている金蔵”という意味で使うわ。何しろ、夏妃は生きていると主張するのだから。……続けて赤き真実を語るわ。《赤：金蔵は、屋敷以外の場所には存在しない。》……そうよね？　エリカ」(ベルン)
「はッ、はい、我が主…！！　金蔵の姿を捜し、屋敷の外、敷地内をくまなく捜索しました…！　しかし金蔵は発見できませんでした…！」(エリカ)
エリカは探偵番組により“全ての手掛かりを発見できる”。よって、そのエリカに、“金蔵が屋外に存在するという手掛かり”を発見できなかったということは、金蔵が屋敷外に存在することはありないと断言するのに等しい。だからそのエリカの真実を、ベルンカステルが断言する…。
「《赤：金蔵は屋敷以外の場所に存在しない。》……ねぇ、夏妃。なら“金蔵が存在するなら”、屋敷内のどこかにいることになるわ。どこに金蔵が隠れているのか、心当たりがあったら教えてくれないッ…？」(ベルン)
「……以上の理由から、金蔵さんが、屋敷以外の場所にいることは考えられません。……そこでまず、書斎のあった、3階を徹底的に捜索しました」(エリカ)(EP5)
「だが、どこにも隠れる場所はなかった。……3階に親父の姿は、影も形もない」(留弗夫)
「では、どこにいるんでしょう、夏妃さん？」(エリカ)
「し、知りません…！　3階にいないなら、地下にでも隠れたのではありませんか…？」(夏妃)
「えぇ、地下ですね。ボイラー室、地下倉庫など、怪しげな地下も全て捜索させていただきました」(エリカ)
「えぇ、私も捜したわ…！　お父様の姿なんて、どこにもなかった…！」(絵羽)
「繰り返します。金蔵さんはどこにいるんですか、夏妃さん？」(エリカ)
「な、なら、1階か2階にでもいたのでしょう…！！」(夏妃)
「そうですね、消去法で行くならそうなります。そして1階を徹底的に捜索しました。結果は？」(エリカ)
「……いいえ。お父様の姿を見つけることは出来なかったわ」(楼座)
「繰り返します。金蔵さんはどこにいたんですか、夏妃さん？」(エリカ)
「で、では、2階に隠れていたのでしょう…！！」(夏妃)
「《赤：屋敷以外の場所に金蔵はいない。3階に金蔵はいない。地下に金蔵はいない。1階に金蔵はいない。以上から、金蔵が存在し得る余地の候補は、2階だけとなるわ。》」(ベルン)
「エリカ。それでは端から順に、2階の全てを捜索して行きなさい。……全ての手掛かりを絶対に見落とさず、如何なる隠し扉も隠し部屋も看破できる探偵番組で…！」(ベルン)
エリカは探偵番組にて、夏妃を含む全員を引き連れ、2階にあがり、端の部屋からの徹底捜索を宣言した。3階にも1階にも地下にも存在せず、2階の、突き当たりの部屋を除いた部屋の全てにも存在しない。
「《赤：夏妃の部屋を除く全ての場所に、金蔵は存在しない！》」(ベルン)
※エリカが探していたのは“生きている金蔵”です。つまり捜索の途中で金蔵の死体を見つけたものの「これは探している金蔵ではない」とスルーしたのです。このEP5はラムダがゲームマスターのわりに、おとなしい話だと思っている人も多いのではないかと思いますが、こんなとんでもない仕掛けがあったのです。もっともこの場面での“金蔵”は“生きている金蔵”のことですので、屋敷以外の場所に死体があった可能性もありますが…。

■EP5で碑文の謎が解かれても殺人が続くのは何故?
※ラムダがゲームマスターであるためと考えられます。EP1と2に登場した“魔女の手紙”はEP5では登場しませんから、“魔女の手紙”による約束は存在しません。
「《赤：妾は約束は守る》。碑文の謎を解けば、黄金郷へ至ることができるだろう。さすれば、儀式は終わる。それ以上、誰も死にはせぬ」(ベアト)(EP2)
※また、上記約束はゲームマスターがベアトであるときの約束です。ラムダがゲームマスターであるEP5のベアトはそのような約束はしていません。さらに言えば、EP5において、ラムダはベアトの駒に干渉せず、自由に行動させていると考えられます。これはベアトの駒を操作すれば、約束を守らなければならないため、放置しているのではないでしょうか？　このゲームでのラムダの相手はベルンです。EP3で絵羽が碑文を解いている以上、ベルンは必ず碑文を解いてきます。
「ベルンはね、ここで碑文の謎を解いちゃったのよ。……さすが、奇跡の魔女ね。“解ける謎であるならば、難易度に関係なく必ず解ける”。……今度は解くのに何年掛けたの？」(ラムダ)(EP5)
※ベアトを始めとした幻想存在の本来の役割は“ミステリーを幻想修飾する際の犯人役”です。しかし、ベルンが碑文を解くことが確定しているため“約束”の制約により、犯人役を演じることが出来ないのです。そのため、ラムダは幻想存在による幻想修飾という手段を諦めざるを得なかったのです。

■EP5に入っているという『Land of the golden witch』の一番用になる部分とは?
※真相解明読本のインタビューにおいて以下の内容があります。
(聞き手)今回、『Land of the golden witch』のネタが入っているということですが。(真相5)
それは絶対言えません!(笑)　確かに『Land of the golden witch』の一番用になる部分が入っていますが、それは恐ろしいネタで……。そしてそれは、戦人にもエリカにもベルンカステルにも謎解に挑められていないんですよ。謎であったことさえも気付かないんじゃないかな。
(聞き手)ユーザーの中にネタが何であるか、気づかれた方はいらっしゃいますか?
ゼロです。
※これは以下のように紗音と嘉音が同席していることだと考えられます。
「皆様、お茶はいかがですか」(郷田)(EP5)
郷田と、配膳台車を押す嘉音だった。配膳台車にはお茶の道具が積まれている。こういう時にサービスするとポイントが稼げることを、彼はよく理解しているのだ。新しい情報に飢えている親族たちは、郷田を、わっと囲む…。郷田は、嘉音に配膳を命じると、親族たちの注目を一身に浴びた。
「郷田さん、どうなんだい、その子は。元気そうなのか…？」(留弗夫)
「さ、…さぁ、わかりません。ですが、心配に無用…！　南條先生が付きっ切りで診ておりますし、熊沢も紗音も一緒です。どうぞ、ご安心下さい。まずは紅茶でおくつろぎになってはいかがですか…？　さぁ、嘉音さん。早く早く、配って配って」(郷田)
「……ぶつぶつ…」(嘉音)
嘉音は、このお茶が郷田のポイント稼ぎだと知ってるので、ちょっぴりむくれ気味で、カップを並べている。
「う―。真里亞も手伝う」(真里亞)
「……だ、大丈夫です。真里亞さまはそのままでお待ちを」(嘉音)
源次が先頭で、扉をゆっくりと開き、……そして脇へ退き、深くお辞儀をして、来客を促す。客人(エリカ)は紗音と熊沢を従え、……客間で待ち構える大勢の親族たちを見ても、まったく気圧される様子がない。(EP5)
※上記2つの内容では、嘉音が喋って仕事をしているため、実際この場にいるのは嘉音であると考えられます。つまりエリカは紗音を認識していないのです。
“俺”はぐるりと客間の人間を見回す。客人の古戸エリカ。そして、その後ろには熊沢さんと紗音ちゃん。その傍らには源次さん。蔵臼伯父さんと夏妃伯母さんが客人を歓迎する。郷田さんが、さっそくアピールを開始し、嘉音君は相変わらず表情を変様がない。そして、親父に霧江さん。絵羽伯母さんに秀吉伯父さん。楼座叔母さんに真里亞。それに南條先生。そして俺の左右には、譲治の兄貴と朱志香…。これが全員。現在の本当の島の人数……。(EP5)
※このEPでは戦人は探偵ではなく、また、ラムダの駒であるため、紗音と嘉音を同時に目撃することが出来るのです。
「失礼します……」(嘉音)(EP5)

「お茶をお持ちいたしました」（紗音）
紗音と嘉音の二人が食堂車と共に訪れる。紅茶の良い香りが、一層、彼らの緊張を解きほぐしてくれるのだった。
「あなたたちもお茶をしていきなさいよ。たまには、自分たちがどういう紅茶を淹れてるか、その舌で学ぶのもいい勉強になると思うわ」（霧江）
「少し付き合ってくれよ。大人ばかりで俺も窒息しそうなんだ」（戦人）
「そら、次期当主の戦人さまのご命令だぞ！　そこに座って、俺たちとしばらくお茶しろい。それで、最近の出来事とか趣味とか、見てるテレビとか若者の今の流行りとか、そういう話をしやがれぃ。俺たちの勉強になるからな」（留弗夫）
「くす。名案ね。ほら、二人とも座って。そして、話題に飢えた私たちの生贄になってちょうだい」（霧江）
厨房では、郷田がさっそく、素晴らしい朝食のために腕を奮っていた。（EP5）
「ふんふんふんふんふん♪　ぱんぱんぱんぱ～ん♪」（郷田）
郷田は鼻歌を歌いながら上機嫌に、準備を進めるのだった。そんな郷田を見ていると、それを手伝う紗音もつられて上機嫌になってしまう。
「食堂の準備が出来ましたよ。いつでも運べますからねぇ」（熊沢）
「もうじきですので、配膳車の準備をお願いします。ふんふんふ～――ん！」（郷田）
思わず熊沢まで、郷田の上機嫌につられてしまう。厨房はとてもよい匂いとよい雰囲気で、朝から実に清々しかった。そこへ、いつも通りに朝から不機嫌そうな嘉音が戻ってくる。嘉音と源次は、カーテンを開けたりなど、諸々の朝の準備が担当になっている。……しかし今日は、嘉音ひとりだったので、いつもよりたいぶ時間が掛かってしまった。
「終わったよ。……源次さまは？」（嘉音）
「まだいらっしゃらないの。……珍しいわね。寝坊されるなんて」（紗音）
「ほっほほ。あの源次さんでもお寝坊をねぇ」（熊沢）
「親族会議の最中だというのに、緊張感に欠けてますねぇ。嘉音さん。起こしてきてあげてくれませんか？」（郷田）
「……はい」（嘉音）
※以上のように、このEPではエリカ以外の駒には紗音と嘉音が同時に“見えている”と思われます。

■EP5の蔵臼殺しはどのようにして行われたの？
※この事件で問題になるのは以下の部分です。
「……そうだ、ちょっと待って。声を聞かせたい人がいる」（１９男）（EP5）
受話器ががちゃがちゃと揺さぶられる音がする。……誰かに電話を代わるつもりらしいが、がさがさごそごそと音が聞こえ、受話器を代わるのにずいぶん手間取っているように聞こえる…。一体、誰に電話を代わるというのか。……この男のこと、…誰に代わろうとも、それが自分にとって、愉快なものになるわけがない…。
「……ぐふ！　これを解ナ…！　卑怯者め…！！」（蔵臼）
「え?!　あ、……あなた?!　あなたなの?!」（夏妃）
「うぐぐぐぐぐ、むぉおおおお…！！　解ナ、解けぇえ！！」（蔵臼）
それは間違いなく、夫の声だった。しかし、夏妃の声には答えない。……暗闇で拘束でもされているのだろうか。蔵臼は、電話先に夏妃がいることにも気付かず、解ナ解けと繰り返していた…。
※蔵臼に自由に話をさせれば、何を言い出すかわかったものではありません。場合によっては犯人の名を口に出すことがあるかもしれません。そのため、この場面では蔵臼は実際には話しておらず、録音された音声が流された可能性があります。その伏線が以下の通りです。
「以後は雑事を取りながらにせんか。言った言わないはもうゴメンや」（秀吉）（EP5）
「文字じゃ、書くのも手間だし、インチキだっていくらでも出来るわ」（絵羽）
「そうだな。……兄貴、こいつは勘くのか？」（留弗夫）
「オーディオセットかね。…なるほど。それならば雑事を手書きせずに済むし、捏造も出来んね。互いにとって公平だ」（蔵臼）
その異様あるオーディオセットは、この威厳ある食堂にとても相応しい重厚さを持っていた。
※食堂から電話をし、オーディオセットで録音しておいた蔵臼の声を夏妃に聞かせた上で、どこか（九羽鳥亭は移動に時間が掛かりますので、おそらく礼拝堂）に幽閉していた蔵臼を殺したと考えられます。以下の赤字がありますので。
「奇跡の魔女、ベルンカステルの名において、赤き真実を語るわ。《赤：右代宮蔵臼は犯人ではない。そしてとっくに殺されてるわ。あんたに電話で声を聞かせた直後にね？》」（ベルン）（EP5）
※もっともゲームマスターが駒を自由に操作できるなら、蔵臼の発言もコントロールできるわけで、上記のような小細工は必要ありません。

■EP5の第一の晩の死体を煉獄の七姉妹やガァプが目撃し、さらにガァプは死体を消しているけど、どういうこと？
※これは“駒”だからです。詳しくは“■駒とはどのようなもの？”で説明します。

■EP5の第一の晩はどのようにして行われたの？
※この事件は一見、単なる殺人の偽装に思えますが、問題があります。以下の２つの内容です。
中からは、若者らしい元気のいいいびきが聞こえてきた。子どもたちは４人いる。真里亞もいる。…すやすやと眠っていた。（EP2）
「はい。私の耳は完璧です。戦人さんが入室後、直ちに私は部屋の壁に耳を付け、何か異常が起こらないか、監視していました」（エリカ）（EP5）
「……あんた、戦人が物鳴をあげる朝まで、何も起こらなかったと証明できると言ったわね…。……まさか、あんた…」（ベルン）
「（私は一晩中、（戦人さんの）寝息を聞いていましたが何か？　……朝まで一睡もせずに、壁に耳を付け、異常が起こらないか監視をしておりました…！」（エリカ）
「エリカの配置力は写真並。そして聴力は録音機並。……エリカの耳を誤魔化して、譲治たちを殺し、首に縄を刻むなど不可能なことよ」（ベルン）
※この殺人が偽装で朝の時点では誰も死んでいなかったとしたら、エリカは戦人以外のみんなのいびきを聞いているはずなのです。エリカは戦人以外の全員が死んでいると考えていましたから、そのことを不審には思わなかったでしょうが、実際は死んでいなかったわけですから、これはおかしなことです。しかし、その答えは以下のようにエリカが自ら語っています。
「すでにお話していますが、私は２４時にラウンジに下り、そこで南條先生と意気投合し、午前１時まで麻雀でミステリー談義に耽っておりました。……お恥ずかしながら、すっかり熱中してしまっていたため、その間、廊下を誰かが通り抜けても、私は気付けませんでした。……探偵にあるまじき、痛恨のミスです」（エリカ）（EP5）
※本当に痛恨のミスです。つまりこのタイミングで戦人以外のみんなはぞろぞろと連れ立って出て行ってしまったのです。その後、九羽鳥亭あたりで殺されたと考えられます。また、エリカと同じく一晩中息を凝らして起きていたという考え方もできます。前者にせよ、後者にせよ、普通の人間には絶対ありえない行為です。ラムダの駒だからこそ、このような行動をとるわけです。

■EP5のペアはどういう存在なの？
※考えられる可能性は2つです。１つはラムダの駒、もう１つは自由意思を持った駒です。夏妃が生み出した幻想だと考える人もいるでしょうが、それは以下の場面で否定されます。
「……これほどまでに反魔法の真実が満ちては、来年の親族会議でも、ゴールドスミス卿の魔法を維持するのは難しいでしょう」（ロノウェ）（EP5）

「だ、……誰ですか、あなたはっ」（夏妃）
「あぁ、驚かずとも良い。妾の家具頭を勤める男だ」（ベアト）
「初めまして、夏妃奥様。ロノウェと申します。どうぞお見知りおきを……」（ロノウェ）
※夏妃はロノウェの存在に驚いていますし、そもそもロノウェを知りもしない夏妃がロノウェをゲーム盤に呼べるわけがないのです。ゲーム盤以前の場面に出てきたベアトは、確かに夏妃が生み出した幻想です。しかし、ゲーム盤にはベアトという駒が存在するため、夏妃の幻想とゲーム盤のベアトが融合したのか、もしくは入れ替わったと考えられます。
こんな時、……せめて金蔵がやさしい言葉を掛けてやれればいいのに。ベアトはその姿を探すが、先ほどから書斎に金蔵の姿はなかった…。夏妃も、あるいはそれに気付いているのだろうか…。（EP5）
※それは金蔵も同じくです。夏妃が生み出した幻想なら、夏妃が求める時にいない訳がないのです。
「……お嘆くは聞いておりマシタ。……残酷で知られた無限の魔女、ベアトリーチェも、こうなっては寂しいものデス」（ドラ）（EP5）
「こいつはもう、ゲームには参加してねえよ。……ゲーム盤のこいつを操ってるのは、ラムダデルタだ」（戦人）
「存じておりマス。……ですが、本来のこの世界の主デス。そしてあなたは、その主に招かれた、正当な客人デス。ですからこうして、ご挨拶に参じマシタ」（ドラ）
ゲーム盤の上では、俺もベアトもドラノールに会っている。しかしそれは、あの魔女たちの、ゲームの駒としただ。俺とベアト自身にじゃない。
「だからわざわざ、ここまで戦人くんとベアトに挨拶に来てくれたのですか…？　…相変わらず、律儀な子ですね」（ワルギ）
「私の流儀デス。……初めまして、ミスター・戦人。ドラノール・Ａ・ノックスと申しマス。…敵対する役ではありますが、よろしくお願いいたしマス」（ドラ）
※上記場面の戦人とドラノールの発言が事実であるなら、ベアトはラムダの駒ということになります。しかし、EP5 のベアトはひたすら良い子です。とてもラムダの駒とは思えません。ですから儁は、EP5 のベアトは自由意思を持ち、自らの意志で夏妃に尽くしているのだと思います。ラムダはもちろんベアトの駒を自分で動かすことは出来ますが、あえて自由に振舞わせているのだと思います。むしろ問題なのは夏妃で、ラムダによってベルンを真相から遠ざけるためのスケープゴートにされたのはわかるのですが、それが自由意思を持ってのことなのか、それともラムダの駒としてなのか、ベアト以上にわかりません。ただ、こちらもおそらくベアトと同じで、泳がされているのだと思います。以下の発言はその証拠ではないでしょうか？
「……夏妃がキングで、ベアトがクイーンってとこかしら。くすくす。夏妃を庇って群がる魔女と家具たちは、チェスの駒というよりは、」（ベルン）（EP5）
「ボーリングのピンって感じィ?!　きゃっはははははははははは！！　夏妃にベアト。金蔵にガラクタ家具の幻想たち！　私たちを楽しませてみせなさいよね?!」（ラムダ）
「黄金の魔女、ベアトリーチェなんて、もう出番はないのよ！　あんたとその家具たちは、私のゲームではほんのチョイ役、やられ役！！　気持ちよくすっ飛ばされて、私とベルンの玩具にされなさいよ！！」（ラムダ）（EP5）

■EP7 のお茶会が一なる真実なの？
※限りなく真実に近いものだと考えられます。が、同時に真実ではないと考えられます。
ゲームマスターは、ベルンカステルでなければ、クレルでもない。ならば、誰……？　違う。ゲームマスターは、……いないのだ。それが意味することは、ただ一つ……。（EP7）
※ゲームマスターのいないゲーム盤なのです。
「駒ではあっても、ご本人と変わりありマセン」（ドラ）（EP6）
「プレイヤーがいなくても、駒は勝手に動き、ゲームは進む。……そうだったわよね」（縁寿）（EP8）
※ゲームマスターの制御なしに駒が行動するということは、本人がその場にいるのとまったく同じように行動するということになります。つまり現実の再現なのです。ところが現実の完全な再現ではないようなのです。
俺（戦人）、あの頃、ひょっとしたら紗音ちゃんのこと、……好きだったかもな―。自意識過剰で、恋に恋してたお年頃だ。キザったらしい、浮ついた言葉で悪ふざけをしていた、甘酸っぱい記憶が蘇る。今さら気付くけど、……当時の俺と紗音ちゃんのあれってやっぱ、俺の初恋だったんだろうな―。ま、再会するまで、ケロリと忘れていた俺には、妬く資格なんてありゃしねえな。（EP7）
「親父殿は今も時折、台湾を懐かしんでピンロウを噛んでいるよ」（蔵臼）（EP7）
※戦人は紗音との約束を忘れていますし、金蔵はピンロウを止めていません。つまり、駒にヤス補正がかかっているのです。ですからあくまでベアトが作ったゲーム盤での、ベアトの駒による、ゲームマスター不在のゲームということになります。

■EP8 で縁寿は何故、入館証を２個持っていたの？
※これは以下のインタビューで竜騎士０７さんが少しヒントを出しています。
縁寿が持っていた１個はともかくとして、もう１個はいつの間に紛れ込んでいたのかは謎ですね。答えを言っちゃうと簡単なんだけど。（中略）大して面白くない答えなので伏せておきます。単純なので考えてみてください(笑)。（真相８）
「じゃあね。私は今はベルンカステル卿の駒。これで失礼するわ」（エヴァ）（EP8）
「同志エヴァ、後ほど」（エリカ）
エヴァが手の平を広げると、そこに、青く光る尖った小さなカケラが現れる。それが爆ぜると、鋭く眩しい光に包まれて、エヴァの姿は消え去る。その光は、さっき礼拝堂から漏れ出したものと同じだった。……ゲーム盤の外へは、駒は出られない。しかし、航海者の魔女だけは、それが出来る。恐らく、ベルンカステルが与えた、それを可能にする魔法に違いない。エリカも手の平を開くと、そこに同じカケラが現れる。
※以上の内容でまず、エヴァがベルンに従っていることがわかります。
「図書の間は元老院の管理下にある聖域よ？　神聖な結界が張られている。元老院の魔女以外は踏み入ることさえ出来ない」（ラムダ）（EP8）
「……パーティーの招待客には、元老院に席を持たぬ者もいるのでは？」（ベアト）
「ええ、いるわ。そういう連中には、特別に聖域に踏み入ることを許可する“招待状”が与えられてるみたい。ところがこの招待状、遅刻厳禁で、パーティー開始時刻までに入場受付をしてないと自動的に効果を失う優れモノ！　そしてお気の毒なことに、ついさっき、パーティーは始まっちゃったわ」（ラムダ）
「つまり、遅刻した来客の誰かから招待状を奪うという手は、もう手遅れということか」（戦人）
※以上の内容で、既に入館している者から入手するしか方法がないことがわかります。
「あら、エヴァ。ちょうど良いところへ」（ベルン）（EP8）
「お呼びでしょうか、我が主」（エヴァ）
「その焼き肉のゴミを捨てておいてちょうだい。私はこれを戻してくるわ」（ベルン）
ベルンカステルの手には、縁寿が選択を終えて魔法を失った鏡と、再び施錠された一なる真実の書があった。
「戻しました、我が主」（エヴァ）
ベルンカステルは、もう一度眼下を見やってから、その姿を消す。それを見送ってから、エヴァは使い魔の猫たちを呼び出し、片付けを命じるのだった。黒猫たちは、縁寿の肉塊とばらばらの手足を集め、ブリキのバケツに放り込む。黒猫たちが、死肢を乱暴に詰め込んだバケツを、虚無の海に放り込む頃には、……縁寿はもう、自分の名前さえも、忘れていた……。
※縁寿の死体の処理をしたのはエヴァです。
「図書の間にか。しかし、入る方法がない。あそこには結界があるんだ」（戦人）（EP8）

「……あいつがこれをくれたの。これがあれば、自由に出入りできるって。……最悪なヤツね。私を捨てる時、回収を忘れたんだわ」（緑寿）
緑寿がポケットを探ると、そこから鈴の音が聞こえる。それは、青リボンの結ばれた鈴だった。
「……それよ。招待状と引き換えに渡される、図書の部の館時入館証。それがあれば、とりあえず１人は、図書の部に乗り込めるわね。…まぁ、カケラの海を誰かが送ってくれれば の話だけど」（ラムダ）
※ベルンに従っていた緑寿は既に入館証を貰っていました。ということは同じ立場であるエヴァも入館証を貰っていたわけです。
「……やぁね、怖い目をして。私は味方でしょ、忘れたァ？」（エヴァ）（EP8）
黒猫の一匹がエヴァに大猛さならぬ猫猛さで近付き、にゃーにゃー言って、この部屋には誰の出入りも許されていない旨を説明する。
「ベルンカステル側より、この鍵の管理を仰せつかったわ。だからここは私に任せて、あんたたちはどっかに行っちゃってちょうだいな」（エヴァ）
猫たちは怪訝そうに顔を見合わてから、そのような命令を聞いていないと、鋭い目つきで睨みつける。
「ところでェ。……猫って体、柔らかいのよねぇ？」（エヴァ）
「「「……？？」」」（猫たち）
「じゃあ(自分のヘソも)噛めるわよね」（エヴァ）
エヴァが黄金の杖を振り上げると、天と地に真っ赤な放射状のひび が入って、広大な部屋の天地を全て覆う。猫たちの反応は電気的に早い。それが攻撃行為であることを瞬時に理解する。エメラルドグリーンの天体が、全てうねって一匹の巨大な深海魚の姿になり、エヴァを飲み込む巨大な口を開けて襲い掛かる。しかし同時に、天地の真っ赤な放射状の、……巨大な蜘蛛の巣が深海魚を上下から挟み込んで叩き潰し、ぐるぐるに絡り上げて、振り回し振り回し、……ボール程度の大きさにまで縮小してしまう。その、ボール状に圧縮された何かが、プチンと砕け散ると、後には何も残らない。全て、一瞬の出来事だった。
「ヘソでも噛んで、死んじゃえ!ヴァあぁあ？？　あ一っはっはっは！！！」（エヴァ）
※エヴァは緑寿の為にベルンを裏切りました。
緑寿は慌てて、ポケットを探る。すると、……さっき鈴を出したのとは別のポケットから、もう１つ、青いリボンの鈴が出てくる。（EP8）
「……そんな……どうして２つ？　私は１つしかもらわなかったわよ？！」（緑寿）
※以上の情報から、エヴァが緑寿の死体を処理するときに、自分が持っていた入館証を密かに渡していたと推測できます。

■緑寿と戦人の出生の秘密を知っていたの？
「緑寿は何も事情を知らず、俺のことを別居はしているけど、本当の兄だと信じて慕ってくれた」（戦人）（EP4）
「これより、そなたに妾の対戦相手たる資格があるかどうか、それを問う」（ベアト）（EP4）
「……ま、……まさか……」（緑寿）
グレーテルは突然青ざめる。……冷静沈着なヤツだと思っただけに、その表情は俺を驚かせた。
「……それでは戦人。赤で復唱してもらおう」（ベアト）
「お、俺に復唱要求ってか？…しかし、赤き真実って俺でも出来るのか？　どうやるんだ…？」（戦人）
「……そ、そうだと念じれば出来るわよ。簡単よ」（ラムダ）
「(赤：俺の名は右代宮戦人)。……お、……おお、こりゃ面白ぇや」（戦人）
「やめてッ！！　あんたの狙いは読めてるわ…！！　でもそれは止めて！　駄ぁ……！！」（緑寿）
「ベアトリーチェに復唱要求、“右代宮戦人は右代宮金蔵の孫ではない”。復唱拒否ね。ベアトが宣言した２つの赤き真実、“(赤：戦人は明日夢の息子ではない)”、そして“(赤：金蔵の孫である戦人にしか対戦相手の資格がない)”。これに矛盾せずに戦人に資格を認められるのは、以下の仮説よ。これが私の青き真実、聞きなさい…！　(青：ベアトの対戦相手の資格は、“金蔵の孫である右代宮戦人”であって、“明日夢の息子”であるか否かは問題ではない。即ち、あなたは明日夢の息子でなくても、金蔵の孫であることは出来る。留弗夫の息子であるならば！)」（緑寿）（EP4）
※以上の内容から、緑寿は戦人が自分の完全な兄(父が留弗夫、母が霧江)だと知っていたようです。事件後、ワイドショーなどの取材に留弗夫が丸め込んだ病院の関係者が事情を漏らしたのでしょう。はじめのうちは留弗夫が緑寿にだけは真相を明かしていたのかもと考えましたが、戦人が兄であることを信じていた緑寿には話す必要のないことですし、緑寿は当時のことを以下のように語っています。
６歳の私には、両親はとても仲がよくて何の問題もないように見えた。……そして、同じ家族のはずのお兄ちゃんが、どうして別居していて、たまにしか帰って来てくれないのか、不思議には思っても、そういうものだと納得していた。（EP6）
「明日夢のことは、知らなかったのか」（フェザ）
「……お兄ちゃんが、誰もいない時に話してくれたような気がするけど、小学校前の私に、それが理解できるはずがない。……だって、写真すらない相手よ。……お母さんは、明日夢さんの映った写真の全てを、お兄ちゃんに送って、家の中には一切残さなかったそうだから」（緑寿）
※以下の台詞は戦人を気遣って、あえて黙 たと考えられます。
「どういう事情で、明日夢お母さんがあなた(戦人)の生みのお母さんじゃないかはわからない」（緑寿）（EP4）

■黄金の真実とはどのようなもの？
「……。……ええ。……黄金の真実、有効よ。黄金の真実は、……この世界の領主、……いえ、……ゲームマスターにしか使えないッ！！」（ラムダ）（EP5）
「な、……何ですって……。」（エリカ）
「……黄金の真実。赤き真実とは異なる方法によって紡がれる神なる真実。……その力は赤き真実と同等デス。……時に劣るでショウ。しかし、時に勝ル！！」（ドラ）
「続けましょう。第２のゲーム、第一の晩。腹を割かれし６人は密室礼拝堂に」（クレル）（EP7）
「幻は幻に。……黄金の真実が、幻の錠を閉ざす」（ウィル）
「第４のゲーム、第一の晩。食堂にて吹き荒れる虐殺の嵐」（クレル）（EP7）
「幻は幻に。……黄金の真実が訪れ出す物語は、幻に帰る」（ウィル）
「第４のゲーム、第二の晩。二人の若者は試練に挑み、共に果てる」（クレル）
「幻は幻に。……黄金の真実が訪れ出す物語は、幻に帰る」（ウィル）
「こ、……こんな……。こんなエンドレスナインがあるの…?!　あ、赤き真実さえ、……通じないなんてッ！！　何なのよ、黄金の真実って！！　赤き真実に打ち勝てる黄金の真実って、一体何なのよ……！！！」（ベルン）（EP8）
「信じる心よ。……それは“私たち”の総意。……私たちが認めて共有した真実の前に、お前の赤き真実など、何も貫けたりしない」（緑寿）
（聞き手）新しく金文字が登場しましたね。（真相５）
なぜでしょうね。ぜひ考えてもらいたいです。「金文字とは何か」「どういう条件で使えるのか」「赤文字よりも強いのか」……これらも、「答え」を理解している人が見れば分かります。
（聞き手）金文字は、ゲームマスターのみ使えるようですが…
厳密に言うとゲームの答えを知ったものにしか使えません。答えを知っていれば、ゲームマスターでなくても使えます。
（聞き手）エリカが使えないのは？
真相を知らないからです。ラムダデルタはゲームマスターを思いていますが真相を知っているので、金文字宣言ができるのでしょう。ベアトが金文字宣言をしなかったのは、空気を読めるいい子だったからで(笑)。戦人も最後の最後でドラノールに「赤で否定を禁じます」と言われたので、金文字を使っただけです。

(聞き手)今回「黄金の真実」を戦人が使わず、ベアトリーチェ(姉)が使った理由は？(真相6)
私としては「誰が使った」ではなく、「どういう条件下で、何を意味して使ったのか」ということを探ってほしいですね。「黄金の真実」と「赤き真実」の成立条件の違いを考えて欲しいです。(略)ルールを理解していれば「黄金の真実」は誰にでも使えるもので、究極的にはゲームの「駒」でも使えるものなのです。だからベアトリーチェ(姉)も使えたのでしょう。
※あまり数がなかったので“黄金の真実”に関わる内容を全て抜き出してみました。多少バラツキがあるものの、これらを束ねると“真実ではないことが、信じる心によって真実に昇華されたもの”と読み取ることができると思います。戦人が金蔵の死体に使ったものも含めると“信じることによって生じる、赤字以外による真実”という抽象的なものになってしまうのですが…。

■家具とはどのようなもの？
「譲治さまの描く未来の夢を、姉さんは叶えられない。今日までよく騙し通してこれたものだと思うよ。そうやって、いつまで譲治さまを騙し通せるつもりなの？　自分が家具であることを、未だに話せない姉さんが」(嘉音)(EP6)
「‥‥家具とかニンゲンとか、‥そんなの関係ない。‥‥譲治さまは、私の全てを受け止めてくれると思うの。‥‥私ね？‥‥求婚、‥受けてみようと思うの」(紗音)
紗音は天井を見上げながら、‥‥自分と譲治で描ける新しい未来の想像を語った。その表情は、未来への不安はありながらも。‥‥愛に生きることを覚えた喜びも浮かんでいた。
「‥‥私の生きたいように生きてみたい。‥‥もう、家具だからとか、ニンゲンだからとか。‥そういうのに抗えるのは、止めようと思うの」(紗音)
「紗音も嘉音も、‥‥いえ、あえて“家具”と呼ぶわ。‥‥家具たちは最初から一貫して、ニンゲンとは恋愛が出来ないと主張してきた。そこに、黄金蝶のブローチという魔法が介在し、その魔法という奇跡の結果、譲治お兄ちゃんとの恋愛が成立した。そう主張してるわ。“再び魔法の奇跡がなければ、結婚は出来ない”。‥‥それが紗音と嘉音の、二人の共通認識になっている。‥‥これがどうしても理解できないの。つまり、こういうこと。紗音は譲治の婚約を受けているけど。‥‥魔法の奇跡がなければ成就されない障害が残っていると知っていることになる。そしてその障害は、二人の努力では取り除けないとも。だから、魔法という奇跡が必要。そして、その疑問は、嘉音にも向けられるわ。‥‥朱志香おねえちゃんとの恋路は始まったばかりだけど、二人の気持ちはまっすぐ。何の障害もないわ。黄金蝶のブローチのカケラが関係なく、もう恋仲になれてる。‥‥何年もの交際を経て、やがては結婚に行き着いても、何もおかしくない。こちらも障害は何も存在しないのよ」(縁寿)(EP6)
「どうして家具はッ、恋をしちゃいけないんですかッ！！！」(離ベアト)(EP6)
「「魂が、一人に満たないからッ！」」(ゼパル&フルフル)
「紗音も嘉音も、駒である君(離ベアト)ももちろん！！」(ゼパル)
「あなたたちはみんな家具！　魂が一人分に満たないから人間以下ッ！！」(フルフル)
「どうして‥！！　どうしてあなたたちは私を助けたんですか？!　どうして死なせてくれなかったんですか?!　私はあの時の大怪我で、‥‥こんな体で生きさせられている！！　こんな体で、生きていたくなんかなかった！！　こんな、恋をすることも出来ない体で‥‥！！　そんなの、そんなの、生きる価値がないんじゃないですか?!　そんなのニンゲンじゃない‥！！　家具じゃないですか！！　そう、私は、家具‥‥！！　家具なんだ‥！！　どうして、‥‥‥私をあの時に死なせてくれなかったんですかッ！！　ぅわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‥‥！！！」(？？？)(EP7)
※以上のことから、紗音は生殖能力を喪失した自分のことを家具と呼び、蔑んでいたようです。また、嘉音は紗音の生み出した人格であるため、肉体を持ちません。このように魂が一人分に満たない存在も家具と呼んでいるようです。

■片翼の鷲の使用人とはどのようなもの？
福音の家から送られる“優秀な”使用人は、もはや血縁すら信用できない金蔵にとっては唯一信頼できる存在であった。そのためある時、金蔵は彼らを直属の使用人として家紋をまとうことを許し、自分の身辺に仕えさせたのである‥。(EP1)
源次、紗音、嘉音の３人は、右代宮家の紋章である「片翼の鷲」を身に着けることを許された、金蔵直属の使用人だ。もちろん、右代宮家に仕えているため、彼の命令にも従うが、唯一の上司は金蔵だけだ。人事権も金蔵のみが握っているため、たとえ蔵臼と言えど、彼らを勝手に解雇することはできない。その為、蔵臼たちには時に、金蔵の手先と見られて疎まれることも少なくなかった。実際、金蔵は彼らはやの人物を書斎に入れることは滅多にない。(EP1)
福音の家出身の使用人は、事件活動中は「音」の文字を持つ名前を名乗ることになる。だから「紗音」という名前も本名ではない。それは「嘉音」も同様だ。そして、今日は紗音と嘉音が懸命に詰めているが、他にも眞音（マノン）や恋音（レノン）といった、音の文字を持つ使用人が数人いて、ローテーションを変わることもある。(EP1)
当主様は、社会活動と職業訓練の一環として、福音の家の子たちの中から成績優秀な子を使用人として受け入れていました。‥‥当家にいる紗音や嘉音、瑠音や眞音、礼音などの“音”の名を持つ使用人は全て、そこからやって来た子たちでした。(EP5)
※瑠音、眞音、礼音も片翼の鷲の使用人であると考えられます。ちなみに“恋音”は“礼音”の間違いと思われます。何故なら窮は以下のようになっているためです。
お勤めのない日は新島の窮に帰り、自分に与えられた部屋で自由に過ごすことが出来る。一応、大人の窮母がいて食事や洗濯の時間を厳しく管理していたが、福音の家でそういう生活に離れていての、苦にはならなかった。部屋は、少し大きめのものでそれぞれが３人部屋になっていた。しかし、人数の関係か幸運なのか、我(ヤス)は３人部屋にはならなかった。(EP7)
※２つある部屋のうち、１部屋はヤスが一人で使っているため、残りの内は３人だけなのです。ちなみにこの“片翼の鷲の使用人”というのは、ベアトリーチェの血を引き、本来ならば誰よりも“片翼の鷲”に相応しい紗音に“片翼の鷲”を与えたくて、金蔵が思いついた言い訳なのだと思います。

■嘉音の“汚らわしい仕事”とはどんな仕事？
「‥‥嘉音くんにも自分のお仕事があるんでしょ？」(紗音)(EP2)
「‥‥‥‥‥‥汚らわしい仕事だよ。僕の魂なんて、とっくに穢れてる」(嘉音)
「‥‥気を落とさないで。姉さんは何も悪くない」(嘉音)(EP1)
「‥‥‥‥‥‥見てたのね」(紗音)
「そういうお役目だから」(嘉音)
‥自分(嘉音)は、見聞きしたことを全てお館様に報告する義務を持つ。‥だからさっきのハメを外した朱志香の様子も報告しなければならない。(EP2)
※見聞きしたことを金蔵に報告するスパイのような仕事をしているようです。ただ、嘉音が働き始めたのが３年前、金蔵が死んだのが２年前ですから、本来は紗音の仕事だったのかもしれません。「嘉音君は優しいからこのイヤな仕事を引き受けてくれるだろう」ということで、嘉音の人格を作ったときに、この仕事も嘉音に回してしまった可能性があります。ちなみにこの仕事、金蔵はスパイをさせるつもりで与えていたのではなかったと思います。紗音にせよ嘉音にせよ、金蔵にとっては“ベアトリーチェの忘れ形見”です。その存在を絶えず気にかけていたでしょうが、普段の生活の中ではなかなか話すきっかけがありません。そこで、会話する機会を作るために“見聞きしたことを報告する仕事”を与えたのでしょう。しかし、そんな事情を知らない紗音(嘉音)は「自分はスパイをさせられている」と思い、その仕事を嫌っていたのです。

■嘉音は現実の六軒島にもいた？
※嘉音が現実の六軒島にもいたとすると、紗音が一人二役で活躍していたことになります。「そんなの変装したってバレバレだろ！」というツッコミを華麗にスルーすれば、実はこれが可能なのです。その証拠を以下に列挙します。
「‥普段はこの島には、何人いるんですか?!」(戦人)(EP1)
「し、‥使用人のシフトにもよるでしょうが、お父様、夫に私に朱志香。そして使用人が２～３人。‥昨日今日は５人いてもらってますが、普段はそこまでいません」(夏妃)

※六車島の使用人は、源次、熊沢、郷田、紗音、嘉音、瑠音、眞音、礼音、以上８人です。このうち２～３人がシフトで働くわけです。しかも料理をするのは熊沢と郷田だけっぽいので、この２人はどちらかが必ず島にいなくてはなりません。源次も使用人の頭ですから、勤務の回数は多そうです。つまり紗音と嘉音が同時にシフトに入る必要はあまりなさそうなのです。

紗音のシフトが週に３回程度として(EP6)

※紗音は週に３日くらいしか六軒島に来ていなかったようです。嘉音としても３日来ていたとしても、週に１日は休めます。１９８６年当時は、週休一日の時代ですから特に不都合はないでしょう。

「その後は、六軒島へ行く度に会っていたということか」（ウィル）(EP7)

「うん。私たちは大の仲良しになった。ベアトと話せば話すほどに、彼女は本当にすごい魔女だと思い知ったよ。彼女は会う度にいつも素敵な魔法を見せてくれた。そして、私とは異なる魔法大系を聞かせてくれて、二人で魔法の深遠を語り合ったよ。私は、早く彼女の高みに上りたいと思った。ベアトのような魔女の域に達したいと願った」（真里亞）

※一週間のうち３日しか六軒島にいない紗音に、六軒島に行く度に会えたというのはおかしな話です。しかし嘉音も入れれば、週に６日ですから不自然ではないでしょう。

（熊沢と嘉音に）「本当にご苦労でした。お前たちと源次と紗音には、約束どおり、過去一ヵ月分の休暇の買い上げと、新たに５日の有給を与えます。秘密の手当てですよ。取得に際しては源次と相談し、他の使用人たちに気取られないように」（夏妃）(EP5)

※以上の内容からわかるように、普段のシフトは源次が決めていたようです。源次が配慮すれば紗音と嘉音のシフトが重ならないようにすることは容易でしょう。

「‥‥嘉音は幻想‥‥。孤独な朱志香が生み出した、幻想の存在‥‥」（山羊）(EP8)

「学園祭でッ！！　私は嘉音くんをみんなに紹介したぜ！！　サクにッ、ヒナにッ、他のみんなに！！　友達みんなが証明するッ！！」（朱志香）

※学園祭の場面はゲーム盤外であるため、現実と考えられます。その場面に登場できるということは、嘉音が実在した証拠です。もっとも、紗音が変装していたという可能性もありえるのですが‥。そして何よりの証拠が以下の内容です。

「この奇妙な日記風手紙には、台風で島に釘付けにされた右代宮家の親族たちが、魔女復活の儀式に巻き込まれ、次々に不可解な方法で殺されていく様子が記されていました。そして最後に黄金の魔女ベアトリーチェが蘇り、全てを黄金郷に飲み込む。‥‥まるで、それこそが当日の全容であるかのように記されていました。また、当時の島の状況についても非常に詳しく描写されており、右代宮家に勤務したことがある元の使用人たちは、間違いなく内部に詳しい人間が書いたに違いないと証言しました」（大月）(EP4)

しかし、絵羽伯母さんを除く１７人もの人命が失われ、莫大な遺産と、あるいは１０ｔもの黄金さえもが闇で動いたのだ。(EP4)

※元の使用人に嘉音、眞音、礼音は当然含まれたと考えられます。この３人がメッセージボトルを読んで、現実には存在しなかった嘉音という使用人が登場することを知ったらどうなったでしょう。間違いなく騒ぎになったはずです。ところがそのような説明は一切ありませんでした。つまり３人にとってメッセージボトルに嘉音が登場するのは当然のことなのです。それは彼女たちが六軒島で嘉音と共に働いていたからです。また“**１７人もの人命が失われ**”ということですから、嘉音も勘定されています。ただ、一つ疑問が残ります。以下の内容からもわかるとおり、嘉音は本来は紗音の心の中の存在のはずなのです。

「戦人以外の者と、新しい宇宙を生み出すしかない。その能力を、姿が与えよう。そなたの心を傷を埋め、癒してくれる存在だ。‥‥そやつは、そなたを裏切らぬ。‥‥そう、‥‥そなたの新しい姉妹だ。‥‥‥‥そなたに弟を与えよう。福音の家で仲の良かった、実の弟のように可愛がってきた少年。‥‥そういう存在を、そなたに与えよう」（白ベアト）(EP7)

弟の設定は、福音の家で仲の良かった、年下の男の子。名前は、‥‥‥‥福音の家のルールに従い、音の一字を与えよう。彼は、‥‥寡黙で無口な男の子。右代宮家には、新しい使用人としてやって来た。そして、紗音とすぐに打ち解ける。紗音を姉と慕う健気な、いつも紗音の味方になってくれる‥‥。源次と同じように、金蔵に直接仕えることが許されている、特別な使用人ということにしよう。

※それがなぜ、現実の六軒島にも登場することになったのでしょう。おそらくこのようなことがあったのではないでしょうか？　朱志香が紗音がいる使用人室の扉を開けると、紗音は着替えをしていて上半身が裸でした。紗音の生物学的な性別は男なので、紗音に胸はありません。朱志香はびっくりして扉を閉めてしまったのか、もしくは紗音が朱志香を扉の外に締め出したのか、とにかく朱志香は紗音の姿を見ない状態で紗音と話をすることになります。朱志香にどういうことか問い質された紗音はとっさに、自分は紗音の弟の嘉音で、たまたまこっそり遊びに来ていた、というような言い訳をしてしまいます。それを聞いた朱志香は嘉音に使用人として六軒島で働くことを勧めます。紗音は以上のことを源次に相談し、源次は紗音を嘉音としても六軒島で働かせることにします。なにせ片翼の鷲の使用人の人事権は金蔵が握っているという建前の為、蔵臼たちは文句を付けられないのです。あるいは金蔵もそれを承知していたのかもしれません。もっとも実際には以下のように源次が握っているわけなのですが。

「お父様のお決めになることは絶対ですから。‥‥‥しかし、あの子（ヤス）についてだけは、簡単に落ちませんでした」（夏妃）(EP7)

「福音の家にも問い合わせたさ。そしたら源次さんに聞いてくれという。源次さんに聞いたら、お嬢様に聞いてくれという」（郷臼）

「お嬢様に聞いたら、ベアトリーチェ～と言う！」（フルフル）

※以下の場面に引っ掛かりを覚える人もいるかもしれませんが、これはきちんとクリアできます。

‥‥‥朱志香の記憶。‥‥‥へぇ。‥お、男の子の使用人なんだ‥。‥‥‥君、‥‥いくつ‥？　それが、彼女と最初に交わした言葉だった気がする。(EP6)

※まず朱志香が初めて会ったときの嘉音は紗音です。紗音が自分に胸がないことを調整化するために「自分は嘉音だ」と言っただけなのですから。その後、嘉音として正式に六軒島に行くことになった紗音は、嘉音の人格で六軒島に行ったのです。ですから、嘉音にとって朱志香とは初対面です。一方、朱志香の方はどうかと言いますと、男だと知っているはずなのに、こんなことを言うのは不自然ですが、周りに人がいたとしたらどうでしょう。以前に会っていることは秘密なわけですから、怪しまれるしかありません。あと、これは文章ではないのですが、EP8で十八と縁寿が六軒島のことを思い出すシーンで、いずれも嘉音のカットがあります。

■偽書作家テストの解答は？

※ＫＥＩＹＡさんの解答に訂正や補足があるものの記載します。

Episode1 Legend of the golden witch

問01 真里亞の薔薇に込められた意味と、消失の理由は？

※物語の冒頭は意味すると考えられます。この場面よりあとがゲーム盤の物語ということです。逆に言えばこの出来事は１９８６年の１０月４日に実際に発生したことでもあると思われます。消失した理由はベアトが言及したとおり。ベアトが手紙を渡すために真里亞を薔薇園に留まらせる目的で抜いた、という説がありますが、EP2で以下の発言があります。“**「ベアトリーチェがね、もうすぐ来るの。だから待ってるの」（真里亞）**”EP2は真里亞の薔薇が消失しなかった(消失が証明にならなかった)EP です。つまり薔薇の消失は立派なアクシデントであって、元々真里亞は薔薇園でベアトと待ち合わせをしていたことがわかります。

問09 【玄関ホール・夏妃殺し】の犯人と方法は？

犯人は紗音だと考えられます。紗音と嘉音は人格死で、人格としてはベアトなのかもしれません。ウィンチェスター銃で射殺したのでしょう。“**微かに香る硝煙の臭いは、夏妃伯母さんが握ったままのライフル銃の銃口から。**”ということですが、これは２つの可能性が考えられます。１つは戦人による誤認(ノックス第９条)です。その場にある銃が夏妃のものだけであり、辺りに硝煙の臭いが漂っていたなら、両者を結び付けて考えることに不自然はありません。もう１つはベアトが夏妃を射殺した後、夏妃の銃を取り上げて隠し、自分が使った銃を持たせた。ＫＥＩＹＡさんは“**ウィンチェスター銃で額を撃てば、あんなに小さな傷で済むはずがない**”とし、銃声が一発だったのは“**二つ同時に響いた**”から、と考えています。しかし『我らの告白』でウィンチェスター銃の威力について以下のように描写されています。“**銃声は軽い。‥‥‥ドラマや映画で聞くような、ドキューンなどという音ではない。せいぜい、シャンパンの栓を抜いたくらいの音だった。しかし、血の塊が弾ける、そこにはぶくぶくと血の溢れ出す痛々しい穴が穿たれた。**”特に問題はなさそうです。むしろ問題なのは“**二つ同時に響いた**”という点です。もし、これが確かでもずれて二つの銃声が聞こえてしまったらどうなるでしょう。たちどころに魔女幻想は崩壊します。夏妃は助かってしまっても、同じくです。魔女幻想を守るためには先制攻撃で一方的に倒す必要があります。

Episode2 Turn of the golden witch

問01 ゲーム盤上に登場したベアトリーチェの正体は?

ベアトの扮装をした紗音だと考えられます。“**魔女はにやりと笑うと、源次を置いてさっさと歩き出す。‥‥その足取りは、屋敷の中を充分に知った家人のようだった。**”これが伏線です。

問02 楼座が受け取ったベアトリーチェの封筒の中身は?

礼拝堂に親族を招く内容だったと考えられます。礼拝堂での親族の反応から、自分(紗音)が碑文を解き、黄金を発見し、家督を継いで黄金の魔女となったことを認めるなら、黄金と家督を譲ると書かれていたのではないでしょうか。

問03 親たち7人は深夜の礼拝堂で何を見た?

見たもの自体はKEIYAさんの考察通り、インゴットでしょうが、やりとりは幻想描写ではないと考えられます。

問04 【礼拝堂・ハロウィンパーティーの6人殺し】の犯人と方法は?

KEIYAさんは“**銃で六人の腹部を撃ち抜いた。**”と考察していますが、全員が腹部を撃ち抜かれるまでおとなしくしているとは考えられません。ここは六人を油断させるために一緒にハロウィンパーティの準備をし、終わったところで「お疲れ様」ということで乾杯し、毒でも盛ったと考えた方が妥当です。常識的に考えて、第一の晩の時点で自分たちが殺されることなど誰も予測できないはずですから、警戒などしないでしょう。

問08 生き残った人々は最終的にどうなった?

爆弾で爆死したと考えられます。KEIYAさんは“**楼座が真里亞を連れて逃走するのは、源次から爆弾の存在を教えられたため**”と考えていますが、『我らの告白』で以下の内容があります。“**その通りだ。爆発から逃れる方法は二つしかない。一つは、妾しか知らない方法によって、時限装置を解除すること。もう一つは、この格子の向こうの地下通路より島の反対側へ行き、爆発を逃れることのみだ。‥‥見ての通り、この格子の施錠も我が手中にある。いずれの方法で生き残るにせよ、妾を拒むことなど出来んのだ」(ベアト)**”共犯者である楼座は地下貴賓室に案内され、このことを教えられていたため“**「この島のどこにも、生き延びることのできる場所はないッ！！」**”と知っていたのです。

Episode3 Banquet of the golden witch

問02 【連続密室・6人殺し】の犯人と方法は?

紗音は死んだフリでみんななをやり過ごした後、自らを人格死させ、礼拝堂へ移動し、嘉音として死んだフリをしたと考えられます。自分以外の被害者は芝居への協力を持ちかけて、そのまま殺してしまったのではないでしょうか。

問03 【薔薇庭園・楼座&真里亞殺し】の犯人と方法は?

絵羽が騒って楼座を殺してしまい、泣き叫ぶ真里亞もあわてて絞殺してしまったと考えられますが、ちょっと気になる描写があります。“**「…お腹いすだから静かにして…。どうしたらあなたは泣き止むの？　どうしたらあなたはママの言うことを聞いてくれるの？」(楼座)　「……」(真里亞)　ぴたりと。真里亞が不自然なくらいに泣き止んだ。‥‥すると振り返り、ぽつりと言った。「……真里亞の薔薇を見たら、ちゃんと明日まで静かにしてるよ」(真里亞)**”もしかすると絵羽は最初から楼座を殺すつもりだったのではないでしょうか。地下貴賓室の場面では楼座を殺すとアリバイがないため、疑われてしまいます。しかし、アリバイのある状況でなら殺しても大丈夫。そのように考えた絵羽はベアトのフリをして真里亞に「楼座を薔薇庭園に連れ出せ」と指示したのかもしれません。地下貴賓室でベアトに会った絵羽はベアトの全てを継承したため、真里亞とのやりとりも継承した可能性があります。そのため、ベアトの口調で真里亞に話しかければ、真里亞が相手をベアトだと信じることも教えられたのでしょう。事故説の場合は楼座と話をするためだけにアリバイを作って窓から脱出するという手間をかけるのかという不自然さがあります。相手が油断していれば、格闘技の達人である絵羽には素手での殺害も容易です。もっとも、一番可能性が高いのは、ベアトはもともと第二の晩の生贄を楼座と真里亞に決めていて、真里亞に楼座を連れて薔薇庭園に来るように指示していた、でしょう。現に以下の描写があります。“**「……ベアトリーチェ。‥‥‥‥ベアトリーチェだ！！　ママっ、ベアトリーチェ！」(真里亞)**”

問07 客間の扉に「07151129」を書いた人物と数字の意味は?

書いたのはベアトだと考えられます。数字は戦人の誕生日である7月29日と、ヤスが黄金の魔女となった11月29日であることがEP7で、貸し金庫の暗証番号であることがEP4であきらかにされています。譲治を殺さざるを得なかったベアトから絵羽へのせめてもの弔慰ほしなのでしょう。

問08 【客間・譲治殺し】の犯人と方法は

ベアトが銃で殺害したと考えられます。

問09 【使用人室・南條殺し】の犯人と方法は?

ベアトが銃で殺害したと考えられます。

問10 EP3のゲーム盤の真相は?

ベアトが第一の晩を終えた後、絵羽が碑文の謎を解き、黄金の魔女を継承。絵羽が親族を殺害していく中で、ベアトは魔女幻想を守るため、あるいはミステリーのギミックとして、譲治と南條を殺害したと考えられます。

Episode4 Alliance of the golden witch

問04 【園芸倉庫・郷田&熊沢殺し】の犯人と方法は?

KEIYAさんは“**小窓から射殺した**”と考えていますが“**それは格子が入った小さな窓で、明かり取りと換気くらいしか出来ないものだった。**”という場所から狙うのは不自然です。何よりEP1において“**礼も何も付いていない鍵**”であったのに、このEPでは“**ご丁寧にも、園芸倉庫の鍵とプレートまで付いている。**”となっています。これは鍵がすりかえられているのではないでしょうか。プレートをつけたのは、戦人がこの鍵が本当に園芸倉庫の鍵か確認しようとするのを防ぐためであると考えられます。つまり中から鍵を投げてもらい、シャッターを開けて、二人に首吊りの真似をさせたところで射殺し、すりかえた鍵を郷田のポケットに入れて、シャッターを施錠したと考えた方がつじつまがあいます。

Episode5 End of the golden witch

問07 19年前の男の正体は?

KEIYAさんは“**十九年前に崖から突き落とされた恨みが、夏妃を脅迫して陥れるというゲーム盤の筋書きに結びついた。**”と考えていますが、このゲームのゲームマスターはラムダです。夏妃を犯人に仕立てたのはベルンを真相に導かないためと考えられます。

Episode6 Dawn of the golden witch

問04 「お母様」の正体と、彼女がベアトリーチェに恋心を託した理由は?

KEIYAさんは“**譲治を選び、戦人への恋心を捨て去ろうとしたため**”と考察していますが、実際は戦人を待ち続ける苦しさに耐えられなくなったためと考えられます。譲治に恋するようになったのは、ベアトに恋心を託したことによって戦人への恋心を忘れたからです。

問05 紗音と嘉音はどのような関係?

KEIYAさんは“**紗音もヤスが生み出した自分の分身**”と考えていますが、紗音は実在の人物で、嘉音も六軒島に実在したと考えられます。

問07 嘉音がチェーンで閉ざされた客室から戦人を助け出し、消失する方法は?

嘉音が人格死した後、紗音がクローゼットに入ります。

問08 「18人目の人間」「17人だ」。エリカ退場後、2つの赤字が並び立った理由は?

18は“登場した順番”としての数字(18番目)もしくは“人格の数”17は“在島者の人数”としての数字だと考えられます。

問10 冒頭で部屋に監禁されていた人物が、女性めいた言葉を発した理由は?
“小さかった頃、この屋敷に泊まり、風雨が窓を叩く不気味な夜には、森の魔女が生贄を求めて彷徨っているというような話にたいぶ怯えたもんさ…。(戦人)(EP1)”“小さい頃の、嫌な記憶が蘇る。親族の集まりで、うとうとしていたら、いつの間にか知らない部屋に寝かされていて。ものすごく心細くなって大泣きした、とても嫌な、辛い記憶…。(EP6)”以上2つの証言から、思考が当時に退行していると考えられます。

Episode7 Requiem of the golden witch
問03 戦人から紗音への手紙は本当になかった? (譲治が隠蔽したという説はあり得る?)
本当になかったと考えられます。戦人は決断するのは紗音だと考えているため、その気持ちを尊重し、自分からはアプローチしないのです。
問05 ヤス、紗音、嘉音、理御、ベアトリーチェ、クレル、それぞれの関係は?
ヤスは紗音の蔑称です。紗音は安田紗音です。嘉音は紗音が生み出した人格です。理御は崖から突き落とされなかった世界の紗音です。ベアトリーチェは紗音が生み出した人格です。クレルはベルンが与えてくれた紗音の正体を隠すための仮の姿です。
問06 ヤスが魔女になってからの2年間に何があったのか?
戦人を待ち続ける苦しさに耐えられなくなり、ベアトに戦人への恋心を託したことにより、戦人への恋心を忘れました。その後、譲治に恋するようになり、譲治と恋人同士になりました。同時にもう1つの人格である嘉音が朱志香に恋するようになりました。
問08 お茶会で描かれた次男夫婦による殺人の真相は?
ゲームマスター不在の駒によるゲームと考えられますが、その内容は限りなく真実に近いでしょう。
問09 クレルのはらわたで描写されたシーンの真相は?
紗音が心の中に隠していた真実だと考えられます。ただし、金蔵の黄金強奪と、金蔵と九羽鳥庵のベアトとのやりとりは、紗音が“そうだと信じる”真実です。
問10 ウィルの二十の模がベルンカステルに通用しなかった理由は?
単なる演出と考えてよいのではないでしょうか。もしくはゲーム盤の駒であるウィルの二十の模は、ゲーム盤外の存在であるベルンには通用しないということなのかもしれません。

Episode8 Twilight of the golden witch
問01 「ゲームマスター」と「作家(物語の筆者)」の違いは?
“ゲームマスター”はテーブルトークＲＰＧのゲームマスターと同義で、ゲームの進行を司ると考えられます。“作家”は偽書を書いた人であり『うみねこ』世界の実在人物である紗音と八城十八です。
問02 各EP(1~8)の作者は誰?
竜騎士０７さんと考えることが出来ますし、あるいは誰もいないとも考えられます。
問03 ベアトリーチェの心臓とは何か?
六軒島の全てを黄金郷に導くことの出来る爆弾、親族を自在に共犯者にすることのできる黄金、紗音と嘉音とベアトリーチェ、1つの肉体に宿る3つの人格と考えられます。
問04 ヤスの血縁関係を分かる範囲で説明せよ
金蔵が祖父で父親です。ベアトリーチェ・カスティリオーニが祖母です。九羽鳥庵のベアトが母親です。蔵臼たちは朱鷺彦の兄弟で伯父や伯母です。戦人たちは朱鷺彦のいとこで甥や姪です。
問08 ベルンカステル&ラムダデルタの正体は?
『ひぐらしのなく頃に』からのゲストキャラクターだと考えられます。
問09 「一なる真実の書」の内容は?
絵羽が誤って殺人を犯してしまったため、霧江が留弗夫を守るために先手を打って親族の皆殺しを計画し、その過程で絵羽に殺されたと考えられます。
問10 八城幾子が真実の書と鍵を持つ理由は?
真実の書は幾子が語ったとおりで、鍵は絵羽から贈られたのではないでしょうか。
問12 12年後の世界やメタ世界は偽書に書かれたこと?
偽書は真里亞の名を騙って日記風に書かれた“ゲーム盤の物語の粗筋以上全文未満の内容”であると考えられるため、12年後の世界やメタ世界は偽書には書かれていないと考えられます。
問13 八城十八が偽書を発表した理由は?
心ある者に真実を伝えたかったのだと考えられます。
問14 3日目の描写の前には何が起こった?
戦人はベアトと合流し、潜水艦基地に収容されたと考えられます。
問15 戦人とベアトリーチェが入水した動機は?
実際に島から出ていって“流し遂げられました”という事実が確定すると、ベアトの中で残り二組の恋愛を否定することにつながってしまうため、ベアトは入水したと考えられます。戦人はベアトを助けるために後を追ったのですが、助けられなかったのでしょう。

■偽書とはどのようなもの?
メッセージボトル偽書作家とは、その名の通り、六軒島の事件を記した謎のメッセージボトルの、文章を捏造して発表する者たちのことである。彼らは、新しいメッセージボトルが発見されたと称し、よく似た贋作、もしくは、真相を自分なりに解釈した新説を、右代宮真里亞の文書を騙って発表するのだ。彼らは堂々と「右代宮真里亞」を名乗り、さも自分は当事者で真相を知っているかの如く、新しい奇怪な物語を描き、それを、ニンゲンが新しく手に入れた海、インターネットの大海に、第三、第四のメッセージボトルとして放っているのだ…。伊藤幾九郎は、そんな人間たちの間でもっとも高い評価を受けている偽書作家なのである。(EP6)
「‥End of golden witch。読ませてもらいました」(縁寿)
彼女の最新の偽書、「End」は、その作中で少なくとも親族たちを7人は殺している。いやいや、彼女のこれまでの偽書、「Alliance」や「Banquest」を含めれば、どれだけの親族を、何度、惨たらしい方法で殺しているやら…。(EP6)
伊藤幾九郎の最初の偽書、「Banquest of the golden witch」は、九羽鳥庵で右代宮絵羽が難を逃れるまでを全て描いており、これこそ六軒島の真実ではないかとさえ騒がれ、ワイドショーでまで取り上げられたことがある…。(EP6)
‥‥直感する。これは新作なのだ。彼女の未発表の最新偽書‥‥。(EP6)
「Dawn of the golden witch」(縁寿)
※新たに発見されたメッセージボトルに見せかけて、偽書作家が捏造したもののようです。ということは文章量や文章のスタイルはメッセージボトルを踏襲していると考えられます。詳しい説明は“■メッセージボトルとはどのようなもの?”で。

■偽書は何のために書かれたの?
※このトピックにおける“偽書”は八城十八が書いた偽書限定です。つまり“八城十八は何のために偽書を書いたの?”ということです。
「‥‥‥そうよ。元々、六軒島の事故は、ただそれだけならば、絵羽伯母さんと右代宮家の財産を巡る陰湿恋愛でしかなかった。‥‥‥しかしそれが、後年、オカルトによっ

て脚色され、陰謀は魔女伝説として塗り替えられる」（緑寿）(EP4)
事件当時は陰謀として騒がれたのに、後年、それらは魔女の仕業だったとするおかしなオカルト説が蔓延し、１９８６年１０月５日の真実を塗り替え始めた…。陰謀説は時間と共に忘れられていくだろう。……そして、奇異で印象深い魔女説だけが、迷信的に残り続け、最後には陰謀説を、塗り潰す。
「そう。恒星爆発の光が地球に届くまでの間の虚偽の真実が、陰謀説という人間臭だったかのよう。……数年後に漂着した手紙入りのワインボトル、『メッセージボトル』が、それをオカルト説という魔女説に遡って塗り替え始めた。……そうよ。魔女なんて、１９８６年の時点では存在しなかった。その数年後に、メッセージボトルによって私たち未来の人間に“観測”されたから、魔女が六軒島を支配した…！」（緑寿）
※執筆当初、世間の関心を“絵羽の陰謀説”から逸らし、絵羽を救うため、と考えていましたが、上記内容から、それは違いそうです。十八が偽書を書かなくても、陰謀説は消えていったものと思われます。
そんな、好事家たちが死蔵して独占欲を満たしたくなるほどに価値ある蔵書が２０世紀末に大量に発見、公開されたことは、全世界に大きな衝撃を与えた…。(EP4)
「この一件により、“Ｒｏｋｋｅｎｊｉｍａ”の名は全世界に知れ渡ることになります。そして同時に、六軒島の事故によって、未発見のさらに価値ある蔵書が大量に失われた可能性が高いことも、全世界に衝撃を与えました。…これにより、六軒島と右代宮蔵書の名は、我々にとって生涯忘れ得ないものとなったのです」（大月）
……我々にとって。その我々とはつまり、金蔵と同じ趣味のオカルト界隈のことだろう。この一件により、六軒島の名は、オカルトの世界で重要な意味を持っていくことになる。六軒島の事故は、確かに大きな報道されが国際的なものではなかった。しかし、この一件は世界を駆け巡り、六軒島のイメージを、伊豆諸島の小さな島から、謎と疑惑とミステリーとオカルトの入り混じった悪魔的な島へと塗り替えていった。つまり、絵羽によって金蔵の蔵書が世間に流出されるまでは、六軒島は、誰の記憶にも留まらない無名の島に過ぎず、……そこは断じて、魔女の島ではなかったのである。しかし、右代宮蔵書が世界的に知れ渡り、六軒島のイメージは一気にオカルト的になる。
「そして、そこへ起こるのが例のメッセージボトル事件です。これがあの島を、魔女の島に変えた。伊豆諸島の無名の小島が、オカルトの島へ、そして謎の魔女、ベアトリーチェの島へと変遷していったのです。右代宮蔵書とメッセージボトル、このどちらが欠けても、六軒島魔女伝説は成り立たなかったと言えます」（大月）
「……近くの島の漁師が拾っていた、というやつですね？」（緑寿）(EP4)
「左様です。式根島の若い漁師が、手紙入りのワインボトルを拾っていたことが分かったのです。この若い漁師は興味本位からそれをたまたま保管していました。それが、右代宮蔵書で六軒島が世界的注目を浴びた為、公表したというのです」（大月）
「この奇妙な日記風手記には、台風で島に打ち付けられた右代宮家の親族たちが、魔女復活の儀式に巻き込まれ、次々に不可解な方法で殺されていく様子が記されていました。そして最後に黄金の魔女ベアトリーチェが登場、全てを黄金蝶に飲み込む。……まるで、それこそが当日の全容であるかのように記されていました。また、当時の島の状況についても非常に詳しく描写されており、右代宮家に勤務したことがある元の使用人たちは、間違いなく内部に詳しい人間が書いたに違いないと証言しました」（大月）(EP4)
「……その、おかしな幻想小説と右代宮蔵書以降のオカルトブーム、そして、結局は真相は闇の中という３つが合わさり、六軒島の魔女伝説を生み出したと…？」（緑寿）
「左様です。すでに１０年以上が経過した事件ですが、未だに世界のオカルトマニアの関心を集めています。いや、むしろ時間を経て、ますますに神格化されたと言っていい。上陸禁止になっている六軒島に、密かに上陸しようというマニアも未だに多いとか。……未だ未発見のメッセージボトルがあるのではないか。そしてあの日、あの島で本当は何があったのか。未だに議論は尽きませんがね」（大月）
「ああ、六軒島ウィッチハントとは、この事件の真相をオカルトの側面から説明しようと試みるマニアの集いのことです。右代宮蔵書から謎の２日間、そして黄金の魔女の伝説など、六軒島にかかわる謎は今でもマニアの間で盛んに議論されているのです。１０周年の時には、ニューヨークで国際コンベンションも開かれました。私も日本の代表として参加してきましてね！　海外の熱心なウィッチハンターと様々な交流をしてきましたよ。海外では魔女はとても人気のあるカテゴリーでしてね。参加者の年齢幅も下は小学生から、上は著名な文化人まで実に幅広い！　日本でも近年ようやく。」（大月）(EP4)
……しかし、こう考えると、絵羽伯母さんが本当に犯人なのかは、疑わしい。もちろん、メッセージボトルの解読が絵羽伯母さんと違うから、などというわけではない。……発見された２つの物語は、どちらも絵羽伯母さんが犯人者の中に含まれているからだ。もし、この日記の筆者が犯人であるならば。……絵羽伯母さんもまた、殺される標的のひとりだったのではないか。それが、どこかで狂い、絵羽伯母さんは生き残った。……私は絵羽伯母さんを憎悪していたから、彼女こそが犯人に違いないと信じてきた。しかし、メッセージボトルの存在は、……彼女よりさらに深遠の、未知なる人物こそが標的なのではないかと疑わせるのだ…。(EP4)
初期の偽書作家は、単なる悪戯目的か、さもなくば、好事家を騙すことを目論んだ詐欺師のどちらかだった。しかし、メッセージボトルの物語の謎を解き「真相」に至ったと自称する人間が次第に現れ始め、あたかも出題者側に回ったかのように、右代宮真里亞による、第三、第四のボトルメールを語って創作を始めるようになった。彼らは好き勝手な解釈で魔女物語を書き綴り、その説の一部は時にネット上で絶大な支持を集めたため、あたかも真実が含まれているかのような信憑性を持ち始めている“創作”も存在する。そんな彼らは、厳格なウィッチハンターたちからは「偽書作家」「贋作作家」あるいは「魔女」と呼び捨ち、激しく忌み嫌われている。真相に至ったと称し、にもかかわらず、至った真相を語らず、試すかのようにメッセージボトルの偽書を創作する。そんな彼らを、生真面目なウィッチハンターたちが極めて不愉快に思うだろうことは、想像に難くない…。しかしその一方で、六軒島のオカルトファンタジーを単純に楽しんでいる者たちの中には、ミステリアスな物語をさらに拡張させてくれると、その創作に作品性を認めている者も、極めて一部ではあるが存在する…。伊藤幾九郎は、そんな人間たちの間でもっとも高い評価を受けている偽書作家なのである。(EP6)
彼女の最新の偽書、「Ｅｎｄ」は、その作中で少なくとも親族たちを７人は殺している。いやいや、彼女のこれまでの偽書、「Ａｌｌｉａｎｃｅ」や「Ｂａｎｑｕｅｔ」も含めれば、どれだけの親族を、何度、惨たらしい方法で殺しているやら…。私が嫌味の一つも言いたくなっても、これは当然のことだ。しかしこれらの作品群は、その規模、完成度において、限りなく、「右代宮真里亞」本人が記してきたそれまでの物語に近いと評価されていた。特に、伊藤幾九郎の最初の偽書、「Ｂａｎｑｕｅｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｇｏｌｄｅｎ　ｗｉｔｃｈ」は、九羽鳥庵で右代宮絵羽が難を逃れるまでを全て描いており、これこそ六軒島の真実ではないかとさえ騒がれ、ワイドショーでまで取り上げられたことがある…。(EP6)
「……ベアトリーチェの真実に辿り着いた者ならば。……私でなくとも、新たな物語を紡げるでしょう。……今回の原稿を以ってきっと、私以外にも真実に至る者が必ず現れる。……その者もまた、新たな物語を紡ぐ資格を得るのです」（幾子）(EP6)
「どんどん無限の魔女が増えていくわ…」（緑寿）
「そう。そして、何人もの無限の魔女たちが、ベアトリーチェの巡礼の物語を増やして行く。……増えれば増えるほど、また新たに真実に至る者が現れる…。……そうすることで、一番最初の無限の魔女、ベアトリーチェが、あれだけの枚数の手紙に物語を記してボトルに詰めて海に投じた労力が初めて、報われるのです…」（幾子）
「それでよい、人の子よ。……右代宮家の最後の生き残りであるあなたが、真実に至り、無限の魔女になることを、運命も待ち望んでいるでしょう。……私という存在など、あなたという真の継承者を覚醒させるための、ただの道標に過ぎないのだから。……エンジェ・ベアトリーチェ」（フェザ）(EP6)
※真相を織り交ぜた偽書を世間に送り出すことにより“六軒島の真実”が心ある人に届くようにしたかったのではないでしょうか？　そしてあわよくば、縁寿に真相を届けたかったのでしょう。もし“全て真相”で出来た偽書を書いてしまった場合、それが真実だと世間にバレる可能性があります。そうすると縁寿が傷付くことになり、絵羽の苦労も水の泡です。また、絵羽は六軒島で人を殺していると考えられます。絵羽が真実を話せなかった一番の理由はそれでしょうし、絵羽を守るためにも“全て真相”である偽書を書く訳にはいかなかったのです。
「幾子さんは、最近はかなりパソコンに熱心なようですね。何か面白い記事でもありますか？」（十八）(EP8)
「……鳳凰馬鹿しいとは思いつつも、なかなか面白いのです。……ほら、例の六軒島事件」（幾子）
「……六軒島……？」（十八）
「六軒島ミステリーの記念日ですでしょう。これが今、ネットでブームになっているのです。それを巡る議論や考察、中でも偽書が実に面白い。……偽書というのは、付近の島に流れ着いた、右代宮里亞の署名のあるボトルメッセージが、他にもあったと仮定して書いたもので……」（幾子）
幾子は得意気に語り続けている。……しかし、……私の頭の中の大きな鐘が、がらんがらんと鳴り続ける。そのあまりに大きな音に、私の頭は割れそうになる。もはや、天井と床の区別さえわからず、……私は頭を抱えながら倒れ込んだ…。
「十八っ、……大丈夫ですか…！」（幾子）
「……頭が、……痛い……」（十八）

六軒島爆発事故。それを巡って囁かれる、不穏な噂の数々。右代宮金蔵の莫大な財産と隠し黄金を巡って、親族たちが暗躍を……。真相は？　唯一の生還者の右代宮絵羽は何も語らず。やがては、当日に欠席して難を逃れた孫娘、右代宮縁寿が全てを相続……。
※十八年以前に“六軒島事件”の話を幾子に聞かされたようですが、その時、這這這の回復には繋がらなかったようです。あるいは潜在意識下で失われた記憶に働きかけ続けていたのかもしれません。また“伊藤幾九郎”の活躍は偽書作家としては後発だったようです。

■霧江は残酷な殺人鬼なの？
※霧江は合理主義者ですから、その場で自分が取りうる最良の手段を選択するだけなのです。EP7 のお茶会で霧江が行ったことは、現実の六軒島で霧江が行ったこととほとんど同じはずです。しかし、あれは霧江にとって“カルネアデスの舟板”だったのです。
「私は幸運よ。その地獄が１８年で終わったから。……だからもう、私は自分を、間違えない の。……あの人は私のものよ。もう逃がさない、手放さない。そして主に感謝する。……その機会を与えてくれて。絶対にあの人を諦めないという“絶対の意思”に、“奇跡”がなえてくれたんだわ」（霧江）(EP6)
朱志香はもはや絶句して、……相槌さえも打てない。……霧江が敬える恋の正しい姿とは、彼女が想像するよりも、ずっとずっと苛烈なものだった…。
「今の私は。……留弗夫さんを私のところに繋ぎ止めるためなら、何でもするわ。そして、留弗夫さんの敵には一切容赦しない。……あの人が望むならば私は、人殺しさえも、躊躇しないかもしれない」（霧江）
※以上のように考え、留弗夫を手に入れるために明日夢を殺そうとまでしていた霧江です。銃の暴発によって、殺人を犯してしまった絵羽に落ち着く時間を与えたら、EP3 の惨劇を起こすことを予見し、留弗夫を守るために先に行動することにしたのです。ですから、絵羽の件がなかったら、霧江は殺人鬼にはならなかったと考えられます。

■霧江は本当に酷い母親だったの？
※以下の場面から霧江は酷い母親だったと考えている人も多いと思います。
「人でなしッ！！　カネに目が眩んで人の命を奪うなんて…！！」（絵羽）(EP7)
「あなただって、うまいことやったわ」（霧江）
「あれは事故よ！！　殺すつもりなんてなかった！　あんたとは違うのッ！！」（絵羽）
観劇者たちだけが知っている。彼女（絵羽）が殺人鬼で有り得た世界を、知っている。
「殺したの？！　みんな！！　真里亞ちゃんまで…？！　……私にはわからないわ。あなたも、自分のお腹を痛めて子を産んだ経験を持つ、母のはず。命の尊さを、知らないわけがない…！　そのあなたがどうして、これだけのことが出来るの…！」（絵羽）(EP7)
「子供なんて。勝手に出来るわ。子はかすがい、って言うわよね。子は、夫を繋ぎ止めておくための、かすがいなのよ。……留弗夫さんに、私のことを認めさせ、あの女から彼を取り戻すためだった。かすがいだった。私はもう。誰かの妻でもないし、母のつもりもない、ということよ。……私は私。霧江。留弗夫さんが死んだ今、右代宮でさえないわ。私は私の得になるように生きる」（霧江）
「そうね、留弗夫が死んで、あんたは妻ではなくなったかもしれない。でも、縁寿ちゃんがいるでしょう…！！　あんたはまだ、母であり続けるはずよ…！」（絵羽）
「言ったでしょ、かすがい、って。留弗夫さんがいなくなった今、縁寿なんて私にとって、必要なものじゃないわ」（霧江）
「……あ、……あんた……、それが、母親が子に対して言うことなのっ？！」（絵羽）
「縁寿なんて、留弗夫さんを縛り付けるための、ただの鎖。……あるいは、家族ごっこをするための、子供の役という名の駒。……私にとって縁寿は、留弗夫さんの前で良き母を演じるときに必要な駒なだけよ」（霧江）
「……それでも人間なの……。……それでも縁寿ちゃんの母なの？！」（絵羽）
「くすくすくす。縁寿なんか知ったことじゃないわよ。あんな、クソガキ。可愛いと思ったことなんて、一度だってないわよ」（霧江）
※このやり取りを額面どおりに受け止めると、確かに霧江は酷い母親です。しかし、これは霧江の本心でしょうか？　この発言をしたときの状況を振り返って見ましょう。
「礼拝堂の前で、留弗夫にも会ったわ！」（絵羽）(EP7)
「元気そうだった？」（霧江）
「ええ。姉弟で久しぶりに、仲良く語り合ったわ」（絵羽）
「……。……そう。……旦立ちたがり屋なのに、ここ一番で頼りない人ね。……やっぱり、あの人は私がいないと駄目なのね」（霧江）
**　それだけのやり取りで、留弗夫はもう殺されていることを、霧江は理解する。しかし、焦りも狼狽も、彼女の表情には浮かばなかった。ただ、彼女らしい淡々とした表情で静かに目を閉じ、……それから再び開いた時には、悠然とした笑みを取り戻していた。**
「……ありがとう。感謝するわ。これで、本当に私が全てを独り占めね」（霧江）
※霧江はこの時点で留弗夫が殺されていることを知っています。霧江にとって留弗夫は以下のような存在です。
「私は幸運よ。その地獄が１８年で終わったから。……だからもう、私は自分を、間違えない の。……あの人は私のものよ。もう逃がさない、手放さない。そして主に感謝する。……その機会を与えてくれて。絶対にあの人を諦めないという“絶対の意思”に、“奇跡”がなえてくれたんだわ。今の私は。……留弗夫さんを私のところに繋ぎ止めるためなら、何でもするわ。そして留弗夫さんの敵には一切容赦しない。……あの人が望むならば私は、人殺しさえも、躊躇しないかもしれない」（霧江）(EP6)
明日夢の死は、断じて殺人ではない。しかし霧江は、死んでしまえと常に願い続け、……１８年目にしてとうとう、自らの手で殺してやろうと決意するに至ったのだ。そして、……実際に、……殺すための凶物さえ用意した……。
「……明日夢叔母さんが亡くなったことが、……奇跡……」（朱志香）
「違うわ。……そんなの全然、奇跡じゃない」（霧江）
「……え？」（朱志香）
「だって。……彼女が死ななければ、私が殺していたもの。……つまり、彼女は必ず死ぬ運命だった。……奇跡なのは、彼女が死んだことにもかかわらず、“私が自らの手を汚さずに済んだ”。この一点に尽きるのよ」（霧江）
※殺人を犯してでも手に入れたいほどの存在だったのです。その留弗夫を喪った時、霧江は自らも死ぬことにしたのではないでしょうか。もし自分が死ねば、縁寿は絵羽に引き取られることになります。絵羽にとって縁寿は、最愛の夫と息子を殺した敵の娘です。到底可愛がってもらえるとは思えません。しかし、もし母である自分が縁寿に否定的な感情を持っていることを知ったら、絵羽は霧江への憎しみゆえに縁寿を可愛がってくれる可能性があります。その為、心にもない芝居をしたのではないでしょうか。以下の場面はその伏線だと思います。
「西部劇の悪役じゃないんだからね？　冥土の土産とか、最期に言い残すことはとか、そんなことやっちゃ駄目よ？」（霧江）(EP7)
※あの場面で絵羽に勝つもりなら、絵羽に隙を作る話をするか、もしくは問答無用の先手必勝で撃つかのどちらかです。それなのに霧江は縁寿の話をしました。地下貴賓室でも話をしていますが、あれは絵羽の銃が使えない圧倒的有利な状況でしたので、双方が使える銃を持っているこの場面とは話が違います。もはや勝つつもりはなかったのです。あるいはもう１つの可能性も考えられます。自分が勝てなかった場合の保険です。
……そう。霧江も留弗夫も、この銃には深く精通していた。父親の影響で、西部劇の銃に興味を持っていた留弗夫は、同型の散弾銃を所持していたのだ。　そして霧江も同じ銃を扱う資格を持ち、二人で射撃を楽しむほどに、……この銃には精通していた…。(EP7)
絵羽は秀吉の亡骸を抱いて泣く。彼女は、撃たれてはいなかった。弾は頭部をぎりぎりかすめ、……外れていたのだ。死んだふりをしていたのではない。彼女自身、本当に撃たれたと思ったのだ。霧江の銃口が火を噴き、激しい衝撃が頭をかすめた時、貧血のように気が遠退き、彼女は気絶してしまっていたのだ。(EP7)
留弗夫の撃った銃弾は、絵羽の足元に外れていた。(EP7)
「……やっぱ、この銃、……狙いが下に、……ズレてるぜ……」（留弗夫）
絵羽は撃たれていない。霧江の気迫に押し倒されこそしたが、……その必弾は再び、彼女をかすめただけで、逸れていた……。(EP7)

※銃に精通しているはずの霧江が至近距離で2度も外しています。霧江の銃も狙いがズレていたのではないでしょうか。給羽が生きていた時点で、霧江は自分の銃の狙いがズレていたことに気がついたはずです。しかし、調整する暇はありませんから、そのまま闘うしかありませんが、狙いがズレた銃では勝てない可能性が高いです。そのため、自分が負けたときの保険として、あのような話をしたのではないでしょうか。また、以下のように霧江が緑寿を可愛がっていたと考えられる内容があります。これも留弗夫を繋ぎ止めるためと考えることも出来ますが、僕にはそうは思えません。

お母さん(霧江)も私(緑寿)をすごく大切にしてくれたっけ。特に誕生日のプレゼントにはいつもすごくセンスを使ってくれていて、私のために何ヶ月も前から手配してくれているようなこともあった。(EP4)

「……あなたはがんばってくれたわ、給羽姉さん」(霧江)(EP8)

「霧江さん…」(給羽)

いつの間にか、給羽の後ろに霧江がいた。留弗夫もいた。

「あなたが緑寿と打ち解けようと、色々な努力をしてくれたことを知っているわ」(霧江)

六軒島の事故の後。ひとり六軒島より生還した給羽は、当日を欠席して生き残った緑寿を養子に迎えた。……後に、互いを傷つけあうような悲しい関係になる二人も、最初からそうだったわけではないのだ。給羽は緑寿の新しい親として、最後の唯一の肉親として愛情を注ごうと努力したのだ。自身の悲しみを懸命に堪えて。しかし緑寿はそれを受け容れなかった。唯一生還した給羽を、自分の親を奪ったと罵ったのだ。……6歳の幼子の傷心を理解し、給羽はそれでも耐えた。歯を食いしばって、報われぬ愛情を緑寿に注いだのだ。しかし、……給羽だって、深く深く傷付いていた。彼女の悲しい努力はついに報われず、……続く未来は、悲しいものとなる。(EP8)

「あなたは緑寿に、譲治くんに注いだのと同じ愛情を、与えようとしてくれたわ」(霧江)

「でも、……それは私だけの独りよがりで、……緑寿ちゃんにはまったく届かなかった…」(給羽)

「それを受け止めなかったのは緑寿だ。姉貴のせいじゃない」(留弗夫)

「6歳の緑寿ちゃんにそれを求めるなんて酷よ…！　それでも私は気持ちを伝えられるよう、もっともっと……、堪えなければならなかったのに…！」(給羽)

「給羽姉さん。これだけは信じて。私たちはあなたを、……責めてなんかいないのよ」(霧江)

「……霧江さん……」(給羽)

「緑寿のために、深く深く傷付いてくれて、ありがとう……。……あの子に人のぬくもがあるなら、いつか必ず、あなたが注いでくれた愛情に気がついてくれるはず」(霧江)

「いい、緑寿。人生には、これからもたくさんの問題が訪れるわ。……今は給羽伯母さんが助けてくれるから、頼ってもいい。でもね、人生の問題のほとんどは、あなた一人で解かなくちゃならないの。その時に、それまで助けてくれた人の助言や恩を、必ず思い出すようにしてね」(霧江)(EP8)

「うん。わかった」(緑寿)

「……給羽姉さん。緑寿をよろしくね」(霧江)

「……お父さん、……お母さん…。……私は……」(緑寿)(EP8)

「今は何も言わなくていいわ。……大変な冒険をしてきたわね。……あなたはひとりぼっちで、大変な冒険をしてきたわ…」(霧江)

「これでわかっただろ。もう、忘れないだろ」(留弗夫)

わかるよ、……お父さん…。

「……ここ(黄金郷)が、お前の帰るべきところだってことだ…」(留弗夫)

「……うん…」(緑寿)

私がそう答えると、お父さんとお母さんは、私を力強く抱き締めてくれた。熱い雫が、頬に落ちる。お父さんとお母さんの、涙だった……。

■霧江は留弗夫の窮状を知っていたの？

霧江は、留弗夫の浮かべる微妙な表情の意味をすぐに察する。……夫は、自分の知らないところで大きなトラブルに巻き込まれ、ひとり苦悩していたのだ。(EP1)

「……。……初耳なんだけれど、私たちには、急ぎ、まとまったお金が必要だという前提があるのね？」(霧江)(EP2)

「つまり、蔵石さんからお金を借りるのはとても難しいというわけね。充分な備えが必要よ。私たちには時間も失敗も許されてない。そうだったわね」(霧江)(EP5)

※EP1と2では知らなかったようですが、EP5では知っていたようです。2対1で知らなかったと考えることも出来ますが、EP5ははじめて“金蔵の死”が明らかにされたEPです。ゲーム盤上前の状況で語られていることは真実である可能性が高いため、どちらかいうと知っていた可能性のほうが高いでしょう。

■曲名の秘密

※この作品には以下の曲があります。“オルガン小曲　第6億番　ハ短調”“599_million_ruins”“弦楽三重奏曲　第6億番　嬰ヘ短調”どうやら、6億という数字に何かこだわりがあるようです。実はこの数字、計算で出て来ます。１９歳×３６５日×２４時間×６０分×６０秒＝５９９１８４０００。つまりヤスの人生を秒に換算した数字なのです。“オルガン小曲　第2億番　ハ短調”こちらは２０００００００００秒÷６０秒÷６０分÷２４時間÷３６５日＝６．３４１…。つまりヤスが待った6年間を秒に換算した数字なのです。

■“金蔵の気まぐれ”とはどのようなことなの？

また、…気の毒なことに、(紗音と嘉音は)夏妃奥様にも嫌われております…。もちろん、年季という意味では奥様の方が長くこの家におられます。ただ、……これぱかりは奥様にも同情しなくてはなりません。…本当にお嬢様も罪作りな方でございます…。ご自身の、ちょっとした気まぐれが、奥様にこれほどまでの劣等感をお与えになるとは、どうして思い至らなかったのでしょう…。(熊沢)(EP1)

※金蔵の気まぐれによって、夏妃が劣等感を持っていること、そしてそれゆえに紗音と嘉音を嫌っていることがわかります。

「お前のそのみすぼらしい姿を鏡に映してみるがいい！！　お前の服のどこに翼が？　どこに片翼の鷲が許されているのか？　貴様など右代宮家の跡継ぎを残すためだけの借り腹じゃないの！！　身の程を弁えるがいい、この端女があッ！！」(給羽)(EP1)

……夏妃には言い返したい言葉が山ほどあった。でも、怒りと悲しみで喉を潰され、それらのひとつも口に辿り着かせることができなかった。…行き場を失った怒りは、一粒の熱い涙となってぽろりと零れ落ちる…。

※夏妃は自分が片翼の鷲を身にまとえないことを非常に気にしているようです。

福音の家から送られる“優秀な”使用人は、もはや血縁すら信用できない金蔵にとっては唯一信頼できる存在であった。そのためある時、金蔵は彼らを直属の使用人として家族をまとうことを許し、自分の身近に仕えさせたのである…。(EP1)

※以上のことから、“金蔵の気まぐれ”とは夏妃には片翼の鷲を許していなかったにもかかわらず、使用人に許したことだと考えられます。しかし、ということは、金蔵は片翼の鷲というものにそれほどこだわりを持っていなかったのかもしれません。他の人がこのことについて言及する場面はないので、片翼の鷲について気にしていたのは給羽と夏妃だけだったのではないでしょうか？

■金蔵の書斎

埃と甘ったるい臭いの入り混じった薄暗い書斎に、年輩の男たちの姿はあった。(EP1)

祖父さまの書斎は、……事前に尋を聞いていたので、それほど驚きはしなかった。しかしそれでも、怪しげな薬物の臭いと、脳を溶かすような甘い臭いにはさすがに閉口するしかなかった…。(EP1)

留弗夫は布団に手を突っ込んでみるが、何の温もりも感じることは出来なかった。温もりがないどころか、……完全に冷え切っている。そして、冷え切っているのは布団だけではない。……部屋の空気や、……気配と言えばいいのか、…そういう、温もりのようなものが冷え切っているように感じられた。留弗夫には、金蔵がこの部屋を抜け出

したのは、ずいぶん前のように感じられた…。(EP5)
「……しかし、滑稽は行き届いてるぜ。生活の痕跡はある。……」(留弗夫)
※EP1 と EP5 で随分、様子が違います。異臭の話が出ないことから EP5 では異臭もないようです。金蔵の在室を演出するなら、金蔵がいたときと様子を変えたらまずいはずなのですが…。

■金蔵:球音が１９年前の赤ん坊であることに気がついていたの?
「学校に通いながら働く子など、あの子以前には前例もありませんでした」(夏妃)(EP7)
「正直、最初の挨拶の時に驚いたよ。明らかに幼かった。他の子たちは１６歳から１８歳くらいなのだが、その子だけはさらに１０歳は幼く見えた」(蔵臣)
「福音の家から来る若過ぎる使用人は、あくまでも社会勉強として当家に訪れているのであって、そもそも、使用人としての戦前はあまり期待していません」(夏妃)
「そうだな。やはり大人の、年季の入った使用人たちに比べると、どうしても頼りないものだ」(蔵臣)
「それが、未就学の子を受け入れるなんて。家事はおろか、社会勉強どころか義務教育もまだではありませんか。お父様にどんなお考えがあったのか存じませんが、明らかにおかしいと思いました」(夏妃)
※このような状況ですから、当然、気がついていたと考えられます。しかし、源次に問い質したところで、恍けるだけだったでしょう。
「……あら懐かしい。どこから出てきたんやら。私がいくら触らせてって言っても、指一本触れさせてくれなかったやつよぅ」(絵羽)(EP1)
「へえ…。祖父さま、こんなの持ってたんですか…。知らなかったですよ」(朱志香)
……お嬢様に、銃を色々撃たせてもらったっけ。…あれ、……結構、面白かったな。(嘉音)(EP6)
※実際に撃たせてもらったのは球音だったと考えられますが、絵羽には触らせず、朱志香はその存在も知らなかった銃を撃たせていたということは、特別に可愛がっていたということなのでしょう。金蔵にとって理鶯は“息子”なので、女である絵羽や朱志香とは扱いが違った可能性もありますが。

■金蔵は夏妃を嫌っていたの?
※以下のように少なくとも夏妃はそう考えていたようです。
(金蔵は夏妃に)……挨拶さえ、……目を合わせてさえ……。(EP5)
※実際、以下の赤字があります。
「(赤:夏妃。金蔵があんたの心に、片翼の鷲を刻むことを、いつ許したっての? あんたの妄想の中の金蔵の言葉でしょうが、それは。……本当の金蔵はね。生涯、ただの一度も! あんたを心の底から信頼したこともないし、あんたに紋章を許そうと思ったことも、ただの一度もないわ!)」(ベルン)(EP5)
※ところが本文をよく読んでみると、金蔵は夏妃を大切にして可愛がっていたと思われるのです。まず、以下の内容です。
(ピンロウについて)「こいつは親父殿も好きでね。昔は取り寄せたのか、屋敷のテラスでも、モグモグやっていたものだ。夏妃が来てからは止めたようだがね。ほら、君が私よりも尊敬する親父殿も愛用していたんだぞ。ほらほら遠慮なく試したまえ」(蔵臣)(EP5)
※好きだったピンロウを夏妃の為に止めています。もっともこれは下品なピンロウを噛む姿を、高貴な家から来た夏妃に見られたくないという、見栄だと考えられますが。しかし、少なくとも夏妃の存在を意識して、好きだったピンロウを絶ったことは間違いありません。
「また蔵臣と喧嘩をしたのか。……嫁を労わらぬとは、蔵臣め、私の悪いところばかりを受け継ぎよる……なんというみすぼらしい顔か、顔を洗え。仮にも右代宮家次期当主の妻ではないか。そんな情けない面を使用人に見せてはならぬぞ」(金蔵)(EP5)
……夏妃は理解している。これは在りし日の金蔵の記憶と、今こそ話を聞いて欲しいと願う夏妃の願望が生み出した…幻。
※この場面の金蔵は夏妃が「もしこの場所に金蔵がいたらこんなことを言っただろう」と想像した姿です。確かに言葉は厳しいですが、夏妃を労わる言葉です。夏妃にはこの優しさが見えないようですが、金蔵は日常的に夏妃にこのような言葉をかけていたことがわかります。
……金蔵はかつて、怒りの感情は、恐怖と不安を最も早く中和する鎮静剤だと言っていたっけ。群衆の中で、もっとも恐怖に怯える人間を見分けるのは容易い。必ず最初に怒り出すからだ。……そう(夏妃に)話してくれたことを思い出す。(EP5)
※こんな話もしてくれたようです。嫌っている人間にこんなことを話すでしょうか。そもそも夏妃が右代宮家に嫁ぐきっかけになったのは、以下の経緯です。
「この赤い日記帳の２４ページに以下の記述があります。…… “私は右代宮家に、嫁と言う名で軟禁された人質なのです。でも、私が人質となることで、全てが丸く収まるならば……”」(エリカ)(EP5)
「夏妃さん。あなたは自分が人質であったことを、ここですでにお認めになっています。……熊沢さんは、夏妃さんがここに来られた当初からお世話をしていますね? 当時のことを話して下さいませんか?」(エリカ)
「……え、……えぇ、そうです。…私にそう言われたこともございました…。……奥様のご結婚についての事情を知るのは、……今は私と南條先生くらいのものでしょうか…」(熊沢)
金蔵が、もっとも凶猛と恐れられていた時代のこと。金蔵はあらゆる財力とコネクションを持っていたが、成金呼ばわりされ、品格がある上流階級から見下されていることにコンプレックスを持っていたという。その為、金蔵は、高貴な家から蔵臣の嫁を迎えて、右代宮家の格を上げたいと思っていたらしい…。そして、夏妃の家を経済戦争で打ち負かし、……その手打ちとして、縁談を提案した。そして差し出されたのが、……夏妃だった。夏妃は、神聖の家で清らかに育てられた、文字通りの姫君だった。それを差し出させることは、相手に与える最大の屈辱であると同時に、金蔵にとっては最高のトロフィーだったのだ。だからその縁談は夏妃にとって、最初から屈辱的なものであった……。
※夏妃が金蔵を憎み、軽蔑するのなら理解できますが、以下のように、夏妃は金蔵を心の底から尊敬していたようです。
「お父様は自己を厳しく律する模範的な方です! そのような汚らわしい存在を島に連れ込むなど、到底考えられません…!」(夏妃)(EP3)
「う、…うわああああああああああああぁ…。お父様…、お父様ぁあぁぁぁぁぁぁ…!!」(夏妃)(EP5)
…夏妃は、二度と目覚めぬ眠りに就いた金蔵の胸に突っ伏し、号泣した。
「お、……奥様、…どうかしっかり…」(熊沢)
「お父様、お父様……!! こんな、…突然なんて……。うううううううううううう!!」(夏妃)
もうひとりの父として慕った金蔵の死に、夏妃の涙は止まらない。熊沢はその背中をさすりながら、夏妃を慰めるのだった……。
「何とかなりませんか…。亡くなったとはいえ、お父様の大切なお体です。傷を付けるなど、耐えられることではありません…」(夏妃)(EP5)
※金蔵の優しさは可らかの形で夏妃に伝わってはいたのでしょう。そのため、夏妃は金蔵を尊敬することが出来たのです。
「蔵臣。また兄弟喧嘩か。お前ごときが弟や妹たちを率いる貫禄が宿らぬのか。情けない! 長男が聞いて呆れるぞ!」(金蔵)(EP3)
間髪入れずにその頬をぴしゃりと打つ。
紗音は怖きながら、普段、屋敷に仕えながら見慣れた光景を思い返す。兄弟たちに尊大な態度で振舞う蔵臣ですら、金蔵の前では、未だに子ども扱いなのである。…紗音も何度か、金蔵が蔵臣に、平手で打ったり、正座をさせているところを見たことがある。……いい歳にもなってそれを強いられるのは、相当の屈辱のはずだ。(EP1)
絵羽が涙をこぼすまでに顔を真っ赤にしながら、……夏妃に歩み寄り、……その胸倉を掴み上げる。そして無言で、夏妃のその頬を打つ。生まれてこの方、平手で打たれたことなど一度もなかった夏妃は、生まれて初めての、鉄の味の感触に呆然とする。(EP5)
※ “■金蔵は暴力当主だったの?”で取り上げるのですが、金蔵は女にも容赦なく鉄拳を振るうような人間です。しかし嫁いでから３０年にもなるのに夏妃は一度も金蔵に殴られたことはなかったわけです(平手ではなく拳で殴られたのだろうとか、穿った見方をすることも出来ますが)。
…蔵臣さまと夏妃さまにはなかなか子宝が授からなかったのです。何しろ男嫡女卑の右代宮家でございます。妻は跡継ぎを残すための道具。……その妻が唯一の役割を果たせないのなら、もはや人間扱いなどされません。当時の奥様が、お嬢様からどれほど貴め苛まれていたか、思い出すのも苦しゅうございます…。(EP1)

※夏妃の不妊の期間は１２年です。２～３年も妊娠しなければ、見切りをつけるのが普通ではないでしょうか。それなのに１２年も待ってくれたのです。立場上、厳しい言葉をかけはしたでしょうが、嫌っていたなら藏王に妾を取らせるなり、追い出したりなりしたはずです。高貴な家から奪い取ったトロフィーだったから、と考えることも出来ますが、高貴な家から迎えた嫁を不妊を理由に突き返した方が、相手に与える屈辱は遥かに大きいはずです。

「この赤子を、我が孫として迎えよ。そして藏王の後を継ぐ者として育てるのだ」（金藏）（EP5）

「……それはつまり、……私と夫の子として…、育てよと仰るのですか……」（夏妃）

「そうだ。お前に子が宿せぬことはもはや明白。……お前の体には、女としての欠陥があるに違いない」（金藏）

※確かに言葉として厳しいですが、ようは「子どもが出来なくてもお前を嫁として認めるから、もう苦しい治療などしなくてよい」ということです。そして、ペアトリーチェの忘れ形見である理御を託すに値する人間であると認めているのです。金藏は夏妃を心の底から信頼ましていませんでした。しかし、そもそも金藏が心の底から信頼する人間などいたのでしょうか？　いたとしてもせいぜい源次くらいのものではないでしょうか。

父（金藏）にとって、女は男を支えるものでしかなく、それ以上であることを許さなかったからだ。（絵羽）（EP3）

※金藏ことって女は男が守るものであり、庇護するものであったのです。信頼されるものであり、信頼するものではないのです。挨拶のときに目を合わせなかったのも、金藏は挨拶をするときに、誰に対しても目を合わせなかった可能性がありますし、人質同然で嫁こ迎え入れた夏妃こ対する後ろめたさがあったのかもしれません。あるいは夏妃が美人だったので照れ臭くて直視できなかった可能性もあります（夏妃は藏王の嫁、夏妃は藏王の嫁‥）。

■金藏は暴力当主だったの？

親父（留弗夫）に聞かされた話じゃ、何でもかんでも鉄拳制裁で、娘であろうと木刀で容赦なく打ち据える暴力当主だったそうだ。俺も何度も会った記憶はないが、非常に気難しそうな顔をした祖父さんで、いっつも鋭い眼光で周りを萎縮させていたっけ。祖父さんがいる時の張り詰めた空気は、窒息しかねない辛いものだったことも思い出す。（EP1）

「確かに強面だけど、そんなに硬くなるほど怖い人じゃないよ。決して理不尽なことは言ってないもん。口下手なだけでちゃんと筋は通す人だよ」（嘉代）

「私なんか木刀で引っ叩かれたことあるしよー。尻だけ尻！　それも乙女の生尻をよー！」（朱志香）

（金蘭は）さっきから何度か話題に上っているので大体わかるだろうが、非常に短気でおっかないお人だ。…俺は孫だし、最後に会ったのは6年前の小学生の時だったので、叩かれたりした覚えはないんだが、親兄弟たちはずっと鉄拳で教育されてきたらしい。（EP1）

金蘭は莫大な資産を持っていて、それを息子たちに貸し与えていた。もちろん、生活に困窮したからと貸す金ではない。…その借りた莫大な金を使い、どのように事業を拡大するか。どれほどの利子を付けて、いつまでに返済できるのか。持たざる者の借金とは違う。攻める者の借金なのである。金蘭は、資産を貸し与えるに値するかどうか、厳しく審査し、その後の運用についても厳しく監視した。だからこうして、六軒島に親族が招かれて、金蘭に事業説明を行なう光景はたまにあることだった。（EP2）

兄弟たちに莫大な額を貸して振舞う藏王ですら、金蘭の前では、未だに子ども扱いなのである。…紗音も何度か、金蘭が藏王に、平手で打ったり、正座をさせているところを見たことがある。（EP2）

※鉄拳制裁も辞さない、暴力的な当主だった一面はあったようです。ただし、木刀で引っ叩かれた朱志香が無事だったことから、加減は弁えていたようです。あるいは冗談交じりだったのかもしれません。

■金蘭は本当は優しい人だったのでは？

「確かに、チェスの目的は勝利を目指すことで、互いにそのために最善手を指す。…そしてそれを讃みあう知的ゲームです。……ですが、勝利以外にもうひとつ目的があることを、金蘭さんはお忘れではありませんかな？」（南條）（EP2）

「……何だと。勝利以外にどんな目的があるというのか」（金蘭）

「はっはっはっは……。金蘭さんがそんなこともお忘れとは。…チェスを通し、親友と楽しい時間を過ごす、ですぞ」（南條）

「む。……参ったな。それは確か、ずいぶん昔に私がお前に言った言葉だったはず。……これは参った」（金蘭）

※この場面自体は立想描写ですが、金蘭の過去の発言は本当のものだと考えられます。

「おじ様は、家族生活と愛人との生活の２つを両立させようと、最初から想定していたと考えるのが妥当なんでしょうねぇ。多分、愛人との関係は小田原時代にまで遡るでしょうし」（絵羽）（EP3）

気付けばもう、自らを若者と呼べず、若者たちに笑われそうになる歳になっていた。気が遠くなるような、長くて何も中身のない灰色の日々。それは２０年にも及んだ。妻を愛していなかったし、かといって毛嫌いもしなかった。……どうでも良かったからだ。（EP7）

※可故、金蘭は２つの家庭を持とうとしたのでしょうか？　本当に妻や息子たちを愛していなかったのなら、離縁してしまえばよかったのではないでしょうか。

「……欲深な長老たちは、互いの利益ばかりを主張し合い、新しい当主を選び出すことさえ出来なかったのだ。長老どもは、自分たちの操り人形になるなら、次期当主など、どこの青二才でも良かったのだ。むしろ、帝王学に無知な人間ほど好ましい」（金蘭）（EP7）

※かつての金蘭は長老たちの操り人形でしたから、政略結婚の妻とはとても離縁など出来なかったでしょう。しかし、金蘭がビーチェに会った時、状況は大きく変化していました。

私は長老たちの働き掛けにより、徴兵が免除されていた。……もちろん悲劇ではない。彼らの大切なお人形だからだ。しかし、私が自らそれを返上したいと望めば、それはとても容易い。その頃には、右代宮家は完全に没落しかかっており、長老たちは、自分たちの寿命が極度には短縮をくすねられたようで、もはや用済みの私が何をしようと、関心はないようだった。

※もはや金蘭がどうなっても構わないと長老たちは考えていたのです。しかも、金蘭の手元には莫大な金塊があります。家族を愛していなかったのなら、離縁してしまえばよいのです。しかし、金蘭はそうしませんでした、やはり、家族を愛していたのです。

紗音はっきりと理解する。愛を知ることは、魂を得ること。…即ち、家具から人間に生まれ変わること。ペアトリーチェの言葉には何も間違いはなかった。…彼女は愛を知ることで、人間を知ったのだ。（EP2）

※とありますので、金蘭も愛を知ったことによって、自分に向けられる愛にも気がついたのかもしれません。

……歳は向こう（ペアト）の方が上だろうに、…まるで私（樓座）を親鳥だと信じるアヒルか何かの雛のように、本当に素直に従ったわ。（EP3）

※九羽鳥庵のベアトの方が樓座よりも年上ということは、ビーチェと出会ってからも妻との夫婦生活があったということです。

「（金蘭は）絶対、お母様が亡くなった時より泣いているわ」（絵羽）（EP7）

※金蘭は妻が死んだ時には泣いているのです。あるいは絵羽は泣いたと考えているのです。つまり、そのような関係だったわけです。後は以下の内容です。

確かに、金蘭とても生まれたばかりの頃に、目尻を下げた日もあったのだ。……まだ多少は正常な心が残っていた頃には。（EP4）

……金蘭に直接仕えることを許された名誉と厳しさ。しかし彼は、その全ての時間が厳しかったわけではない。……その威厳を保って見せねばならない家族の姿がない時、信じられないくらい子供っぽい顔を見せて、おかしな悪戯の片棒を担んできたりするのだ。……だお雛祭に、飾を色々撃たせてもらったっけ。（EP6）

世間が右代宮金蔵を語る時、それは総帥で短気で怒りっぽく。そして気紛れで寡黙で理解しがたい奇人であるかのように語られた‥。（EP8）

「でもそれは、……祖父さまの外の顔だ。右代宮家で、親族一同、水入らずで過ごす時の顔じゃない。縁寿だって、遊んでもらったり、頭を撫でてもらったりしたことがあるはずだ。本当に覚えてないのか……？」（戦人）

そう言ったことが、……あったかもしれない。しかしそれは、金蘭のちょっとした気紛れで……。

「……私、……見てたもん！　知ってたもん！　右代宮金蘭は恐ろしい人だ、って！　怒鳴っているところを見たことがあるもん！！　私は覚えてる、忘れない！！」（縁寿）

「さっきも見た通り、祖父さまは唐突なお人だ。……ひょっとすると、何かを驚かそうとしたのかもしれない。あるいは、親たちとの真剣な議論の中で、つい怒鳴ってしま

ったこともあったかもしれない」(戦人)
「お、……お兄ちゃんだって、6年間、右代宮金蔵には会ってないじゃない」(縁寿)(EP8)
「そうだな。でも、6年ぶりに帰って来て、……祖父さまは6年経っても、まったく変わってなかったって知ったぜ。オカルト趣味なのは間違いない。余生の趣味にしちゃ、ちょいと珍しいものだったのは事実だ。……その不気味な収集品で孫を怖がらせてからかう、悪い趣味があったことは、俺も認める」(戦人)
戦人もかつて金蔵に、からかわれたことがある。おかしな杖が7本も詰まったアタッシュケースを見せられ、……これは中世の昔に、魔女が生贄の儀式で、心臓を抉るのに使った杖だ、みたいなことを。脅された当時はそこそこに怖かったが、今にして思うと、文字通りの子供騙しだ。祖父さまは孫とじゃれ合いたくて、……怖がらせてからかっていただけなんだ。
「祖父さまはきっと、……お前にも同じことをしてからかったと思う。幼いお前が、それに怯えて、祖父さまを不気味で恐ろしい人だと思い込んだとしても、無理もない話だと思う。さっき、客間でハロウィンのプレゼント交換があったな」(戦人)
「……何よ、あれ。あんな甘ったるいこと、右代宮家でやるわけがない…！」(縁寿)
「お前は、……まるで覚えてないんだな」(戦人)
「私がかつて、プレゼントをもらったことがあるというの？！　覚えてない！！　そんなのあるわけがない…！」(縁寿)
「……オカルト好きで西洋かぶれの祖父さまが、ハロウィンをやらないと思うか？……祖父さまのハッピーハロウィンは、もう親族会議の挨拶みたいなもんだったぜ。……縁寿だってもらってるはずだ。……幼いってのは残酷だな。祖父さまが心を込めて選んだろうプレゼントも、……お前の心にはまったく残らなかった」(戦人)
……やがて縁寿も年を経れば、右代宮金蔵が、世間でどのような評判を持つか知るだろう。世間が知る右代宮金蔵と、孫に接する金蔵は、まったく違う。それを知る時。……縁寿は右代宮金蔵を思い出して、世間の知る暴君の一面と、微笑んだ笑顔のどちらを思い出してくれるだろう。(EP8)
私が恨むべく自分勝手だったのから、覚えてさえいなかった。いつも私を甘やかしてくれる、やさしかったお祖父ちゃん。あのハロウィンのクイズパーティ自体は、確かに幻。あんなことは、確かになかったけれど。……親族のみんなで集まる席に、……あのパーティに勝るとも劣らない、……楽しいことが、いつだってあったじゃない……。(EP8)
「お前(留弗夫)の人生にも、そして家庭にも。私は何も文句を言うつもりはない。しかし、親父剛はカンカンだよ。勘当ならまだしも、子の方から愛想を尽かして籍を出て行くなど、聞いたこともない」(蔵臼)(EP7)
※これは世間体を気にしてのことでしょうか？　自分の愛する孫が、留弗夫のせいで家を捨てたことを怒っているのではないでしょうか？
須磨寺家から見た右代宮家は、莫大な財産は持っていても、すでに没落した格下の家と見られていた。しかもその家の次男坊の、正妻ならまだしも愛人とは…。本来なら、これほどの不名誉ならば、本家の娘として容赦はされない。棒を立てて、右に倒れれば太平洋、左に倒れれば日本海に、簀巻きにされて放り込まれているところだ。……しかし、霧江への処分は勘当のみで、信じられないくらいの温情判決だった。その後、須磨寺家は右代宮グループの一部において、優遇的な措置を受けるようになる。……何らかの裏取引があったのは間違いない。つまり霧江は、右代宮家からの経済支援をダシに、堂々と須磨寺家を出て行ったわけだ。(EP4)
※これだって留弗夫の一存でこんなことが出来るわけがなく、霧江の為に金蔵が動いてくれたわけです。
(ＫＥＩＹＡ)源次は「お嬢様は真里亞さまのことをあまりお好きではない」と言っていました。あれはほぼ事実と見てもよいのでしょうか。(最考戦)
EP8まで見ると、とてもそうは思えないわけです。金蔵は孫を溺愛していたように見えましたよね。ただ、名前を付ける時にかなり揉めたのは間違いないわけで。金蔵としては、可愛い可愛い孫娘のためにとっておきの名前を用意しておいたのでしょうけど、よほどのドキュンネームだったんでしょうね(笑)。
この世界の一番の主たる観測者は紗音なんですよね。少なくとも世界観においては。だから紗音が見て聞いて、そうだと思ったことが世界観のデフォルトになってしまう。ベアトリーチェが金蔵の書斎に入れないというのは、一方的に紗音が作った設定です。(最考戦)
※紗音はどう考えても、金蔵、夏妃、絵羽に対しては良い感情を持っていません。よってゲーム盤でのこの3人については“書き手による悪感情”によって描写が歪んでいる可能性があります。

■金蔵不在の伏線
「…ん―…、去年から相変わらず、かな。……余命3ヶ月、余命3ヶ月って割には相変わらずピンピン、カリカリ、イライラしてるって話です」(朱志香)(EP1)
※朱志香の言葉から朱志香は金蔵としばらく会っていないことがわかります。
「……あなたが親族会議に専念できるよう、全ての手配を済ませています。…全て」(夏妃)(EP2)
「……すまん。……親父剛の件は、……問題ないかね」(蔵臼)
「はい。……源次と南條先生は私たちの味方です。…あの強欲な兄弟たちを、決してお父様には会わせません」(夏妃)
※蔵臼と夏妃には、源次と南條を巻き込んでまで金蔵を親族に会わせたくない事情があることがわかります。
源次、紗音、嘉音の3人は、右代宮家の紋章である「片翼の鷲」を身に着けることを許された、金蔵直属の使用人だ。もちろん、右代宮家に仕えているため、誰の命令にも従うが、唯一の上司は金蔵だけだ。人事権も金蔵のみが握っているため、たとえ蔵臼と言えど、彼らを勝手に解雇することはできない。(EP1)
「…私は源次たちが怪しいと睨んでいます。やはり、どんな動機を付けてでも片翼の鷲の使用人たちは全て解雇した方が良かったんです」(夏妃)(EP3)
「まぁ、そう言うな。長く勤めてくれた恩もある。…もちろん、気は許せんがね」(蔵臼)
※人事権を金蔵が握っているはずの片翼の鷲の使用人を、解雇した方が良かったと言っています。まるで人事権が蔵臼たちに移っているような感じです。

■蔵臼と夏妃の関係は冷めていた？
「譲治兄さんのところは両親仲が良くて羨ましいぜ？　うちなんか冷め切ったもんさ。そのくせ、私の成績の話だけは連帯しやがる」(朱志香)(EP1)
※ということですが、これは朱志香の主観です。
「……君を思えばこそ、あえて関わらせなかったのだ。これ以上は頭痛に触るだろう。君は今夜はこれで休みたまえ。兄弟の話は兄弟でつける。君は関係ない。それだけだ」(蔵臼)(EP1)
鈍い頭痛が夏妃を苛む…。どんな薬や、どんな香を焚こうとも癒されることはない。……むしろこうしてひとりで薄暗い廊下にたたずみ、雨音で頭を満たしている方が痛みを和らげてくれるような気がした…。……私は、夏妃ではあっても、…右代宮夏妃ではなかったのだ。借り腹と蔑まれ、…それすら出来ぬと罵倒され、……それでもなお妻の役割を全うしようとして、……夫にまで拒絶される。娘の養育だけが自分に残された仕事なのかとがんばった。…しかし、やり場のない怒りや悲しみは、無意識の内にそれらを歪ませてしまった…。過剰に厳しくした教育のせいで、朱志香にはすっかり嫌われてしまった。学校の成績にしか興味がないと蔑まれている。夏妃は逃れえぬ運命によって、右代宮家に嫁がなければならなかった日々を思い返してしまう…。それは自ら禁じた記憶のはず。……彼女はそれを意識して忘れ、右代宮夏妃として与えられた人生に、積極的に臨もうとしたのだ…。そして積み重ねた新しい人生。……でも、…その全てが、……さっき、呆気なく否定された気がする。
「…今日の準備は全て手配が終わっています。あとはお茶でも飲みながら寛いで待とうではありませんか」(夏妃)(EP2)
「……すまん。君に、いつも面倒なことを全て押し付けている」(蔵臼)
「…どうか。私をもっと頼ってはいただけませんか。…私はあなたの妻です」(夏妃)
「……無論、君にはいつも助けられているし感謝もしている。……だからこそ、私は私の仕事に専念できる」(蔵臼)
「わかっています。……お仕事のこと。……そしてお父様の遺産の話、ですね」(夏妃)
「……君には関係のないことだ。欲深な兄弟たちの腐肉の争いあいに過ぎん」(蔵臼)
「……大丈夫です、あなた。…全てうまく行きます。あなたのお仕事がうまく行かなかったことはありません」(夏妃)
夏妃はそっと蔵臼の肩に寄り添う。蔵臼の仕事の苦労を労う言葉を掛けるが、…順調でないことを一番知っているのが夏妃だった。…夏妃だけは知っている。右代宮家の長男として、これから大きな責任を背負っていく蔵臼の、辛い胸中を誰にも打ち明けられず、常に父の偉業と比べられる苦悩を知っている…。

「……あなたが親族会議に専念できるよう、全ての手配を済ませています。…全て」（夏妃）
「……すまん。…親父殿の件は、……問題ないのね」（蔵臣）
「はい。……源次と南條先生は私たちの味方です。…あの強欲な兄弟たちを、決してお父様には会わせません」（夏妃）
※上記2つの内容は同じようなやり取りですが、夏妃の受け取り方が微妙違います。どちらが正しいのでしょうか？　EP5の蔵臣と夏妃のやり取りは金蔵の死を前提としているため真実である可能性が高いのですが、それに近いのは後者の方です。ということは前者は、書き手によって歪められた描写であると考えられます。
「朱志香。そういう言葉遣いは改めるよう、いつも言っていますよ」（夏妃）（EP2）
「……はい」（朱志香）
朱志香は恭然と答える。それを見て、蔵臣は少し微笑むと夏妃との話を中断した。
「やれやれ…。朱志香は勉強と一緒に、少しはお淑やかな言葉遣いも学ぶ必要があるんじゃないかね？　右代宮家の家紋を背負う一人娘が、それではみっともないな」（蔵臣）（EP2）
「いいんですいいんです。あの人（夏妃）、そういうの全然気付かない人なんで」（朱志香）（EP2）
「朱志香。母親をあの人呼ばわりとは感心できんね。謝りなさい」（蔵臣）
※蔵臣は朱志香の言葉遣いには寛容なようですが、夏妃に対する言葉に関しては厳しいです。その他、以下のように蔵臣の言動には夏妃を気遣う様子に溢れています。ただ、夏妃を気遣うあまり、面倒ごとから夏妃を遠ざけようとする蔵臣を「冷たい」と夏妃は感じていたようですが…。
「だから焦るな、落ち着け。何なら、君は熱を出したことにして寝込んでいてくれればいい。その間に、私が全て乗り切って見せる」（蔵臣）（EP5）
「……あなただけに任せられません…！　私も最後まで戦います…！」（夏妃）
夏妃が強情に涙を堪えきれなくなった時、……そっと蔵臣がその肩を抱いた。……夫の抱擁に温かみを感じたのは、どれくらいぶりだろう……。
「頭痛が、……酷いのだろう？　君がそういうしわを眉間に浮かべる時は、いつもそうだ」（蔵臣）
「私は愛のない結婚を強要された、花嫁という名の人質だと、…そう思っていました……。ですが、……夫は、……私を人質などと見下しはしませんでした……。…私の事情を理解し、同情と慈しみを与えてくれました……。夫だけは、……私の理解者だったのです…！」（夏妃）（EP5）
「……なるほど。それは一理あります。確かにあなたの日記には、蔵臣さんがあなたの事情を知って、気遣ってくれる描写が、いくつか散見できます。しかしあなたはそれを、こちらの日記帳の４７ページで、むしろ気持ちが悪いと描写していますね？　以下、朗読します。“蔵臣の気遣いは、むしろ私を惨めにさせるだけ。そうして私を導しめているのではないかとさえ思う時があります”。……以上から、夏妃さんが、そんな気遣いを見せていた夫を嫌悪していたことがうかがえます」（エリカ）
「ま、……待ちなさい…！　た、確かに最初はそう思ったこともあります…！　まだ日々を不安に過ごす私が、気遣いを素直に受け取れず、邪推してそう記してしまったこともあったかもしれません…！　私はやがてそんな夫の気遣いに気付いて、その気持ちを受け入れるようになるのです…！」（夏妃）
「その記述は、日記帳のどこにも登場しませんが？」（エリカ）
「に、……日記にさえ書かない、秘められた気持ちというものもあります…！」（夏妃）

■蔵臣はムスカ大佐？
※蔵臣は『天空の城ラピュタ』に出てくるムスカ大佐の台詞のパロディをいくつか話しています。
「凄まじい破壊力を持つ黄金のインゴットだよ。こいつがなければ、誰も黄金伝説を信じはしなかったろう」（蔵臣）（EP1）
※「凄まじい破壊力を持つロボットの兵隊だよ。こいつが空から降ってこなければ、誰もラピュタを信じはしなかったろう」（ムスカ大佐）
「こいつはまともなインゴットじゃない。このインゴットを鋳造したのが、国内なのか国外なのか、それすらも私にはわからないんだ」（蔵臣）（EP1）
※「こいつは地上で作られたものではない。この体が金属なのか粘土なのか、それすら我々の科学力ではわからないのだ」（ムスカ大佐）
「ここを見たまえ。……性えることはない。こいつはただの金塊だ」（蔵臣）（EP1）
※「ここを見てくれ。怯えることはない。こいつは始めから死んでいる」（ムスカ大佐）
「…はははは。お前は六軒島を宝島が何かだとでも思っているのかね？」（蔵臣）（EP3）
※「君はラピュタを宝島が何かのように考えているのかね」（ムスカ大佐）
「３分間、待ってやる…！」（蔵臣）（EP4）
※「３分間待ってやる」（ムスカ大佐）
（聞き手）蔵臣はどんな役回りのキャラクターなのでしょうか？（真相１）
ラピュタ王。
※という発言がありますので、決定的といえば決定的なのですが…。

■ゲーム盤とはどのようなもの？
「あの魔女どもに、ベアトのゲームは理解できるのか」（戦人）（EP5）
「…同じゲーム盤を使う以上、この子に出来ないことは出来ません。……しかし、この子がやらないことはやれます」（ワルギ）
「……ロノウェは、ヤツらのゲームを見たのか」（戦人）（EP5）
「一部ではございますが、……上辺は、大変良くお嬢様のゲームに似せていると思います。しかし、根本が大きく異なっています」（ロノウェ）
「それはベアトのゲームのルールに反することなのか」（戦人）
「いいえ、反しません。ラムダデルタさまはお嬢様のゲームのルールを、実によく理解なされております」（ロノウェ）
※誰がゲームマスターであったとしてもゲーム盤のルールには従わなくてはならないようです。

■ゲームマスターとはどのようなもの？
「領主…?!　誰が?!　このカケラの支配者は誰?!　私です…！！」（エリカ）（EP5）
「……領主……。……まさか……、……戦人が……？」（ベルン）
「はい。右代宮戦人は、このカケラの正当な領主と認定されているであります…！」（シエスタ００）
「え、そうよ。……まだわからないの？　あの黄金の輝きの意味が。……戦人はね、……至ったのよ。……全ての真実の最深奥にねッ！！　だから戦人は、今やこの世界の、物語の、ゲームの全てを理解している。……それはつまり、ゲームの支配者の地位を得たということよ。……くすくす、それを信じたくないでしょう、ベルン?!」（ラムダ）
※ベアトのゲーム盤の仕組みを全て理解した者はゲームマスターになれるようです。
「……《赤：“金蔵は全ゲーム勝利相手に死亡している”》。すでにベアトによって語られている真実です。……あの戦いは、戦人くんには、引き分けに持ち込めれば上々。勝ち目は絶対にないはずの戦いでした」（ワルギ）（EP5）
「……そうだな。……一言そう言われちまえば、それで終わっちまう戦いだった。……なぜ、その赤を使わなかった？　まさかステイルメイトだからとでも言うのか？」（戦人）
「《赤：ノックス第２条。探偵方法に超自然能力の使用を禁ず。》その赤き真実を、私たちは直接使うことが出来マセン。しかし、《赤：“窓が降霊術に開かれたことはない”》という赤き真実を、私は窓を守っていたコーネリアに持たせていマシタ」（ドラ）
「ドーン。…そいつでチェックメイトだ。……どうしてあの姉ちゃんは、その切り札を切らなかった…？」（戦人）

「……ッ！！　こ、これは…。……う。き、脳溢…！　我が赤が破れる道理はなし！　そなたの謀み、叶うことなしと知り給え…！！」（コーネリア）
それまで、冷静に戦いを進めてきた彼女が、……俺が突進した時、急に焦った。俺は突然の攻撃に怯んだものと思っていたのだが、……実際は違った。完全に俺を弾き返せる切り札の赤を持っていたのに、……直前で、使えなくなったから、戸惑ったのだ。
「わかりマセン。突然、あの瞬間に、切り札の使用が禁じられたのデス。それを失った時点で、あなたの勝利は約束されマシタ」（ドラ）
「……ゲームマスター、ラムダデルタ側の干渉でしょう」（フルギ）
「あいつめ…。……結局、あの戦いは全て、ラムダデルタの手の平での茶番ってわけかよ。“俺たち”は、あいつの筋書き通りに、お芝居をやらされたってわけだ」（戦人）
「……。……今度はマリアージュ・ソルシエールについて聞きたい」（ウィル）（EP7）
「……」（真里亞）
「……。……どうした」（ウィル）
「やだ」（真里亞）
「……何？」（ウィル）
「私、喉が渇いちゃったからジュース飲んでくる。またね」（真里亞）
真里亞は急によそよそしくなり、ぺこりと頭を下げてから、一方的に立ち去る。……真里亞らしくない仕草だった。なるほど。ゲームマスターが、駒を動かしたということか。……今は別の話を聞け、ということらしい。
※以上、２つの内容でゲームマスターは駒の行動に干渉して操作出来ることがわかります。そもそも以下のように書かれています。
ゲームマスターは、どんな駒でも呼び出せる。そして駒たちをどのようにも動かせ、絶対の神として君臨できる。（EP6）
「お兄ちゃんはもう、ゲームマスターなんだ。ゲーム盤の全てを知る者だけが、ゲーム盤を開き、駒を招くことが出来る」（戦人）（EP8）
※さらに、以下のようなことまで出来るようです。
「……戦人も、そこまで見下げ果てたほど、無能じゃないってことですね。おそらく、ゲームマスター権限で、この島の全てのガムテープに干渉したんでしょう」（エリカ）（EP6）
彼女にガムテープを持たせるだけで、それは魔女にとって致命的な武器となりうる。それは前回、血液病みだ。だから戦人は、その武器を屋敷中から取り除いたのだ……。
「恐らく、ガムテープに代わる品も、全て干渉を受けているに違いないデス」（ドラ）
「……了解デス。３部屋分の封印のガムテープを受領いたしマス。……その受領ですが、エリカ嬢がミセス熊沢から、粘着力なきガムテープを受領した時点に遡っての受領でよろしいデスカ？」（ドラ）（EP6）
ガムテープの封印を作ろうと、エリカは熊沢にガムテープをもらった。しかしそれは、戦人によって、粘着力のないものに変えられていた…。あのガムテープの粘着力が問題なかったということにすれば、ゲームの進行はスムーズだ。
「ああ、いいだろう。……物語を書き直す。……初日の深夜に、エリカが熊沢さんからもらったガムテープは、封印可能な粘着力を持っていたが、３部屋分しかない、残りわずかのものだった。……これを今から適用する」（戦人）
※ただ、以下のようにベアトのゲーム盤の駒は、標準状態ではベアトが作った設定どおりになるようです。
「……あなたは、何で右代宮戦人を、お父様と呼ぶの？」（縁寿）（EP6）
「わ、私という駒を、生み出して下さったからです…」（離ベアト）
「……では、どうして右代宮戦人にそこまで尽くすの？　駒は、生み出した造物主に絶対服従しなくてはならないルールでもあるの？」（縁寿）
「そんなルールはない。……駒は道具、…あるいはナイフだ。……ゲームマスターが上手に扱えば有利な道具になる。しかし、扱いを間違えれば自らを傷つけもする。……道具になろうと凶器になろうと、そこに道具の意志はない。ただ結果があるだけだ」（フェザ）
「じゃあ、どうしてあんたはお兄ちゃんにああも尽くすの？　まるでそれは、……あなたという駒の目的かのようだわ」（縁寿）
「は、……はい。…それが、私が生み出された目的だからです」（離ベアト）
「あんたを生み出したお兄ちゃん自身が、その目的を与えたの？」（縁寿）
「それは違う。…戦人はゲームマスターとして、“そういう役目を持った駒”を、盤上に置いただけに過ぎない。……そして、彼女という駒を生み出したのは、このゲームを生み出した最初のゲームマスターである、ベアトリーチェ自身だ…」（フェザ）
「……あぁ、ややこしい話だわ。……つまり、あんたはお兄ちゃんのことを、お父様お父様呼んでるけど、別に父親ってわけじゃないのね。……あんたは、お兄ちゃんに尽くさなければならないという目的のために、親しみを込めて、お父様と呼んでるだけだわ」（縁寿）
「は、……はい。……そうだと思います。私という駒を盤上に置いて下さったのがお父様です。お父様が盤上に置かなければ、私という駒の出番はありません。ですから、私がここにこうして存在し、そして私の目的のために尽くせるのは、全てお父様のお陰なのです」（離ベアト）
「……なるほど。そしてそれは、お父様と呼ぶのに相応しいってわけね。……じゃあ誰があんたに、お兄ちゃんに尽くすように命じたの？　……あぁ、それは初代ゲームマスターのベアト自身よね。……あぁぁぁ、ややこしいっ」（縁寿）
「なぜにそなたは、右代宮戦人に尽くさねばならぬのか、……と尋ねたいのであろう？　しかし、それを彼女に答えることは出来ぬ。彼女に与えられたのは目的だけだ。……その目的を与えた動機は、与えた本人にしかわからぬのだから」（フェザ）
このベアトの行動原理は、お兄ちゃんを慕う女の子そのもの。でも、ならば彼女は何？　お兄ちゃんが好きなら、慕うのも尽くすのも、自分自身でするべきだわ。それをどうして、……“彼女という駒”を生み出し。自分以外の存在にやらせるの……？　それじゃ、……もしもお兄ちゃんが振り向いてくれたとしても、それは駒の彼女に対してであって、……彼女という駒を生み出した、創造主に対してではなくなってしまうじゃない。
※しかし、以下のように、限界もあるようです。
戦人は激しく机を叩くが、駒のベアトは何の反応も示さない。……戦人が“それに反応するように”命じないから。駒としてなら、あのベアトを蘇らせることは容易い。しかしそれは、戦人が望んだ通りに動くだけ。……会話だって、これじゃ、……独り言を言ってるのと、……何も変わらない……。ゲームマスターは、どんな駒でも呼び出せる。そして駒たちをどのようにも動かせ、絶対の神として君臨できる。……しかし、だからこそ、……ただの駒。それは信じられないほどに、孤独で、……悲しい。（EP7）
※ゲームマスターには以下のようなことも出来るようです。
「《金：この死体が右代宮金蔵の死体であると保証する…！！》」（戦人）（EP5）
「……見事な黄金の真実。……、有効デス」（ドラ）
「黄金の真実は、……この世界の領主、……いえ、……ゲームマスターにしか使えないッ！！」（ラムダ）
「……朗読の巫女は、自分の口を通して、物語を脚色することも歪めることも出来る。……たとえ私のゲームに小細工がなくとも、朗読の術で、いくらでもそれをすることが出来る」（ベルン）（EP8）
「そうであるな。……それもまた、ゲームマスターの権利の一つだ」（ベアト）
「あんたたちとしたい決闘は、シンプルでありたいの。……だから、朗読者はいらない。あなたたちが自らの目と耳で、物語を読みなさい」（ベルン）
「いいの…？!　それじゃベルンに有利なことがなくなっちゃうじゃない…！」（ラムダ）
「……わかった。朗読者はいらない。俺たちが自分で、物語を読む」（戦人）
「朗読者がいないということは、……いわゆる、物語の下書きに、一切の虚偽が混じらぬということか」（ベアト）

■駒とはどのようなもの？
※普通に考えれば、駒はプレイヤーが操作するものです。しかし、ベアトのゲーム盤では、プレイヤーは一人(戦人)しかいません。戦人が動かすのは、自分(戦人)だけです。
では、その他の駒はどのようにして動いているのでしょうか？　ゲームマスターであるベアトが全て操作しているのでしょうか？　その答えは以下の通りです。

「プレイヤーがいなくても、駒は勝手に動き、ゲームは進む。……そうだったわよね」（緑寿）（EP8）
「……そうだな。プレイヤーを離れ、少し傍観者になるといい。そして、また戻って来たい時に、戻ればいい」（戦人）
「……物語だけはちゃんと見ていろよ。聞くだけでもいい」（戦人）（EP8）
「気が向いたらね。……じゃ」（緑寿）
緑寿の目が、ぼんやりと曇る。そして一際強い風が、ざぁっと吹いて、彼女の髪を大きく散らした。その風が埃を運んだのだろう。緑寿は鼻をむずむずさせてから、大きなくしゃみをする。
「……ぅぅぅ。……お兄ちゃん…？」（緑寿）
「何だい」（戦人）
「……いつまでここにいるの…？　何かお天気、変…。……ゲストハウスに帰ろうよ」（緑寿）
もう、緑寿の瞳は曇っていない。しかし、先ほどまでの緑寿とは、どこか瞳の色や雰囲気が、違うように見えた…。
※つまりゲームマスターが初期設定したＡＩ（人工知能）で自動的に行動するのです。これならばベアトは何十人もの駒を一人で操作する必要はなくなります。
「……おいおい、何だよこれ。……駒の俺は、ずいぶんと頭が牛しるじゃねぇか。お陰で俺の推理する出番がねぇぜ」（戦人）（EP5）
「あぁ、ごめんなさい。……戦人は この時、不在だったから、私の方で勝手に駒を操らせてもらったわ。……切れ者っぽくていいでしょう…？」（ベルン）
「くすくすくすくすくす…！　あんたはベルンにプレイヤーをしてもらった方が賢そうに見えるわ。……プレイヤーは降りて、駒に専念した方がよくない？」（ラムダ）
俺は１０月５日の、だいぶ殺人が起こってからの段階でゲームに途中参加した。だから、そこまでの“俺”という駒は、プレイヤーのベルンカステルがコントロールしてる。なので、ベルンカステルの推理を、“俺”の口を通して披露することも可能、ってわけだ…。……今の俺にとって、現在見ているこのゲームは、すでに終わっている部分のリプレイに過ぎない。
「こいつはもう、ゲームには参加してねぇよ。……ゲーム盤のこいつを操ってるのは、ラムダデルタだ」（戦人）（EP5）
「存じておりマス。……ですが、本来のこの世界の主デス。そしてあなたは、その主に招かれた、正当な客人デス。ですからこうして、ご挨拶に参じマシタ」（ドラ）
「……先ほどの戦いでは、ありがとうございマシタ。最後の最後に、慈悲を与えてくれたこと、感謝いたしマス」（ドラ）（EP5）
「あの“俺”は俺じゃねぇぜ。……ラムダデルタが操ってたんだ」（戦人）
俺は、第５のゲームには途中から参加している。“この時点”では、まだ参加していない。だから、俺が参加するまでの間、“俺”という駒は恐らく、ベルンカステルか、もしくはラムダデルタによって操られているはずだ。
「……あいつら、どういう気まぐれだろうな。妙にカッコ良くしてくれやがって。あれじゃまるで俺が、ベアトを助けに来たナイト様みてぇじゃないか」（戦人）
「ラムダデルタ卿は、魔女とニンゲンのそれぞれが病廃し、ドローゲームとなることを望んでいます。……エリカの登場により、天秤がニンゲン側に大きく傾いたので、ベアトに加担するように物語を操ったのでしょう」（ワルギ）
「それは知っていマス。しかし、駒は、出来ないことは出来ナイ。そして、本来の性格に相応しい行為を得意とスル。……だから、あれは確かにあなたの、……戦人の成し得たことデス。だから、あなたに感謝するのデス」（ドラ）
※上記３つの内容で戦人は“駒はプレイヤーが動かすもの”と認識しているようです。実際にベルンが操作した場面もあったでしょうが、ＡＩで動いている場面もあったはずです。ドラノールは戦人の発言を肯定しているように見えますが、それはあくまで“駒を操作しているのは戦人とベアトではない”ということであると考えられます。ちなみに、このEP の戦人は優秀ですが、何せプレイヤーの戦人は以下の有様です。
「ついでに言おう。《赤：そなたは無能だ》！　くっくくくっくくくく、《赤：ひーっひひっひひひひひひひひひひひひ》！！」（ベアト）（EP2）
※本来は優秀な駒である戦人が、赤字で無能認定されてしまったプレイヤーのせいでその能力を発揮できないのかもしれません。何よりの証拠が以下の場面です。
「私の知る限り、ミステリー史で、もっとも死者が出る連続殺人は、アガサ・クリスティの『そして誰もいなくなった』の１０人です。日本ミステリー界では、多分、島田荘司の『占星術殺人事件』ではないかと。まぁ、こっちは１０人未満ですが」（エリカ）（EP5）
「日本ミステリー界の話だが。……『占星術殺人事件』より、坂口安吾の『不連続殺人事件』の方が先だぜ」（戦人）
「あっははははははっはっはっは、きゃーっはっはっはっはっはっはっッ！！　何これダッサぁイ、超ウケルー！！　まー、仕方ないわよねぇ？　『占星術』は、事件が起こるのが１９３６年だもんねぇ？　それと混同しちゃったのよねぇ？　うっひっひひっひひっひゃっはっはァア！！」（ラムダ）
ラムダデルタは、テーブルを両手でバンバンと叩きながら笑い転げる。回廊に堪えていたベルンカステルも、唐突に噴出すと、同じようにテーブルを笑い転げながら叩き出す。
「ふ。……くっくくくくぁっはっはっはははははははっ！！　オモシロイオモシロイ！！　ぎーっひっひっひひひひひひひぃ！！……やるじゃない、戦人の駒」（ベルン）
※ラムダが操作して戦人にこの発言をさせたのなら、こんなにはウケないでしょうし、ベルンが評価しているのもラムダではなく、あくまで戦人の駒です。ということは、これが戦人の駒の実力なのです。
「おや、ベアトリーチェさんじゃないですか。てっきり前回、死んで消えたとばかり」（エリカ）（EP6）
「……消えたのはプレイヤーのベアトよ。こいつは駒でしょ、戦人の」（ベルン）
「駒ではあっても、ご本人と変わりありマセン」（ドラ）
※駒は本来のその人物を忠実に再現しているようです。ですから例えＡＩで動いているのだとしても、その行動は本人がそこにいるのと変わらないわけです。EP5 以外の戦人はプレイヤーの戦人が操作しているため“本当の戦人”がゲーム盤で見れるのはEP5 だけなのかもしれません。
「馬鹿馬鹿しい……。馬鹿馬鹿しい……！　私は認めないわよ…。こんな茶番が真実なんて、……絶対に認めないんだから…！！」（緑寿）（EP8）
そう吐き捨てると、緑寿の瞳が曇る。すぐにそれは晴れる。その時にはもう、緑寿は６歳の彼女に戻っていた…。
緑寿は一度だけ鼻を啜り、目を擦った後には、６歳の彼女に駒を譲った。（EP8）
※プレイヤーは結構自由に駒から離れたり、戻ったり出来るようです。そして離れてもＡＩで動くわけですから、我々ゲームをプレイしている者にとっては、見分けがつかずやっかいです。『■EP2 の終盤で戦人は何故、金蔵を目撃したの？”で取り上げた戦人はまさにこれで、終盤、プレイヤーが駒から離れてしまったものと思われますが、特に言及されていなかったため、本来ならばありえないことが起こってしまったわけです。ちなみにベアトのゲームの駒でない場合はプレイヤーが離れると以下のようになります。
「……ごめんね。私ってば、最高にカッコ悪いわ。……そうよね、ここで私が、任せておきなさいって胸を叩いたら、私の人気は鰻登りで、次の人気投票はトップ３くらいに入っちゃうかもねー。……でもね。……私はあんたたちと違って、……“物語の登場人物”じゃないのよ。……死ねないのよ。……あんたたちが深刻に、クライマックスはこれからだ―とか意気込んでるけど。私は明日、月曜でガッコーで、日直で朝は起床が早いワケよ…！　住んでる世界が違うのッ…！！　だからさッ、……私をさ、……は――……」（ラムダ）（EP8）
ラムダデルタは、立ち眩みでも起こしたかのように、……すとんと椅子に座る。そして人形のように無表情になり、ただじっと、宙の一点を見て、沈黙していた……。
「……すまん」（戦人）
戦人が小さく謝る。しかし、ラムダデルタは無表情なままだった。
「……俺たちには出来ることも尽くさないのに、あんたにだけ、何かを失うように強いるのは、フェアじゃない」（戦人）
「……」（ラムダ）
「俺たちは、ここで戦い、最後の一秒まで、ここを守る。……緑寿が、一なる真実よりも、俺たちを選び、帰って来てくれるかもしれない奇跡を信じて。……それも尽くさないのに、あんたに、俺たちと一緒に命を捨ててくれなんて、頼めるわけもない」
戦人は席を立ち、踵を返す。

「‥‥戦人‥」（ベアト）
「見張りの二人と交代してくる。‥‥俺が、ヤツらと戦う時の先陣でありたい。それが、今すぐ俺がラムダデルタに見せられる、俺の決意だ」（戦人）
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥」（ラムダ）
「妾も行くぞ。お銅色猫は、ラムダデルタ卿に斬しいポップコーンを頼む」（ベアト）
「‥‥ベアト‥‥」（ワルギ）
「縁寿は必ず帰る。信じねば、実る奇跡も実らぬというもの。クジを買わねば、当たることもないのだからな」（ベアト）
戦人の後を追い、ベアトも席を立つ。
「‥‥みんな。戦いに備え、何かの準備をしよう」（譜治）
「賛成だぜ。ここで腐いてたって、馬鹿馬鹿しいぜ‥！」（朱志香）
「そうだな。最後くらい、景気良く行こうぜ」（留弗夫）
「‥‥‥縁寿ちゃんの帰る場所を、守らなくちゃ」（絵羽）
「私たちも、作戦会議が必要デス」（ドラ）
「そうだな。家臣に武具に悪魔に興味深い問言だ。このちくはぐ連合軍で、うまく連携を取らなきゃな」（ウィル）
「さぁ、妹たち。休憩の時間は終わりよ」（ルシファー）
「シエスタ隊、起立」（シエスタ００）
ニンゲンたちも、幻想の住人たちも、‥‥皆、ぞろぞろと立ち上がり、東屋を後にする。後には、ぼんやりと宙の一点を見つめ続ける、放心したラムダデルタが残るだけだった‥‥。
※ＡＩが用意されていないため、動かなくなってしまうのです。この時、ラムダは何をしていたのでしょうか？　友達に電話をして日直を代わってもらっていたのでしょうか。あるいは長丁場に備えて夜食の用意にでも行ったのかもしれません。とにかくプレイヤーがコントローラーを置いてどこかに行ってしまったため、動けなかったのです。駒関係で１つ理解できない場面があります。それが以下の場面です。
「我が主、それをどうかお認め下さい！！　私は無能ではありません、失望もさせません‥！　必ずやこのようにご期待に応えて見せますから、どうかお見捨てにならないで下さい！！　我が主‥！！」（エリカ）（EP5）
天井よりさらに向こうにいるのかもしれない誰かに向かい、エリカは両手を広げてそう叫ぶ。そして、‥‥‥それに応えたかのような、大きな大きな落雷が、すぐ近くに落ちる。ものすごい音だった。地震さえ感じた。その音と同時に、エリカは、まるで操り人形の糸が全て千切れたかのように、カクンと脱力し、椅子に座り落ちる。そして、ゆっくりと元通りの風雨の音が館屋を満たすと、‥‥まるで立ち眩みから目覚めたように、エリカはうっすらと目を開ける。すると、何事もなかったかのように、静かに食事を再開する。先ほどからずっとそうであるかのように、平然と。‥‥‥今、エリカは突然立ち上がって、おかしなことを捲くし立てなかったっけ‥‥？　思わず、自問したくなるくらいに、エリカはさも当然のように、静かに食事を続けている。その平然とした様子に一同は、‥‥‥自分たちが錯覚してしまっていて、エリカが突然叫び出すような幻を見てしまったんだろうと、それぞれが自分を納得させてしまった。だから、ほんの数瞬前のエリカの変貌ぶりは、白昼夢のような扱いとなり、すぐに全員の記憶から薄れていった‥‥‥。エリカは、静かにサラダを突きながら、誰にも聞こえぬ声で呟く。ありがとうございます、大ベルンカステル卿‥‥‥。我こそは古戸エリカ。我が主の駒にして分身。‥‥‥必ずや、あなたのために最高の物語を献上してご覧こいれます。うっふふふふ‥‥‥。
※落雷後、しばらくの間、エリカの駒からプレイヤーが離脱してしまったのでしょうか？　その時、ベルンに何らかの許しをもらって再び駒に帰ってきた、という解釈をしていますが、正直自信がありません。ちなみに“駒”という言葉は２つの意味で使われるようです。１つは完全な操り人形としての駒。これはEP6で出てきた以下の駒ベアトです。
「どうだ、ベアト。俺の作った、第６のゲームは」（戦人）（EP6）
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥」（駒ベアト）
「まぁ、実直に褒めるヤツじゃないもんな。せいぜい、“無能なりにそこそこ頑張ったではないか”、ってとこだろうぜ」（戦人）
「くっくくくく。無能なりにそこそこ頑張ったではないか」（駒ベアト）
「へっ。ゲームマスターの立場になってよくわかったぜ。‥‥‥お前も毎回、ずいぶんと苦労してやがったんだってな」（戦人）
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥」（駒ベアト）
「“ゲームを作るのは楽なことではない。よもやそなたと、それを労い合う日が来ようとはな”」（戦人）
「ゲームを作るのは楽なことではない。よもやそなたと、それを労い合う日が来ようとはな」（駒ベアト）
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥」（戦人）
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥」（駒ベアト）
「‥‥違う‥。‥‥‥こんなのは、‥‥‥ベアトじゃないッ‥‥」（戦人）
戦人は激しく机を叩くが、駒のベアトは何の反応も示さない。‥‥‥戦人が“それに反応するように”命じないから。駒としてなら、あのベアトを蘇らせることは容易い。しかしそれは、戦人が望んだ通りに動くだけ。‥‥‥会話だって、これじゃ、‥‥‥独り言を言ってるのと、‥‥‥何も変わらない‥‥‥‥。
※この操り人形としての“駒”が出てくる場面はほとんどなく、この作品で“駒”と言う場合は、一般的には以下のように“キャラクター”を指すと考えられます。
「‥‥‥あなたは、何で右代宮戦人を、お父様と呼ぶの？」（縁寿）（EP6）
「わ、私という駒を、生み出して下さったからです‥‥」（離ベアト）
「‥‥‥では、どうして右代宮戦人にそこまで尽くすの？　駒は、生み出した造物主に絶対服従しなくてはならないルールでもあるの？」（縁寿）
「そんなルールはない。‥‥‥駒は道具、‥あるいはナイフだ。‥‥‥ゲームマスターが上手に扱えば有効な道具になる。しかし、扱いを間違えれば自らを傷つけもする。‥‥‥道具になろうと凶器になろうと、そこに道具の意志はない。ただ結果があるだけだ」（フェザ）
「じゃあ、どうしてあんたはお兄ちゃんにああも尽くすの？　まるでそれは、‥‥‥あなたという駒の目的かのようだわ」（縁寿）
「は、‥‥‥‥はい。‥‥それが、私が生み出された目的だからです」（離ベアト）
「あんたを生み出したお兄ちゃん自身が、その目的を与えたの？」（縁寿）
「それは違う。‥‥‥戦人はゲームマスターとして、“そういう役目を持った駒”を、盤上に置いただけに過ぎない。‥‥‥そして、彼女という駒を生み出したのは、このゲームを生み出した最初のゲームマスターである、ベアトリーチェ自身だ‥」（フェザ）
※ゲームマスターは以下のように駒の知覚に干渉できるようです。
‥‥秀吉は、足元の紗音の遺体を見下ろす。‥‥‥‥それは、他の遺体と同じような目を覆いたくなるような惨状。‥‥‥頭部を側面から砕かれ、表情は半分しか残っていなかった。（EP1）
※秀吉は“死体がある”と嘘をついたわけではなく、実際に死体を目撃しています。
嘉音は恐る恐る源次の毛布を剥ぎ、‥‥‥源次の変わり果てた姿に、‥‥‥絶句した。（EP5）
「な、何よこれ。首がスッパリ、やられてるぅ！」（ベルゼブブ）
「‥‥‥‥鋭利だ。‥相当の刃渡りのものでなければ、ここまでの切り口には出来まい」（ベルフェゴール）
「ど、どういうことよ。碑文の謎を戦人が解いたんでしょう？　どうして殺人が起こるわけ?!」（レヴィアタン）
「わからん。‥‥‥いずれにせよ、厄介なことになるぞ。ベアトリーチェさまと夏妃さまにご報告申し上げた方がいい」（ベルフェゴール）
「ベルフェは急いでルシ様に報告を‥！！」（レヴィアタン）
「心得た‥！」（ベルフェゴール）

「……ごめんね、源次。そこでゆっくり永眠してたいだろうけど、そういうわけにはいかないの。右代宮家の最後の当主、夏妃に死してなお率公するために、ここから消えてちょうだい」（ガァプ）(EP5)
ガァプは毛布を捲り、安らかに眠る源次に、そう語り掛ける…。そして深く刻まれた首の傷をじっと見る…。
「……見事な切り口じゃない。……まさに一刀で斬ったのね。……こんな真似が出来るヤツが、顕現しているの……？　嫌ね。…これが可能な心当たりのあるヤツに、ろくなヤツがいないわ」（ガァプ）
言うに及ばず、魔女は己の格に比例して、強力な存在を召喚できる。あの大ラムダデルタ鬼が、とっておきの１９人目として呼び出したのだ。……楽園的に見積もってさえ、その格は、自分やロノウェと同等…。ベッドに漆黒の穴が開き、まるで源次をベッドの中に飲み込んでしまうように消し去る。源次の死体もまた、ゲストハウスの４人と同様に、どこか見知らぬ場所に隠されてしまう…。
※以上の場面は、幻想存在である煉獄の七姉妹やガァプも駒であることには変わりはないため、知覚に干渉されているのだと考えられます。つまりガァプは“元々無い死体”を“自分が消した”と認識させられているのです。

■駒の認識力
「さて、ベアトリーチェ。お前が取った６つの駒は何なのか、そして次なる手はどうくるのか。楽しませてもらうぞ。……私の守りは完璧だ。前回のような無様は晒さぬぞ」（金蔵）(EP2)
「……珍しいよ。殺されないで、捕まるなんて」（嘉音）(EP4)
「今回はベアトリーチェさまが決越しにならないし。お嬢様が書斎を出られるし。……何が何だかわかんないね…」（紗音）
「わかるさ。……何が起ころうと変わろうと、全てあの魔女の気まぐれと余興。結果は何も変わらないのさ」（嘉音）
「今回は黄金郷に、……行けるかな」（紗音）
「さぁね。僕たちは脱落率が高いから」（嘉音）
「……そう言えば、二人で第一の晩を生き延びたのって、ずいぶん珍しいね。……儀式が始まってるのに、こうして二人でお話できるなんて、何だかすごく珍しい気がする」（紗音）
※ゲーム盤の駒の中にも他のゲームを認識している駒がいるようです。ただ紗音と嘉音はメッセージボトルの書き手であるヤスの分身、金蔵は既に死んでいるため幻想存在（魔女や悪魔と同等の存在）ですので、普通の駒は他のゲームを認識していないと思われます。

■『最終考察　うみねこのなく頃に散』にツッコミ！　ツッコミ！
※ＫＥＩＹＡさんは“消滅説”というトンデモ説を掲げています。それは以下のような説です。
・ヤスはゲーム盤上に存在しない。彼女が自分の分身としてゲーム盤に配置した駒は紗音である。よって紗音が抱えている心と事情は、現実世界のヤスに重ねられている。
・ヤスしか知りえない情報がメッセージボトル以外のゲーム盤（八城十八の偽書）に出てくるのは、戦人が親族会議の日にそれを知った可能性が疑える。十八と幾子が後年になって得た情報が入り込んでいる可能性もある。
・紗音が死亡すると嘉音は消滅してしまう。それは紗音が生み出した分身だからである。朱志香の死や紗音の恋心の決着も嘉音消滅のトリガーになっている可能性がある。嘉音の消滅はヤスが現実世界を反映して定めた、ゲーム盤におけるルールである。
・紗音と嘉音はゲーム盤上に駒として実在する。紗音が一人二役を演じているわけではなく、多重人格でもない。(p266)
※言いたいことはわかります。「変装したってバレバレだろ！」ということです。しかし、ＫＥＩＹＡさんは、常識に囚われ過ぎたあまり、逆にトンデモな説に辿りついてしまったのです。この作品はミステリーです。人間で全てが説明できるのです。つまり現実の物理法則が適用される世界なのです。それなのに人間が消滅するってどういうことですか？　これは『名探偵コナン』でコナンが「Ａさんが死ぬとＢさんは消滅するのです」と言い出すのと同じことです。哀しいことに、ＫＥＩＹＡさんは本人も気がつかないうちに、魔女に敗北してしまっていたのでした。そんなＫＥＩＹＡさんに以下のやり取りを贈りましょう。
「未知の薬物Ｘ，未知の科学装置Ｘは、魔女と戦う上での一番の武器だろうが…」（戦人）(EP5)
「……それ。。全部、正式なミステリーでは違反だから。未知のウイルス、未知の薬物、…未知の病気、未知のＸを仮定なんて、立派なファンタジーなわけ。ご愁傷様。それがあなたの推理だったなら、あなた、ゲームオーバーよ。あなたはベアトと真正面から戦ってきたつもりでいる。でもね、本当は違うのよ。真正面じゃない。ズレた角度で戦い合ってたの。あなたがしてた推理ごっこは、ファンタジー対ミステリーじゃない。ファンタジー対アンチファンタジーでしかないのよ。……私たちは魔女幻想というファンタジーを殺すために戦ってるのよ。それはつまり、この物語を“正式なミステリー”で解釈するということ。つまり、ミステリーの禁忌に触れる全ての要素は始めから無視してかかれということよ」（ベルン）
※さらにイタいことに、この解釈でEP6をどう突破するのだろうと期待して読んでみたら、トンデモないことが書いてありました。
嘉音という異名を持つ紗音は隣部屋の窓から脱出し、屋敷の客室に駆けつけた。そして戦人と入れ替わってクローゼットに身を潜める。ここまでよいい。(p114～P115)
※全然よくないですよ！　貴方は“紗音と嘉音はゲーム盤上に駒として実在する。紗音が一人二役を演じているわけではなく、多重人格でもない”と書いてるじゃないですか。何考えてるんですか、まったくもう。
第一の晩が訪ぎる前に、霧江は私服（ブレザー）姿のベアトリーチェと遭遇した。（中略）彼女は嘘をついているのだ。(P273～274)
※仮に楼座に頼まれて嘘をついたとしましょう。しかし、その後、霧江の発言によって親族会議に波乱が巻き起こります。楼座にどんな頼まれ方をしたのか知りませんが、あの状況で嘘をつき通すというのはありえないのではないでしょうか？

■さくたろうの伏線
叔母さん（楼座）はかなり手先が器用。彼女の着る洋服の中には、自ら作ったものもあるそうだ。だからぬいぐるみを作るぐらい、きっとお手の物だったに違いない。(EP4)
そこに現れたのは、つぶらな瞳と白いおなかが可愛らしい、ちょっとのっぺりしたライオンのぬいぐるみだった。大きさは小さな枕くらい。背の低い真里亞お姉ちゃんが特つとそこそこの大きさに見えるけど、多分、そう大きくはないのだろう。何も知らない人が見れば、百貨店か何かで売っている安物だと思うだろう。でも、真里亞お姉ちゃんにとっては、世界でただひとつの、何物にも変えられない母親の手作りのぬいぐるみなのだ。(EP4)
※デザイナーであり、自分で服まで作れてしまう楼座が作ったにしてはさくたろうの出来はショボそうです。また、まさしく枕だったため、マルフク寝具店に置いてあったわけです。ちなみにEP6で答えは明かされています。
……だって、ほとんどの場合、出版社からは何の連絡もなくて、そのまま明日、新島に出発してしまうのだから。……？　……新島に出発したら、それから六軒島に行って。……お姉ちゃんに、…さくたろうのぬいぐるみを。……え？　……どうして私、さくたろうのぬいぐるみを……？(EP6)
量販品のぬいぐるみだって、……小さな魔法で、世界にたった一つの、母の愛に満ちた素敵なぬいぐるみに生まれ変われるのだ。(EP6)

■朱志香には何故、彼氏が出来ないの？
「しゃ、……紗音さ…。…正面に言って…。……私。……髪型とか、…変かな…」（朱志香）(EP2)
「まさか…。お嬢様の髪はとてもお美しいと思います」（紗音）
「じゃ、じゃあじゃあ、目とか変かな、鼻とか変じゃないかな。…やっぱり喋り方が電話目なのかな……。だから彼氏できないのかな……」（朱志香）
「そんなはずはありませんよ。お嬢様はそのままで充分に素敵です。そして、その魅力はこれからもっともっと増していくと思いますよ」（紗音）
「……でも、私だけ彼氏できない…。サクもヒナも彼氏できたのに、私にだけできないよ……。やっぱり私には魅力ないからかな……。みんなね、文化祭に彼氏連れてくるんだって……。私もその日までにはきっと彼氏いるって思って、大見得切って…。……彼氏なんてできやしない。私だけ、私だけ……」（朱志香）

朱志香には彼氏がいない。異性の友人は多いのだが、特定のオンリーワンはいない。…しかし朱志香は学校ではちょっとした有名人で、それに見合うパートナーがいて当然だと思われていた。(EP2)
朱志香は学校の生徒会長でもあるのだ。…そんな面倒臭いものに関心はないのだが、親がうるさいのでいやいやなった。不幸にも、学校内では人気者だったので当選してしまっていた。(EP2)
※ごく単純にみんな「自分では朱志香にはつり合わない」と思い、気後れしてしまうのでしょう。なこせ、人気者で生徒会長で、夫は将来の右代宮家当主です。

■朱志香の喘息は演技?
※EP7で以下のやり取りがあります。
「私は、こんな時の真里亞を、そうだと思ってる。‥‥‥いや、本当の自分が、普段の自分を塗り潰してしまったと言うべきかな。私も、そういうのちょっと覚えが。‥‥‥深窓の令嬢に憧れて、病弱な自分になれたらいいなと思って‥、咳する真似ばっかしてたら、悪いクセになって」(朱志香)(EP7)
「咳き込めば、周りがやさしくしてくれるからか」(ウィル)
「いや、はは、‥‥‥嫌な話の流れになった時とか、空気悪い時とかに、流れを断ち切れるし」(朱志香)
「なるほど。それもまた、お前の、なりたいもう一人の自分、なんだな」(ウィル)
「はは、この話は内緒で頼むぜ‥」(朱志香)
※ところが以下の場面を見ると、とても演技とは思えません。
「それなら絵羽叔母さんが先に説明しろよ！！　6人を誰がどうやって殺して、そして自分が騙わっていないという証拠を示してみろってんだッ！！　‥‥‥ゲホン、ゲホゲホゲホン、ゲホッ、ゴホッ！！！　う一、ゲホゲホゲホ！！　ゲホゲホッ！！ゲホゲホガハガハッ！！！」(朱志香)(EP1)
「お嬢様‥、お嬢様‥！！」(熊沢)
朱志香が急に咳き込み始める。感勢よく叫びすぎて咽てしまったのかと思ったが、それにしては長く本当に苦しそうだった‥。朱志香はなおも咳を続け、床に四つん這いになりながらも咽痛する‥。
「朱志香‥、しっかり…！！　南條先生…！」(夏妃)
「‥朱志香さん、吸入器を早く。‥‥‥いえ、私が持ってきているのがあります」(南條)
南條先生は、ソファーに置いてあった自分の鞄から気管支拡張剤の吸入器を取り出し、朱志香に渡す。‥‥‥そう言えば、6年前の朱志香も、時折激しく咽こみ始めると、あれで薬を吸ってたっけ‥。でも、朱志香がこんなにも苦しむ様子は、6年前には見られないものだった。
「‥‥‥兄貴、朱志香ってこんなに喘息ひどかったっけ…?」(戦人)
「ここ数年でだいぶ悪くなったんだよ‥。大丈夫な時はいいんだけどね‥。突然発作が来ると咳が止まらなくなるんだよ」(譲治)
「ゲホンゲホン！！　う一、ガハッゲホゲホゲホ！！　ゴホンゴホン、ゴホンゴホン！！」(朱志香)
「‥‥‥お嬢様、お薬です。‥‥‥‥さぁ‥」(嘉音)
「‥‥‥‥‥‥ん、‥。‥‥‥ゲホンゴホン！！」(朱志香)
嘉音くんの手から吸入器を与えられ、朱志香が慣れた手つきでそれを吸う。…しばらくは喉に痒さを感じているようだったが、次第に治まっていった‥。
「大丈夫かよ、朱志香‥。びっくりしたぜ‥」(戦人)
「‥‥‥大したことねぇよ。…心配すんじゃねぇぜ‥」(朱志香)
朱志香は全身に玉のような汗を浮かべて荒い息を隠せずにいたが、とりあえず突発的な喘息発作は治まったようだった‥。
朱志香は喘息に苦しみながら、…誰にもたれかかりつつも、自分の部屋に向かっているようだった。‥‥‥嘉音は無言でその後を追う。手を貸せといわれれば、飛んでいって支える。…しかし朱志香がそれを求めない限り気配を殺し、いつでも助けられる距離にいて、彼女を見守った。‥‥‥心が張り裂けそうなほど悲しい時、誰かがそこにいてくれたらと、百億の人々が振り返る時、居て欲しい瞬間に嘉音はいながら朱志香の背中を無言で見守った‥。そしてとうとう、自分の部屋の扉の前でうずくまってしまう。‥‥‥喘息の発作は、全身の体力を奪う。そして酸欠になった頭は朦朧とし、もはや立ち上がることもできないのだ。(EP2)
※これらの場面はゲーム盤での出来事です。執筆者である紗音が“朱志香は喘息だ”と信じていたため、ゲーム盤の朱志香は本当に喘息なのだと考えられます。

■紗音が実際の六軒島でしようとしたことは?
「特別條項。契約終了時に、ベアトリーチェは黄金と利子を回収する権利を持つ。ただし、隠された契約の黄金を暴いた者が現れた時、ベアトリーチェはこの権利を全て永遠に放棄しなければならない。‥‥利子の回収はこれより行なわますが、もし皆様の内の誰か一人でも特別條項を満たせたなら、すでに回収した分も含めて全てお返しいたします。なお、回収の手始めとしてすでに、右代宮本家の家督を受け継いだことを示す“右代宮家当主の指輪”をお預かりさせていただきました。封印の蝋燭にてそれを、どうかご確認くださいませ」(真里亞)(EP1)
※殺してしまっては“お返し”することが出来なくなるため、戦人以外の全員を巻き込んだ一大偽装連続殺人ショーをもくろんでいたと考えられます。ですから第一の碗の犠牲者は全員使用人だったでしょう(『EP3』の六連鍵密室が現実の六軒島でも予定されていたのだと思います)。その後は親族との個別交渉によって共犯者を増やしていくつもりのはずが、絵羽を中心とした親族によって碑文の謎が解かれてしまい、破綻したのだと考えられます。もっとも、遺族になると思われる全員に金が送られていたことから、最後には全員爆死する予定だったのでしょう。ひとつ気になるのが“戦人の勝利条件”です。六軒島に暮らす紗音が何か月もかけて、さらにヒントまで与えられて解いた謎を、部外者の戦人が1日で解けることは考えられません。戦人が約束を思い出したら、あるいは偽装連続殺人ショーを見破ったら“戦人の勝利”ということにするつもりだったのではないでしょうか?　戦人以外の人間は紗音と同じ条件であったため、特に手心を加えるつもりはなかったと考えられます。

■紗音の胸は偽物?
戦人が本当に紗音のおっぱいを揉んでいたら、胸が偽物だということに気づいたかもしれない。紗音は常に「バレるならバレろ」という気持ちだったんでしょうね。(最考察)
※本文中にはそのような記述はまったくありませんでしたが、作者が言うからにはそうなのでしょう。
「かー、俺が真里亞を背負うって立候補すりゃあよかったぜ～！　そうすりゃ、傘をさしてくれる紗音ちゃんのでっけぇお乳を二の腕でたっぷり堪能できたってのによぅ！」(戦人)(EP1)
「そそそ、そんなつもりじゃないよ、誤解だよ…！」(譲治)
「そっ、そうしないと譲治さまが濡れてしまうと思いまして‥‥‥」(紗音)
※この場面では、かなり近づいているか、もしくはかすかに触れている程度(バレない程度)だったと考えられます。
彼女(紗音)の肩を抱き寄せる。華奢な体が、強引に抱き寄せられて、まるで人形のように僕(譲治)の胸に飛び込んだ。その頭を抱え込みながら、二人して水平線を見る。僕たちは、小雨すらぱらつき始めている灰色の海を眺めながら、互いの鼓動をいつまでも確かめ合うのだった‥。(EP2)
※この場面では、譲治は紗音を背後から抱きしめていたのだと考えられます。そうでないと抱き合っているのに同じ方向を見ることはできないからです。もしくはおっぱいソムリエの戦人とは違い、譲治にはニセモノだとわからなかったのかも。

■紗音の容姿

「…は――…！　朱志香にも驚かされたが、紗音ちゃんにも驚かされたぜ…。あんたもすっかり美人になったじゃねぇのよ～！」（戦人）（EP1）

容姿がすっかり変わってしまったので記憶は繋がらないが、6年前の彼女とはお互い面識がある。内気な感じの性格は今も昔も変わらないようだが、やはり歳相応の女の子らしい魅力が宿ったような気がする。（戦人）（EP1）

※美人なようです。

■紗音は優秀？

答えに詰まるとすぐに言いよどんでしまう紗音は、ただそれだけの短所のためにいつも損をしていた。郷田のように、ミスがあってもうまく立ち回れる狡猾さがわずかにでも紗音にあったなら、もう少し気楽に日々を送れたろうに。…そつなく仕事をこなせる分、その短所は非常に気の毒だった。もっとも、ミスを言い繕って誤魔化すことを思いつかない紗音の病直さは、わかる人間にはわかる。（EP1）

譲治との交際を始めてから、紗音は表情を明るくすることが多くなった。笑顔は全てを円滑にし、運気すらも変える。……紗音は以前に比べれば仕事でミスをすることも少なくなり、家人の評価も少し変わり始めていた。

「……私はその、今でもそうなんですが、うっかり屋さんで…。よく、ものをどこにおいたか忘れたり、鍵を掛けたつもりが忘れちゃったりとかして、……迷惑を掛けてたんです」（紗音）（EP6）

「でも紗音は途中から克服したんだぜ、その忘れっぽいの」（朱志香）

「……うふふ。たいしたことじゃないんですけど、……その、こまめにメモを残すようにしたんです。大切なものはどこに置いたのか、ちゃんとメモして。…日々繰り返すことは、メモにチェックリストを書いてちゃんと点検して……」（紗音）

※あまり優秀ではなかったようですが、大分ましにはなったようです。

■譲治と朱志香の対比

「空手で蹴りの威力を。テコンドーで速度を。カポエイラでは自在の間合いを学んだ」（譲治）（EP4）

…嘉音が目を開くと、なぜか顔面がおびただしい怪我。みんな大の字型になって壁に打ち込まれていた。朱志香は嘉音が目を開く前にメリケンサックをポケットにしまう。（EP2）

朱志香はロノウェを正確なフットワークで壁際に追い詰めていく。回り込ませない。（EP4）

※足技主体の譲治とボクシングの朱志香は対比になっています。これは単純なキャラ立てという可能性もありますが、絵羽がボクシング経験者である蔵臼への対抗意識から、譲治は足技主体の格闘技を学ばせた可能性があります。自身はムエタイもやっていますし。

■譲治と紗音はいつから付き合いだしたの？

当時の私（紗音）は中学生。歳相応に色恋を想像することもある、普通の少女だった。でも、私はその夢を、本当は見てはいけなかった。…なぜなら、私は「家具」だからだ。家具は道具に過ぎず、人間ではない。人間未満の私は、義務教育に行かせてもらえただけでも十分すぎる幸せだったのだ。だから恋なんて、本当は知ろうと思うこと自体が身に過ぎたことのはずだった…。（EP2）

譲治のことを異性として意識したのは、確かにこれが初めてだった。自分（紗音）は家具で、譲治は右代宮家に連なる大切な賓客。……それ以上の関係なんて、想像することすら許されないと思ってきた。だから考えなかった。

「そ、それはとても魅力的な提案だけど、…紗音ちゃんに悪いよ。彼女の貴重な休日を奪うだけじゃない。彼女が本当に想いを寄せる人と二人きりで過ごす聖夜に、僕が割り込んでしまうことになる。そんな無神なことはできないね」（譲治）

「わ、わ、…私も、その……、……想い人とかそういう人はいませんので、その、…そういうお気遣いは、はい、む、無用なのです…！」（紗音）

「兄貴たち、付き合って、どのくらいになるんだ？」（戦人）（EP3）

「どの段階から付き合ってると呼ぶのかにもよるだろうけど、確実に1年以上は続いてると思うぜ。双方片思い時代を含めると数年になるんじゃねぇのかな」（朱志香）

「世界を、変更。……恋の芽を、紗音からベアトリーチェに」（ベアト）（EP7）

※上記の恋の芽をベアトに移したのが１９８３年の親族会議です。親族会議は毎年１０月ですから、紗音が譲治の事を意識し出したのは１９８４年あたりからと考えられます。当時紗音の年齢は公称１４歳、譲治は２１歳。ちょっとロリコン入ってないでしょうか？

■使用人の勤続年数は？

一昨年から右代宮本家にお仕えさせていただいております」（郷田）（EP1）

「（嘉音は）ここに勤めて3年になるんだっけ？」（朱志香）（EP1）

「はい。お縁様で10年ほどお仕えさせていただいております」（紗音）（EP1）

（熊沢さん）右代宮家にもう何年も勤めている古参の使用人だ。さすがに高齢なのでカ仕事は得意じゃないが、台所仕事から掃除、洗濯と何でもこなすスーパー使用人らしい。玉に瑕なのはサボリ癖があるらしいということか。（EP1）

「熊沢さんはさ、…辞めたり勤めたりと急がしいけど、源次さん並みに昔からここに出入りしてるわけでしょ？　……ベアトリーチェのこと、もっと知ってるんじゃないの？」（朱志香）（EP2）

（南條さん）祖父さまがこの島に屋敷を立てた当初からの付き合いだそうで、数十年の交流があるという。まさか祖父さまの怪しげな趣味のご縁かと思ったら、意外にもチェス仲間なのだそうだ。（EP1）

玄関を入ると、老いた使用人が迎えてくれた。彼はさすがに俺の記憶にも残ってる。最古参で、使用人の長を勤める源次さんだ。（EP1）

（右代宮家の屋敷は）戦後すぐに建てられたらしいから、すでに半世紀近くを経た貫禄を漂わせている。（EP1）

実際、（金蔵は源次を）死んだ祖母さまよりも常に側に控えさせていたらしい。朱志香に言わせると、祖父さまはどんな肉親たちよりも信頼しているという。しかし勤めてどのくらいになるんだろう。詳しく聞いたことはないが、この屋敷が建てられた当初からいる、みたいな話を聞いたこともある。…ということは、半生を事公に捧げてるってことになる。…そりゃあ、信頼も厚いわけだぜ。（EP1）

※勤続年数が短い順から並べてみました。

■真実の魔女の限界

「あなたはベルンカステル卿の駒になる以前から、実に見事な青き真実の使い手デス。……しかし、エリカ卿。ニンゲンに許されるのは、青き真実だけデス。そして、青き真実に反論できるのは赤き真実だけデス。そして赤き真実は、ニンゲンには許されていマセン。……ならばどうやって。…あなたのお相手は、彼の真実を示せば良かったのデスカ。……私が示した、あなたを今も愛している青き真実の証拠6点は、未だ否定されていマセン。……あなたさえ、ニンゲン。それを否定する赤き真実を使えは、しないのデス」（ドラ）（EP6）

「探偵御限で、８４点の証拠を赤き真実に、後に昇格させました。我が主のお力によって…！　私はニンゲンにしてニンゲンを超えた存在。探偵にして魔女。真実の魔女、古戸エリカです」（エリカ）

※これは８４点も証拠があったから、それを赤き真実に昇格できたわけではなく、単にそれが真実だったからに過ぎません。もしエリカの彼氏が本当にエリカを裏切っていなかったとしても、愛を信じないエリカにはその真実に辿りつけないのです。

「船の都合があるので、時間がほしい。あなたはそう言ったわ。でも、あなたが買収されているならば、それは須磨寺霧が大軍島で待ち伏せするための時間稼ぎだと断言で

きる」（縁寿）（EP8）
「……し、知らんぞ、……何のことかわからんッ…！！」（川畑船長）
「ありがとうございます。……それでは明日、お昼に。あの、これ、船代に」（縁寿）（EP4）
縁寿は懐より帯封付きの壱万円札の束を取り出す。その厚みは、確かに船長にも見えたはずだ。しかし船長はまったく興味を示さず、首を横に振った。
「……わしはお前さんに感謝しとるよ。これは天のお導きだ。あんたを、六軒島へ連れて行き、そして無事に連れ帰る最後のチャンスを下さったんだ。わしは金蔵さんに任されていた最後の仕事を、今、ようやく終えることが出来る。だからあんたには感謝してる。カネは、当時の金蔵さんからたらふくもらってる。あんたから取れんよ。……事情は知らんが、相当な厄介に巻き込まれてるようだな。騒がしい連中が、人探しをしていると噂になっとる。あんたのことじゃないのかね？　わしは、六軒島を目指す客人を送り届け、……そして迎えに行き、連れ帰ることが仕事だった。……その仕事を１２年前に中断したまま、まだ終えていない。だからわしは、あんたのお陰でその仕事を、ようやく終えることが出来るんだ。だから。……わしにその仕事を終えさせてくれよ？　わかってるな？」（川畑船長）
※川畑船長が罵倒されるような人間なら、縁寿の金を受け取っていたはずです。ですから本当は川畑船長は罵倒されていなかったでしょう。しかし、縁寿はその真実を見抜けず、自分が信じた真実によって川畑船長を殺してしまいました。真実の魔女の真実とは、本人にとって都合の良い真実であり、客観的な真実ではないのです。

■親族会議
「また台風か。……親族会議が毎年１０月ってんじゃ、これは宿命だぜ」（留弗夫）（EP1）
「同感ねえ。私もお盆の時期にやってくれればっていつも思うわよ」（絵羽）
右代宮家の親族会議は年に一度。１０月の最初の土日に行なわれる。世間一般的な家だったら、親族会議なんてもったいぶった名前で呼んだところで、久しぶりに親類が顔を合わせて寿司桶でも囲みながら挨拶する程度だろう。しかし、莫大な資産の一部を息子兄弟に貸し出し、事業的な成功を以って一人前と見なそうという右代宮家では、それは文字通り会議であったという。相当厳しい親族会議だったらしく、罵声や怒声が次々と浴びせられ、いい年にもなって平手打ちをもらうこともざらだったらしい。（EP1）
右代宮家の親族会議は毎年１０月に行なう恒例的なものだが、それ以外の時に親類たちが集まれることもあった。（EP2）
「夏はいとこたちで海ではしゃいだし、冬は冬で、色々ゲームをして遊んだっけ！　俺たちにとっては、親族会議ってのは楽しいもんだったぜ」（戦人）（EP7）
※明らかにおかしいです。考えられる可能性は3つです。１つ、毎年１０月になったのは最近のことで、昔は特に決まった時期はなかった。２つ、毎年１０月というのは、メッセージボトルの書き手であるヤスが考えた設定。３つ、竜騎士０７さんの勘違い。

■身長はいくら？
（戦人の身長は）今じゃ 180 cmは超えている（戦人）（EP1）
※戦人の身長は180cm前後だと考えられます。
譲治の兄貴を 10 cmも超えて見下ろせる日が来ようとは、夢にも思わなかったぜ。（戦人）（EP1）
※譲治の身長は170cm前後だと考えられます。
俺の身長もなかなかのもんだと思うが、親父も同じくらいの立っ端がある。（戦人）（EP1）
※留弗夫の身長も戦人と同じく 180cm前後だと考えられます。
（郷田を見て）「…俺も立っ端には多少の自信があったんだが、でっけえ人だなぁ。…紛れもなく初対面だぜ。こんな大男、あったら絶対忘れないさ…！」（戦人）（EP1）
※郷田の身長は190cm前後あると考えられます。
手を振っている方を見ると、……小柄な少年（嘉音）がいた。（EP1）
※推断と偏見で嘉音の身長は155cm前後ということにしましょう。
「…そうだよな。…父さんも留弗夫叔父さんも体格いいし、絵羽叔母さんなんか格闘技習ってんでしょ。…大丈夫だよね。うん…」（朱志香）（EP2）
※蔵臼も戦人や留弗夫と同じく 180cm前後はあるのではないでしょうか？
「駄目だな……」（金蔵）（EP4）
窓辺に立ち、威厳ある背中を向ける大柄な人影が、斜めだけれども強く、…そう答えた。
※金蔵も戦人や留弗夫と同じく 180cm前後はあるのではないでしょうか？
大人顔負けの貫禄を持つ客人（エリカ）も、体格はまだ中学生くらいだ。朱志香の昔の服のサイズがぴったりだった。（EP5）
※エリカの身長は150cm前後。朱志香は160 cm前後ということにしましょう。

■世界観
※まずメッセージボトル及び偽書と、各EPは分けて考えなくてはなりません（このあたりの説明は“■メッセージボトルとはどのようなものか？”で）。その上で、各EPはメッセージ及び偽書をゲーム盤として核にしたうえで、その内容を脚色し、現実の出来事と、幻想世界を盛り込んで一つの物語に仕上げたもの、と認識することが出来ます。ただし、EP7 と 8 においては核となる偽書は存在しないと考えられます。何故なら、ゲーム盤部分がなく、本文中に偽書の存在を伺わせる記述がなかったためです。ちなみにEP5 でベルンと戦人が、EP6 で雛ベアトが、EP7 でウィルが過去のゲームを読んでいますが、それはメッセージボトル及び偽書ではなく、各EPそのものであると考えられます。というのは以下のようにゲーム盤以外の描写にも言及しているためです。
「熊沢さんは、知っているのですか？　ベアトリーチェのことを……」（理御）（EP7）
「知ってるだろう。……第４のゲームの時、連絡船の船長は、熊沢がカ羽鳥荘に出入りしていたことを証言している。恐らく、熊沢は屋敷と九羽鳥荘の双方で、異なる勤務シフトを持っていたに違いない。若い娘の世話だ。育児経験の豊富な熊沢は、さぞ重宝されただろう」（ウィル）
「軽音楽はやっていないのか」（ウィル）（EP7）
「え、……え？！　し、しぃ――！　それは秘密、内緒…！」（朱志香）
「俺は好きだぞ。ペッタンペッタンとか。どっきゅんどっきゅんとか」（ウィル）
「二重人格！　あぁ、そいつは多分、ぴったりな表現だろうな。あるいはそれが、真里亞にとっての理想の人格だったのかもしれない」（朱志香）（EP7）
「自分のなりたい、“もう一人の自分を生み出す”、の話か…？」（ウィル）
「え、…何で私のモットーを知ってんだよ」（朱志香）
「難しく考えるな。頭痛ごならァ」（ウィル）
それはかつて、朱志香が嘉音に語った話だ。人は誰でも、自分を本当に好きになれる、もう一人の自分を生み出すことが出来る、という話。……確か、第２のゲームの冒頭で語られた真実だったと思う。
※現在、僕が考えている世界観は２つあります。１つはこの作品はファンタジーで、メタ世界が作品世界の中心で、その部品としてゲーム盤と現実世界のパートがある、というものです。もう１つはメタ世界の戦人とベアトもゲームマスターの駒である、というものです。ゲーム盤は箱庭的世界で、駒がゲームマスターの干渉を受けながら、基本的にはＡＩで自律行動しています。後者だと“全てがゲームマスターの１人遊び”ということになり、何の意味があるのかよく解らなくなります。

■ゼパルとフルフル、どっちが男でどっちが女？
「……第５のゲームでは、お前は男ということになっている。しかし数多のゲームでは、女だと考えられる。……右代宮戦人がマスターを務めた第６のゲームでは、性別を違えつつも確定しない二人組の悪魔が登場し、それを暗示した。……いや、厳密には、一番最初のゲームからだな。……お前の性別は、ゲームの外側の、隠れた謎の一つだ」（ウィル）（EP7）

※“性別を違えている”という事は、男らしく振舞っているのが女で、女らしく振舞っているのが男ということです。
「……あの二人は本当に、戦人を救い出せるのかしら」（フルフル）（EP6）
「救い出せるさ！　愛の奇跡さえあればね…！！」（ゼパル）
※ということは、ゼパルが女で、フルフルが男ということになります。以下のＴＩＰＳもそれを肯定しているでしょう。
ゼパルのＴＩＰＳ“**草食男子を好んで捕食する恋の狩猟者でもある。（EP6）**”
フルフルのＴＩＰＳ“**草食男子に肉の味を教える恋の調教者でもある。（EP6）**”

■１９９８年
※EP4と６と８で描かれていますが、いずれも内容が違います。EP4においては縁寿は、ビルから飛び降りたものの、奇跡的に助かり、八城幾子に会えず、六軒島に行き、天草に射殺されます。あるいはビルからの飛び降りで、そのまま死亡します。EP6においては八城幾子に会い、六軒島に向かうところで話が終わります。EP8においてはビルから飛び降りず、そのまま寿ゆかりになるための旅に出ます。あるいは六軒島に向かう船中で天草と船長を射殺し、そのまま六軒島には向かわずに旅に出ます。これらの出来事は平行世界、あるいは白昼夢と考えるしかないと思います。
風が頬をくすぐる。私は、閉じていた目を、ゆっくりと開く。……ずいぶん長い間、目を閉じていたのかもしれない。その眼下の煌きさえ、とても眩しく感じた。……そこは、星の海が眼下に広がる、不思議な世界。風が冷たい。……でも、私が現実に帰ってきたことも教えてくれた。私は、眼下の星の海に、……一歩を踏み出した、片足の状態でいた。いつから、私はここにいたのだろう。……多分、ペルンカステルに捕まれて、一歩を踏み出そうというところで、……ずっと私の時間は止まっていたのだ。（EP8）
「……」（縁寿）
その足を、……ゆっくりと、戻す。そして、フェンスに寄り掛かって、座り込んだ。空は、遠い。でも、地上も遠い。どちらの世界にも遠い、悲しい場所に、私はずっといたのだ。空へは、行けない。なら、私の世界へ、帰らなくちゃ。
「そしてそれは、エレベーターがいいわね。……スカイダイブはもうたくさん。さすがにもうないわよね。ここから飛び降りて、無事なんて奇跡は」（縁寿）
そんな奇跡は絶対ないって、某奇跡の魔女の保証済みなんだからね。
※ビルの屋上に立った縁寿は飛び降りる瞬間に、飛び降りた世界の自分の記憶を共有し、あるいは白昼夢として見て、飛び降りるのを止めるのです。以下の内容が記述です。
（聞き手）手品エンドは、『EP6』のあとの話ということになるんでしょうか？（真相８）
正確には『EP6』を途中までなぞった分岐世界ですね。あそこで縁寿が六軒島に行ってしまうと霞が待っていて『EP6』の話になるんです。
※竜騎士０７さん本人が「分岐世界である」と明言しています。しかし、この考え方で万事解決というわけには行きません。
「新居と口座を決めたら連絡してくれ。何も不自由はさせねえからな」（小此木）（EP8）
「須磨寺家は問題ない？」（縁寿）
「全部任せてくれ。こっちには縁寿ちゃんの委任状って節の保証がある。お陰で右代宮グループは一枚岩だ。……縁寿ちゃんのお陰で、会長の作った会社が守られた。会長も、縁寿ちゃんの決断を喜んでるはずだぜ」（小此木）
「面倒臭いことを全部押し付けたかっただけよ」（縁寿）
「そうだ、運転手を紹介しておこう。俺の子飼いの男だ。信用できるし、何でも頼れるぞ。会長のところで長年護衛をしていたから、縁寿ちゃんも面識があるかもな？」（小此木）（EP8）
「……天草だけは御免よ」（縁寿）
へっぷし！　運転席から出てきた男がくしゃみをする。
「そりゃねぇですぜ、お嬢」（天草）
「天草、お前ぇ、何やらかしたんだ？」（小此木）
「……伯母さんの護衛の中で、一番軽薄そうだったからね。こいつだけは御免よって思ったの」（縁寿）
「でも、一番仲良くしてたろ」（小此木）
「……まぁ、おしゃべりだけは面白かったかも」（縁寿）
「……さて。どこへ行きますかい。北へ？　南へ？」（天草）（EP8）
「……お勧めはある？」（縁寿）
「本州を出るのはどうですかい。北海道なんてお勧めですぜ。……広い草原、でっかい雲！　ログハウスで執筆する小説家なんて、最高ですぜ」（天草）
「じゃあ南にするわ。……あんたが言ったのと逆の方にするって決めてた」（縁寿）
「へはッ、そりゃ酷えや」（天草）
「温かい地方がいい。海が見える町がいいわ」（縁寿）
縁寿はゆっくりと目を閉じる。色々とどたばたして疲れた……。
「了解です。お嬢が次に目を覚ます時にゃ、もう見知らぬ興梠ですぜ。……ですがそこは、海の見える、温かい町です」（天草）
「期待してるわ。あんたのチョイス」（縁寿）
車は高速道路に上がっていく。そして、東西に往来する車の大河に飲み込まれる。もう、どの点が彼女の乗る車か、わからなくなっていた。
「八城……、十八先生、……ですか」（縁寿）（EP8）
彼女（縁寿）はその名を、数十年ぶりに思い出す。その名を再び聞くことになるとは、……思わなかった。
「ご存知ですか？　ひょっとしてお会いになったことがおありとか…」（編集者）
「いいえ、ありません…。お尋ねしたこともありましたが、当時は私も無名。それも鹿宴に出版社さんへ押し掛けたもので、お断りされてしまいまして……」（縁寿）
私（縁寿）は旅立ちの日、右代宮縁寿という名を捨て、新しい人生に歩み出した。今でこそ和解したが、当時は須磨寺家とのトラブルがあり、それを嫌ったためだ。（EP8）
私（縁寿）は、真実に至ったと自称する偽書作家、伊藤幾九郎の正体が八城十八だと気付いた。そして、なぜ彼女が真実に至ったと自称できるのか問い質そうと、出版社を通じて面会を要求したのだ。しかし、叶わなかった。結局、何の連絡もなく、八城十八と面会するのに、こうして数十年の月日を要することになってしまった。……あの時、出版社が私を取り次いでくれたら、私たちはもっと早くに再会できていたのだ。しかし、当時の私は、札束をばら蒔くだけのブルジョワ娘。誰の紹介もなく、ずかずかと乗り込んできて、当時、人気絶頂だった八城十八に会わせろと言ったって、取り次ぐ作るわけもない。（EP8）
※まず、須磨寺家との問題です。
（聞き手）六軒島で霞が死亡したのは、事実と考えて良いのでしょうか？（真相４）
構いません（キッパリと）。“１９９８年の六軒島で殺人が起きた”というのは、紛れも無い事実です。
※何故、霞は六軒島に行ったのでしょう。縁寿が六軒島に行っていない以上、霞が六軒島に行く理由がありません。仮にガセネタを掴まされて六軒島に行って、殺されたとしましょう。なら、須磨寺家にはもう縁寿を狙う人間はいないはずで、須磨寺家とのトラブルなどなくなっているはずなのです。まあこれは、平行世界での“事実”であって、現実世界とは違うのかもしれません。また、縁寿は霞が殺されていることを知らなかったため、須磨寺家から狙われていると勘違いしていた可能性もあります。しかし、縁寿が八城十八に会おうとしたのは一体いつで、何の為なのでしょう。平行世界の知識を持つ縁寿ことって八城には既に会っているので、会う意味がないのです。ビルからの飛び降りを決意する前でしょうか。あるいは旅立ちの前かあるいは旅立ち後に何となく気になって会おうとしたのでしょうか。旅立ちの前の場合は、少なくとも天草は同行していなかったと思われます。というのは、小此木の台詞から縁寿と天草は久しく顔を合わせていなかったことが伺えるためです。

■１９８６年?

「ほら、対戦ゲームでもよくあるだろォ？　乱入したけど相手があまりに弱くて拍子抜けで、わざと負けて最終ラウンドまで延長させて、最後に本気でフルボッコにすることとかってあるだろォ？」（ベアト）(EP2)

「‥‥‥例えの意味がわかんねーよ」（戦人）

※対戦ゲームの元祖とも言える『ストリートファイターII』の登場は１９９１年です。

「赤ん坊のお守りからネトゲのお相手、スペースシャトル操縦まで何でもお応えしますよ。にひひ！」（シエスタ４１０）(EP3)

※インターネット普及の原動力となった『Windows 95』の発売は１９９５年ですし、ネットゲームの普及はブロードバンド登場前後です。

「ああぁ、ミステリーでも、最近はそういう異世界はポピュラーですので。純粋推理空間とかご存知で？」（エリカ）(EP5)

「観光行人のデビューは来年（１９８７年）だ」（戦人）

「‥‥‥‥‥‥譲治ね？　この問題を考えたのは。モンティ・ホール問題は１９８６年にはあったっけ？」（絵羽）(EP8)

「１９９０年だろ。縁寿ちゃんの世界にはもうある問題なんだから、出題してもいいかなって思って」（譲治）

「お嬢様のような素直じゃない方を、…何でしたっけ、譲治さまに習いました。そうそう、ツンドラ(正しくは“ツンデレ”)**とか言うそうですよ？　あと十数年かすると流行るんだそうですよ？」（紗音）(EP2)**

※これらの内容は「この作品を書いているのは２００７年以降に生きる自分なんですよ」という竜騎士０７さんからのメッセージなのではないでしょうか。

■１９８６年１０月４日

「左様です。このせいで、六軒島ミステリーはさらに面白みが増したのです。２つのボトルの中身は、どちらも事故前日から当日までを記した日記風の手記です。しかし、その内容はまったく異なったのです。まるで、どちらかが真実で、どちらかが虚偽のように。あるいは両方とも虚偽なのかもしれない。…しかし、始まりと終わりだけは一致するのです。始まりは、親族たち１８人は台風で島に閉じ込められた。そして終わりは、全員が死亡、黄金の魔女が蘇り、全ては黄金郷に飲み込まれる」（大月）(EP4)

※メッセージボトル及び物書は各EPのどこから始まっているのでしょうか？　それによって１９８６年１０月４日の出来事の解釈は変わっています。まず考えられるのは、妥当に“始めから”です。空港の場面からこの作品は始まりますが、そこからという考え方です。この考え方の問題点は、大月教授の語る始まりとズレがあること、真里亞の薔薇の意味がなくなってしまうこと。また、書き手であるヤスの観測外での出来事が多く書かれることになるため、現実の再現性が下がること、文章量が多くなるため、メッセージボトルにそんな長い文章が入るのかという疑問が生じることです。もう一つ考えられるのが、“真里亞の薔薇より後”です。この考え方だと“始めから”の時に指摘した問題点はクリアできるのですが、大きな問題点が出てきます。というのは、EP1と2は空港で既に話が違っていますし、EP1と3の下船の場面が明らかに違いますので、この場面が事実だったとは考えるには“平行世界”を持ち出すしかないのです。あるいはEP1～4に現実の出来事をバラバラにして組み入れた、もしくはどれかが本物、ということになりますが、では偽の場面は一体何なのだろうということになります。もし僕がこの作品の書き手だったなら、ゲーム盤の始まりは“真里亞の薔薇より後”にして、それ以前の描写は、現実の１９８６年１０月４日の出来事を視点と場面を変えてEP1～4に配置します。例えばEP1と2は真里亞のハロウィンのマシュマロで話が分岐しますが、それならば、EP1では戦人が真里亞と仲良くなった後に場面を飛ばし、EP2では仲良くなる場面を描く。というようにすれば良いですし、EP3では船で甲板に出ていたのは留弗夫と秀吉だけでしたが、それを前甲板では戦人たちが暮いており、後甲板では、留弗夫と秀吉が煙草を吸っていた、というふうにすればよいのです。海岸の場面も最初は碑文の謎解きに挑戦して、それから６年前の話をしたことにし、EP1では謎解きの話だけを、EP3では６年前の話だけを、描けばよいのです。そして真里亞が一人で薔薇庭園に行んでいる場面で突然、台風の到来による突風が起き、思わず真里亞は目を閉じる。その瞬間、薔薇の花弁が舞い上がってあたり一面を覆いつくし、おさまったときにはベアトがそこにいた、という風にします。もちろん、そんな風で薔薇炊雪が起きるわけもなく、その場面は幻想描写です(EP2はほぼそのような描写になっていますが‥)。そしてゲーム盤の始まりを告げるシーンでもあるのです。竜騎士０７さんがそうしなかったということは、この考え方が間違っている証拠なのかもしれません。ちなみにEP1～4のどれかが正解だったとするなら、それはEP1だと思います。EP2は昼食後にそのまま雨が降り出して、海岸に行っていませんし、真里亞の薔薇の消失シーンもありません。EP3は甲板に出ていたのが留弗夫と秀吉だけであるため、以下の場面と矛盾します。**

(川俣)元船長は、引退の理由が何だったかわからないくらいに元気だった。記憶も鮮明らしく、１０年以上前のことを良く覚えており、当時の縁寿のことさえも記憶しているようだった。話が弾み、縁寿としてはとても助かったが、‥‥同時に、最後の親族会議のこともよく覚えていて、船上の戦人の“落ちる落ちる騒ぎ”のことまでも詳細に記憶していたことは、逆に縁寿には辛かった。(EP4)

※EP4はそもそも真里亞の薔薇以前の場面がほとんど描写されていません。

■台湾への伏線

「戦人くんとは海外旅行を一緒に行くと賑やかそうねぇ。伯母さんとエジプトとか行かない？　１４時間も飛行機に乗れるわよぅ？」（絵羽）(EP1)

「譲治ももう立派な大人や。わし（秀吉）が頑張ってなくてもしっかり仕事ができる一人前や。‥‥‥どや。正月辺りをのんびりモルジブ辺りで過ごさんか。わしら二人（秀吉と絵羽）水入らずや」（秀吉）(EP1)

「戦人くん、今度おばさんと一緒に海外旅行に行きましょうよ。ヨーロッパとか行かない？」（絵羽）(EP4)

「‥‥‥お嬢様は昔の話はほとんどされません。…ただ、右代宮家が誠心誠心付けた関東大震災について、非常に他人事のように話されることがありましたので、関東地方よりずっと遠方にお住まいだったかもしれません」（紗音）(EP1)

「川も一本ではないだろう。地理的な意味では我々もそれぞれにかなり調べたつもりだ。‥‥‥絵羽に至っては、現地まで直接調べに行ったんじゃないかね？」（南田）(EP3)

「あくまでも旅行としてよ。‥‥‥でも、町並みは当時と完全に変わってる。何しろ戦争を挟んでるのよ？　お父様がどこに住んでいたのかさえ、正確な場所の把握は不可能よ。…多分、お父様が自ら現地へ足を運んでも、今となっては、どこに住んでいたか特定できないでしょうね」（絵羽）

「あちらさんもずいぶん目覚しく復興したって話だからな‥」（留弗夫）

※絵羽の旅行先として、国内が名前に出ることは一度もありませんでした。また留弗夫も、随分遠くを想定して話をしているようです。

■ＴＩＰＳ

(夏妃のEncute)魔女に鉄砲如きで挑もうなんて、身の程知らずもいいところ。当然の結果なんだよ。　きひひひひひひひひひひ。(EP1)

(絵羽のEncute)ニンゲンに、殺せるわけがないよ。(EP1)

(ベアトリーチェのEncute)人の身で姿を殺そうなど無謀な夢。鉛弾を射掛けようとも鏡の如く己が身に跳ね返されるだけよ。だが、姿を殺す方法はひとつだけある。その方法はお前の手に握られている。お前如き凡夫には無理であろうがな？(EP1)

(留弗夫のEncute)彼には、不運を嘆く権利がある。(EP1)

(霧江のEncute)悪魔のルーレットが選んだ。　それだけ。(EP1)

(戦人のEncute)この馬鹿にも、早く貴方が現えたらいいのにね。(EP1)

(楼座のEncute)また会えるよ。だから寂しくない。(EP1)

(真里亞のEncute)行方不明。きひひひひひひひひひひひひひひひ。(EP1)

(ベルンカステルのEncute)考え続けることによって、私は永遠に生き永らえる。つまり、考えることをやめれば、いつでも死ねる。でも、考え始めれば、いつでも蘇る。(EP1)

※EP1のＴＩＰＳは基本的に真里亞によって書かれているようです。魔女に関しては自己紹介のようですが。

(南田のEncute)碑文さえなければ、机なんていらないのにね。面倒臭い。(EP3)

(夏妃のEncute)そもそも、何で碑文に沿わなきゃならないの？ゲーム？(EP3)

(留弗夫のEncute)ここからは机でトドメが必要とのこと。悪趣味。(EP3)

(朱志香のExecute)彼女は確かに、黄金郷で嘉音と結ばれた。互いの胸倉を掴り合い、本当の素直な気持ちを伝え合った。そして最後の瞬間まで、抱き合っていた。(EP3)
(南條のExecute)あと一息で、多分、彼も生還できたのだ。しかし、最後の最後で、魔女は彼のそれを許さなかった。(EP3)
(秀吉のExecute)油断した。まだ生きていたなんて……。(EP3)
(譲治のExecute)彼の魂と引き換えに、魔女は8桁の数字を与える。０７１５１１２９。唱えれば、小さな黄金郷が、開かれる。(EP3)
(縁壽のExecute)腹と言うのは、何とも致死性に欠ける。(EP3)
(楼座のExecute)彼女こそが、新しい魔女誕生のための生贄…。(EP3)
※EP3のＴＩＰＳは基本的に第三者、及びエヴァによって書かれているようです。

■テーブルトークＲＰＧ？
※ベアトのゲーム盤はテーブルトークＲＰＧだと考えられます。なぜなら“ゲームマスター”という単語を他では聞いたことがありませんし、そう考えると非常にわかりやすいためです。テーブルトークＲＰＧとは簡単に言うと、観客のいない演劇です。通常は１人のゲームマスターと６人程度のプレイヤーによって行われます。テーブルトークＲＰＧにはルールブックというものが存在します。これは、そのゲーム世界の約束事を定めたものです。どんな気候や風土で、どんなモンスターが存在していて、どんな風俗、文化、宗教、国家があって、どんな魔法があって、どんな武器や道具があるのか。そういったゲームを楽しむために必要な情報を定義しています。ゲームマスターはルールブックの情報を元にクエストを作ります。これはコンピューターＲＰＧで例えるとわかりやすいと思いますが「近所の遺跡に魔物が棲みついて町に被害をもたらすので退治をしてくれ」といったものです。このクエストの場合、ゲームマスターは遺跡のマップ、仕掛け、配置するモンスター、アイテム、などを考える必要があります。ゲームマスターはゲームの進行を司り、プレイヤーを生かさず殺さず、クエスト達成に導きます。プレイヤーは自分の分身であるキャラクターを作り、そのキャラクターを演じてゲームマスターのクエストに挑みます。このあたりはオンラインＲＰＧで例えるとわかりやすいかもしれません。もっと詳しく知りたい人は“駒河屋”で関連書籍が２０円くらいからで買えますので、ライトノベルのジャンルで“リプレイ”と入力して検索してみてください。『ロードス島戦記』関連などが初心者向けだと思います。ここで話をうみねこに戻しますが、うみねこの場合、ルールブックから作っています。ルールブックを作ったのはベアトです。ゲームマスターもベアトですが、これはEP5ではベルンであったり、EP6では戦人であったりと、変わっています。しかし、ルールブックを作ったのはベアトですから、そのルールには従わなければなりません。プレイヤーはEP1～4は戦人、EP5と6はエリカです。通常、プレイヤー以外のキャラクターはＮＰＣ(ノンプレイヤーキャラクター)と呼ばれ、ゲームマスターが演じます。しかし“■駒とはどのようなものの？”で説明しましたが、ベアトのゲームではゲームマスターが特別に干渉しない限り、キャラクターはＡＩ(人工知能)で動くようです(プレイヤーがキャラクターから離れても)。ちなみにベアトのゲームではキャラクターは“駒”と呼ばれています。テーブルトークＲＰＧの面白いところは、プレイヤーの知識や能力がキャラクターに反映されないところです。たとえば“ライカンスロープ(獣人)は銀製の武器か魔法でしかダメージを与えられない”という設定のテーブルトークＲＰＧがあったとします。キャラクターがその情報を知らない設定で、プレイヤーは逆に知っていたとしましょう。ライカンスロープが現れた瞬間、キャラクターが手持ちの武器を捨てて、道具袋から銀のナイフを取り出して戦う、というのは、この場合NGです。たとえプレイヤーが手持ちの武器ではライカンスロープにはダメージを与えられないと知っていても、キャラクターは手持ちの武器で攻撃し、ダメージを与えられないことを確認しなければならないのです。その上で道具袋から取り出した様々な武器を試す中で、銀のナイフならダメージを与えられることに気がつかなければなりません。ということは“無能である”と設定されたキャラクターは無条件で無能なのです。ですから赤字で宣言できるわけです。以下の場面はこの作品がテーブルトークＲＰＧであることの証明だと思います。
「狂ってやがるッ！！　もう止めろ喜ヱォオオオォ！！　ワルギリアッ、この狂った茶番を止めさせるんだ！！　どうすりゃいいんだ！！」(戦人)(EP3)
「……私たちは盤外の存在です。盤上には触れられません」(ワルギ)
※これはEP3において黄金の魔女を継承したエヴァが薔薇庭園で楼座と真里亞を魔法でいたぶるシーンです。プレイヤーが自分の駒を自由に操作できるなら、戦人は自分の駒を操作して薔薇庭園に行き、エヴァをぶん殴らせれば良いのです(返り討ちに遭うのが関の山ですが…)。しかしテーブルトークＲＰＧ的にはそれはNGです。キャラクター(駒)が知らないことは、そのキャラクターを操作するプレイヤーが知っていても、知らないことになるからです。

■夏妃の頭痛
「……。……ごめんなさい。生まれつきの頭痛持ちなものでし」(夏妃)(EP1)
……その日より１９年間、私(夏妃)を苛む、長き頭痛の日々の始まりに呻いていました……(EP5)
※生まれつきのものではなく、１９年前からのものでした。メッセージボトルの書き手であるヤスが事実を知らなかったため、こうなってしまったと思われます。

■夏妃は１９年前に赤ん坊を殺そうとしたの？
「お、お父様……。今、……何と仰いましたか……」(夏妃)(EP5)
「この赤子を、我が孫として迎えよ」(金蔵)
「お―……、よしよしよし。よしよしよし…」(熊沢)
熊沢があやす赤ん坊は、薔薇の空気がよほど合わなかったらしい。…ずっとずっと、嫌がるように泣き喚いていた……。
「も、…申し訳ありません、お父様…。……私には、何を仰っているのか……、」(夏妃)
「この赤子を、我が孫として迎えよ。そして蔵臣の後を継ぐ者として育てるのだ」(金蔵)
「……それはつまり、……私と夫の子として…、育てよと仰るのですか……」(夏妃)
「そうだ。お前に子が宿せぬことはもはや明白。……お前の体には、女としての欠陥があるに違いない」(金蔵)
あの日、年配の使用人に赤ん坊を預け、私は薔薇庭園でこれからを思案していました。いいえ、それは嘘。……何も考えたくなかったのです。赤ん坊の泣き声がうるさいので、聞こえないところへ連れて行きなさいと、私は使用人に命じました。……聞こえないところとは、どこか遠くへという意味。えぇ、私は願いました。……いっそ、二度と帰って来ないくらいに遠くへ行ってしまえばいいのにって…！！(EP5)
「なるほど……。……行きずりの悪魔が、夏妃さまのその願いを、聞いてしまったのですな」(ロノウェ)
「して、……どうなったのか」(ベアト)
「それは、悪魔が願いを叶えてくれたとしか思えない、奇妙な事故でした…」(夏妃)
薔薇庭園から船着場への林道は、確かに心地良く散歩にも向くだろう。……気分で、時には道を出て木立の中を歩くのも気持ちいいに違いない。でも、……赤ん坊を抱いての散歩にしては、あまりに踏み入り過ぎたのではないだろうか…？
「その先は断崖です。高さは、……多分、１０ｍくらいはあったと思います。下は岩場。…そこには柵もあったのです！　その使用人はわざわざそんなところまで赤ん坊を抱いたまま、歩いていき、そして柵に寄りかかったとでも言うのでしょうか…？　まるで、悪魔に手招きされて誘われたとしか思えない！！」(夏妃)
「……誘われちゃったのねえ。……あなたの願いを聞いた悪魔が、その使用人を招いちゃったんだわ……」(ガァプ)
「それでは、……その使用人と赤ん坊は…」(ベアト)
「死にました…！！　崖から転落して、下の岩場に…！　いえ、私が願ったから死んだ！　だからこれは、」(夏妃)
崖下の二人を見つけ、……私は青ざめました。大至急、船で病院に運びましたが、……あの高さで、即死を免れただけでも、奇跡。使用人も、……そして赤ん坊も、……死にました。私はお父様から赤子を預けられ、三日も経ない内に、……殺してしまったのです…！　主人は出張中でした。当時、まだお遊戯にお住まいだった楼座さんも、ご友人と旅行中でした。……六軒島には、私とお父様しかいなかった！！　そして私とお父様以外、誰も良く知らぬ間に、……どこからともなく赤ん坊が現れ、そして消えていった…！！　お父様は私を責めるに違いないと思っていました。…しかし、何か様子がおかしかった…！(EP5)
「眺めていたぞ、眺めていたぞ、この期待な！　どこまで足掻くのか。どこまで我が物にならぬというのか！！　空の檻に興味はない！　打ち捨てい！！」(金蔵)
事故死を知ったお父様は、これ以上愉快なことはないとでも言うように、いつまでもいつまでも、聞いているこっちが嫌気味悪くなってしまうくらいに、…ずっとずっと笑

っていた。心の中の何かのたがが、外れてしまったのかもしれない‥‥。その日からだ。お父様がそれまで以上に、オカルトの世界だけに篭り切るようになるのは‥‥。
「‥‥‥１９年前のあの日。‥私は、お父様より、ひとりの赤ん坊を託されました。‥‥‥いつまでも崩れぎを身篭ることの出来ない私に、ならば養子を迎えよとお父様が仰り、‥‥‥孤児院から連れてきたという、ひとりの赤ん坊を‥‥、私に抱かせたのです‥。それが私に、‥‥どれほどの女としての屈辱を与えたか、想像がつきますか‥?!」（夏妃）(EP5)
‥‥‥あれは、赤ん坊を抱かせた使用人と共に、薔薇庭園から船着場の方へ散歩に行った時でした‥。‥‥私はひとりになりたかったのですが、‥‥赤ん坊を連れたその使用人の女は、伸縮で私の後について回りました。ひとりにしてくれとさえ言い出せず、‥‥だから赤ん坊の泣き声から逃れられず‥‥。‥‥‥その日より１９年間、私を苛む、長き頭痛の日々の始まりに耐いていました‥‥。‥‥‥そして、柵より、崖を確む。はるか眼下の岩洞に、‥‥この赤ん坊を放り捨てることで、‥‥全てなかったことに出来れば。‥‥そんな悪魔の誘惑を、私は確かに聞きました。(EP5)
「そして、‥‥‥それが本当に出来たら、どれほど爽晴らしいかと、‥‥その誘惑に、ほんの一瞬、耳を傾けてしまったのです。‥‥その時、」（夏妃）
赤ん坊を抱いた使用人が、大きな石を踏んで、足を挫き、よろめいた‥‥。そして粗末な柵に寄りかかり、‥‥その時、柵が大きく軋んだ気がした。私は、危ないと言いながら肩を掴もうとしました。
「‥‥いえ、‥‥そんな曖昧な言い方はしません‥。懺悔します。告白します。‥‥‥私はあの時、確かに、‥‥危ないと言いながら、‥‥‥‥その使用人の肩を、両手で、‥‥どんと、‥‥強く押し飛ばしたのです‥‥」（夏妃）
粗末な柵は根元から折れ、‥‥‥使用人と、‥‥その手に抱かれた赤ん坊と一緒に、‥‥‥眼下の岩浜へ転落していきました‥‥。その瞬間のことは、‥‥鮮明に覚えているのに、‥なのになぜか曖昧で、‥‥とても不思議な気持ちだったのを覚えています。転落したというより、‥‥まるで、何もない宙に、二人が皆も無く飲み込まれて消えたようにさえ感じたのです。だから私は、二人が岩洞に落下した音さえ聞いていません。いえ、きっと聞いているのです。でも、消えたと思い込みたかったから、‥‥‥その聞いた音を、きっと記憶から消し去ってしまったのです‥。
「‥‥‥そ、‥‥‥それから‥‥‥?」（戦人）
「私は一瞬、‥これが夢だと信じました。‥‥あの高さですから、ちょっと身を乗り出したくらいでは、眼下の二人は見えません。だから、二人が落ちたことさえ、‥‥ほんの数秒前のことさえ、現実のことなのかわからなくて‥」（夏妃）
きっと私は、ここから赤ん坊が落ちれば良いのにと願いすぎて、白昼夢を見てしまったに違いない‥。そう自らに思い込ませ、足早に薔薇庭園に戻り、‥‥‥赤ん坊は使用人に任せ、私はひとり、ここで休んでいたことにしました‥。‥‥そして、‥‥‥お父様に、赤ん坊はどうしたのかと問われ、‥‥‥‥。‥‥‥任せた使用人の姿が見えないと、‥‥‥騒ぎになって‥‥‥‥‥。やがて、壊れている柵が見つかって、‥‥‥その崖下に、二人の死体が発見された‥。‥‥明かせぬ筋からの赤ん坊だったらしく、その存在は伏せられ、‥‥使用人が単独で事故を起こして死んだこととなった。そう。私は、‥‥一度に二人もの、罪なき命を奪ったのです‥‥‥。気の毒な使用人については、‥‥遺族に充分なねぎらいをしました。真相を知らない老いた夫は、不幸な事故を嘆きつつも、それに納得してくれました。そして、ほんの数年前、老衰で亡くなり、‥‥‥‥私は墓前で真相を告白し、懺悔しました。
※以上が夏妃の告白を抜粋したものです。これは2回ありますが、１回目は途中に夏妃が作った嘘の出来事が入っています。２回目は本当にあった出来事ですが前半部分は省略されています。両方をあわせると、実際の出来事がわかります。結論から言えば、夏妃が赤ん坊を抱いた使用人を突き飛ばし、崖下に落下させたのは事実でしょう。その意味で夏妃は赤ん坊を殺そうとしました。しかし、これは事故だったのではないでしょうか？　こんな経験はないでしょうか。瓶が倒れそうになったのを支えようとして、逆に突き飛ばしてしまった。あるいは机から落ちた物を空中で拾おうとして、逆に突き飛ばしてしまった。人間、咄嗟に手を出すことは出来ます。しかし、必ずしも思った結果を出せるとは限りません。この時の夏妃がまさにそうだったのではないでしょうか。使用人の肩を掴もうとして失敗し、逆に押してしまった。その結果、使用人は崖から転落します。それを見た時、自虐癖のある夏妃は思いこんでしまったのではないでしょうか？　「自分は赤ん坊がいなくなればよいと思っていた。そのため、使用人を助けようとしたのは嘘で、悪意を持って押してしまったのだ」と。真面目で責任感の強い夏妃なら、ありえないことではありません。つまり行動としては殺そうとしたけれども、心情としては助けようとしたとも考えられるのです。

■南條さいつから金蔵と知り合いなの？
「開かぬ社押堂と知りながら。‥‥それでもなお、奇跡の日を夢見ていたのでしょうな。‥‥‥金蔵さんは若い日にはとてもロマンチストな方だった。‥わかる気がします」（南條）(EP2)
気付けばもう、自らを若者と呼べば、若者たちに笑われそうになる歳になっていた。気が遠くなるような、長くても何も中身のない灰色の日々。それは２０年にも及んだ。２０年あれば、人は生まれ、志を持ち、社会へ飛び立ちことさえ出来る。つまり、‥‥社会人となって初めて人間と呼べるのだとしたら。私は、人間が一人、生み出せるほどの膨大な時間を、‥‥何もすることなく、欲深な老人たちの人形として過ごしてきたわけだ。(EP7)
「では、‥‥まさか、あなた（南條）なのですか！　お祖父さまがベアトリーチェを連れて行った、新島の医者というのは‥」（理御）(EP7)
「突然、海軍の兵隊さんが、外国人の女性を連れて現れたのです。驚きましたとも。‥‥‥しかも、その上、軍艦なので、秘密で治療しろというのです」（南條）
「それが、お祖父さまとの初対面だったのですか‥?」（理御）
「‥そうです。それが、金蔵さんとの初めての対面でした」（南條）
※明らかにおかしいです。金蔵が南條に会ったのは、当主になってから２０年も経ってからです。１５歳で当主に抜擢されたとしても、３５歳です。果たして若いといえるでしょうか？　まあ、これに関してはそれから４０年も経っているわけで、現在の年齢から考えれば若いと言ってもおかしくはないでしょう。ところが以下の内容は致命的です。
金蔵が右代宮家の当主に突然抜擢され、右往左往していた頃のことを覚えている南條は、蔵臼のその姿に金蔵の当時を懐かしむ。だからこそ、蔵臼の苦悩にも理解が及び、同情できるのだった‥。(EP5)
※そんなわけがないのです。これは一体どういうわけなのでしょう、南條は嘘をついているのでしょうか？　しかし、そんな嘘をつく意味があるとは思えません。おそらく竜騎士０７さんの勘違いなのだと思います。

■年齢さいくつ？
（真里亞の年齢は）「９歳。うー」（真里亞）(EP1)
「えっとえっと‥！　（嘉音の年齢は）確か、私たちの２つ下だから、‥１６だったよなー？」（朱志香）(EP1)
「はい。お嬢様で１０年ほどお仕えさせていただいております」（紗音）(EP1)
彼女（紗音）は６つの時からここに勤めているという古参の使用人だ。
※紗音の年齢は１６歳（と他人は認識している）。
（古戸エリカについて）「（朱志香）お嬢様くらいの、若い女性でございます」（源次）(EP5)
「朱志香お姉ちゃんよりは下だった」（真里亞）
（エリカは）戦人や朱志香よりはわずかに年下に見えるが、高校生とは到底思えない落ち着きと仕草は、良家の令嬢を思わせた‥‥‥。(EP5)
エリカの着ていた服は、朱志香の昔の余所行きの服だった。大人顔負けの貫禄を持つ客人も、体格はまだ中学生くらいだ。朱志香の昔の服のサイズがぴったりだった。(EP5)
※エリカは１６～１７歳。
「私しゃ花も恥らう１８だぜ！」（朱志香）(EP1)
（譲治の年齢は）俺（戦人）より５つ上だから、今年で多分２３のはずだ。（戦人）(EP1)
※戦人の年齢は１８歳。
「はい。《赤：ここは１９６７年の世界》。１９年前の世界でございます」（ロノウェ）(EP3)

「‥‥あれはいくつの時だったのかしら…。…多分、中学生か、‥‥よく覚えてない。とにかくそのくらいの頃だったと思うわ‥」（楼座）
※１９６７年に中学生だったということは、楼座の年齢は３２～３４歳。
２つ年上の兄、蔵臼は、私（絵羽）に比べたらまったくと言っていいほど、右代宮家に相応しくあろうという努力をしているとは言えなかった。（EP3）
「大学院に進んで、もっといっぱい勉強して、優れた成績を出して、蔵臼を追い詰めてやりましょう」（絵羽）（EP3）
「私は女で、子を産むことができるわ。そして兄さんには未だ結婚もない」（絵羽）
「夏妃姉さん、私より３つも若いんだからぁ。もうちょっとしっかりなさい？」（絵羽）（EP1）
※絵羽の大学院進学時（２２歳）にまだ蔵臼は結婚していなかったため、最も早くてその翌年に結婚したとして、当時、夏妃は２０歳。１２年間子どもが出来ず、その後、生まれた朱志香が１８歳であるため、夏妃の年齢は５０歳。絵羽は５３歳。蔵臼は５５歳。何となく留弗夫は、蔵臼と絵羽の間より、絵羽との年齢差があるように思われるので（留弗夫は私に逆らわない、との絵羽の発言から）、５０歳。
（熊沢の年齢は）下手すりゃ８０にも届くはず。（戦人）（EP1）

■ノックスの十戒とヴァン・ダインの二十則から見る『うみねこのなく頃に』
ノックスの十戒
・第９条。観測者は自分の判断・解釈を主張することが許される
※EP1 における“**そこは、ベアトリーチェの肖像画の前。そして、真里亞が覗きつくのは、‥‥‥‥肖像画の、…人物。**”EP4 における“**２階のバルコニーから、‥‥傘を差しながら身を乗り出し上機嫌に手を振っているのは、‥‥紛れもなく、‥‥肖像画の魔女、…ベアトリーチェ‥‥‥！！**”これらはある程度距離が離れているため、探偵である戦人でも紗音がベアトの扮装をしていることに気がつけないのだと考えられます。
ヴァン・ダインの二十則
・第７則。死体なき事件であることを禁ず
※EP5 は死体が出ていないため、これに違反しているのでは？　と考える人もいるのではないかと思います。しかし、登場人物が死体を目撃していますし（幻想ですが）、何よりこれは“死者が出ない事件であることを禁じる”と解釈することも出来ます。その場合、赤字で死亡が確定されているため、違反はしていないと考えられます。
・第１１則。使用人が犯人であることを禁ず
※紗音は使用人ですが、それは世を忍ぶ仮の姿で、本当は右代宮家当主です。
・第１２則。真犯人が複数であることを禁ず
※EP3 ではもともとの犯人である紗音の他に、犯行を引き継いだ絵羽も犯人です。しかしこの規則では“真犯人”と規定されています。この場合、真犯人は紗音で、絵羽は模倣犯、もしくは便乗犯になります。

■戦人が１９８６年に帰ってこなかったら事件は起こらなかったの？
「‥今、君（紗音）に贈るのに相応しい指輪を作らせてる。多分、今度の親族会議の日には持っていけると思う。その時に贈るから、どうか君の返事を聞かせて欲しいんだ。‥‥君が僕の婚約を受けてくれたら。僕はその席で、お祖父さまを含めた全ての親族の前で君との婚約を宣言する」（譲治）（EP2）
「譲治さん。‥‥婚約って、‥何でしょうか」（紗音）（EP2）
「え?!　あ、‥‥えっと！　結婚の約束をする、という意味だよ。…でも僕はその意味において結婚と同じものだと考えてる。僕は、一時の感情で言ってるんじゃない。今だけの君を見て言ってるんじゃない。‥‥‥明日の君も、明後日の君も。…それこそ未来の、老後の君すらも見据えて言っている」（譲治）
※譲治の指輪を貰ってしまったら、それはもう結婚と同義です。１９８７年では手遅れですし、１９８５年ならまだセーフです。

■戦人の乗り物嫌い
「こいつ（戦人）、昔から乗り物がなぜかダメでさぁ。二言目には、堕ちるだの沈むだの」（留弗夫）（EP1）
「‥母さんもよしなよ。戦人くんの乗り物嫌いはきっと遺伝だよ」（譲治）（EP4）
「あぁ、明日夢さんの？」（霧江）
「‥‥あいつ（明日夢）、どういうわけか乗り物系がダメでなぁ。自転車と車以外はほぼダメだったぜ。どこか遠出しようとすると、アレはダメだコレはダメだ、怖い怖い落ちる落ちるギャーギャーとうるせぇ女だったさ」（留弗夫）
「子供は、親が苦手がるモノを危険だと学ぶものです。きっと戦人くんは、明日夢さんのそういうところを見て、乗り物は怖いものだと覚えてしまったんでしょうね」（譲治）
「こいつは飛行機でも船でも、落ちるの何のと相変わらず賑やかでなぁ」（留弗夫）（EP8）
「明日夢さんの血でしょ？」（霧江）
「多分アレだぜ。こいつが小さい頃、遊園地で激し目なのばっか乗せて回ったからだ」（留弗夫）
「身長制限で乗れないんじゃないのぅ？」（絵羽）
「いやいや。ティーカップとか、足漕ぎボートとか色々あるだろ？　そういうのを、ちょいと激し目に付き合せたのがまずかったみたいだ」（留弗夫）
※明日夢から恐怖を学び、留弗夫から恐怖を与えられ、現在の戦人が出来上がったようです。

■戦人は本当に約束を忘れたの？
※ベアトは戦人が約束を忘れたと主張しています。しかし、約束の場面をよく読んでみると、とんでもない事実が判明します。以下の場面に注目してください。
「ホワイダニットを扱う小説って、案外ないんだよな」（戦人）（EP7）
「犯人特定後に動機を自白する作品は、結構あると思いますけど…?」（紗音）
「それを、犯人が自白する前に推理できるようになってなけりゃ駄目なんだ。動機がないと思われていた人物が、推理不能な動機により事件に及ぶってのは、俺は個人的にはアンフェアだと思ってる。ホワイダニットを大切にしない推理小説ってのは、何だか一味足りないように思う。‥‥いや、つまらないって言ってんじゃない。‥‥何て言うのか、‥‥一番大切なものが足りない気がするんだ」（戦人）
「一番大切なものが、足りない‥‥?」（紗音）
「心だよ、心が足りない。人の心ってのは、すごく重要だと思うんだ。人間が殺人を決意し、計画し準備し、実行に踏み切るためには、ものすごい大きな心の力が必要なはずなんだ。人は、心で動いているんだぜ」（戦人）
‥‥即ち、人を殺せるのは心だけなんだ。殺したいほどの感情の高ぶりの挙句に、起こるのが殺人という悲劇なんだ。裏を返せば、殺人という、悲劇に至らしめた心を探ることこそ、事件に迫るってことじゃねぇのかな。心だけが、人を殺せる。そして、人が殺されたなら、心を探らなければならないんだと。彼はそう言った。
「紗音ちゃんは、いつまで使用人を続ける気なんだ」（戦人）（EP7）
「‥‥わかりません」（紗音）
「もし、いつか。辞める時が来たら。俺のところへ来いよ、そしたら。‥‥今度はもう、時間も何も気にせずに済むもんな」（戦人）
この島での逢瀬は、一年の間に数えるほどしか許されず、‥‥そしてその一度も、無常なほどわずかな時間でしかない。
「その日が来たら‥‥、俺が白馬に跨って、迎えに来てやるぜ」（戦人）
「そ、‥‥その日は、いつ来るんでしょう‥」（紗音）

「紗音ちゃんさえ決心したなら、すぐにさ。俺はいつだっていいんだぜ。紗音ちゃんの人生さ。よく考えてから、決心するといい。……俺はその決心がいつであっても、それを尊重するぜ。その日まで、ずっと待ってるぜ」（戦人）
……一年後にも、あなたが、私を白馬に跨って迎えに来てくれる気持ちが、また揺らいでいなかったら。そして私も。一年後に、あなたを好きでいる気持ちが、揺らいでいなかったら。私は、あなたに全ての人生を捧げようと思います……。
「1年後に、この同じ場所で。……決心しようと、思います。で、……ですから…来年……」（紗音）
きっと、……迎えに来て下さいね…？
「おう。その日が来るのを待っているぜ」（戦人）
「はい。……私も、待っていますからね……。…絶対、……来て下さいね…」（紗音）
「あぁ」（戦人）
「……絶対ですよ。来年、来て下さいね」（紗音）
「あぁ。絶対、来るぜ。ここで会おうな」（戦人）
※戦人は「待つ」と言っています。つまり決断し、実行するのは紗音の方なのです。そして、その下の文章。「」がついていません。つまり紗音の心の中の声なのです。この言葉は戦人には伝えられていないのです。確かに戦人は約束の次の年に六軒島に現れず、“来年に再会する約束”は破ってしまいました。しかし“白馬に跨って迎えに来る約束”を破ったわけではなかったのです。そもそも当時の戦人の年齢は１２歳、紗音は１０歳（と戦人は思っている）です。戦人にとってこの約束は、紗音が義務教育を終える１５歳以降、つまり１９８６年以降に紗音が決断するべき約束なのです。戦人が１９８６年に六軒島にやってきたのは、紗音の決断を聞くためだったのではないでしょうか。
しかし、6年ぶりにやって来た六軒島で戦人は驚愕の事実を知ることになります。紗音は自分を捨てて譲治と付き合っていたのです。
「紗音？　……しゃのん。……あぁぁぁああぁぁ…。思い出したぜ、そんな子もいたな！　今も使用人やってんのか？　元気かよ！」（戦人）（EP1）
※この場面は実際の場面である可能性がありますが、その場合は、わざと忘れていたフリをしていると考えられます。
何しろ俺（戦人）は、深く考えずにポンポンと喋るものだから、いちいち内容は覚えてない。（EP3）
「ぶっちゃけると、俺はもう何も覚えてないんだ～。頼むから思い出させないでくれ～」（戦人）
実は6年前、ちょっぴり彼女を意識していたことを思い出す。そっか～、譲治の兄貴とじゃお似合いだよな、仕方ねぇよなぁ。…さらば、俺の６年前の淡い初恋…。……ってことは、さっき紗音ちゃんが自重してくれた、俺の６年前の恥ずかしいセリフ集は、……それ関係って可能性が高いな…。うぉおおおおぉぉおぉぉぉ、ケツが痒くなってきたぜ…。
※“■１９８６年１０月４日”でも取り上げたとおり、この場面は嘘の場面の可能性が高いです。しかし、仮に本当の場面だったとしても、発言の細かい内容までは覚えていないということなのかもしれません。
「戦人の方にそどうなんだよ。彼女とか出来たのかよー？」（朱志香）（EP3）
「さぁてどうだろうな。一緒に遊ぶ女の子は何人かいるぜ。だけどオンリーワンって関係はまだねぇな。……俺がお子様なんだろうよ。誰かと二人っきりでいるより、みんな大勢でわいわいやってる方が楽しいように思えるんだ」（戦人）
「あー、そりゃ何とも戦人らしいぜ。でも、女友達との関係はちゃんとしっかりしておけよ。女の思い込みとコミュニティは怖ぇぜ？　勝手に戦人を巡って暗闘が繰り広げられて、勝手に誰かが怒ったり傷付いたりしているかもしれないぜ？」（朱志香）
「おっかしーな。同じ忠告をついさっき、クラスの女から受けた気がするぜ。……何だってんだろうな。どうしてみんなで楽しく過ごせねぇんだ。そうまでして、つがいになりたいのかねぇ」（戦人）
※紗音の決断を待つ身である戦人には、特定の相手を作るわけにはいかなかったのでしょう。これもEP3ですので、嘘の場面の可能性はあるのですが。
戦人さんの手紙に、私（紗音）宛のものはなかったのだ…。（EP7）
「右代宮家へ帰ってくるつもりは、ないのかしらね」（楼座）
「ないみたいだよね。僕の方に、六軒島に行くことはもうないだろうって書いてあるよ」（譲治）
※“待つ身”である戦人としては、自分から紗音に連絡を取るわけにはいかなかったでしょうし“右代宮家の親族”という立場としては、もう六軒島には行かない決意だったのでしょう。
「留弗夫さんと仲直りはするけれど、右代宮家に帰ってくるつもりはないみたい。……仕方ないわ。気持ちもわかるもの」（霧江）
※これこそまさにベアトが黄金郷で語ったように“紗音と付き合うのに右代宮では都合が悪い”為だったのかもしれません。明日夢の両親が亡くなってしまった為、戦人は“右代宮”に戻らなければなりませんでしたが、そうでなければ明日夢の両親の姓を名乗り続けるつもりだったのかも…。
「今日は紗音もいるぜ。一緒に遊んだの、覚えてる？」（朱志香）（EP7）
「あー…、紗音ちゃん！　すっかり忘れてたぜ、懐かしいなぁ！　元気にしてるかい！」（戦人）
俺、あの頃、ひょっとしたら紗音ちゃんのこと、……好きだったかもなー。自意識過剰で、恋に恋してたお年頃だ。キザったらしい、浮ついた言葉で悪ふざけをしていた、甘酸っぱい記憶が蘇る。今さら気付くけど、……当時の俺と紗音ちゃんのあれってやっぱ、俺の初恋だったんだろうなー。ま、再会するまで、ケロリと忘れていた俺には、妬く資格なんてありゃしねぇな。（EP7）
※この場面はEP7のお茶会です。“ゲームマスター不在の駒によるゲーム”であると考えられるため、参考になりません。
「まさに奥手な、小学生、中学生の恋愛だな。……気があるくせに打ち明ける勇気もなく、相手の告白を待って、もじもじしたまま何の進展もなく、……ひと夏が終わる。いやいや、他の男とくっ付いちまうことだってあるぜ。俺の初恋もそんな感じだったさ、いっひっひ」（戦人）（EP5）
「俺は約束を、絶対に破らない…！！」（戦人）（EP5）
「嘘だな。……そなたの約束など、わらわはもう二度と信じぬぞ」（ベアト）
※以上の発言は“駒の戦人”によるものですが、以下のドラノールの発言があります。
「駒ではあっても、ご本人と変わりありマセン」（ドラ）（EP6）
※その人物の人間性自体は駒にも受け継がれているのです。そして以下の竜騎士０７さんの発言です。
彼（戦人）はその罪を全然覚えてないんですよね。（すべて）
（聞き手）なぜ戦人は覚えていないんですか？
なんででしょうね。戦人が戦人じゃないからですか？
（聞き手）やっぱりそうなんですか。
EP2でもその伏線は出てきているんですよ。「あなたが右代宮戦人だと証明できますか？」って。
※これは以下の発言です。
「留弗夫兄さんも含めて、私たちは6年ぶりにあなたに再会しているわ。あなたが本当に右代宮戦人かなんて誰も証明できないのよう？！」（楼座）（EP2）
※僕はこの内容を初めて読んだとき、「戦人が戦人じゃないから」を「これって無駄じゃないですか？」＝「これって無駄ですよね？」の“じゃない”と読んで、「戦人が戦人だから」＝「戦人がそういう人間だから」と読んでいました。しかし、これはおそらく「戦人が戦人ではない」という意味なのです。そう考えれば、その後の聞き手とのやり取りも不自然ではなくなります。では「戦人が戦人ではない」とはどのような意味なのでしょうか？　その答えは以下の2つの内容です。
俺（戦人）の椅子の後には、……まるで、……血の詰まった西瓜をまとめて十個くらいを、……叩き潰したような、……ぐちゃぐちゃぼきゅぼきゅの、……山があった…。そしてその血と焼き肉の山の周りに、……縞模様の着ていた服や靴が、……脱ぎ捨てたようにぐしゃぐしゃに潰れていた…。でも、……その肉と服の山の上に、……ちょこんと転がるのは、……間違いなく、あいつが頭に付けていた、ピンクの珠の…髪飾りだ。正直、彼女にはちょっと子どもっぽ過ぎてあまり似合っていないなと思っていた…。……だからよく覚えている。……縞柄は何だって、こんな安っぽい髪飾りをずっと……？（EP4）

「‥‥はい。‥‥確かに私は、島を脱出した前後のことは、今でも記憶があやふやです。しかし、それ以外のことはほとんどを思い出しました。‥‥‥たとえば、あなたが大事にしていたピンクの髪飾りは、私が遊園地のゲームコーナーで取ってあげたものだとか」（十八）(EP8)
※この2つの内容の矛盾は一体何でしょう？　しかも仕込んである EP が４と８です。僕はたまたま事情があって、EP8 の次に４をプレイしたため、これに気がつきましたが、普通はなかなか気がつかないと思います。おそらく竜騎士０７さんは意図的にここの位置にこの内容を入れています。十八、つまり現実世界に生きる戦人は髪飾りのことを覚えていました。しかし、ゲーム盤の戦人は覚えていませんでした。これはゲーム盤の戦人が“本当の戦人”ではないからです。では何なのかと言いますと“紗音との約束を忘れ、ミステリーへの興味も失った戦人”です。紗音は３年経っても六軒島に現れなかった戦人のことをこのように考えたのです「戦人は約束を忘れてしまった。もはやミステリーへの興味も失っただろう」と。そしてその設定で戦人の駒を作ったのです。そのためベアトは戦人のことを赤字で無能であると宣言することが出来ますし、ノックスもヴァンダインも知らない戦人が出来てしまったのです。
第１のゲームのラストで、この物語が、メッセージボトルによって後世に語り継がれていることが明記されている。‥‥誰かが事件を、物語に、記した。つまりこの物語は全て、‥‥メッセージボトルを砂浜に流した人物という、観測者によって、私見が含まれた世界ということになる。つまり、観測者は神ではない。ニンゲンなのだ　よって、その記述の真の意味での公正は、保証されていない。(EP5)
この世界の一番の主たる観測者は紗音なんですよね。少なくとも世界観においては。だから紗音が見て聞いて、そうだと思ったことが世界観のデフォルトになってしまう。ベアトリーチェが金蔵の書斎に入れないというのは、一方的に紗音が作った設定ですし。(最考散)
※つまりゲーム盤の戦人は紗音によって歪められた戦人なのです。
‥‥‥そして、推理小説に精通な、男性。それが意味する人物を、私（縁寿）はひとりしか思い付けない。遺品整理の時、彼（戦人）が自室に、本当にたくさんの推理小説を積み上げているのを、私は知ったから。(EP8)
※本当の戦人はミステリーを愛し続けていました。そんな戦人がノックスもヴァンダインも知らないなんてことがありえるでしょうか？　むしろ本当の戦人がゲームに参加していたら、第一の晩で全てのゲームの謎を解いたことでしょう。そしてそんなに好きなミステリーを通じて交流した紗音のことを忘れてしまうでしょうか？　この物語は戦人と紗音、二人の勘違いが生んだ悲劇なのです。

■一人二役?
※ベアトも入れると一人三役ですが、どうしてもこれを認められない人の為に、証拠の抜粋を以下に列挙します。
「‥‥‥姉さんは相変わらず不器用だね。奥様は今朝から虫の居所が悪い。黙って怖いてれば良いものを、余計なことを言うから」（嘉音）(EP2)
「‥‥嘉音くん‥」（紗音）
**　嘉音はいつの間にかそこにいた。‥‥‥もともと猫のように足音を立てず、気配をさせない彼だ。いつからいたとしても、彼女には気付けなかっただろう‥。**
※これは嘉音の人格が意識の表層に出てきたことを意味するのでしょう。
嘉音くんはまだ少し納得できないような表情を浮かべるが、それ以上はしつこくせず、姿を消してくれた。(EP2)
※これは「その場を立ち去った」という意味ではなく、嘉音の人格が意識の表層から消えたことを意味するのでしょう。
あの日以来、ベアトリーチェは時折、紗音の前に姿を現すようになっていた。依然として、紗音にとって彼女は薄気味悪い存在であることに変わりはない。…しかし、譲治との縁を取り持つ魔法を授けてくれた大恩人でもあった。だから紗音は極力、驚いたり怖がったりしないように努めようとしているのだった。(EP2)
※これは紗音の人格がベアトの人格を認識したということなのでしょう。
紗音がベアトリーチェについて知っていることはそう多くない。まず、彼女は幽霊のような存在で神出鬼没。そして誰にでも知覚できるわけではないらしい。何でも、人毎に波長のようなものがあり、魔女を知覚できるか否かについては激しい個人差があるのだという。こうして言葉を交わせるほどに交流できるのは紗音と嘉音だけ。…その気配を感じられる人間も少しはいるようだが、多くの人間はそれすらも感じ取ることができなかった。(EP2)
※本人ですから。
‥‥‥魔女は知っている。仮に結ばれたとて、紗音も譲治も、嘉音も朱志香も、必ず破綻し、恋の地獄にて永遠の砂漠を彷徨いながら、永遠の渇きに苦しむことになる‥！(EP2)
※本人ですから。
魔女はにやりと笑うと、源次を従えてさっさと歩き出す。‥‥その足取りは、屋敷の中を充分に知った家人のようだった。源次はその後を仕えるように追う。ちょうどその時、客間から霧江が出てきた。…化粧直しにでも出たのだろう。そして、源次を従えるようにして歩く魔女の姿を見て、表情を崩さぬ程度に驚いた。(EP2)
「‥‥‥‥初めまして」（霧江）
「留弗夫の後妻だったか」（ベアト）
※紗音として屋敷で過ごしていますし、霧江とも面識があります。
「真里亞は、以前にベアトリーチェと会ったことがあるの…？」（楼座）(EP2)
「うー。毎年会ってる」（真里亞）
「毎年…？　この、六軒島のお屋敷で？」（楼座）
「うー」（真里亞）
「いつから会ってるの？　何年前から！」（楼座）
「…うー。‥‥わかんない」（真里亞）
「わからない?!　どうして！　去年？　一昨年?!」（楼座）
「‥‥もっと前から。‥‥‥うー」（真里亞）
…この島には右代宮家の屋敷があるだけだ。だから、この島に自分の知る以外の人間がいるわけないのだ。なのに真里亞は、何と毎年、親族会議の度にあの怪しげな女と出会っていたという‥‥。
「うー！　ベアトリーチェにね、お手本書いてもらうの！　ほらほら、見て！　見て！」（真里亞）
真里亞は嬉々としながら手提げを漁る。‥‥‥そして、一冊の自由帳を取り出し、そのページを開き始めた。真里亞が開いたそれらのページには、これまた不気味な魔法陣が書かれていた。‥‥‥しかもそれは一目見て、真里亞が書いたものではないとわかった。筆圧や線の太さ、図形の精緻さ。‥‥‥これだけから書いた人間の素性を推し量ることはできないが、確実に真里亞より年齢の高い人物が書いたことは理解できる。
「うー。真里亞はベアトリーチェの弟子だから、お師匠の言うことはちゃんと聞くの」（真里亞）
※嘘をつかない真里亞が毎年会っていたと言い、そして絵まで残しています。ベアトは六軒島に実在する人物の誰かなのです。
「‥‥郷田さんはご自身の仕事に専念され、親族の皆さんのお相手を、どうかよろしくお願いします‥」（源次）(EP2)
「そのようなお客様相手に、源次さんならともかく、こんな子どもを行かせていいのですか?!　もし何かの粗相があったら失礼に当たります」（郷田）
紗音が個別の中に控えているにもかかわらず、郷田はそれをずけずけと言う。源次が、ベアトリーチェの部屋へ食事を運ぶよう指名したのは紗音だった。それを聞き怖く紗音の後から嘉音の声が聞こえた。…嘉音は死角に当たる、入り口の廊下側壁に寄りかかって話を聞いていたのだ。
※紗音と嘉音の関係を知らない郷田の前には二人同時に現れることは出来ないため、郷田の死角から話をしているのです。
「これでトドメだぜ。クソジジイ、お前に御冒険求だ。“全人物の中で、異なる複数の名前を持つ人物は存在しない”！！」（戦人）(EP4)
「で、‥出来、ぬ‥‥‥‥！！　ぐ、ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」（金蔵）
「源次さま。紗音が（親族会議の日に）シフトに入る必要はないのでは。僕たちだけで充分やれます」（嘉音）(EP5)
※多くの来客を迎える親族会議の日に、何故、人手を減らしても大丈夫なのでしょう？　元から一人しかいないからです。
「本来、人は人であり、人格そのものを指して人とは呼びません。しかし、人格を人と認めるニンゲンたちにとって、それはさながら他人のようなものでしょう‥」（幽子）(EP6)

私たちにとって人格が人そのものならば。たとえ同じ肉体を共有していても、異なる人格を指して別人であると言い切れるだろう。人は同じ人間であっても、別人になる得る。いや、生い立ちと無限の可能性によって、無数の数の別人になる得るのだ。
※人格を人として認識してよいという話です。
使用人たちは皆、一年で最大の行事の準備のため、早朝から慌しい…。紗音と嘉音は、ゲストハウスの準備に追われていた。(EP6)
「お嬢様に、一緒に親族の方々をお迎えに行こうって誘われたのに、どうして断ったの？」(紗音) (EP6)
「……仕事があるし…」(嘉音)
「嘘。……仕事なんか、何もないくせに」(紗音)
本当は、新島の港に親族たちを迎えに行くのは、朱志香と嘉音のはずだった。しかし、嘉音が、仕事があるからと突然言い出したので、熊沢と代わったのだ。嘉音には仕事など、なかった。それを紗音は知っていた…。
※多くの来客を迎える親族会議の日に、何故、仕事がないのでしょう。元からいないからです。
「嘉音くんのことなら、私は何でもわかる」(紗音) (EP6)
「本当にわかってるなら、どうして聞くんだッ！　だから、……僕なりに応援してるんじゃないか！！　そうでなかったら、……僕だってッ！！」(嘉音)
「もし。……嘉音くんが心の底からお嬢様を愛していて、……それが、私の旦那さんへの想いと同じか、それ以上だと言えるなら。……私は、あなたと決着をつけなきゃならない。それが、お互いのため。……嘉音君の思いを、私を理由に、諦めないで」(紗音)
「僕のわがままが、姉さんの幸せを傷つけるかもしれないのに……？」(嘉音)
「私も自覚してるよ。……私の幸せが、……嘉音くんを傷つけることを。私の恋が実っても。君の恋が実っても。……私たちは互いを祝福しよう」(紗音)
「うん。……約束する。そして僕が勝ったら。……お嬢様を愛し、……姉さんも大切にする」(嘉音)
「ありがとう。でも、私が勝ったら。……君と島を忘れて、ここを永遠に出て行く」(紗音)
※何故、紗音は嘉音のことを何でもわかるのでしょう。どうして決着をつけなければならないのでしょう。紗音は嘉音を忘れることが出来るのに、嘉音は紗音を忘れることはできません。これは、嘉音は紗音が生み出した人格であり、人間としての戸籍を持っているのは紗音だけのためです。
しかも、どうやら、一個のブローチは、一度の奇跡しか与えられないかのような描写が見て取れる。だから紗音は、そのたった一つの奇跡を自分が消費してしまうことで、嘉音の恋路が自動的に永遠に閉ざされてしまうことに、躊躇していたかのように思えるのだ…。(EP6)
※これはブローチが一度しか使えないのではなく、使う側が一人しかいないためです。
「ここに親しいは、奇跡なくして恋を成就できぬ呪われし者たち。その奇跡を与える、黄金蝶のブローチの力は、泣こうが喚こうが今宵限り、最後のチャンス！　それは1組の番にしか与えられぬ！」(姉ベアト) (EP6)
※紗音と嘉音と雛ベアトは同一人物だからです。
「朱志香が惨じめというなら、破綻の最後だけ語ろう。……嘉音は使用人を辞め、この島を去る。永遠にな」(姉ベアト) (EP6)
「君は島を出て思い人を探す旅に出るだろうね。しかしそれは決して報われない！」(ゼパル)
「そなたが魔法の奇跡を紗音と嘉治に譲るなら。……二人は結ばれ、島を出る。……そして嘉音もまた、島を出る。それは避け得ぬ、運命なのだ」(姉ベアト)
「で、……では、魔法の奇跡を得られたならば…？」(雛ベアト)
「無論、嘉音は島に留まり、いつまでも朱志香の傍にいる」(姉ベアト)
「……ただ。…その場合は、私と嘉治さんもまた、結ばれません」(紗音)
「……僕たちは、自らの幸せと未来を賭けて、……戦わねばならぬ、運命なんです」(嘉音)
「……その魔法の奇跡は、そなた(雛ベアト)であっても、享受できるものであるぞ。黄金蝶のブローチの奇跡は、……そなたの願い、……戦人への好意を認められたいという願いさえも、叶えることは容易い。……そして、その奇跡なくして、むすばれることも、また、……ない」(姉ベアト)
※これも、紗音と嘉音と雛ベアトは同一人物だからです。
マリアが吠えると同時に、密閉全体が、真っ赤な魔法陣壁の立方体で隔離される。嘉音を断じて逃がさない結界を、概念化した密室だ。(EP6)
「…失礼します、真里亞さま。ゼパルさま、フルフルさまとの契約により、お命、頂戴致します…！」(紗音)
「こんなところで負けてたら、諦めがつかないもの」(紗音)
「……そうさ。こんなとこで負けてたら、諦められない」(嘉音)
※何故、結界の中に紗音は現れることが出来たのでしょう。始めからいたからです。何故、嘉音の負けがそのまま紗音の負けになってしまうのでしょう。体が一つしかないからです。
「愛し合う二人以外に、本来は何もいらないんだ」(ゼパル) (EP6)
「だから、それが“二人”でない時、……私たちは決闘でその数を“二人”にしなくてはならない」(フルフル)
「世界を生み出す最小の人数は二人」(ゼパル)
「二人が揃って初めて、世界は生まれ、恋は成就できる」(フルフル)
「だからこの決闘は、必要なんだ」(ゼパル)
「彼らがその人数を満たすために」(フルフル)
※一つの肉体に複数の人格が宿っているため、決闘しなければ“二人”にはなれないのです。
「これは破綻のための決闘じゃない。……本当の恋を成就させるための、決闘」(フルフル) (EP6)
「……私には、……あなたたちの言っている意味が、……わからない……！」(雛ベアト)
「いいえ、わかりなさい。これは、……本当に人を愛することが出来るニンゲンが、誕生する瞬間」(フルフル)
※決闘をしなければ、人を愛する資格すら持てないのです。
「……嘉音も呼んで、二人に話が聞きたい」(ウィル) (EP7)
「申し訳ございません。受付を空けることは許されておりませんので、私には呼びに行くことが出来ません」(紗音)
「なら、誰かわりを呼んできて受付を代わらせる。あんたと嘉音と俺。……理御を知らない三人で、一緒に、話がしたい」(ウィル)
「……受付は1人でいいと、仰せつかっております」(紗音)
「2人いちゃいけねぇとは言われてねえはずだ」(ウィル)
「本日は人手が足りませんので、受付に2人も不要と仰せです」(紗音)
「誰がそう命じた。金蔵か。縁寿か。それとも理御か。確認する」(ウィル)
「私の、命令権者です。私は命令に、逆らえません」(紗音)
「その命令権者は誰だ。そいつに交渉する」(ウィル)
「交渉など、デキマセン。私たちの、命令権者デス」(紗音)
「嘉音を呼べ。お前たちに確かめたいことがある」(ウィル)
「オ呼ビデキマセン。ソレデモナ　オ、ソレラニ希望デスカ……？」(紗音)
※探偵であるウィルの前に紗音と嘉音は同時には現れることが出来ないのです。
「戦人以外の者と、新しい宇宙を生み出すしかない。その誰かを、妻が与えよう。そなたの心を傷を埋め、癒してくれる存在だ。……そやつは、そなたを裏切らぬ。……そう、……そなたの新しい姉弟だ。……そなたに弟を与えよう。福音の家で仲の良かった、実の弟のように可愛がってきた少年。……そういう存在を、そなたに与えよう」

(白ベアト)(EP7)
弟の設定は、福音の家で仲の良かった、年下の男の子。名前は、……福音の家のルールに従い、音の一字を与えよう。彼は、……寡黙で無口な男の子。右代宮家には、新しい使用人としてやって来た。そして、紗音とすぐに打ち解ける。紗音を姉と慕う義理堅い彼は、いつも紗音の味方になってくれる……。源次と同じように、金蔵に直接仕えることが許されている、特別な使用人ということにしよう。
※嘉音を生み出す場面が描写されています。
「……私(紗音)が譲治さまと結ばれる世界と。あなた(嘉音)がお嬢様と結ばれる世界が、同時に存在できるのが、猫箱の中じゃない」(紗音)(EP8)
「……どんな矛盾した夢も、全てが同時に存在できる世界」(嘉音)
※可故、これが矛盾なのでしょう？
「……紗音が殺されると同時に、嘉音は永遠に行方不明となるわ。……以後、嘉音は殺されたものとして扱う。嘉音のマスターキーも破壊されたものとして扱うわ」(ベルン)(EP8)
「まあ、無粋だから割愛するけど、紗音が死んだんだから、そういうことになるわよねぇ」(ラムダ)
※可故、無粋なのでしょう。何故、“**そういうことになる**”のでしょう。
この際、紗音と嘉音を一緒に連れてはいけないので、うまくやらなければならない。(我告)
※可故、一緒にお連れて行けないのでしょう。
「……ありがとうございます、ベアトリーチェさま。……じゃあね、姉さん。また、次のゲーム盤で」(嘉音)(我告)
「うん。また次のゲーム盤で」(紗音)
ベアトリーチェがケーンを振るうと、嘉音の姿は煙管の煙に溶けて消え去る。
※可故、人が消えてしまうのでしょう。
うーん。答えになってしまうのであまり言いたくないのだけど、「ベアトリーチェと戦人が結ばれてしまう」というのは「紗音と譲治、朱志香と嘉音が結ばれない」ということを確定させることでもあるんですよね。三組の恋がそれぞれ成就されるためには、実は誰も成就してはいけないんですよね。(インタ)
※可故、……。

■フェザリーヌ・アウグストゥス・アウローラ
※2つのキャラクターが融合されていると考えられます。1つは『ひぐらしのなく頃に』に登場する“羽入”のスピンオフです。頭部の馬蹄状記憶装置は羽入の角の代わりであると考えられますし(幾子が本体で馬蹄状記憶装置は羽入の角なのかも)“尊敬なる観劇と戯曲と傍観の魔女”の称号のうち“傍観”は物語に主体的に関わろうとせず“傍観者”であり続けた羽入の立場を表しています。羽入を“羽=feather”と“入=in”と読み、繋ぎると“フェザリーヌ”になります。また、以下の内容は梨花と羽入の関係に当てはまります。
「我が主も、……ロジックエラーの地獄に落ちたことがあるというのですか…？」(エリカ)(EP6)
「あるわ。ロジックエラーを起こしたのはあの子ではないけれど」(ラムダ)
「……主がゲームマスターではない…？」(エリカ)
「そうよ。……当時、あの子はまだ、自覚さえしていない小さな駒だったわ。ロジックエラーを起こしたのは、ベルンの主であるゲームマスターだった」(ラムダ)
「……我が主も、……魔女の駒だったのですか」(エリカ)
「ええ。……あの子の主、……これがまた酷いやツでねぇ。……自分で作ったゲームのはずなのに、途中でゴールが分からなくなっちゃって。……スタートとゴールがつながった、ドーナツみたいな、壊れたすごろくを作ってしまったのよ」(ラムダ)
「ゴールをなくしたとは……？」(エリカ)
「ロジックエラーってことね。……どうやれば自分の望むゴールに辿り着けるか、そいつは自分のすごろくを、ロジックを描けなかった。だからいつまでも、すごろくは壊れたままで、ゴールがなかった。……ならば自分一人で、静かにそれを悩んで考え出せばいいのに。……そいつはあろうことか、その考えることさえも、駒であるベルンに任せっきりにしたのよ。……“無限の塔の定理”って、知ってる？」(ラムダ)
「……彼が、無限の時間の中でデタラメにタイプライターを打ち続ければ。……いつか偶然にも文字列が、ハムレットとまったく同じ文章になるかもしれないという理論、いえ、暴論ですわ」(エリカ)
「……ひどい地獄よね。……ベルンは、無限の時間の間、意味もわからずデタラメにタイプライターを叩かせられて。……ゲームマスターは、自分さえ思いつかないゴールを、彼女に作らせようとしたのよ」(ラムダ)
※もう1つは八城幾子です。姿が八城幾子の姿ですし、以下のように幾子本人も自分がフェザリーヌであると主張しています。
「……物語の中に登場した、フェザリーヌって魔女。……あれは、あんたよね？」(縁寿)(EP6)
「語るのもおこがましいですが、そのつもりです」(幾子)
※ただ、何故2人が融合されているのかはわかりません。

■プレイヤーの戦人とは一体何者なの？
※“■戦人は本当に約束を忘れたの？”で書いたり、取り上げたりした内容と結構、被るのですが、大事なことなので2回書きます。
「ノックス第8条、提示されない手掛かりでの解決を禁ズ！　これまでのあなたは探偵デシタ！　そのあなたが今回は探偵でなく、私見を交える観測者であったことは示されていたのデスカ！！　それがない限り、あなたには主張を偽る権利はありマセンッ！！」(ドラ)(EP5)
※EP1～4の戦人は探偵だったわけです。ということは単なる駒ではありません。しかし、戦人本人であるかというと、それもありえません。
遺品整理の時、彼(戦人)が自室に、本当にたくさんの推理小説を積み上げているのを、私(縁寿)は知ったから。(EP8)
※戦人はミステリーマニアだったのです。
……ノックス十戒ってのは、どんなのだったっけ……？　ドラノールが俺(戦人)をぶちのめしながら、そのほとんどを説明してくれたはずだ。もちろん俺だって、うろ覚えはしている。第1条は、……何だったっけ……。(EP5)
※ところが、プレイヤーの戦人はノックスさえまともに知らないのです。さらに決定的なのが以下の内容です。
俺の椅子の後には、……まるで、……血の詰まった西瓜をまとめて十個くらいを、……叩き潰したような、……ぐちゃぐちゃぼきゅぼきゅの、……山があった…。そしてその血と挽き肉の山の周りに、……縁寿の着ていた服や靴が、……脱ぎ捨てたようにぐしゃぐしゃに潰れていた…。でも、……その肉と服の山の上に、……ちょこんと転がるのは、……間違いなく、あいつが頭に付けていた、ピンクの珠の…髪飾りだ。正直、彼女にはちょっと子どもっぽ過ぎてあまり似合っていないなと思っていた…。……だからよく覚えている。……縁寿はお付だって、こんな安っぽい髪飾りをずっと……？(EP4)
「……はい。……確かに私は、島を脱出した前後のことは、今でも記憶があやふやです。しかし、それ以外のことはほとんどを思い出しました。……たとえば、あなたが大事にしていたピンクの髪飾りは、私が遊園地のゲームコーナーで取ってあげたものだとか」(十八)(EP8)
※十八が覚えていたことを、プレイヤーの戦人は覚えていませんでした。つまり、2人は別人なのです。これは竜騎士07さんも以下のように言っています。
彼(戦人)はその罪を全然覚えてないんですよね。(すべて)
(聞き手)なぜ戦人は覚えていないんですか？
なんででしょうね。戦人が戦人じゃないからですか？
(聞き手)やっぱりそうなんですか。

EP2でもその伏線は出てきているんですよ。「あなたが右代宮戦人だと証明できますか？」って。
※では、プレイヤーの戦人とは一体何者なのでしょう？　答えは端的に言ってしまうと“EP6に出てきた雛ベアトの戦人版”です。雛ベアトとは以下のような存在です。
「……あなたは、何で右代宮戦人を、お父様と呼ぶの？」（縁寿）（EP6）
「わ、私という駒を、生み出して下さったからです…」（雛ベアト）
「……では、どうして右代宮戦人にそこまで尽くすの？　駒は、生み出した造物主に絶対服従しなくてはならないルールでもあるの？」（縁寿）
「そんなルールはない。……駒は道具。…あるいはナイフだ。……ゲームマスターが上手に扱えば便利な道具になる。しかし、扱いを間違えれば自らを傷つけもする。……道具になろうと凶器になろうと、そこに道具の意志はない。ただ結果があるだけだ」（フェザ）
「じゃあ、どうしてあんたはお兄ちゃんにあれも尽くすの？　まるでそれは、……あなたという駒の目的かのようだわ」（縁寿）
「は、……はい。…それが、私が生み出された目的だからです」（雛ベアト）
「あんたを生み出したお兄ちゃん自身が、その目的を与えたの？」（縁寿）
「それは違う。……戦人はゲームマスターとして、“そういう役目を持った駒”を、盤上に置いただけに過ぎない。……そして、彼女という駒を生み出したのは、このゲームを生み出した最初のゲームマスターである、ベアトリーチェ自身だ…」（フェザ）
※“千年という名の6年”を経る前の、戦人への恋心だけを持つ駒なのです。プレイヤーの戦人もこれとほぼ同じなのですが、雛ベアトとは少し違う部分があります。紗音にとっては“約束を忘れ、6年間も紗音を放置した戦人”なのです。ミステリーにも興味を失い、かつての知識は完全に失われています。「自分との約束を忘れたのだから、ミステリーへの興味も失ってしまったに違いない」と紗音は考えたのでしょう。ゲームマスターにそのように設定されてしまった駒なのです。そのため、ベアトは赤字で以下のように保証できるわけです。
「ついでに言おう。《赤：そなた（戦人）は無能だ》！　くっくくくっくくくくく、《赤：ひーっひひっひひひひひひひひひひひひ》！！」（ベアト）（EP2）
※ベアトはこんな戦人に一体何をさせたかったのでしょう。自分との約束を忘れ、ミステリーの知識も失って無能に成り下がった戦人が、自分が何年もかけて生み出した渾身のミステリーを解くという奇跡を成し遂げたなら、自分を愛してくれた戦人が帰ってくるという奇跡もまた、起こりうる。ベアトはそのように考え、このゲームを始めたのではないでしょうか？　そして戦人はEP5に至ってようやく、衝撃を果たしたのです。
「前回のゲームで。お前は自分の親の死に顔が見れないと喚いたな？　だから残したぞ。しっかり残したッ！！　よく拝んでおけ、間違いなく父親たちが殺されたことを！！」（ベアト）（EP2）
「そ‥‥ぅかよ、そいつぁサービス満点だぜ、気に入った！！　俺はてめぇの息の根を止めたら顔面解体してやろうと誓ってたが、そいつは取り消してやるぜ、てめぇのハラワタを引きずり出してやるッ！！！」（戦人）
※このやり取りで“プレイヤーの戦人”はEP1の戦人が2周目以降に入った存在であることが分かります。また、以下の発言もあります
「ふん。‥‥成敗ひきのあんた（戦人）に同情されるとは、私も焼きが回ったもんね」（ベルン）（EP8）
※つまり“雛ベアトの戦人版”として生み出された“プレイヤーの戦人”は真相に至ったことにより全ての記憶を取り戻し“ゲームマスターに成った”わけです。

■ベアトリーチェの容姿は？
※ベアトは六軒島で登場人物に目撃されています。はたしてどのような容姿をしているのでしょうか？
そこは、ベアトリーチェの肖像画の前。そして、真里亞が死ぬつくのは、……肖像画の、…人物。（EP1）
魔女はにやりと笑うと、源次を置いてさっさと歩き出す。……その足取りは、屋敷の中を充分に知った家人のようだった。源次はその後を仕えるように追う。ちょうどその時、客間から霧江が出てきた。…化粧直しにでも出たのだろう。そして、源次を従えるようにして歩く魔女の姿を見て、表情を崩さぬ程度に驚いた。（EP2）
「……初めまして」（霧江）
「留弗夫の後妻だったか」（ベアト）
「左様でございます。留弗夫さまの今の奥方様であられます、霧江さまでございます」（源次）
そのやり取りで、霧江は初対面の彼女が、右代宮家においてかなり格の高い賓客であることを理解する。……そして、それほどの賓客であるという事実と、……彼女が背負う玄関ホールの肖像画の面影が重なり、……霧江の目は見る見るうちに見開かれていった…。
「……私も、ちょっと玄関ホールに出た時に挨拶をしただけです。二十歳ちょっとくらいに見えたわ。私は名乗ったんだけど、彼女は名乗らなかった。…源次さんに案内されて、二階へ上って行くのを見たの」（霧江）（EP2）
謎の女は霧江に言った。名乗らず、うすうす想像がついているくせにとぼけ笑った。……そこから連想する人物。…そして、彼女と瓜二つの、肖像画の魔女…。
服は違うが、……その顔は、あの肖像画の魔女にそっくり……。2階のバルコニーから、……傘を差しながら身を乗り出し上機嫌に手を振っているのは、……紛れもなく、……肖像画の魔女、…ベアトリーチェ……！！（EP4）
※遠目に見る分には、肖像画と見分けがつかないほどにそっくりなようです。
「はい。（ヤスには）……若き日の、九羽鳥庵のお嬢様の面影が、よく残っております」（熊沢）（EP7）
※ベアトの扮装をしていなくても、やはり元から似ているようです。もっともこの台詞は熊沢のおべっかが入っている可能性がありますが。
彼女が肖像画の魔女のドレスを着て酔狂に笑うのもまた。……碑文の謎を解いた者にのみ許される愉悦なのかもしれない。（後告）
「こ、……こら驚いたわ……。まさに肖像画の魔女に瓜二つやで……。そのドレス、特注したんかいな……」（秀吉）
※しかし、流石に至近距離だと正体が判明するようです。この秀吉の台詞は明らかに面識のある相手へのものです。ちなみにEP7のお茶会では以下の通りです。
「……この姉ちゃん、大した肝っ玉やで」（秀吉）（EP7）
※秀吉はベアトが紗音であることに気がついていません。これはこの秀吉が駒である為です。

■ベアトリーチェは駒のベアトとゲームマスターのベアト、二人いる？
※EP5のTIPSを見ると、ベアトリーチェは二人いることがわかります。
（ベアトリーチェのTIPS）彼女自身は駒に過ぎず、上層界の当人はゲームマスターを思いているため、第5のゲームの真相を知り得る立場にない。
（ベアトリーチェのTIPSの[Resurrect]）この世界を生み出した、最上層のベアトリーチェ。第4のゲームにて全ての戦人に託し、ゲームマスターの座を降りた。
※EP1～4でプレイヤーの戦人と対戦しているベアトは、駒のベアトの方ではないでしょうか？　彼女の目的は“戦人を屈服させて自らを魔女と認めさせ、黄金郷を開くこと”です。しかし、ゲームマスターであるベアトの目的は“戦人に自分との約束を思い出してもらうこと”です。ですから、駒ベアトが勝利しそうになると干渉され、結局勝てないのではないでしょうか？
「‥妾は生まれた時からその屋敷におった。そして屋敷の中だけで生きた。もちろん、庭には出られたが、敷地はとても高い柵で囲まれており、それを出ることは出来ず、また出てはならないと厳しく言われておった。……妾はな、屋敷と庭は自由に歩けたが、その外へは、自らの意思ではたった一歩、出ることさえ叶わなかったのだ」（ベアト）（EP3）
「……そりゃどういう意味だよ。…物心ついた時から、ずっと籠の鳥だったって言いたいのか」（戦人）
「……そういうモノだと思っていた。何しろ、気付いた時からそういう生活だったからな。疑問にも思わなかった」（ベアト）
「お前、……一体、何者なんだ」（戦人）
「それよ。それこそ、妾もまた望んだものだった」（ベアト）
※ベアトは九羽鳥庵のベアトのことを自分のこととして話しています。本来は別人のはずですが、駒ベアトはゲームマスターのベアトにそのように設定された駒なので、それが事実だと信じているのです。

「‥‥今、俺は驚いたと思ったことがある。‥‥‥どうして俺がお前と、こんなおかしなゲームを延々と続けてるのかだ。‥‥‥これは俺を屈服させるためのゲームじゃない。‥‥‥お前が、本当の意味で、無限の魔女に認められるための試験ではないのか、ってな」（戦人）（EP3）
「‥‥し、‥‥‥知らぬわ。‥妾がそなたにゲームを申し込んでいるのはその、‥‥単なる暇潰しだ‥。誰の思惑でもないわ」（ベアト）
※この“誰の思惑でもない”という発言は不自然ではないでしょうか？　何故ベアトが戦人にゲームを申し込むのに、ベアト以外の思惑が絡むのでしょう？
「前回。黄金郷の扉がようやく開いたが、お前はサインを拒んだ。‥‥転倒ではないだろうがな。お前がサインを拒んだ為、この世界を再び闇に閉ざしてしまったのだ」（金蔵）（EP3）
※EP2終盤の戦人は、プレイヤーが駒から離れていると考えられますが、それならばゲームマスターが自由に出来るはずで、サインを拒ませる理由がありません。
「ほらほら早く」（ベアト）（EP3）
「そこに、サインを」（ワルギ）
「‥‥‥‥‥え‥？」（戦人）
「早く」（ベアト）
「サインを」（ワルギ）
‥‥‥何だか二人が、妙に気持ち悪い笑顔で、俺にサインを強請って来て‥。
※こんな疑われるようなことをしなければ、戦人は素直にサインをしたはずです。これはこのベアトよりもさらに上の存在からの干渉なのではないでしょうか？
「そうそう。次期当主のテストであったな。そなたと喋るのが楽しくて、ついついさっきから脱線してしまうわ。‥‥‥それでは次期当主のテストを始める。そなたに、右代宮家次期当主としての資格があるかどうかを問う。心して答えるが良い」（ベアト）（EP4）
さっきまで、酔っ払いのようにふざけていた魔女が、その威厳を取り戻す。‥‥‥その姿はまさに、あの貫禄ある肖像画から抜け出してきたかのようだった‥。
「‥‥‥我こそは右代宮家顧問錬金術師、黄金の魔女にして無限の魔女、ベアトリーチェ。‥‥右代宮家の家督と我が黄金の全てを継承する資格があるかどうか。それを妾が問う。‥‥‥そなたの名を名乗るが良い」（ベアト）
「‥‥‥‥‥右代宮、戦人だ」（戦人）
先ほどまでの様子からは想像もつかないその貫禄に、俺は何の迷いもなく、返事をしてしまう。‥‥それくらいに、‥‥その姿はなるほど、‥‥本当の意味で、この島の女王と名乗るに相応しかった。
※この急激なベアトの変化は、駒にゲームマスターのベアトが宿ったためではないでしょうか？
「つまり、この島の本来の人数は１８人じゃなく１７人だったんだ。そこに未知の人物Xが隠れ潜んでいて、犯行を行なったんだ。‥‥‥どうだベアトッ?!　出て来い、前回の最後の、最大の謎は今、解けたぞ！！」（戦人）（EP4）
※戦人が言っているのはEP3の“南條殺し”のことなのですが、以下のようにこの謎を出題したのはベアトではなく、エヴァです。
「南條を殺した犯人は、動物などの類ではないわよ。それはすでに赤で宣言済みよ？　人間以外は一切、考慮から外しなさい。ロボットなんかも駄目よ。《赤：人間以外の一切の要素は、このゲーム盤に関与しない》！　ゆえにこうも言えるわね。《赤：南條を殺したのは、確かに人間である》！《赤：地に足の付いた人間が、凶器をかざし、それにて殺した！　眼前にて！》　ただし、その人間は魔法が使えたかもしれないわ。‥‥それは即ち、魔女だったということ。‥‥それがつまり、この私。黄金の魔女、ベアトリーチェ！！」（エヴァ）（EP3）
※ところがベアトは以下のように自分が壮麗者であるかのように振舞っていますし、戦人もベアトが壮麗者であると認識しています。それならばEP3の終盤でエヴァと戦ったベアトは一体何だったのでしょう？　駒のベアトは“碑文の謎が解かれたら儀式(殺人)をやめなくてはならない”のですが、それはあくまで“駒のベアトの約束”であり、ゲームマスターのベアトには関係がないのです。ですから“EP3において議台と南條を殺したのはゲームマスターのベアト”と考えることが出来ます。
「くっくっく、くっはははははは‥！　ブラヴォー、ブラヴォー。そなた如き無能にしては、ようやくの感は否めぬが、兎にも角にも、ひとつの解答を出してみせた。思考停止ならコンクリートの塊でも出来る！　つまり、そなたはようやく今、ようやく知性ある存在に進化できたわけだ。‥‥ただ涙を流し、歯噛みしながら妾の靴を舐めるだけの存在から、ようやく一歩を踏み出したと言えようぞ。くっくっくっく！」（ベアト）（EP4）
「さらに続けて第３のゲームだ。六軒島の凍結密室、楼座叔母さんと真里亞の殺人、親父たちのホールでの死亡、蔵臼伯父さんと夏妃伯母さんの殺人、その全ては《青：絵羽伯母さんを犯人に仮定することで説明可能だ。》これは当時すでに論破済み。それに対しお前がエヴァを通して出題してきた最後の難題、《青：南條先生殺しも１８人目の未知の人物Xで説明可能。》これで第３のゲームまで全て打ち破ったぞ！！！　反論はあるかッ！」（戦人）（EP4）
「この黄金郷には、ベアトが望まない限り、誰も辿り着けないのか」（戦人）（EP5）
「ええ。‥‥‥ドラノールをここへ呼んだのは、この子なのですよ」（ワルギ）
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥」（ベアト）
「‥‥‥ベアトが、‥‥‥あいつをここへ呼び、俺に会わせたのか‥」（戦人）
‥‥‥しかし俺は、ベアトが望まない人間がここに辿り着いたことがあるのを知っている。縁寿だ。‥前回のゲームで、縁寿は招かれざる客人でありながら、‥‥‥ここへ一人、辿り着いて見せた。あれも、‥‥‥ベアトが望んだこと、‥‥‥なのか‥‥‥？
「‥‥縁寿‥‥？　‥‥‥ベアト、縁寿だ‥‥‥！！」（真里亞）（EP4）
「‥‥‥‥‥‥どうやってここ(黄金郷)へ‥？　‥‥‥引き取られよ。妾はもはや、ここへは誰も招かぬのだ」（ベアト）
※つまり“駒のベアト”は真里亞と二人で黄金郷に閉じこもることを選びましたが“ゲームマスターのベアト”は縁寿を黄金郷に招き入れたのです。EP4でゲームマスターのベアトは盤外大きく干渉し、その結果、戦人が約束を思い出しそうもないため、失望してゲームを降りました。EP5では“駒のベアト”だけがゲーム盤に残り、夏妃の為に頑張っているのだと考えられます。そしてEP5のラストで“ゲームマスターのベアト”が消えたため、その駒である“駒のベアト”も消えてしまったのでしょう。ですからEP6で戦人は新たに“雛ベアト”を生み出す必要があったのです。
「《赤：初めまして、こんにちは！　探偵ッ、古戸エリカと申します！！　招かれざる客人ですが、どうか歓迎を！！》《赤：我こそは来訪者ッ、六軒島の１８人目の人間ッ！！！》」（エリカ）（EP7）
「‥‥‥‥申し訳ないが、」（戦人）
「《赤：そなたを迎えても、》」（ベアト）
「「《赤：１７人だ。》」」（戦人&ベアト）
※“紗音”“嘉音”“ベアトリーチェ”3つの人格があると考えれば人数が合いませんが、そもそも“ベアトリーチェの人格”などないとしたらどうでしょうか？　“ゲームマスターのベアト”が宿った駒をプレイヤー達が“ベアトリーチェの人格”だと誤解させられているのではないでしょうか。

■ベアトリーチェは何故、蜘蛛の巣が苦手なの？
「(ベアトに)他にも蜘蛛の巣が鬱陶しいに効くとも聞きました」（紗音）（EP6）
「あれ？　それは悪食島の悪霊が苦手な方じゃなかったっけ？　熊沢さんが詳しいよな、そういうの」（朱志香）
「ある夜、紫の雷が鎮守の社を打ち砕いたのです。島々の者たちは、凶兆だと囁き合いました。おお、今思えば、あれこそがベアトリーチェさま復活の徴だったに違いありません」（熊沢）（EP6）
「その鎮守の社は、悪食島の悪霊を封じるために、旅の修験者が建立した。そうでしたね？」（エリカ）
「ええ、そうでございます。強い神通力をお持ちだったということで、その力を鎮に込め」（熊沢）
「霊鎮として社に奉納し、悪霊を封印した。‥‥‥少し違和感を覚えます。‥‥‥悪食島の悪霊を封印する社が、どうしてベアトリーチェも封印するんです？」（エリカ）
「は、‥‥‥はぁ‥。それはその、霊鎮の神通力が‥」（熊沢）

「……なるほど。東洋の悪霊も西洋の魔女もOKの、便利な霊媒だったから、というわけですか。……わかりました。すっきりはしませんが、そこは折れることにしましょう。しかし、どうしてベアトリーチェが蜘蛛の巣を嫌うのかわかりません」（エリカ）
伝説では、悪食島の悪霊は蜘蛛の巣を嫌ったため、魔除けとして近隣の島々でも崇められたらしい。
「しかし、それ、悪食島伝説の話です。そもそもベアトリーチェの魔女伝説の発祥は、この島に引っ越してきた右代宮金蔵が、ミステリアスな黄金伝説と、それを授けた魔女という名の愛人を吹聴してから始まったものです。つまり、悪食島の悪霊と、黄金の魔女ベアトリーチェは本来、まったく異なる存在のはずなんです。なのに、設定が同じになっています。金蔵さんの書斎のドアノブは、サソリの魔去呪が彫かれていて、それは西洋魔術では魔除けを意味する。だから西洋魔女のベアトリーチェは、ドアノブに触れられない。……これは理解できるんです。でも、蜘蛛の巣に限っては、ベアトリーチェが嫌う理由がありません。私の知る限りでも、西洋魔女の苦手なものに、蜘蛛の巣があったという記録はありません。むしろ蜘蛛は、魔女の仲間や眷属では？　思うに。……悪食島伝説の悪霊と、魔女伝説のベアトリーチェ。この２つの異なる伝説が、少し混交しているように思います。いえ、混交どころか融合かもしれません」（エリカ）
「ほっほっほ、ベアトリーチェさまの悪戯では困りましたねぇ。でも、魔女が苦手なら、おまじないで何とか出来るかもしれませんよ？」（熊沢）（EP7）
熊沢さんは、あれはどこにあったっけ、と言いながら、厨房の棚を漁り始める。ようやく見つけてもって来てくれたそれは、何と、凧糸だった。それをピンと葉って見せ、５０cmくらいの長さに包丁で切ってくれた。
「これの端に鍵を括りつけ、反対の端は、ポケットのボタンのところでも、目立たないように括りつけておきましょう。……これは、蜘蛛の糸のおまじないなのですよ」（熊沢）
「蜘蛛の糸？　六軒島の悪霊が宿れたという？」（ヤス）
「そう、よく覚えていますね。この島の蜘蛛の糸には霊力が宿っていて、強い魔除けの力を持っていると言われていました。ほら、こうしてピンと張ると、蜘蛛の糸のようでしょう？　ほっほっほ、これで蜘蛛の糸が苦手なベアトリーチェさまは、もう悪戯が出来ないというわけですよ」（熊沢）
※この場面が、ベアトが蜘蛛の巣が苦手になった瞬間です。ベアトの悪戯に対抗するための、蜘蛛の糸のおまじない。そして、蜘蛛の巣が苦手な悪食島の悪霊。熊沢がとっさにこの２つを結び付けてしまったため、ベアトは蜘蛛の巣が苦手になってしまったのです。

■ベルンカステル
※『ひぐらしのなく頃に』からのスピンオフです。古手梨花(ふるでりかり)が自分が歓んでいたワインに書かれていた名前と自分の名前から作ったペンネーム、フレデリカ＝ベルンカステルが元になっています。ちなみに「ベルンは悪者だ」だと思っている人が多いでしょうが、おそらくそういうわけではないと思います。EP8の戦人は“もう一つの真実”を見せることによって縁寿を導こうとしました。しかし、同時に“一なる真実”からは縁寿を遠ざけようとしました。ベルンは「これでは本当に解決にはならない」と考えたのではないでしょうか。あるいは「縁寿には真実に堪える力がある」と見込んだのかもしれません。ですからあえて悪役を引き受けることで、縁寿を導いたのだと思います。

■魔女の碑文
※“地下貴賓室に至る方法”を示しているわけですが、以下の部分は何を意味しているのでしょう？
魔女は賢者を讃え、四つの宝を授けるだろう。一つは、黄金郷の全ての黄金。一つは、全ての死者の魂を蘇らせる。一つは、失った愛すらも蘇らせる。一つは、魔女を永遠に眠りにつかせよう。安らかに眠れ、我が愛愛の魔女ベアトリーチェ。
※これは金蔵からの源次へのメッセージなのではないでしょうか？　まず“**黄金郷の全ての黄金**”これはそのまま１０トンの黄金です。“**全ての死者の魂を蘇らせ**”金蔵はビーチェも九羽鳥庵のベアトもその存在ごと抹殺してしまいました。それを“**蘇らせ**”るということは、ビーチェと九羽鳥庵のベアトの存在を認め、その子どもである紗音に、あるいは親族に、きちんと説明をする、ということではないでしょうか。“**失った愛すらも蘇らせる**”これは金蔵ことって１９６７年に死んでしまったはずの理御が生きていたと判明することで、その存在を“**蘇らせる**”ことが出来るということではないでしょうか。最後の“**魔女を永遠に眠りにつかせよう**”これは自分が愛したベアトリーチェはもう死んでしまったことを認め、全てを清算するということではないでしょうか。
「どうやら、この碑銘は、隠したがゆえに弔うことが出来なかった二人のベアトリーチェのためのようですね……」（理御）（EP7）
※もし金蔵が紗音と面会した時に死ななければ、実際にこのような葬儀をしたものと思われます。ちなみに“魔女の碑文”は九羽鳥庵のベアトに黄金と家督を継がせるために礼拝堂とセットで用意したものだと考えられます。思いがけない事故の為に、実際に使われる時期が大幅にずれ込みましたが…。

■魔法とはどのようなもの？
「……魔女は魔法を以ってしても、自らに出来ないことを出来ない。……自らに出来ることのみ、魔法で“装飾”できる」（縁寿）（EP6）
“魔法は、出来ることしか、出来ない”。つまり、魔法なくして出来ることのみが、魔法で残せる結果なのだ。はっきり言い切ろう。魔法は大別して２種類がある。巨人を呼び出したり、塔を地面から生やしたり。……でも、蓋を開けてみれば、薔薇庭園には何一つ起こっていなかった、というタイプの魔法。これはただの“幻想”。魔女の言うところの、半魔法の毒薬が一切ない病所での、観測者なき“嘘”だ。結果を伴う必要のない魔法は、もっとも簡単な魔法で、そして“嘘”だ。これは取るに足らない妄想、幻想、白昼夢に同じ。そしてもう１種類が、本当の魔法とも言うべき、“結果を伴う魔法”。つまりこの場合で言えば、観測者が、実際に中身が空であることを確認して伏せたカップの中に飴玉が現れ、それを実際に観測者が得られるという、“結果を伴う魔法”だ。幻想の魔法と違い、結果の伴う魔法は、すでに私（縁寿）が看破しているある大きなルールがある。それは自分の成し得たことの観測者なき過程のみを、人は魔法に昇華できる、というもの。もっと平たく、冷酷に言い切ろう。つまり、全ての魔法は手品なのだ。“魔法なくして出来ることしか、結果を伴えない”（EP6）

■真里亞の就寝解放は高いの？
「…うー。……そこにオウゴンキョウへの、…カギが、ネムる。うー！　読めた！」（真里亞）（EP1）
「うー！！　駄目ぇ、真里亞が読むの！　真里亞がみんなに読んで聞かせなさいって言われたの！！」（真里亞）（EP1）
「……真里亞ちゃん、その封筒はどうしたの？」
「うー！　傘を貸してくれた時にベアトリーチェにもらった。ご飯が終わったら、真里亞がみんなに読んで聞かせろって言われた！」（真里亞）
「読む。うー」（真里亞）
真里亞の口から出る言葉なのに、なぜかいつもと違う声のような気がして。
「なお、回収の手始めとしてすでに、右代宮本家の家督を受け継いだことを示す“右代宮家当主の指輪”をお預かりさせていただきました。封印の蝋燭にてそれを、どうかご確認くださいませ」（真里亞）
※碑文にしても、魔女の手紙にしても、とても小学3年生に読めるような文章ではありません。しかも、碑文は読むのに苦労しているのに、魔女の手紙はスラスラ読んでいます。自分で手帳に書き記し、読み方も教えてもらったであろう碑文がなかなか読めないのに、何故、初見の魔女の手紙はあっさり読めてしまうのでしょう。これは後者はゲーム盤であるため、幻想補正が入っていると考えられます。本当はうまく読めなかったけれども、うまく読めたように修飾されたか、もしくは騎であるため、能力が補正されているのです。そして前者は、１９８６年の１０月４日に実際にあった場面なのかもしれませんし、あるいは単にゲーム盤の外で幻想補正がないため、うまく読めないだけなのかもしれません。

■真里亞の薔薇は結局どうなったの？
「本日は、ご来賓の皆様が大層お気に入りでございました薔薇の庭園にちなみまして、パンナコッタをローズガーデン風に仕上げてみました。散らしてございます薔薇の花びらは当家の庭園より先ほど採取してきたものでございます」（郷田）（EP1）

※郷田に召し上げられてしまった、という説がありますが、見栄っ張りの郷田が、わざわざ見映えの悪い薔薇を使うとは思えません。また、料理以外の雑事を厭う郷田が、料理に専念できる立場にあるときに、ゴミのついた見映えの悪い薔薇を見つけたとしても、手を出すとも思えません。ベアトが真里亞を孤立させて手紙を渡すために扱いたという説がありますが、これもありえません。

「……さ、真里亞。もうすぐお昼よ。ママと一緒にお墓参りに行きましょう」（楼座）（EP2）

「うー。行かない。ベアトリーチェがね、もうすぐ来るの。だから待ってるの」（真里亞）

※ベアトは真里亞と薔薇園逢瀬で会う約束をしていたのです。ですから薔薇の消失は、むしろ余計なアクシデントだったのです。

「……ふむ。諸行無常よの。残念だな、真里亞。…この風雨に、そなたの薔薇は耐えられなかったらしい」（ベアト）（EP3）

「うー……。それじゃ、真里亞の薔薇は……？」（真里亞）

「風雨に散り、すでにこの世のものではない」（ベアト）

※ベアトが断言しますので、実際その通りなのでしょう。

■真里亞は自閉症？

（真里亞）は感情をあまり表に出さないので、何を考えているのかわかりにくい。（戦人）（EP1）

「真里亞ちゃんは素直な子だから、そういう冗談でも真に受けちゃうんだよ」（嘉代）（EP1）

「うー？　約束したから探させる！　真里亞、約束は守る！　絶対守る、うー！！」（真里亞）（EP1）

「うー！　真里亞は忘れっぽいからちゃんと書く！　ママに言われたからちゃんと書く！」（真里亞）（EP1）

俺たちが手分けして探そうとすると、不機嫌そうな顔をした真里亞が俺の上着を引っ張る。……他所へ行くなという意思表示に感じられた。（EP1）

「何だよ、どうした」（戦人）

「……うー。真里亞の薔薇はここなの。ここにあるの…！」（真里亞）

真里亞は地団太を踏む。……間違いなくそこにあったと言って指し示すのだが、現にそこにはない。

「真里亞はたまに、すごくどうでもいいことを気にし始めちゃうんだよ。それがどうにかなる時はいいんだけど…」（朱志香）（EP1）

真里亞は最庭が七つ付くほどの正直だから、……ないものを探していなさいと命じたら、ずっとずっと探し続けている。……雨が降り出しても…！！（EP1）

「いや。昔から最直なぐらい正直で真面目だよ。普通なら聞いただけで嘘とわかるような冗談すら鵜呑みにするタイプだぜ？　真里亞から冗談を言い出すなんて聞いたこともない。……真里亞に関してだけは、何かの比喩とか冗談とか、そういうことは考えられねえぜ。…額面通りの意味だと思うべきだろうよ」（朱志香）（EP1）

「……真里亞ちゃん、この一年でずいぶん立派になりましたね」（霧江）（EP2）

「……そう見えます…？　未だに自分のお洋服を畳むことすらできないんですよ」（楼座）

「……ない…。ない…。目印を付けた、……真里亞の薔薇がない…。……うー。……うー！！」（真里亞）（EP3）

真里亞は密かに記憶していた。その薔薇は、花壇のここのここにあった。なのにない。

黄金の蝶たちは輝きを強め、数を増やし、そしてベアトリーチェが天高く指す、その指先に集まっていく…。それこそが、黄金の魔法の奇跡…。そして黄金の蝶たちは、眩しく輝く一粒の黄金に凝縮されていく。……それは金色に輝く一粒の種だった。それがベアトリーチェの指先に乗り、黄金の芽を芽吹かせ、黄金の葉を開く。そしてぽとりと指先から落ち、花壇の泥の中に潜り込み、ぐんぐんと成長していく…。（EP3）

「…ふむ。立派な花を思い出したようだな。……だが、このままでは他の薔薇たちに混じってしまい、区別がつかなくなってしまうというものよ。もうひとつサービスしておくか」（ベアト）

ベアトリーチェは、なおも唸り続けて集中を続けている可愛い見習い魔女のために、もうひとつだけ魔法を掛けることにする。パチンと指を鳴らすと、黄金の蝶が一匹現れ、ひらひらと舞い、群った数かりの花に止まる。それは再び、パチンと弾けて姿を消すと、金色のモールになって目印となってくれた…。

「これで良いろう。……真里亞。もう目を開けても良いぞ」（ベアト）

「……うー？　薔薇はどこ？　ない。ない」（真里亞）

「そっちではないぞ、こっちだ。…ほれ。金モールで印を付けておいてやったぞ」（ベアト）

真里亞お姉ちゃんは、クラスの子たちと比べて、いつもテンポがひとつ遅かった。感受性も、ものの考え方も少し特殊的で、……彼らに溶け込むには、少し個性が過ぎた。成績もかなり低く、それでいて神童とするオカルト分野には饒舌だったものだから、クラス中から奇人扱いを受けていた。（EP4）

真里亞はごちゃごちゃの部屋の中を漁り始める。楼座によく片付けるようにと言われるのだが、どうにもお部屋の片付けは苦手だ。（EP4）

※自閉症的傾向は間違いなくあります。自閉症の人の中に、ごく稀に“サヴァン症候群”と呼ばれる驚異的な能力を持った人がいます。サヴァンの一つに“映像記憶”があります。一度見たものを写真に撮ったように記憶できる能力です。真里亞はこの“映像記憶”を持っているため、薔薇のあった場所を確信しているのでしょう。そして、ベアトはそのことを知っていたようです。ですから、真里亞が覚えていないであろう場所にあった薔薇にモールを括り付けて、真里亞の薔薇が蘇ったことにしたのです。

■メッセージボトルとはどのようなもの？

それから数年後。近隣の島の峰岡にて波間を漂う不思議なワインボトルが、漁師によって引き上げられました。その中にはびっしりと細かい文字で書かれ、細く丸めたノート片が詰め込まれておりました。それこそが、……この、物語。隠に包まれた１９８６年１０月４日からの謎と怪異に満ちた二日間の正体を、人々はこのノート片によって初めて知ることになります。そしてワインボトルのノート片は、この謎に満ちた事件を語りつつも、その真相については語っていません。書き記した人物の自書によれば、…彼女の名前は右代宮真里亞。（EP1）

※見つかったのは事件の数年後です。儀式当初、これは六軒島から脱出したヤスが事件後に書いたものだと考えていました。そう考えると色々と都合がよいのです（縁寿が来ないことや台風の到来を予見しているため）。しかし、それは間違いでした。

「……事件の数年後、近隣の島に流れ着いたメッセージボトル。それは好事家の手に渡った。アポイントは、一応取ってあるの」（縁寿）（EP4）

「式根島の若い漁師が、手紙入りのワインボトルを拾っていたことが判かったのです。この若い漁師は興味本位からそれをたまたま保管していました。それが、右代宮蔵書で六軒島が世界的注目を浴びた為、公表したというのです。ワインボトル内のノート片には、右代宮家のとある人物の署名がされていました。右代宮真里亞という少女です。しかし、彼女の遺品の内容から、別人の筆跡であることが確認されました。少なくとも、少女より遠縁で年齢のある人物によって書かれたことは疑いようがないでしょう。彼女の名前を騙った、何者かが筆跡した可能性が極めて高かったのです。よって、この時点ではノート片の内容の信憑性は薄いと考えられました」（大月）（EP4）

ところが、後に、同様のメッセージボトルが、事故当日に警察による遺留品捜索で周辺海域から回収されていたことが判明し、センセーションを巻き起こす。

「警察は現場の状況とボトルの当日状況から、捏造の可能性は低く、事故直前の数日以内に投棄したものと判断したようです。また双方の筆跡は一致しました。これにより、漁師の発見したノート片の信憑性が増すこととなりました」（大月）

２つのワインボトルの中には、ノート片が何枚もぎっしり詰められていた。それは、右代宮真里亞を名乗る本人以外の何者かによる、事故前日から当日を日記風に記した膨大な手記だった。そしてこの内容こそが、「魔女伝説連続殺人事件」、そして「黄金の魔女ベアトリーチェの謎」の始まりだったのである。

「この奇妙な日記風手記には、台風で島に釘付けにされた右代宮家の親族たちが、魔女復活の儀式に巻き込まれ、次々に不可解な方法で殺されていく様子が記されていました。そして最後に黄金の魔女ベアトリーチェが蘇り、全てを黄金郷に飲み込む。……まるで、それこそが当日の全容であるかのように記されていました。また、当時の島の状況についても非常に詳しく描写されており、右代宮家に勤務したことがある元の使用人たちは、間違いなく内部に詳しい人間が書いたに違いないと証言しました」（大月）

※実際に書かれたのは事故の数日前でした。そして上記内容によって、大抵の人が想定しているであろう“EP1と2＝２つのメッセージボトルの内容”という前提が崩れます。日記とはよ手記にせよ、一人称、もしくは三人称で書かれるものです。そして署名が真里亞ということですから、メッセージボトルは真里亞の一人称、もしくは三人称で書かれていたことになります。ところが各EPは戦人の一人称、もしくは三人称で書かれています。つまりEP1と２がメッセージボトルの内容の訳がないのです。また、メッセ

ージボトルはワインボトルの中に入っていたノート片ですが、“何枚も”と書かれています。“何十枚も”ではありません。『うみねこのなく頃に Episode1』は小説としても出版されていますが、上下で約６００ページあります。どんなに細かい字で書いたところで、ワインボトルに収まるものではないことがわかります。ではメッセージボトルには一体何が書かれているのでしょうか。

「‥‥確か、流師のノート片と、警察のノート片で、内容がまったく違うと聞きましたが」（縁寿）（EP4）

「左様です。このせいで、六軒島ミステリーはさらに面白みが増したのです。２つのボトルの中身は、どちらも事故前日から当日までを記した日記風の手記です。しかし、その内容はまったく異なったのです。まるで、どちらかが真実で、どちらかが虚偽のように。あるいは両方とも虚偽なのかもしれない。…しかし、始まりと終わりだけは一致するのです。始まりは、親族たち１８人は台風で島に閉じ込められた。そして終わりは、全員が死亡、黄金の魔女が蘇り、全ては黄金郷に飲み込まれる」（大月）

２つの日記は、どちらも魔女の降臨に沿った連続殺人を描いているのだが、犠牲者の順番も死に方も、“二日間の物語”さえも違う。しかし、どちらも最後は全員が死亡し、魔女が復活するという同じ顛末を描いている。メッセージボトルが本当に日記であるかは大いに疑わしい。‥‥何しろ、文章量が膨大だ。実際に連続殺人の渦中にあった人物が、冷静にそれらを記せたとは考え難い。だとすると、この日記は、事故前日までゆっくりと時間を掛けて執筆されたという方が現実的だろう。

※大月教授の話をそのまま受け取るのなら、台風の到来が始まりになります。これは雨が降り始めた時間帯、真里亞が薔薇を探すために薔薇迷路に一人残った時間帯なのではないでしょうか？　つまりあの場面こそがメッセージボトルの始まりだと考えられるのです。ということは、EP1 の空港の場面や船の場面はメッセージボトルには含まれないことになります。EP2 の籠台と紗音の沖縄デート、文化祭も同じです。後の EP で“ゲーム盤”と呼ばれる場面、あれこそがメッセージボトルの中身なのではないでしょうか。また、ノート片は“何枚も”ですから、ゲーム盤部分だけでも書ききれません。しかし、粗筋だけでは逆に何枚も必要ないでしょう。ゲーム盤の出来事を、真里亞の視点で粗筋以上、全文未満の内容で記したもの、それがメッセージボトルなのだと考えられます。そして“■偽書とはどのようなもの？”でも説明したとおり、偽書はメッセージボトルに似せて書かれていたため、スタイルや文章量もメッセージボトルに準じると考えられます。その証拠と考えられるのが以下の部分です。

「さ、‥‥どうぞ、続きを読んで。文字を追うあなたの顔を見るのが、何よりも楽しいの。そして、言葉を交し合うことも‥」（幾子）（EP6）

「物書きは感想に飢えてるってのは本当ね。‥‥でも申し訳ないけど、こんな分厚い原稿を、延々と読んでる時間はないの。それより私はあなたに、‥‥‥‥‥」（縁寿）

「‥‥時間なんて、いくらでもあるでしょうに‥‥」（幾子）

彼女の後ろにある、凝った意匠の飾り時計は、‥‥振り子も秒針も、ずっと動かし続けている。なのに、‥‥全然、さっきから時間が経っていない。この部屋に通されてから、まだ3分くらいしか経っていないのだ‥。

「ね？　時間など、気にすることもないでしょう。‥‥あなたが読み終わるまで、全ての時間はあなたを追い立てない‥」（幾子）

「お嬢、次のページ、次のページ」（天草）

天草に次のページをせがまれるので、‥‥私は再び、物語の世界へ戻る。

縁寿とハ城の物語を巡る議論は、物語を読み終えても、長く続けられていた。それはとても真剣で、‥‥熱のあるものだった。縁寿は、この物語がふざけた創作ではなく、‥‥六軒島より、真実の一つを知らせるために１２年前より再び流れ着いた、新しいボトルメッセージだと、認めていた‥。そして、‥‥‥この物語の語ろうとする真実を、彼女なりの見方で、見つけられたようだった。‥‥もちろん、それは、ある一つの真実であって、それをもって、彼女の旅が終わるわけではない。しかし、‥‥こういう解釈もあってもいい。それだけで、彼女の１２年の心の空白は埋まらないけれど。‥‥でも今は、‥‥少しだけ余韻を、ハ城の淹れた苦い珈琲で味わっても良かった。‥‥窮屈なはずの、他所の家のソファーなのに、‥‥すっかり自宅みたいに馴染んでしまっていて、何だか不思議な気持ちだった。でも、時計は、ここで彼女と会ってから、せいぜい２～3時間を回った程度だ。‥‥時間の感覚が、とても不思議だった‥。（EP6）

※何故、時間が進んでいなかったかというと、縁寿は3分で読める程度しか、偽書の内容を読んでいなかったのです。というかこの時点ではゲーム盤の場面まで読み進めていないため、そもそもまだ読み始めてもいないでしょう。そして、偽書を読みながら議論をし、読み終わってからも長時間、話をしたのに２～3時間しか経過しませんでした。もしこれが『Episode6　Dawn of the golden witch』を読んだのだとしたら、とてもこんな時間では終わらなかったでしょう。つまり、偽書はその程度の文章量しかないのです。ちなみに以下に書かれているほどの文章量が偽書にあるわけがないため、この場面は幻想修飾されていると考えられます。個人的にはこれは感心しません。幾子が見せるのならワインボトル数枚程度という偽書の体裁を守るべきで、この文章量にするならフェザリーヌが見せたほうが良かったと思います。幻想と現実が混在しているこの場面で、現実まで幻想修飾するというのはやりすぎです。

彼女（ハ城幾子）は鍵の掛かった引き出しから、分厚い何かの入った大きな茶封筒を出していた。中にはぎっしり、印字されたプリンター用紙が詰まっているようだった。‥‥‥彼女の原稿を印刷したものだろうか。そして茶封筒には万年筆の達筆な字で、‥‥‥「Dawn」と記されていた。Dawnの名で始まる偽書は存在しない。‥‥‥と、いうことは‥‥。‥‥‥直感する。これは、新作なのだ。彼女の未発表の最新偽書‥‥。「Dawn　of　the　golden　witch」‥‥（EP6）

縁寿の読む原稿は、無論、また物語の途中だ。‥‥‥しかし、あと数枚で終わってしまう。続く物語の原稿は？　まだまだ続くはず。相応の原稿の束が、まだあるはず‥‥。それは、別の茶封筒に入って、‥‥‥‥ハ城の手元にあった。ハ城は、にやにやと笑いながら、その厚みある茶封筒を振る。（EP6）

■メッセージボトルの不思議

※メッセージボトルには不思議な点が2つあります。１つは縁寿が当日島に来ないことを予見していたこと、もう１つは、嵐によって親族が島に閉じ込められ、一日余計に過ごすことを予見していたことです。

（縁寿は）「いつも手筋の変わり目に風邪を引くんです」（霧江）（EP1）

緊張して体調を崩しやすかった縁寿が、何度も六軒島へ行けたとは思えない。（EP8）

「縁寿は幼い。そして、体調を崩し、六軒島へ来ないことも多かった。‥‥私をよく覚えては、いないだろう」（金蔵）（EP8）

※幼く、体調を崩しやすかった縁寿は、もし誘い来ない人間がいるとしたら断トツの最有力候補です（大人たちは生きている限り、這ってでも来るでしょう）。縁寿が来ると在島者の数は１７人になります。チェスの駒は１６。このゲームをチェスに例えるベアトにとって、この１６という数字は守りたいものであったため、縁寿は来なかったことにしたのだと考えられます。縁寿が来た時用のバージョンも用意していたのかもしれませんが、運命のルーレットに身を任す主義のベアトらしくないので、その可能性は低いと考えられます。

「ちょっと天気が怪しいものねぇ」（絵羽）（EP1）

絵羽伯母さんが特合ロビーのテレビを見ている。そこには天気予報が映し出されていて、関東地方に台風が近付きつつあることを教えてくれていた。

「また台風か。‥‥親族会議が毎年１０月ってんじゃ、これは宿命だぜ。もうちょい時期を選んでくれりゃあいいのによ」（留弗夫）

※“■親族会議”でも取り上げましたが、親族会議が毎年１０月ということ自体、既に創作の可能性があります。また、嵐によって孤立した孤島は、クローズドサークルの定番ですので、ベアトにとって外せない舞台です。ですから台風で親族が島に足止めされたのも、運命のルーレットの結果なのでしょう。もしかすると縁寿が来たり、台風が来なかったりしたら、紗音は事件を起こさなかったかもしれません。縁寿が来ず、台風が来る、それは決して高い確率ではありません。だからこそ、紗音は「自分が書いたメッセージボトルと同じ内容になったら事件を起こそう」と決心したとも考えられるのです。

■メッセージボトルは誰が特っているの？

※EP1 のメッセージボトルは特定できています。

「わかってるわ。‥‥事件の数年後、近隣の島に流れ着いたメッセージボトル。それは好事家の手に渡った。アポイントは、一応取ってあるの」（縁寿）（EP4）

「そうそう。最後にもうひとつだけ質問を。‥‥先生は、メッセージボトルの実物をご覧になったことは？」（縁寿）（EP4）

「ありますとも」（大月）

「では、その筆跡についてもお詳しいですか？」（縁寿）

「もちろん。その道の専門家ではありませんが、メッセージボトルの筆跡に関してだけは、日本でもっとも詳しいと自負していますとも」（大月）

そのページには、“親愛なる魔女見習いへ”から始まる手書きの文書が記されていた。‥‥‥そして末尾には、カタカナでベアトリーチェとのサインが。一目見た瞬間。男の

顔面は蒼白になる。
「このページに記されている文章の筆跡は、メッセージボトルの筆跡と一致しますか…？」（緑寿）
「い、いやその、……も、持ち帰って詳しく調べないことには…」（大月）
※緑寿も大月教授も忙しいですが、大月教授で間違いないでしょう。問題はＥＰ２のメッセージボトルです。当初は証拠品として警察が押収していたと思われます。しかし、以下の描写があります。
警察は遺留品捜索の際、大量のガラクタを収集。それらは律儀にも捜査終了後、右代宮家に返却された。（EP4）
※とありますので、絵羽が持っていた可能性が一番高いです。あるいは証拠品として今も警察に保管されているでしょう。

■メッセージボトルは何のために書かれたの？
「ねえ、見えてる？　クレル？　……あなたもまた、この真実を隠したかったのよね？　あなたは戯れに、憧れる推理小説のラストのように、メッセージボトルに封じるつもりで、猫箱の物語をいくつも書いていた。それをあなたは、海に投じたわ。この真実を知ったら苦しむだろう者を救うためにね…！！」（ベルン）（EP7）
「前から聞きたかったんだが、あのメッセージボトルは何なんだ？」（戦人）（EP8）
「そなたとのゲームを練りながら、その過程で生み出した派生の物語のようなものよ。一つのゲーム盤から、異なる複数の物語を無限に紡ぎ出せることに気付き、面白くなってしまってな…！」（ベアト）
「いつか俺に読ませようと、書き溜めてたわけか」（戦人）
「うむ！　あまりの力作に、そなたを待つのが惜しくなってな…！　アガサ・クリスティーに倣い、妾もそれを瓶に封じて海に投じてみたのだ。ミステリアスであろう?!」（ベアト）
※まず、約音が事故前に予想していた現実世界での結末は“誰も碑文の謎が解けず、全員が全ての証拠と共に爆死”というものでした。全てを猫箱に封じ、あらゆる可能性の実現を癒った彼女には“真実の追求者”と“真実の語り手”を生み出す必要がありました。そのための“きっかけ”としてメッセージボトルを書いたと考えられます。しかし、実際には碑文は解かれ、絵羽が生還しました。そのため、彼女が想定していた未来は訪れなかったのです。

■モーターボート
「蔵臼さまのボートは今、修理中で島にありません…。ですので、月曜の船を待つ他ないかと……」（源次）（EP1）
私（紗音）は、教えてもらったばかりのモーターボートで、この小島にやって来た。（EP2）
戦人とベアトの姿は、……六軒島の地下の潜水艦基地の廃墟にあった。ベアトは水際に下りると、大きなシートを取り払う。そこには一艘のモーターボートがあった。（EP8）
「そなたはモーターボートの経験は？」（ベアト）（EP8）
「あるわけないぜ」（戦人）
手馴れてはいなかったが、ベアトは何度かの試行錯誤の末、エンジンを掛ける。
※ベアトは蔵臼のボートを修理に出したことにして、潜水艦基地の廃墟に隠していたのではないでしょうか？　もっとも、金はあるので自分で買ったのかもしれませんが。ちなみに鍵割りの場面は、事件の数年前と考えられますが、そんなに練習する機会もなかったでしょうから、１９８６年になっても自在に操るというわけにはいかなかったのでしょう。

■ヤス＝幾子説
※ヤスが戦人と共に六軒島を脱出し、八城幾子になったとする説です。十八＝１８＝戦人の年齢、幾子＝１９＝ヤスの年齢、という共通点がありますし、それを裏付けるような以下の記述も存在します。
しかしこれらの作品群（八城の書いた偽書）は、その規模、完成度において、限りなく、「右代宮真里亞」本人が記してきたそれまでの物語に近いと評価されていた。（EP6）
このハ城十八という人物を好きになるのは、あまりに困難だ。……しかし、彼女が書くこの偽書は、……まだ冒頭の部分だけとはいえ、確かにメッセージボトルの物語と、とてもよく似た何かを感じる。メッセージボトルを記した“ベアトリーチェ”と、八城十八は別人。……であるにもかかわらず、その物語は、同じ匂いを持つ…。（EP6）
※同一人物が書いているのですから当然です。
月日を重ねぬうちに、私（ヤス）は学校の図書館の推理小説を全て読み尽くし、大人向けの推理小説にも手を出し始める。（EP7）
「あれだけ古今東西の様々な推理小説に精通していて、素人ということはないと思います」（十八）（EP8）
※ヤスも幾子も推理小説に精通しています。
幾子と名乗った女性は、私（緑寿）よりずっと年上のはずなのに、信じられないくらいに若々しいのが印象的だった。お化粧が上手とか、若作りが上手いとか、そういう感じじゃない。こう言っては変だけど…。不老不死だから老けない、とでもいうような、……そんな不思議な神秘性を感じた。（EP8）
※緑寿とヤスの年齢差は１３歳です。ずっと年上というほどではありません。などなど多くの証拠があります。しかし、この就だと以下の出会いの場面の説明がつかないのです。
傘をはずす、遠慮深そうな人影が、私（十八）に近付いてくるのが見える…。（EP8）
「……ここはそなたの庭か？」（幾子）
人影は問い掛ける。無論、私には返事をすることも出来ない…。
「……そなたの庭ならば、私は謝らなければならないな。なるほど、このような良き天気の日には、昼寝と洒落込みたくなるような素晴らしき庭だ。……しかし、私の記憶が確かなら」（幾子）
人影がしゃがみ込み、私の顔を覗く。……女だった。
「ここは天下の公道だ。そなたは挽き肉になりたいのか？　……あるいはすでに挽き肉なのか。どちらなのか教えて欲しい」（幾子）
私は、……下腹に力を込める。何かの返事を返し、意思を疎通させなければならないと思った。だからようやく、……うぅ、という短い唸り声を発することが出来た。
「……なるほど。まだ挽き肉ではなかったようだな」（幾子）
それが私と、……幾子との出会いだった。
※無理やりに解釈すると、この時は本物の八城幾子で、以下の場面ではヤスに入れ替わっている、と考えることも出来ます。現に１８歳であることを否定するような内容もあります。
「……非常に衰弱しております。あと、記憶障害の可能性が高いですな。ＣＴを見ないことにはわかりませんが、脳にダメージがある可能性もあります」（医者）（EP8）
「ダメージ程度で済んで大いに結構でした。あそこであのまま寝ていれば、それどころでは済まなかったでしょうから」（幾子）
「……ですな。何れにせよ、大きな病院で一度見せた方がいいでしょう」（医者）
「ありがとう、先生。……この件は内密に。これはわずかですが、往診のお車代に」（幾子）
「わざわざ恐縮しませんが、……いやいやっ、こんなにたくさんいただくわけには…」（医者）
結局、医者は金を受け取り、他言はしないと誓わされた。やがて、八城が戻ってくる。
「おや、起きていたのですか。具合は如何です…？」（幾子）
私は小さく頷き、とりあえず悪くはないことを意思表示した。……しかし、ここはどこだろう。まったく知らない家、……まったく知らない部屋だった。そしてそれ以前に、まったく知らない女性だった……。「まず」は私の自己紹介から。私は八城幾子。八城家はこの辺りではちょっと知られた大地主の名家。……出来のいい兄たちと違い、わたしはどこかズレた変わり者。色々と悪さが過ぎまして、とうとう親たちからも愛想を尽かされて追い出され。今はここで蟄居をさせられています。……趣味は推理小説を読

むことと、そして書くこと。歳は秘密の独身女。心は女子でも、そろそろそれを語るにはおこがましいかなという年資です」（幾子）（FP8）
自分の年齢はと自問した時、浮かんできた数字が、１８だった。正直なところ、自分に１８歳だという自覚は少し薄い。‥‥‥心はそれよりずっと幼いように感じるし、‥‥‥愚鈍な体は、それよりずっと老いて感じられた。私は八城十八と名乗ることになった。体がうまく動かないのは、恐らく交通事故のせいだという。私はあの日、あそこで車にはねられ、倒れているところを、幾子に拾われたのだ。八城幾子は、海の見える町の、小高い丘の上に、小さいがとても立派な邸宅に住んでいた。ゆっくりと時間を掛けて、リハビリを進め、私は体の自由を少しずつ取り戻していった。（FP8）
※幾子と共に暮らしていた十八はある日、以下の事件を起こすのです。
「‥‥‥‥‥ある日、自分と、受け容れられぬもうひとりの自分との板ばさみに、発作的に‥‥‥‥‥」（幾子）（FP8）
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥」（十八）
「運良く、一命を取り留めましたが、その後遺症で、車椅子で生活せざるを得ない体に‥」（幾子）
※そして、再び記憶を失ったため、使用人として側に仕えていたヤスは幾子と入れ替わって、十八と一緒に暮らすようになるのです。
彼女（幾子）の実際の年齢はわからない。婚姻的には、また取り返しのつく年齢らしいが、こんなところで一人で隠居していては、出会いもあるわけがない。（FP8）
※その時には十八は二十代後半くらいになっていたわけです。
実際に島から出ていって「恐い迷子にされました」という事実が確定するとペアトリーチェの中では残り二組の恋愛を否定することにつながってしまう。残り二組も幸せでいるためにはペアトという猫箱は伏せたまま、閉められたままでなければならないんですよ。でもそのまま戦人に島から遠ざけ出されたら猫箱が開いてしまう‥‥‥う一ん、ここはお茶を濁したいな。（インタ）
※ヤスはベアトの人格を殺し、別の人格として生きることで、猫箱を閉じたのです。一応筋は通ります。しかし、僕はこれはありえないと考えます。何故なら、ヤス＝幾子説が真実だったのなら、もっとそれっぽく書けるためです。僕がこの設定で書くなら以下のようにします。まず、ヤスは事前に八城家と交歩し、八城幾子という人物をでっちあげてもらいます。もしくは八城幾子と交歩し、その存在を売ってもらいます。幾子だって蟄居生活はイヤだったでしょうから、渡りに船だったはずです。そして六軒島から脱出してきて、八城幾子として、戦人と共に暮らし始めます。ところが、戦人は事件の真相を抱え続ける辛さに耐え切れず、自殺を図ります。自殺に失敗した戦人が目覚ました時に、側にいるのは使用人です。ヤスは何らかの事情でたまたま席をはずしていたのです。目を覚ました戦人と話をした使用人は、戦人が記憶を失っていることに気がつきます。ヤスはその話を聞き、一芝居打つことにします。自分と戦人は初対面で、事故に遭った戦人をたまたま自分が助けたのだと。あとはFP8の展開通りです。つまり、この作品ではヤス＝幾子説が成り立つような展開を意図的に避けているのです。これこそが竜騎士０７さんからの答えなのではないでしょうか。

■ヤスは男？
推理すれば、譜台が描く結婚後の未来像が彼女を苦しめていた、という考えには十分至れるかと思います。（中略）「将来は多くの孫に囲まれて過ごしたい」と、譜台はやたらと子どもがいる未来にこだわるんですよね。子沢山が夢の憧れなんですかね。それが彼女にとって非常にプレッシャーとなったことは、推測可能だと思います。（最考散）（ＫＥＩＹＡ）ヤスはEP7で「恋をすることも出来ない体」と言っていましたね。
その発言を踏まえれば、恐らくは性的に何か不全な要素があるのだろう。ということが推測できると思います。
戦人が本当に紗音のおっぱいを揉んでいたら、胸が偽物だということに気づいたかもしれない。紗音は常に「バレるならバレろ」という気持ちだったんでしょうね。（最考散）
※以上の内容で、紗音は妊娠できないこと、そして胸がないことがわかります。
私（夏妃）はお父様から赤子を預かられ、三日も経たない内に、‥‥‥殺してしまったのです‥‥！（FP5）
※夏妃は数日間、赤子と過ごしています。その夏妃が“１９年前の男”に違和感を覚えなかったことから、赤子は男であったことがわかります。
「でも、その赤ん坊は生きていたのね？」（フルフル）（FP7）
「左様です。‥‥‥無論、大怪我でしたとも。あれだけの怪我をして、生き永らえたのは奇跡でした」（南絲）
※如何に大怪我をしたとはいえ、それは赤ん坊時代のことです。将来、胸が発達しないほどのダメージと、体内に二つある卵巣が二つとも機能不全になるようなダメージ、そんなダメージを負った赤ん坊が生き永らえるものでしょうか？　ここは男が体外に露出している生殖器を失い、女として生きざるを得なかったと考えた方が自然です。また、理御は当然、ヤスと性別が同じはずですが、以下のように理御はどう考えても男です。
「朱志香。もう少し妹らしい言葉遣いは出来ないのかい？　ついでに言うと、もう少し年頃の女性らしい言葉遣いにも気を付けてみるべきだね」（理御）（FP7）
※理御は自分は男としての言葉遣いをしていて、朱志香に女らしい言葉遣いを求めています。これが女であるとは考えられません。
あの頑固なお父様が、女でも当主を継げるようにして、しかも兄を飛ばして私（絵羽）を当主に選んでくれるなんて、‥‥‥いくらなんでも考えられない。（FP3）
「‥‥‥理御はどこか‥！　肩を貸せ」（金蔵）（FP7）
「当主様‥！　ただいま」（理御）
※男尊女卑の金蔵が女に肩を借りるでしょうか？　そもそも女を当主にしようとするでしょうか？
お勤めのない日は新島の別宅に帰り、自分に与えられた部屋で自由に過ごすことが出来る。一応、大人の監視がいて食事や沐浴の時間を厳しく管理していたが、福音の家でそういう生活に慣れているので、苦にはならなかった。部屋は、少し大きめのものでそれぞれが３人部屋になっていた。しかし、人数の関係か幸運なのか、我は３人部屋にはならなかった。（FP7）
「ねぇ、ガラシさん～。何でヤスだけは３人部屋じゃないわけですかー」（レヴィアタン使用人）（FP7）
「知らないわよ、部屋の割り振りは源次様が決めてんだもの。私だって納得いかないわよ」（ルシファー使用人）
※源次はヤスが金蔵の子どもだから特別扱いしたわけではなく、男だから他の使用人とは同じ部屋に出来なかったと考えられます。
「‥‥‥同じ過ちが、‥‥‥繰り返されるのではないか。‥‥‥私はそう、思いました」（源次）（FP7）
※つまり源次はヤスが金蔵にカマを掘られるのではないかと心配したわけです。あるいは整形手術で女としての形は整えられていたのかもしれません。「いくら金蔵でもそんなことは‥」と考える人もいるかもしれませんが、金蔵のことをよく知る人たちなら以下のように答えてくれるでしょう。
「いや、金蔵さんならありえますな」（南絲）（FP5）
「親父ならやりかねねぇ」（留弗夫）
「お父様だものねぇ‥‥‥」（絵羽）
「武勇伝の多いお人や。それくらいじゃ驚きもせんで」（秀吉）

■ラムダデルタ
※『ひぐらしのなく頃に』からのスピンオフです。ベルンカステルと比べると若返っているため、わかり辛いのですが、髪の色に注目です。ラムダデルタはギリシャ数字の３４だそうです。

■楼座に愛が視えない？
※「愛がなければ視えない」このキャッチフレーズを胸に数々の真実に至った僕なのですが、どうやっても愛が視えなかったのが楼座です。探せば探すほどに愛のなさだけが視えます。これはどういうことなのでしょうか？　何か意味があるはずなので発想を転換してみました。そもそも何故、楼座には愛がないのでしょう。それは以下の通りです。
「楼座さまは、とても聡明な方です。‥‥‥連帯保証人を引き受けることが、どういう意味を持つか、よく考えもせず、引き受けたわけがありません」（嘉音）（EP6）
「‥‥‥‥‥‥籍こそまだだったけれど、‥‥‥これから結婚する相手で、パートナーだと思ってた。私の名前がなければ借りられないお金なら、それに協力するのが、未来の

妻の役目だと思ったのよ」(楼座)
「‥‥未来は、来ましたか」(嘉音)
「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥」(楼座)
未来は、来なかった。だからいつまで経っても、‥‥楼座は、ひとりぼっち。そしていつまでも、‥‥真里亞に父親はいない。でも、時間は進んでいる。二人の結晶のはずだった真里亞だけは成長を続け、まるで、楼座の遠う地獄を量る、生きた砂時計のようだった‥‥。だから、真里亞の成長が、‥‥辛い。
※楼座にとって真里亞の存在は、自分が裏切られた証なのです。ですから、真里亞の存在そのものが楼座の心の傷を抉るのです。しかし、そもそも楼座の夫は本当に楼座を裏切ったのでしょうか?
「そうよ。‥‥‥彼の夢を応援したいなんて甘えたことを言ったあの日に、私は多分、もう死んでいた。‥‥‥やっぱり、あの日は後悔すべき日だったのかしら? 俺には夢がある。海外を巡りたい。このちっぽけな日本を飛び出して、必ず大物になって帰ってくる。‥‥懐かしいわね‥」(楼座)(EP6)
「‥私はその負けを美化して、‥‥男の海外への憧憬を笑顔で見送り、甲斐甲斐しく娘と帰りを待つ良き女の幻想に酔ってるだけ。‥‥‥電話一本寄越さず、彼が教えてくれた住所への郵便も、転居先不明で戻ってくるのにね‥」(楼座)(EP6)
※わかっている事実はこれだけです。楼座を裏切った事実など、どこにも存在しないのです。もしかしたら、今も楼座の為に大物を目指して頑張っているのかもしれません。あるいは何らかのトラブルに巻き込まれ、楼座のことを想いながら異郷の地で果てたのかもしれません。もしも楼座が愛を信じることが出来たなら、真里亞は裏切りの証ではなく、愛の結晶だったのです。つまり愛を信じられなかったがゆえに、楼座は自ら地獄に落ちたのです。娘の真里亞が母の愛を信じることで幸せになれたのとは対照的な姿です。

■ロジックエラーとはどんなもの?
「物語の表裏が合わぬこと、矛盾することでございます。‥‥これが生じると、ロジックエラーと呼ばれる致命的な反則手となり、即座にゲーム盤は破壊、崩壊いたします。魔女側が犯せぬ、最大最悪のミスです」(源次)(EP6)
「ロジックエラーとは‥。‥‥‥“不可能になってしまった手品”という意味ね」(縁寿)(EP6)
筋が通ることを、ロジックという。そしてそれが矛盾して通らなくなる時、これをロジックエラーと呼ぶ‥。それが意味するのは、‥‥魔女のゲームの、破綻。(EP6)
「人間に説明可能なゲームがこの世界。‥‥却ち、全ての魔法は“トリックでも”可能なようになっていなければならない。‥‥‥トリックで不可能だったら、人間側は打つ手なしのステイルメイト」(縁寿)
「いいや違う。それこそが、ロジックエラーと呼ぶ致命的かつ最悪の反則手だ。‥‥‥これを魔女側が犯した場合、即座にゲームは破壊され、致命的敗北となる‥」(フェザ)
「‥‥‥ロジックエラーになったら、ゲーム盤がぶっ飛ぶのよ。‥‥‥あんたは、ベアトからこのゲーム盤を受け継いだわ。‥‥‥‥あんたの大切なベアトから受け取った、‥‥‥唯一の形見なんでしょ。だからあんたは、断じてロジックエラーを受け入れない」(ラムダ)(EP6)
※ロジックエラーは単なる敗北ではなく、ゲーム盤そのものの消失を引き起こすようです。しかし、以下のように即座に作動するものではないようです。
ロジックエラーは、‥‥‥魔女がそれを認めて初めて成立する。言い逃れできる新たなロジックを考え続ける限り、‥‥‥死なない、死ねない。しかしそれは、‥‥‥永遠に終わらない、思考の生き地獄に閉じ込められるのと同じことだ。

■六軒島の電話事情
朱志香は自分の部屋に駆け戻ってくると、転送した電話を取る。(EP5)
電話が鳴った。 夏妃はテレビを消し、受話器を取る‥。(EP5)
「お休みのところ、申し訳ございません。源次でございます。奥様に外線からお電話でございます。‥‥‥ですが、名前をお名乗りになられません」(源次)
「名乗らない‥?」(夏妃)
「はい。先方は話せばわかるとは申しておりますが‥。如何しますか。悪戯かもしれません」(源次)
「どんな相手です?」(夏妃)
「恐らく、若い男性ではないかと。お心当たりはございませんか‥?」(源次)
「若い、‥‥男性?」(夏妃)
夏妃には、まったく心当たりがなかった。そもそも彼女の知人に、名乗らないような失礼な人間はひとりもいない。その上、若い、‥男性‥‥? 腹立たしい電話なら、名乗らない電話は二度と取り次がないよう、源次に厳命すればいいだけの話だ。夏妃はそう考え、やはり切りますかと言う源次に、繋ぐように伝え、一度、受話器を置く。しばらくすると、再び電話が鳴り響いた‥‥。
「‥‥‥‥もしもし」(夏妃)
これは内線ではない、源次が転送した外線電話だ。だからもう、直接、謎の男と電話は繋がっているはず。
※外線は一旦、使用人室に繋がり、そこから転送されるようです。ということは、EP5で夏妃に2日目以降に掛かってきた電話は内線だということになります。

■六軒島の料理事情
「郷田さんがいる時のメシは楽しみなんだよ。あの人、どこぞの有名ホテルでシェフをやってたらしくて、かなり料理の腕があるんだぜ!」(朱志香)(EP1)
「はっはっは、秀吉さん。うちの郷田を引き抜かれるのですか? これは困った。郷田の待遇をもっとよくしないと引き抜かれてしまいそうだ」(絵羽)(EP1)
「くすくす、そうした方がいいわねぇ。じゃないと引き抜かれて、三食が熊沢さんの麻婆料理にされちゃうわよぅ?」(絵羽)
厨房では、熊沢が張り切って料理をしていた。色々なお皿が並び、郷田の芸術料理からはたいぶ見劣るにしても、充分に華やかなものだった。落ち込んだ心を、少しでも食事で盛り上げたいという熊沢の気遣いだった。熊沢は、郷田のような職業的料理人にはたいぶ劣るが、決して下手なわけではない。‥むしろ漁村育ちの彼女の手による素朴な料理は、時にとても高い評価を受けるのだった。(EP1)
熊沢が調理を終えた料理を、嘉音が教えられながら皿に盛り付けていた。嘉音も時には厨房を手伝うが、それが役割として与えられることは少なかったため、懸命ではあったが少々だけ稚拙だった‥。盛り付けがうまくできていないことを自覚し、嘉音は少しだけ表情を曇らせる。でも熊沢はそれでいいと微笑んでいた。(EP1)
「ほっほっほ、綺麗に盛り付けられてますよ。嘉音くんもお上手ですよ?」(熊沢)
「‥‥‥‥‥紗音姉さんだったら、‥もっと綺麗ご‥」(嘉音)
盛り付けの手を少しだけ止め、嘉音が俯く‥。熊沢の料理の補助はいつも紗音だった。‥嘉音は今夜、それを代わっている。‥‥そして、紗音の面影と、無惨な最期を思い出し、顔を歪める‥。
「ほっほっほ。最近は全然ですけど、昔の源次さんは、それはもう、色々なお料理を作ってくれたんですよ。特にお菓子作りはお上手で‥!」(熊沢)(EP6)
※料理をするのは、郷田と熊沢だけのようです。使用人歴10年の紗音がしないということは、福音の家出身の他の使用人もしないのでしょう。

■コラムコーナー２
■第○回偽書作家コンテスト～あなたも今日から偽書作家～
主催 …右代宮グループ
後援 …元老院　天界大法院

《募集内容》
あの伊藤幾九郎〇五七六を輩出した推理小説界の名門・偽書作家コンテストの募集をいたします。オリジナルの短編ミステリーで、未発表の日本語で書かれた作品に限ります。

《賞品》
大賞（１名）　煉獄の七杭（７本セット）
入賞（４名）　ウィンチェスターM１８９４　ソードオフ（弾丸は 45 ロング・コルト弾、410 ゲージショットシェルどちらか一方をお好みに合わせてお選びいただけます）
※銃刀法に抵触するおそれがありますが、警察への対応は自己責任となります。

《選考委員》
ウィラード・H・ライト（元ＳＳＶＤ　主席異端審問官）　右代宮縁寿（右代宮家当主）　ドラノール・A・ノックス（アイゼルネ・ユングフラウ　主席異端審問官）　フェザリーヌ・アウグストゥス・アウローラ（尊厳なる観劇と戯曲と傍観の魔女）　ベアトリーチェ（黄金の魔女）　ベルンカステル（奇跡の魔女）　ラムダデルタ（絶対の魔女）

《応募資格》
年齢・性別・職業・国籍・種族は問いません。

《応募規定》
既存のノート（種類不問）に数枚程度。手書き原稿のみ（ワープロ原稿不可）。ベアトのゲーム盤のルールを遵守し、文体は“右代宮真里亞”の一人称で統一してください。

《原稿の締切》
無期限

《応募方法》
１９８６年１０月５日以前に出荷された適当なワインボトルに詰め、水濡れのないよう厳重に封をしたうえで、新島港から海に流してください（ラベルを剥がす等、製造年月日が特定できないようにしてあれば、１９８６年１０月６日以降に出荷されたものでもかまいません）。不法投棄の現行犯となるおそれがありますが、警察への対応は自己責任となります。

《注意事項》
海に浮かばない場合は選考の対象となりません。応募原稿は返却しようがありませんので控えのコピーをお取りのうえご応募下さい。二重投稿はご遠慮下さい（失格条件となりうる）。なお、応募原稿に関する問い合わせには応じようがありません。

■憐極の七姉妹
膨満のルシファー（太りすぎです）
Shit のリヴァイアタン（糞野郎です）
糞塗のサタン（糞野郎です）
帶駄のベルフェゴール（駄目駄目オーラを帯びています）
乞谷のマモン（は風呂に入れて！）
亡職のベルゼブブ（仕事頂戴！）
死期怨のアスモデウス（まもなく死にます）

■『うみねこ』の読解きは“国語の読解”
僕の考察を読んで「引用ばっかで自分の文章が全然ないじゃねーか！」と思われる方がいらっしゃると思います。しかし、僕にとってこれは必然なのです。何故なら、作者である竜騎士０７さんが「答えは全て本文の中にある」と言っている為です。むしろ「本文中に根拠を示せない考察は信用できない」というのが僕のスタンスです。これは我々が学校でさんざんに学んだ（人によっては現在学んでいる）“国語の読解”なのだと思います。国語のテストで「作者の考えを本文中から見つけ、３０文字以内で抜き出しなさい」という問題がありますが、まさにそれなのだと思います。ただ、その本文が小説に換算して５０００ページにもなろうかというとんでもない分量であるだけで…。ミステリーに全く縁の無かった僕が、今のレベルまで至れたのはこの点が大きいのだと思います。僕は子どもの頃からよく本を読んだためか、国語の成績は結構良かったのです。また、それが理由で“伝えることの難しさ”も感じています。
高校時代に定期テストで『山月記』が出題された時、１人の友人が「この問題が解らなかった」と言って持ってきた問題がありました。それは主人公が「俺の毛皮が濡れたのは夜露の為だけではない」と言ったのはどういう意味か問う問題でした。僕にとってこの問題は、問われることさえ馬鹿らしい問題で、問題になってない問題でした。しかし、その友人は「解らなかった」と言い、そもそも“問題として成立する”ということは、理解できない人間がいるということなのです。上から目線で非常に申し訳ないことなのですが、僕にとって“理解できないことが理解できない”レベルの読解力しか持たない人がいます。僕にとっては「この説明で理解できるだろう」と思ったことでも理解できない人がいますし、さらに言えば“どう説明しても理解できない”人もいます。残念なことですが、そのような人を納得させるだけの力は僕にはありません。竜騎士０７さんもこの問題には苦しんでいるだろうなーと思います。

■考察は指南

僕の考察では満足できなくて「自分でもっと考察したい」と思われる方もいらっしゃるでしょうから、僕がどのようにして考察したのか、その方法を公開しておきます。まずゲームをプレイしながら“理解できなかった内容”“疑問を持った内容”“重要だと思った内容”これらを抜き出しました。そして抜き出した内容をテーマごとにまとめ“考察の柱”を建てました。例えば“■赤字とはどのようなもの？”などです。そしてもう一度ゲームをプレイし“考察の柱”を支える材料となる内容を抜き出して“考察の柱”にくっつけました。それと同時に“考察の柱”を否定する材料がないかも確認しました。それから自分の考えを“考察の柱”にくくりつけて完成です。これらの作業の過程で新たな“考察の柱”になると思われる内容に気がついたら、再びゲームに戻り“柱”を支える材料が揃えば、新たな“考察の柱”とする。これのくり返しです。

一つ気をつけていただきたいのは“自分に都合の良い材料だけを集めない”ということです。これをすると明らかに成立しない“考察の柱”が監立する事態になりかねません。場合によっては“柱”を支える材料がいくつも揃っているのに、たった一つのそれを否定する材料の為に“柱”を倒さなければならない場合もありますが、ここをきちんとしないと考察でも何でもなくなってしまいます。しかし、ある程度材料の集まった“柱”は大抵の場合、否定する材料をさらに否定する材料が見つかることが多いです。それによって新たな“考察の柱”が見つかる場合もありますので、建てることを諦めた“柱”も安易に撤去しないことをオススメします。とりあえず寝かせておくと、新たな材料が見つかることで、また建てることが出来るかもしれません。“考察の柱”が出尽くしたら、他のプレイヤーに尋ねてみる。もう一度ゲームを通してプレイする(新たな視点を得るためにテキストだけを読む、声に出して読む、EP8からプレイする、など変化をつけると良いかも)などの手段を使うと、より理解が深まります。

■他人と考察をぶつけ合う価値

僕が自分の考察を掲示板に書き込むようになって、初めて気がついたことがあります。それは“解ったつもりと解ったは違う”ということです。自分ではとことん考えて“決定版”として繰り出した考察が、いとともあっさり論破されてしまったり、理解されなかったり、ということがあるのです。あるいは逆に考察をする人が、とても基本的なことを見落としていたりもします。きっと１人では“客観化”に限界があるのです。ですから自分の考察はどんどん人に見せて、意見を聞くことが大切だと思います。不思議なことに自分では「呼称と呼味を重ねてこれ以上は書くことはない」と思った内容でも「〇〇さんにはどう説明したら理解してもらえるだろう？」と、特定の個人を対象にしたとき、それまでは思いもつかなかった内容が書けることがあります。さらに自分１人ではどう考えても解らなかったのに、掲示板に「〇〇が解りません」と書き込んだ次の日に、自己解決することもあります。これは本当に不思議なのですが、きっと課題を他者に投げかけることで、自分から切り離し、客観視できるようになるのだと思います。時には考察を全面否定され、自分の人格まで否定された気分になるかもしれませんが、その悔しさを考察にぶつけることで、より高みに上ることができると思います。他者との関わりがあってこそ、今の僕があるのです。“まとめＷｉｋｉ”の掲示板に常駐していますので、考察を戦わせたくなったり、疑問に思うことがあったら訪ねてきてください。僕を指名していただければ、いかなる内容であれ、応対させていただきます。

■考察はまだ終わらない

僕はこの作品を６周半したわけですが、これで終わりだとは思っていません。解らないことがまだまだあるからです。今だって考察を読み返すと「あ、この説明ではまずい」と修正することがちょくちょくあります。僕は現時点では、ここまでしか至っていませんが(今は再プレイする気力が湧きませんが、何年かしたらまた挑戦します)、僕の考察を読めば、僕より更なる高みに至ることのできる人も沢山いると思います。どうか、僕を超えてください。そしてまだ見ぬ世界に僕を連れて行ってください。それだけが僕の願いです。

■『うみねこ』への理解を深めるための参考作品

『好色五人女』井原西鶴

『嵐が丘』エミリ・ブロンテ(岩波文庫の河島弘美訳がオススメ)

『カルメン』プロスペル・メリメ

『二十年後』『賢者の贈り物』０・ヘンリ

『林檎の樹』ゴールズワージー

『名探偵に薔薇を』城平京

『心の旅路』(映画)

『Wの悲劇』夏樹静子

『AURA～魔竜院光牙最後の闘い～』田中ロミオ

『ハサミ男』殊能将之

※ネタバレになる作品がありますので“何故この作品なのか？”については解説しません。『うみねこ』を理解できなかった、『うみねこ』をもっと深く理解したい、そんな方はこれらの作品に触れてみると良いと思います。ちなみに僕はミステリーをほとんど読んでいないため、ミステリー成分は少なめです。また、作中で取り上げられた作品は除外しています。

■あとがき

僕が『うみねこ』と本当の意味で出会ったのは、２周目として、ＰＳ３版のEP1をプレイし終えた時でした。犯人も“ベアトの心臓”も理解しているため、それぞれの事件のトリックが手に取るように理解できました。「こんなに簡単な答えで本当にいいの？」と『最終考察』と『真相解明読本』を読んでみてビックリしました。誰もきちんと正解を出せていないのです。そのEPで正解を出せないのなら理解できるのですが、EP7のウィルの謎解きの解釈の時点で正解を出せていないのです。僕はミステリーは苦手で『うみねこ』もミステリーではなく、ただの物語として受け止めていました。ですから謎解きには全く興味がなく『最終考察』や『真相解明読本』も謎解きの部分は適当に読み飛ばしていたため、これには気がつかなかったのです。。

このとんでもない惨状に、僕は失望すると同時に我然やる気が出てきました。「誰も正解を出していないのなら僕が出してやる！」そう意気込んで、ＰＳ３版のEP1～4をプレイし終わりました。それでも結局、EP3の犯人殺しが理解できなくてネットの掲示板に助けを求めました。そこでのやり取りで気がついたのは“この作品を理解できている人間はあまりに少ない”ことと“理解できない人間にはとことん理解できない”ということでした。これも衝撃的な事実でした。僕がＰＳ３版のEP1をプレイしたのは2011年の10月です。完結から10ヶ月も経っています。それなりにろくに考察もしなかった僕でも明らかにおかしいと理解できる“トンデモ説”を恥ずかしげもなく披露している人間がいるのです。僕はそれまで“正解を見せられたら誰もが納得する”ものだと思っていました。しかし、それは間違いでした。“どう説明しても、理解できない人間には理解できないし、信じない人間は信じない”のです。おそらく竜騎士０７さん本人が掲示板に現れ、匿名で真実を書いたところで、認めない人間は認めないでしょう。「人間とは難しいものだな」とつくづく思い知りました。他人には何の希望も見出せない以上、頼りになるのは自分だけ。僕は謎を見つけるたびに周回を繰り返し、現在6周半にまで至っています。その甲斐あって「ここまで至っているのは日本中で僕くらいのものでは？」と思えるくらいまで至ることができました。

そこまで至って思ったのが「何故これほどの作品が正当に評価されないのだろう？」ということです。僕と同じレベルまで至ったなら、この作品の評価をガラリと変える人もいるはずなのです。しかし、竜騎士０７さんは猫箱を守り続けます。「これではいつまで経っても『うみねこ』が正当に評価されることはない。理解できない人間がいることは仕方がないとしても、理解できる人間には理解して欲しい。そんな思いからこの本を作ることを決めました。僕の思いが１人でも多くの人に届くことを願っています。そして誰よりも悔しい思いをしているはずの竜騎士０７さんに、ここまで至った人間がいることを知ってもらいたいです。竜騎士０７さん、貴方は胸を張って良いです。こんなにも素晴らしい作品を生み出すことが出来たのですから。理解できないのは理解できない人間が悪いのです。貴方は素晴らしい仕事をしました。これからも素晴らしい作品で僕を楽しませてください。貴方を超えられるのは貴方だけです。

最後になりますが、“まとめＷｉｋｉ”でずっと僕の相手をしてくれたちびゆかさん、本当にありがとうございます。貴方がいなければ、今の僕はいなかったです。

平成２４年６月
ケーナ

■更新履歴

２０１２年　６月２５日　誤字の修正及び加筆